
メドレー

南国タヒチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メドレー

【Nコード】

N1553U

【作者名】

南国タヒチ

【あらすじ】

ポンコツのボクサー、馬鹿を極めたヤンキー、障がい者、そして捨てられた者達。

本来なら交わらないはずの人間達が、不思議な灯台の下で交わる。

そんな物語です。青春あり、恋愛あり、笑いあり、下ネタあり、そしてほんの少しだけ感動スパイスが入ってます。

三部構成で、いまのところまだ完結してません。

二部までは書きためてるのでなるべく早く更新したいと思います。仕事忙しいとキツイです。

更新が遅くなったときは生ぬるく見守ってください。
晒し中です。

終わりのなき旅 前編

朝焼けの光を浴びながら、おれは砂浜を走っていた。

砂浜を蹴り上げる足は重く、

汗を大量に吸い込んだＴシャツはベトついて気持ち悪かった。

おまけに自慢だった肺も入院している間錆びついたのか、息が酷く切れる。

喉も渴いた。

正直つれえや。

？キツイなら休めばいい？

おれはもう肺を苛める必要はない。

おれはもう足を鍛える必要はない。

おれはもう無茶な減量する必要はない？

？おれはもうボクサーじゃないのだから？

引退したボクサーが体を苛めたところで、得るモンなんてない。
ない。

疲れるだけだ。

それなのに――。

おれは走るのを止めようとはしなかった。

自分でも何故走るのか、よくわからない。

おれが馬鹿だから――

おれが救いようもないほどのバカだから。 身につく努力なのか、
無駄な努力なのかわからないほどの馬鹿だから――。

性懲りもなく、走ってるのだろうか。

それとも長年の習慣、てやつか？

現役時代。

おれは毎日この砂浜を走った。

雨が降ろうが。

台風がこようが。

雪が降ろうが。

おれはこの砂浜を走った。

毎日が苦しかった。

毎日が辛かった。

でも走るのを止めよとは思わなかった。

何故ならおれは夢を見ていたから。

リングに立つ夢を見た。

勝者になる夢を見た。

倒される夢さえも見た

そしてなによりも一番多くみた夢は――。

世界チャンピオンになる夢だった。

だから辛くなかった。

夢が、おれの心に麻酔を打ってくれたから。

でも

もう

麻酔は切れちゃった。

おれはグローブを置いてしまったのだから。

夢を見る時間は終わってしまったのだ。

現実を。

現実ってやつを。

見なきゃいけない。

そのうち現実すら見ることが出来なくなるのだから。

おれの目は失明しつつあった。

所謂殴られすぎてやつだ。

近くならかろうじて見えるが、酷く滲んで見える。遠くはほとん

と見えない。

ついでに言えば――。

未来はまったく見えない。

おれは中卒だ。学歴もなけりや、まともに働いた経験もない。

おれにあるのは元日本チャンピンという微妙な肩書きだけだった。これで目がまともなら、この肩書きで喰ってくことも可能だったろうが、目が悪くなった今はそれも不可能だった。

おれは走りながらため息をついた。

こうなっちまったのも、目が悪いことを隠して、最後の試合に臨んだおれが全部悪い。

？ああ、格好なんてつけるじゃなかった？

無限の後悔と共に過去が蘇る。

おれの最後の試合。相手は高山きよしだった。

――ジムの後輩だった男だ。

きよしは中学を卒業すると秋田のド田舎から、ウチのジムにやってきた。

小汚いジャージで体を包み、その上にファッション性皆無の坊主頭を乗つけていた。

目も態度も酷くオドオドしている。

どこからどう見てもボクサー志望って面じゃない。

エクササイズコース志望といったところだろう。

それか、はじめの一步の読み過ぎか。

どっちにしる興味ねえや。

おれはシカトを決め込んだ。いくら試合明けで暇を持て余してるとはいえ、田舎者を相手するほど暇ではない。

おれは受付の机に脚を放り出し、寝たふりを決め込んだ。

――十分が経過。

田舎者は帰らない。それどころか狸寝入りを決め込んでるおれの横顔をジツと見つめている。

？ホモかこいつは？

これ以上見つめられては堪らない、おれは態とらしく欠伸をする
と目をこすった。

勿論、起きたフリだ。

「兄ちゃん、エクササイズコースならほか行ったほうがいいぞ」
おれは挨拶も、愛想も抜きで要点だけを放り投げる。
へたに愛想よくして、入門されてもこまる。

ウチにも時代を反映してエクササイズコースがあるが、受講者は
誰もいない。

エクササイズコースといっても、トレーナーはなんせアレだから
――。

「クソンだらあ！ テメーなに簡単に万歳してんだあ！」
リングサイドでは、貧相な丹下段平がマットをブツ叩きながら怒
鳴っていた。

あの小汚い禿げ親父が、おれが所属する沢村ボクシングジムのオ
ーナー兼トレーナーである。

さらに最悪なことにおれの実の親父でもあった。

アレがトレーナーであるかぎり、エクササイズコースが繁盛する
可能性はゼロに等しかった。

が、ウンザリすることにウチのジムが繁盛しない原因は親父だけ
に求めるわけにはいかなかった。

一般コースの方々にも問題がある。

リングの中央では、昇り竜を背負った兄ちゃんが必死の形相で立
ち上がるうとしていた。

悠然と見下ろしてる兄ちゃんの右肩にも、派手な桜吹雪が散って
いた。

あれがウチの一般コースの方々である。

勿論一般の方々ではない。

本職のヤクザモンである。

ジムのタニマチである片桐組が、若手教育の一環として毎年送り込んでくるのである。

おれは盛大にため息を漏らした。

エクササイズコースが流行りやあ、家計も助かるし、運が良ければ巨乳の姉ちゃんがボクササイズしにウチに通いにくるかもしれないのに……。

だが、親父とヤクザモンがいるかぎり、巨乳の姉ちゃんが、ボクササイズしにウチのジムに通ってくる可能性はゼロ以下だった。

いや姉ちゃんだけじゃない。気合いの入ったプロボクサー志望者も、うちの親父とヤクザモンを見れば回れ右して帰る。

ウチのジムに耐えられるのは、逃げたら指を詰めなきゃいけないヤクザモンか。

人生の足し算引き算もできない大馬鹿野郎だけである。

？この小僧はどうだ？？、

ウチのジムに入門するほどの馬鹿なんだろうか？ おれはニキビ

小僧の面を改めて見直した。

よく見ると、耳毛が伸びていた。

こりゃあ典型的な馬鹿面だ。

しかしウチに入門決めちゃうほどの馬鹿にも見えない。

「なあ、兄ちゃん。見ての通りウチはガラが悪い。エクササイズコースやりたければ隣の武村ジムに行ったほうがいい」

おれはなるたけ優しい口調で声をかけてやった。

返事はなかった。

坊主頭は黙り込んだままである。

ビビって固まってるのかと思って、あれこれ声をかけたが、坊主頭はウンともスンとも言わなかった。

地蔵のように突っ立てる。

いい加減切れたおれが怒鳴ろうとしたその時――。

「入門させてください！」

突然、坊主頭が怒鳴った。

あまりの声の大きさ、親父もリング上のヤクザも動きを止めた。おれもびっくりして硬直している。

「——こっちは練習してんだ、静かにしろ！」

親父は小僧にむかつて怒鳴り散らすと、今度はリングの上に突っ立てるヤクザモンにむかつて「ゴロツキども、誰が手を止めていいと言った！」

親父の怒鳴り声で金縛りが解けたのか、ヤクザの兄ちゃんたちも殴り合いを再開した。

「なあ、坊主。ウチの親父が切れないウチに帰ったほうがいいぞ」これでビビって帰るだろうと思った。

親父は本職ではないが、へたな本職より迫力がある。片桐組が送り込んでくる血統書つきのごろつきで共でさえ、親父に逆らうやつは滅多にいなかった。

それでもゴロツキなので、たまに親父に逆らう馬鹿もいる。

そういう馬鹿には、親父の鉄拳制裁によってジムの序列をたたき込んだが、例外も

片桐小十郎の息子、片桐忍。

片桐組の組長の息子である。

殺しの小十郎の息子だけあって、根性の捻くれ具合が半端ない。

入門初日で、つまらないことで親父と大喧嘩になった。

片桐忍は親父の腹をドスで刺し、親父は片桐忍の顎を拳で碎いた。ジム中大騒ぎにはなったが、幸い二人とも超合金でできたロボットのなみに丈夫なので、一ヶ月の入院ですんだ。

あとで組長自ら詫びに来たが、親父はゲラゲラ笑いながら、「あいつを鍛えることができるのはおれっちゃんじゃないから、退院したらもう一回つれてこい。ありゃあいいボクサーになるぞ。なにせ負

けそうになつたらドスで刺すからな」と宣つた。

組長も、次ぎ喧嘩したらどつちらかが死ぬかもしれないと思ったのか、息子をジムに再入門させることはなかった。

そんな親父である。

普通の人間はまずビビる。

それなのにこの小僧は――

「入門させてください!!!」

またしても怒鳴つた。

どうやら普通の人間ではないらしい。

頭のネジが二、三本緩んでるようだ。

かと言つて、ボクサーに向いてると思えない。

おれは懇切丁寧にボクサーに向いてないことを諭してやったが、坊主頭は入門させてくださいの一点張りだった。

おれじゃあ埒があかない。

ついに親父が来た。

親父はおれを押しのと、いきなり坊主頭をぶん殴つた。

坊主頭は派手に倒れた。

貧相で年喰つてるとはいえ、親父は元プロボクサーだ。その上今も鍛えてる。

粹がつてる半チクの若造をブチのめすぐらいのパンチ力はある。

そんな男が手加減抜きで殴つたらタダじゃすまない。

「親父……」

なに考えてんだ、いくら相手が馬鹿そうとはいえ、怒鳴ってるだけの馬鹿を殴つていいわけがない。ヘタしたら警察沙汰だ。

おれが親父を諫めようとした瞬間、坊主頭が立ち上がった。

唇から血がこぼれている。

「入門させてください!!!」

坊主頭は血の混じつた唾を吐きながら叫んだ。

親父は無言で殴り飛ばした。

坊主頭はまた倒れる。坊主頭はよろよろと立ち上がると、折れた

奥歯と血の混じった唾を吐き捨てた。

本来ならジムの常識人であるおれは、非常識極まりない大馬鹿野郎共を止めなくてはいけなかったのだろうが、不覚にも二人の馬鹿が醸し出す雰囲気飲まれてしまった。

リングの上のヤクザモンも同じだった。

ガラの悪い刺青に似合わない間の抜けた顔で二人のやり取りを見つめていた。

「入門させてください!!!」

坊主頭がまたも怒鳴った。

親父は、坊主頭の団子鼻にストレートを叩き込んだ。

坊主頭は背中をくの字に曲げた後、前のめりにぶっ倒れた。

？立てまい？

プロボクサーなら誰もがそう思う倒れ方だった。試合なら己の勝利を確信する。

レフリーのカウントを聞くまでもない。

そういう倒れ方だ。

だが、坊主頭は立ち上がった。

よろよるとゆつくりと、薄らみつともない立ち方だが、それでも立ち上がった。

目も死んじやいない

「.....入門させてください」

坊主頭は鼻血をダラダラ垂らしながら、親父に迫った。アノ様子じゃ、坊主頭の鼻は確実に折れているだろう。

親父はもう殴らなかつた。

「——一平。この馬鹿はウチ向きだ。入門させてやれ」

親父の言葉が終わると同時に、坊主頭は倒れた。

親父は坊主頭を助け起こすこともなく、血で汚れた拳を洗いに行つた。

親父は余裕カマしてるが、周りの人間は泡食った。性格容姿ともヤクザにしか見えないが、親父はたんなるボクシングジムのオーナー

ーだ。

無抵抗の入門志望者の鼻を折るのはまずい。普通なら警察沙汰だ。もっともこの大馬鹿野郎がお巡りにチクるほど利口な頭してるとは思えないが。

おれは床に伸びてる男の面をちらりと見た。

鼻が折れてるのに笑みを浮かべてる。

これは手のつけようがない馬鹿だな。

頭の方は直しようなさそうだが、怪我の方は放っておくわけにはいかない。

おれは坊主頭を抱き起こした。

いつのまにかおれの後に立っていたトレーナーの山形さんは救急箱を取りに走る。

「坊主、すっかりしろ。自分の名前言えるか？」

坊主の名前が知りたくて尋ねたわけではない。

意識がしっかりしているかどうか確認するために尋ねた。

「……高山きよしです」

きよしは口元に弱々しい微笑を浮かべながら答えた。

これがおれと高山きよしとの初めての出会いだった。

翌日。

きよしは鼻に包帯巻いた姿でジムに現れた。

親父はなんの言葉もかけず、ごく当たり前のようにきよしをロードワークに連れ出した。

きよしの馬鹿もなんの文句も言わずに親父の後を追いかけていった。

？親父に気に入られたらしいな？

親父がロードワークに付き合うのは、お気に入り証拠だった。気に入くない相手なら絶対ロードワークに連れ出したりしない。だが、親父に気に入れたことがきよしにとって幸運なことかと

言うと微妙だった。

いや、はつきり言えば不運だ。

親父のシゴキはキツイ。

親父のシゴキに根を上げて、辞めていった人間を、おれは何人も見ている。

？大丈夫かな、あいつ？

おれはちよつと心配になったが、すぐに忘れた。

今朝、日本ランキング三位の堂島隼人から、試合の申し込みがあった。

堂島は日本ランキング三位。

ランキングは向こうの方が上。

実力もある。

華麗なフットワーク、そして強打。

才能のある万能型ボクサー典型みたいな男だ。

おれが唯一まさるのは、年と打たれ強さぐらいなものである。

なんでこんな化け物が、ランキング下位のロートルに試合を申し込んできたのかというと、ベルトを取るための肩慣らし、所謂かませ犬としておれを指名してきたのである。

考え方としては間違っていない。

いまベルトを腰に巻いてるのは三〇歳の超ベテランで、狡猾な試合運びと反則すれすれのラフファイト、それと強打を武器にしている、おれと良く似たタイプだ。ただチャンピオンにはあって、おれには無いものがある。

才能である。

おれには強打という才能がなかった。

パンチは弱い方ではない。そこそこ強い方だとは自負してる。

しかし強打と評されるほどではない。

努力で手に入れることができる程度の強打だ。

チャンピオンのように努力と才能で作り上げた強打ではない。

つまりは、へなちょこ強打のおれなら安全にベルト取りの練習が

できるってわけだ。

？クソっ？

堂島の野郎舐めやがって。

おれは奥歯を強く噛んだ。

おれにボクシングの才能があれば――。

堂島の半分ほどの才能があれば。

堂島の野郎なんぞ余裕で叩きのめすしてやんのに。

でもおれにはボクシングの才能はなかった。

ボクシングを始めた頃なら、才能のあるなしなんて考えなかった。根拠もなしに、はじめの一步のようなボクサーになれると思い込んでいた。

根拠もなしに、才能があると思ひ込むことが出来た。

でも幾多の敗戦が、ボクシングに賭けた時間が、おれの限界を、おれの才能のなさを、おれに教えてくれた。

知りたくなかったのに――

？クソっ？

拳を強く握りしめると、近くにあつたサンドバックをぶん殴った

三ヶ月後。おれは化け物退治に成功した。

相手の減量失敗、際どい判定に助けられたとはいえ勝ち負けは勝ちだ。嬉しくてしょうがない。

なんせ試合前、誰もが堂島の勝利を予想していた。

身内であるジムの連中も口には出さなかったが、おれが負けると思ってた。

親父など、「お前じゃ殺されに行くようなモンだな」と面と向かって言ってくれた。

試合が始まればはじまったで解説席に座ってる三流グラビアアイドル、そして会場に駆けつけたにわか女子高生ファンも、堂島に黄

色い声援を送っていた。

一方おれはといえば、応援席に座ってるのは女子高生ではなく片桐組のごろつき共と、

片桐組の連中に無理矢理チケットを買わされた胡散臭い自称素人の方々、それといつもおれを応援してくれるアル中のおっさん――。

千葉で一番クソな応援団だ。

おれはヤジのような声援を浴びながら戦った。堂島といえば黄色い声援を背に戦っている。

そういう環境のなかでもぎ取った勝利だ。嬉しくないはずはない。

メチャクチャ嬉しい。

堂島の悔し涙を見たときなんか、中指の一本ぐらい突き立ててやりたかった。

さすがにやめたけど、握手するときなんざニヤニヤ笑いがとまらなかった。

思わず相手の肩をポンポンと叩いてしまった。

がんばれよ、みたいな感じで。

堂島のやつ絞め殺された鶏みたいな顔でおれを睨みつけやがったが、ロートルのおれとしては、若手のホープである堂島には、この敗戦を期に奈落の底まで堕ちて欲しい。

いやきつと堕ちる。

ああいう才能に恵まれた奴は負け慣れしてないからな。挫折に弱い。

今頃ヤケ酒でも呷って悔し涙を流してるかもしれない。

半べその堂島が酒を喰らってる姿を想像すると、思わず笑みが零れた。

腹に鈍い痛みが走った。

？人の腹殴りすぎだ。あの小僧！？

おれが女だったら、子どもを産めない体になってるぞ、堂島の野郎――。

心の中で毒突いてるとロードワークを終えた親父ときよしが帰ってきた。

二人とも汗まみれだった。

相当激しく走ってきたようだ。

親父はベンチで呻いているおれを目ざとく見つける。

「怪我人は家でセズリでもコイてろ、このテマンチヨ野郎が！」と怒鳴りつけた。

「ウルセエだよ！、このインチキ丹下が！」

反射的に怒鳴り返したが、親父のほう为正論なので、悔しいけどすぐ黙った。

たしかに練習もしないで、ジムのベンチでゴロゴロしてるのは目障りだ。

それはわかるのだが、どうも家でゴロゴロしているとケツの座りが悪い。

弟の数馬みたいにファミコンが好きなら、家でピコピコしてりやあいいだが、生憎おれはボクシング以外にも知らないし、興味もない。

家にいても、セズリするのが関の山だ。

セズリは嫌いじゃないから、家で息子を弄ってもいいだが、いくらタフなおれでも限界はある。

おれは今日、すでに三回ほどセズリをこいてる。

これ以上チャレンジする気力がないので、ジムにやって来たのだ。だから親父の言葉は実行済みだし、これ以上家に帰って息子と遊ぶ気力もない。

おれはベンチに寝っ転がった。

親父はダレきってるおれを無視して、きよしをリングに上げてシヤドウをはじめた。

おれはぼんやりときよしのシャドウを眺めたが、はっきり言って下手くそだった。

一欠片の才能も感じられない。

？こいつもおれと同じ根性だけのボクサーか？

おれはすぐに飽きて、鼻くそをほじり始めた。

きよしがりズム感皆無のシャドウを終えると、親父は「おれっちは武田ジムの親父と昼メシを食う約束してるから、後は適当にやっておけ」と言い捨てて、ジムを出て行った。

親父がいなくなると、きよしはサンドバッグを叩き始めた。

シャドウと違って、サンドバッグでは生意気な音を出していた。

？多少のパンチ力はあるようだ？

どんな奴でも一つぐらい取り柄があるようだ。

もつともこの程度のパンチ力じゃ、欠点をカバーするのは難しそうだが。

きよしは、おれに評されてるとも知らず馬鹿真面目にサンドバッグ叩きまくっている。

渾身のアップパーをたたき込んだところで、きよしは膝をついた。

床にゲロをぶちまける。

吐き終わると、きよしはヨロヨロと立ち上がり、サンドバックを叩き始めた。

？今どき珍しい馬鹿だ？

親父が気に入るはずだ。

おれはベンチからのそりと立ち上がると、黙ってサンドバッグを支えた。

きよしは礼も言わずにサンドバッグを殴った。礼など、おれも期待してなかったので腹も立たない。

きっかりハラウンド分のパンチをサンドバッグに浴びせると、きよしは自分の吐いたゲロ目がけて倒れ込む。

おれは慌ててきよしの体を支えた。

「オメーは無茶すぎなんだよ。飛ばしすぎると体がぶっ壊れるぞ」

世間にはオーバーワークという言葉がある。

根性論主体のこのジムでも、オーバーワークという言葉は辞書に

載っていた。

ただしその文字は酷く薄く、ときにはページごと破り捨てられるけど。

「大丈夫ス。おれ恵まれてるから大丈夫ス」

「はあ？」思わず聞き返してしまった。

どうマイルドに考えても、きよしが恵まれてるようには見えなかった。

「世間のみんなは学校いつてるのに、おれだけ好きなことやってるだから恵まれてるんス、おれは」

ぶっ倒れそうになってるのに、きよしの目はきらきらと輝いていた。

おれはきよしの足下を見た。汗とゲロで水たまりが出来ている。

「——大したマゾ野郎だよ、お前は」

おれは呆れかえった。おれも練習量には自信があるが、きよしには負けるかもしれない。

きよしは自分の足で立てるほど回復すると、急にモジモジしはじめた。

「——あのう」きよしは女に告白するような面で呟いた。

はつきりいつて気持ち悪い。

「なんだよ」

「——感動しました」

「何が感動したんだよ」

「——昨日の試合ス。おれリングサイドで見てたス」

きよしは真っ赤な顔でのたまった。

「——気持ち悪いだよ、テメーは！——いいからゲロ片付けろ！」

恥ずかしくなっておれが怒鳴ると、きよしは掃除箱の方へすっ飛んでいった。

床からゲロと汗がなくなると、きよしはまたモジモジしはじめた。しかも、時折ちらちらおれの顔を盗み見たりする。

？ダメなオカマかこいつは？

おれはウンザリした。巨乳の姉ちゃんとは言わねえけど、もう少し色気のある人間に懷かれない。

「——なんかおれに頼みでもあるのかよ」

ほっておくと、ずっとこちら見されそうなので、仕方なく声をかけた。

「——一平さん、ミットもつてくれナイスか」

「まあ、べつにいいけど。ちょっと休憩しろ」

「大丈夫ス。もう回復しました」

おれは答える代わりに、きよしの胸を軽くおした。
きよしはあっさりと尻餅ついた。

「——うんな体じゃ、ミット打っても意味ねえよ」

「……ウッス」

きよしは振られた女みたいな顔で俯いた。

「うんな顔すんな気持ち悪い。おれも少しアップしときたいから、三十分たったらリングに上がってこい」

キヨシは顔をガバツと上げて起き上がった、おれは無視してリングの上にあがった。

軽く体を動かす。

ジャブ、ワンツー、フック、疲労が抜けきつてないので、体に切れがない。

おれが横で見てたら、リングから降りると怒鳴りたくなるレベルだ。

それなのにきよしの馬鹿は、生板シヨウに嚙りついてる童貞小僧みたいな顔で、おれのシャドウを見つめていた。

？はずい？

おれもプロだから人に見られるのは慣れてるはずなんだが、あんなにガチ見されるとやりづらい。

おれはきよしの視線を追ひ払うため、シャドウに集中した。
いい感じで体が温まった頃、きよしはリングに上がってきた。
足下はしっかりしている。スタミナは回復しているようだ。

「はじめんぞ」

おれが声をかけると、きよしはミットにジャブを撃ち込んできた。リズム感のない、どんくさいジャブだ。

？昔のおれみたいだ？

自分の欠点を見せられるようで、面白くない。

だが、きよしの右ストレートを打ち込んできた時、おれの顔色が変わった。

ミットが弾き飛ばされたのだ。

号砲だった。

衝撃が骨を伝わり、腹まで響いた。

鈍い痛みが走った。

？二階級上とはいえ、半端じゃねえぞ？

サンドバッグ支えているときも、ハードパンチャーだと思ったが、あの時のきよしは体力の限界を超えていたので、あれでもパンチは死んでいたのだ。

しかし体力の回復した今、パンチの威力が戻ってきている。

おれは顔をしかめた。

右腕に走った痛みのせいばかりではない。

？きよしはおれとは違う？

ファイトスタイルは同じファイタースタイルだが、持ってるパンチは違う。

おれのは努力のパンチ。きよしは努力と才能のパンチだ。

上にいく人間のパンチ。

才能のないおれとは違う。

「——どうしたんスンカ、一平さん？」

きよしは馬鹿面ぶら下げて尋ねてきた。

「馬鹿野郎！ ボケツとしてないで、さつさと撃ってこんかい！」
おれはきよしの面をミットで殴り飛ばした。

きよしの唇が切れる。きよしは唇から血を流しながら、スンまんせんす、と言って頭をさげた。

文句の一つ言わない。

八つ当たりなのに。

たんなる八つ当たりなのに

——氣づけよ馬鹿が。

おれの思いに氣づくことなく、きよしの拳がミットを撃ち抜いてきた。

衝撃が体を襲ったびに、おれの臉から涙が零れそうになった。

？同じ中卒。同じボクシング馬鹿なのに。なぜきよしなんだ？

おれは、お前の何倍もの年月をボクシングに捧げてきたんだぞ。

何倍もの人間を殴り、その何倍ものパンチを体に刻んできたんだぞ。

？——畜生？

殺してやりたい。堂島以上に殺してやりたい。

リングの上できよしの顔をメチャクチャにぶん殴ってやりたい。二度と立ち上がれないくらい、ブチのめしてやりたかった。

ミット打ちは終わった。

この日を境に、おれは狂った。

傷を癒してる間も、ネチネチと体を苛めた。

傷が癒えると、今度は体のありとあらゆる箇所を苛めた。

海岸をメチャクチャ走った。筋肉をメチャクチャ苛めた。

拳が折れるじゃないかと思うほど、サンドバックをメチャクチャ叩いた。

拳から何度も血が出た。

でも痛みはなかった。

おれの拳は夢を見ているから——。

おれの拳は、きよしの顎を砕くことを夢みていた。

おれの拳は、きよしの肋を砕くことを夢みていた。

おれの拳は、きよしの夢を打ち砕いてやることを夢みていた。

——夢が叶うことなんて決してないのに。

原則としてボクサーは同門同士で試合を組むことはなかった。それにきよしは、おれより二階級も上だ。階級も合わない。

明日のジョーでもないかぎり、やり合うことなんて絶対にない。なのにおれは、自分を苛めることをやめることはなかった。

どうしてなのか、自分でもわからない。

きよしに追いつかれるのが恐かったのかもしれない。

弱い自分が許せないのかもしれない。

——それとも何か予兆のようなものを。

運命とかいうヤツを——。

感じたのかもしれない。

狂ったおかげか、一年後おれは日本チャンピオンのベルトを巻くことが出来た。

嬉しかった。

正直取れないと思っていた。

諦めかけていたベルトが、自分の腰の上で輝いてる。

？ありがとう、きよし？

憎み嫉妬しながらも、おれはきよしに感謝した。

きよしがいなくなったら、おれは死にものぐるいになれなかった。

腰にベルトを巻くことも出来なかったらう。

だから妬み憎んでいるきよしにさえも感謝できた。

きよしの奴も強打を武器に新人王を取った。

そして運命の日が訪れた。

きよしが突然ジムを移籍したいと言い出したのだ。親父が移籍する訳を尋ねた。

おれと戦いたい。

それがきよしの答えだった。

横で聞いてたおれは、拳を握りしめた。握らなければ、手が震えだしそうだったからだ。

「なあ、きよし。気持ちはわからんでもないけど階級も違うだし、もうちよつと考えたらどうだ」

ジムの常識派である山形さんが諭した。

「恩知らずなんだよ、テメーは！」ヤクザモンは脅した。

きよしは、どうか移籍を許してくださいと、馬鹿みたいに同じ言葉を繰り返すだけだった。

ほかの言葉はなしだ。

？ なんか、あるだろうが。ほかにもよう？

お願いしますとか、自分の実力を試したいとか、ウチのジムの悪口とか――。

―― なんかあるだろうが！！

そう絶叫したかった。でも声はでない。

ただ拳を強く握りしめるだけだった。

おれのかわりに親父が、きよしの相手をした。

親父は、入門したときと同じようにきよしを殴り飛ばした。

「万ちゃん！」山形さんが悲鳴を上げる。

「しょうがねえだろう。相手はきよしなんだからよう。話したってラチがあかねえよ」

親父らしい答えだった。

「きよし。わかったから荷物まとめてさっさと出てけ。移籍金とかは山ちゃんが話まとめてくれるからよ」

親父は汚い猫を追ひ払うように言ったが、語尾は微かに震えていた。

ジムの中で親父が一番、きよしに目をかけていたのだから、辛いだろう。

きよしはありがとう御座いました、と怒鳴った後、ジムから消え

ていった。

きよしがジムから去った後、おれは王座を二回防衛した。どの試合も死に物狂いだった。とりわけ二戦目は。

二戦目を終え、顔面をしこたま殴られた俺は病院に担ぎ込まれ、そこで医者に失明の危険があると告げられた。殴られすぎて、脳が傷んじまったそうだ。

一方きよしの奴は、力石なみの減量で肉をそぎ落とし、スパーフエザー級に殴り込んできた。

ハイエナのような上位ランカーは、やせ細ったきよしを見て絶好の力モだと判断したらしく、きよしの挑戦を喜んで受けた。

きよしは上位ランカーに蹴られたが、最後は自慢の強打をふるって見事に逆転KOした。

その後行った二試合もすべて勝った。

きよしはベルトへの挑戦権をもぎ取り、おれに挑戦状を叩きつけた。

——即答で挑戦受ける。

なんて格好いいことは、弱いおれには出来なかった。

きよしは強い。

肋が透けて見えようが、パンチの威力は落ちてない。

階級落としてから行った試合、すべてKO勝ちという戦績が証明していた。

せこく判定勝ちでベルトを守ったおれとは大違いだ。

——それに、おれには目に爆弾がある。

こそこそ隠れて行った精密検査の結果、医者の野郎はやれて一試合。

頭に強打を受けた場合は目の保証はできないそうだ。

そのおれが強打者のきよしとやるなんて、自殺行為であった。

——迷う。迷いに迷った。

親父を抜かして、周りの人間は全員逃げると忠告してきた。

きよしのスーパージョーリングの相手をした見習いやクザの兄ちゃんも、何年もの間、おれのパンチをミット受け止めてきた山形さんも。

皆おれに逃げることを勧めた。

おれも逃げるべきだと思った。

たしかにきよしに対して、憎しみに似た激情はある。今だって、腹のなかで煮えくり返っている。

拳で叩きふせてやりたい。

拳で実力の差を思い知らせてやりたい。

拳でお前を想った量を教えてやりたかった。

だが、おれはもういい大人だ。

青臭い餓鬼みたいに、夢ばかり追っても仕方ない。

日本チャンピオンのベルトだって一応巻いたんだ。

腰のベルトを上手く使えば、引退した後もボクシング関係の仕事で食っていくことはできる。

目が潰れたら、それもオジャンだ。

目の見えない元ボクサーなんて、誰もまともに相手しない。

上手く世の中渡っていこう。

もう二九歳だしな。

おれは逃げる。そう決心した。

なのおれは——。

リングの上できよしと向かい合っていた。

試合は、序盤から凄絶だった。

お互いファイター同士。ファイトスタイルは被っている。おまけに頭も悪い。

作戦もクソもない。一ラウンド目からブン殴り合いとなった。四つの拳は、試合の主導権をもぎ取るうと、激しく混じり合う。前半は反則混じりのラフファイトとロートルの狡猾さでおれが試合の主導権を握ったが、中盤はきよしの強打で、主導権を奪い返された。

中盤戦は主導権もクソもなかった。

減量苦と、おれがスタミナを削るためにしつこく放ったボディーブローが効いて、きよしはフラフラ。

おれの方はといえば、スタミナが切れたきよしを見て、チャンスとばかりに襲いかかったが、きよしが苦し紛れに放った殺人パンチを喰らって、膝が笑い出してる。

互いにギリギリ。

足も使えない。

ポイントも五分五分だ。

そうなたらやることは一つしかない。

我慢比べだ。

おれはフットワークを止めた。足を大きく開く。

示し合わせたかのように、きよしも同じスタンスを取った。

？考えてることは同じか？

お互い頭悪いな。そう思った瞬間、おれはきよしの頬めがけてパンチを放っていた。

鏡のようにきよしもパンチを打ってくる。

互いの拳が交わったかと思うと、相手の顔面にめり込んだ。？痛てえだよ？テメーのパンチは。

歯が折れちまったじゃねえか。おれは折れた歯を吐き出す。

血まみれの奥歯がリングに転がる。

きよしの方は歯は折れてない。

すでに体勢を整えてる。

——パンチ力の差か。

？やんなるね、まったく？
才能って奴は。

ラウンドは重なる。

おれときよしはリングの中央で拳を交換した。

おれの体に拳がめり込むたびに、きよしの拳がおれに語りかけてきた。

己を苛めた時間を。

おれに対する憧れを。

そしてなによりも——

勝ちたい。

おれに勝ちたいという気持ちを拳は語った。

わかったよ、クソたれ。

おれも拳で、きよしに語りかけた。

若さと才能に嫉妬する気持ちを。

夢を碎いてやりたいという憎しみを。

倒れてくれという、祈りにも似た思いを。

しかしきよしは倒れない。

倒れるどころか、おれの顎の骨を右のアップーで碎いてくれた。

きよしに縋り付くような形でダウンするおれ。

敗者特有のポーズ。決着のポーズ。

だがおれはチャンピオンだ。

そう簡単にバンザイするわけにはいかなかった。

カウント8で辛うじて立ち上がった。

まったくチャンピオンなんかになるもんじゃねえや。

チャンピオンだった寝ていられるのに。

おれはファイティングポーズを取った。

レフリーの馬鹿はやれるのか？ とアホな質問をしてきた。

「やるから、拳構えてんだよ」

と言ったつもりだが、顎が馬鹿になってるので言葉にならない。

おれはレフリーを睨みつけた。

？止めたら、殺すぞ？

おれの肉体言語が通じたのか、レフリーは試合続行を宣言した。

きよしはと言えば、信じられないという顔で、おれの顔を見つめていた。

あのアッパーで決まったと思ったんだろう。

おれがベルトを巻いてなければ――。

相手がきよしじゃなければ――。

今のアッパーで決まっていた。

？来いよ、きよし？

おれは余裕をカマして、手招きした。

本当は足が動けないから、きよしが攻めてこないとうにもならないのだ。

案の定きよしは襲いかかってきた。

おれは亀のように身を固めた。

きよしは必死の形相で殴ってくる。

あっちもボンコツ寸前なんだから、このラウンドで決めたいだろう。

それにさっきのアッパーで立ち上がってきたのも、ムカついてんだろうな。

わかるよ、その気持ち。

おれも逆ならむかつくわ。

でもよう――

きよしの強烈な殺人パンチが、おれの腕ごとガードを壊していく？腕の骨にヒビぐらい入ってるかもな？

もう限界だ。おれは耐えられなくなり、ガードを下げた。
きよしはロートルにトドメを刺すべく、得意の右ストレートを放った。

予想通り。

おれはクロスカウンターで返した。

きよしはマットの上にくずれ落ちる。

？でもよう、きよし。おれはチャンピオンなんだ。そう簡単にベ
ルトくれてやるわけにはいかないだよ？

おれはリングの上に転がってるきよしに心の中で言い放った。

8カウントできよしは立ち上がってきた。

おれは驚かなかった。

きよしなら立ち上がってくる。

おれは拳を構えた。

ノロノロときよしに近寄ったところで、ゴングが鳴った。

お互いミミズのように這って、自分のコーナーに戻った。

最終ラウンド。

親父の張り手で、コーナーから出たものの、歩くどころか、立っ
てるのもやつの状態だった。

きよしも似たようなもんだが、若いぶん余力はおれよりあった。

きよしはノロノロとした歩みながらも、おれに襲いかかってきた。

おれは歩く気力もなかったから、拳を構えるのが精一杯だった。

きよしは右フックを放つ。おれは腰を屈めてさけ、そしてきよし
に抱きついた。

すこし疲れたよ。おれは年寄りなんだからちよつとは優しくしろ、

馬鹿野郎。

きよしの馬鹿は年寄りに優しくするつもりはないらしく、おれを
突き放そうとあがいた。

おれはそうはさせじと、力を込めて抱きしめた。

「焦るなよ」おれは喘ぎながら呟いた。

大丈夫。ちよつと休めば、また戦えるようになるからさ。

だから少しだけお前の胸で休ませてくれ。

おれはボクサーにとって、恋人ともいえる空気を求め喘いだ。

空気の読めないレフリーはおれを引きはがそうとした。

リングサイドの観客共も、おれを野次った。

？お前等には、これほど必死でなにかを求めた事があるか？？

さらなる空気を求め、おれは烈しく喘ぐ。

？ねえだろう？

お前等がどんなに喚こうが、この空気の甘さだけはリングの上でしか味わえない。

テメー等は指でも啜えてリングサイドで眺めてろ。

肺が回復してきた。

おれの肺は長年苛め続けた結果、三十路目前だというのに中学生のちんぽなみに回復が早い。

レフリーはおれときよしを引き剥がす。

「もういいよ」体力は回復した。

再開の聲が上がると同時に、おれは体勢を落とし、きよしに突っ込んでいた。

おれを引つpegす作業に夢中になっていたきよしは、スタミナが回復していなかった。

反応が遅い。

おれはきよしの腹めがけてアッパーを放り込む。

きよしは腸でも吐き出しそうな顔で、体をくの字に曲げた。

おれは渾身の力を込めて左フックをキヨシの面に叩き込んでやった。

？寝ちまえよ、きよし？

おれの想いに答えるかのように、きよしは前のめりになり、そし

て崩れ落ちた。

どうだきよし。

立てまい。

おれはきよしを見下ろしながら、勝利を確信した。

この倒れ方はボクサーなら誰でも知ってる。

絶対立ち上がれない倒れ方だ。

おれはマットの上で倒れているきよしをみて、腹の底から歡喜が込み上げてきた。

おれはきよしより強い！ おれはきよしより強い！ 強いだ、くそつたれがつ。

歡喜が、足の指先から頭の天辺まで満ちていく。

あとは手を挙げて勝利を宣言するだけだ。

おれが勝利を確信し手を挙げようとしたその時、きよしはゾンビのように立ち上がってきた。

ゾンビのくせに、きよしの目はまだ死んではいなかった。

？ああ、忘れてた。相手はあのきよしだったんだ？

初めて出会ったあの日。

親父のKOパンチを喰らっても、きよしは立ち上がってきた。

おれは拳を構えた。

いいさ。何度でも立ち上がってこい。何度でも倒してやる。

きよしはふらふらと。おれは足を引きずるように、互いの距離を縮めた。

先に射程距離に達したのはおれだった。

おれは右ストレート放つ。きよしは額で受けると、左ストレートをぶち込んできた。

おれの左腕はごく自然に反応し、きよしのストレートを受け止めた。

あとはパンチを返せばいい。おれが右ストレートをきよしの顔面に打ち込もうとした。

しかし体勢が崩れた。

疲れやダメージのせいではない。おれの左腕が折れたのだ。

？嘘だろう！？

おれは叫び出しそうになった。が、叫ぶ暇などなかった。

がら空きになったおれの顔面に、きよしの拳が殺到してきたのだ。

気づくと、おれは病院のベットで寝ていた。

病院の天井は酷く滲んで見えた。

？どうせ負けるだったら、さつさと寝ておけばよかった？

さつさと寝とけば、病院の天井もこんなに滲んで見えることもなかっただろうに。

終わりのなき旅 後編

砂浜を走っている現在のおれはため息をついた。

？あんな試合、やらなきやよかった？

人間、格好つけると後悔するもんだな。

漫画やドラマなら、後悔なんかしてねエ！、と大見得を切るところだが、現実のおれはえれえ後悔していた。

だって目が見えなくなるの怖エえし。

本当に怖ええ、怖くて怖くて堪らなかった。

少しずつ視力を失っていくのは、試合前に感じる恐怖とはべつの怖さがある。

ボクシングの試合にはゴングがあつた。ゴングさえ鳴っちまえば、どんなにビビっていても恐怖は消える。きよしと戦ったときですら、そうだった。

しかし人生にはゴングが無かつた。

ダラダラと続く果てしない道があるだけだ。

おれは失明の恐怖に怯えながら、見えもしないゴールを目指して歩かねばならなかった。

耐えられなかった。

？ああ、だからおれ走ってるだ？

失明の恐怖に耐えられなくて、おれは砂浜を走ってるだ。

何かを目指すわけでも、チャンピオンベルトを守るためでもなく、ただ恐怖から目をそらすために走ってるのだ。

おれは走るのが急にやんなくなった。

どうせ隣で走っている駄犬もへたばってくる頃だし、ちよいと休

むか。

おれは隣で走っているはずの駄犬に目を向けた。

駄犬は姿はどこにもなかった。

「どこに行きやがった！」

「まさか、もうヘタばつてるじゃないだろうな？」

おれは後ろをふり返った。

だらしなく滲んだ黒い点が見える。

あの黒い点は駄犬だ。

目が弱つてゐるせいで、滲んだ黒い点にしか見えないが、あれはたしかにウチの駄犬である。

おれは舌打ちをし、駄犬の所まで走った。疲れて走りたくなかったが、どうせ呼んでもこない。

駄犬は、仰向けになってバテていた。

「バテるにしろ、もつと犬らしいバテかたがあるだろう？」

駄犬の情けない姿を見たら、休む気もうせた。

「おい走るぞ、駄犬」

「クフーン」

駄犬は汚らしい声で媚びてきた。犬のくせに走りたくないのだ。

「うるせえ！ 走らないと保健所に叩き返すぞ！」

おれが脅すと、駄犬も渋々と立ち上がった。

——と思ったら、駄犬はおれの股間にむしゃぶりついてきた。

「クフイイーン」

おれの息子を舐めながら、さかりのついた雌馬のような声をあげる駄犬。

犬の癖に、目には場末のスナックにいる婆みtainな媚びの色があった。

「馬鹿野郎！ 気色わるい媚び方やめろ」

おれが一喝すると、駄犬はすぐさま地面にひっくり返り、降参のポーズを取った。

だらしなく伸びたチンポが丸見えだった。

「名前負けもいいところだな、お前」

？こんな馬鹿犬、どうやって盲導犬にすればいいだよ？

おれは心の中で、親父に毒づいた。

おれの親父は頭がイカれてるとしか思えないほどのボクシング馬鹿であり、それと同じくらいアホだった。

これだけでもウンザリするのに、親父はアホなアイデアをよく思いついた。

実行力だけは無駄にあるので、思いつけば即実行する。

この馬鹿犬も、親父のアイデアを実行した結果だった。

現役を引退しナイーブになっていたおれは毎日カリカリしていた。目が見えなくなるのも嫌だし、将来のことを考えると憂鬱で仕方なかった。

なによりボクサーでないことに慣れることができなかった。

そんなおれを見て、デリカシーのデの字もない親父は、おれの背中を思い切り叩きながら、

「なに暗れえ顔してんだ。目が悪いぐらいで。おれっちが盲導犬買ってきてやるから心配すんな」とのたまった。

冷静な弟と、親父ほど馬鹿でないおれは「そんなに都合よく盲導犬が手に入るわけないだろう」と冷静に諭したが、火のついた親父には何を言っても無駄だった。

親父は常識を説く息子たちに向かって、「この根性なしどもが！」と罵ると、家を飛び出して行った。

火のついた親父を一人にさせておくのは、核ミサイルのスイッチを三歳児に持たせるより危険だ。おれは仕方なく親父の後を追った。

——一時間後、おれと親父は駅前のデパートの中にある洒落たペットショップの中にいた。

親父は行きつけのソーブにでも来たかのようにテンションが高い。おれは心配になって親父の袖を引っ張った。

「——親父。こんな所に盲導犬が売っているわけないだろう」親

父の耳元で囁く。

「犬屋に、犬が売ってねえわけないだろう！この腐れ金玉が」

親父の怒鳴り声がフロア中に響いた。

フロア中の人間が一斉に、おれ達を見つめた。おれは居心地悪くてしかたなかったが、親父はまったく動じていなかった。

親父は啞然としている店員の兄ちゃんに、何事もなかったかのようになに声をかけた。

「兄ちゃん悪いが、一番安い盲導犬一匹くれや」

？一番安いやつかよ？おれは心のなかで毒突いた。ペットショップで盲導犬を買うはずはないのだが、それでも面白くなかった。

「――申し訳ございません、うちでは盲導犬は扱ってないですが・
・・・・」

店員の兄ちゃんは常識を説いた。

「なんだと！ お前は何年犬屋やってんだよ！ そんなんだからこんなしみつたれたデパートでのとくってるだよ！ この腐れ貧乏人がっ！」

親父は店員にむかって怒鳴り散らした。店員の兄ちゃんは謝る必要など微塵もないのに、怒り狂う親父に向かって頭を下げまくっていた。騒ぎを聞きつけた他の店員たちも、恐る恐るこちらの様子を窺っている。

最悪だ。

おれはわめき散らす親父をなだめながら思った。

――一時間後、親父とペットショップの店員は笑顔で語り合っていた。

店員が根気よく丁寧に、無知で馬鹿な親父に盲導犬について説明した結果だった。

「兄ちゃん、あんたは犬の神様だよ。あんたほど犬に詳しい野郎、おれっちは見たことがない。今度、ボクシング教えてやるからウチのジムこいよ。犬のことを教わった礼に、おれっちは自らがボクシング教えてやるから」

親父は店員の肩を馴れ馴れしく叩きながら言った。

店員は愛想笑い浮かべながら返事を誤魔化した。

店員の兄ちゃんも、この一時間の会話で親父の性格を理解したのだ。

うつかり頷くと、本当にボクシングやらされるハメになることを。「遠慮すんなよ。兄ちゃん頭いいから、きつと良いところまでいくぜ。ウチの馬鹿息子でさえ日本チャンピンになれたんだから。もつとも根性ねえから、後輩のパンチにヒックリ返されて、死んだ蛙みたいピクピクしてたがな」

親父はご丁寧にも死んだ蛙の真似までした。

？このクソ親父、殺してやりたい？

店員の兄ちゃんは、おれの怒りで引きつった顔を見て青い顔していた。

おれは怒ると凶悪な顔になるのだ。人相の悪い親父に似たので仕方なかった。

美人で優しかった死んだお袋に似れば、もうちつとマシな顔になったんだが。

「だからこのトンチキもおれのアドバイス通り、弱きを挫き、強きを助ける作戦でベルト守ってりやあよかっただよ。それをなこのアホときたら、なに勘違いしたのかテメーより強い奴の挑戦なんか受けちまいやがって……。そんなんだからベルト奪われたあぐく目までおシャカにしちまうだよ」

親父はそう言うとき、怒りに震えるおれの背中をバンバン叩いた。

おれの顔を見て俯く店員。おれの怒りはとつと沸点を超えていた。

すべての空気を見捨てて親父の馬鹿は機嫌良く喋っている。

「いいか、アンちゃん。弱いチャンピオンてのはな、強い奴の挑戦受けちゃいけないのよ。こいつみたいにすぐ負けるから。噛ませ犬相手に防衛回数稼いどけばいいのよ、そうじゃないとベルトなんて霧の摩周湖で、涙の連絡船だから。たかうどうしようないね、こ

いつは」

このアホウー 調子に乗りまくった親父は奇声を上げた。
おれは親父をぶん殴った。

「なにすんだ、このチンカス野郎が！」

親父はこれでもかというぐらい額に血管を浮かべて、おれを睨みつけてきた。

息子の方はとっくの昔に血管が切れていた。

「なにすんだ、じゃねーよ。クソ親父！ なにが強きを助けるだ。うんなことちらっと

も言ってねえだろうが。テメーがほざいたのは後輩の挑戦も受けないのは、千葉の恥だとか言っ、て、散散おれのことを煽っただろうが！」

「そりゃあテメーに合わせてやっただけよ。女の腐ったみてえあなオメーのことだから、きよしの挑戦うけなかったら、挑戦受けとけばよかっただの、おれはきよしより弱いのかよとか、ダメなコオロギみたいに鳴くだろう！ だから親切なおれっちがしなびた金玉みたいなオメーに空気いれてやっただろうが。ひょっとしたら勝てるかもしれねーしな。そしたら案の定ボロ負けしたあげく、後輩に介錯までされやがって。もうお前は本当にボクシングの才能ないな」

「うっせえ！ ボクシングの才能ないのはテメーに似たからだ、このインチキ丹下段平

が！」

「うんだとこの負け犬野郎が！」

親父はおれに殴りかかり、息子は殴り返した。

デパートで始まる壮絶な親子喧嘩。店員は血相変え警察に電話し、犬たちは興奮しはじめてワンワンと吠え始めた。

ある犬などおれと親父の喧嘩を見て興奮しすぎたのか、犬小屋相手に腰を振り始めた。

二時間後、おれと親父はお巡りにこっぴど油を絞られ、交番を追

い出された。

二時間も絞られたのは、親父が交番のお巡りに食って掛かったからだ。

若いお巡りは、親父の毒舌に頭きて公務執行妨害で引つ張るとまて言い出したが、

親父の顔見知りである物わりのいい中年のお巡りが仲裁に入つて事なきを得た。

まったく親父と一緒にいると、三回に一回は交番で説教を喰らう。おれはウンザリしながら歩いてると、親父はお巡りを待たせて買つておいた首輪と鎖をデパートの紙袋から取りだした。

何をするのか黙って見ていると、空の首輪に鎖をつけて、カウボーイよろしく振り回しはじめた。

？小学生か、お前は？

「なあ、親父。恥ずかしいから鎖を振り回すのやめろよ」 おれは小声で諭した。

「なにが恥ずかしいだ。おれは千葉のクリント・イーストウッドと呼ばれてんだぞ」

？誰も呼んでねえよ？

「イーストウッドは犬の鎖なんか振り回せねえよ。だいたい危ねえだろうが」

それにあれは投げ縄だ。

「お前も男のくせに、小姑みたいにうるせえ野郎だな」と言つて振り回すのをやめなかった。

勝手にしろ。

おれは呆れて、親父の好きなようにさせた。

十分ほどすると、親父のアホは英語の歌までガナリ始めた。

道行く人々は、千葉のカウボーイを気取つて親父を見て笑いを堪えるのに必死だった。これだけでも恥ずかしいのに、学校帰りの小学生の集団が、親父の奇行を見物し始めた。

おれは恥ずかしくなつて俯いたが、ギャラリーが増えたことによ

って、親父の野郎は益々調子に乗り始めた。

「おうガキ。千葉のクリント・イーストウッドが投げ縄教えてやるぞ」

親父は、自分の奇行を見物していた小学生に気安く声をけた。

小学生は一瞬戸惑ったが、そこは親父である。

相手が戸惑っていろいろが、笑いを堪えていろいろが一切関係ない。

聞きもしない投げ縄の極意を得意げに語り始めた。投げ縄なんか一回もしたことないのに。

おれは途中何度も、親父の袖を引っ張って止めさせようとしたが、親父の野郎はそのたびに「テメーもつまらないこと抜かしてねえで、投げ縄の一つでも覚えて女の一匹二匹捕まえてこねえか！ この素人童貞が！」と、無茶苦茶なことを怒鳴り散らした。

殺してやりたいと思ったが、またお巡りに引っ張られるのも嫌なので、

親父が飽きるのを待つことにした。

一時間ほどして、親父はようやく飽きた。

親父はガキ共と別れると、鼻歌を歌いながら歩き出した。

おれは親父の横を歩きながら、いままですつと不審に思っていたことを尋ねた。

「親父、なんで犬の首輪なんか買ったんだよ。店員の兄ちゃんには迷惑かけたが、犬の首輪なんか買ったって仕方ないだろう」

親父はぴたりと足を止めると、おれの顔をまじまじ見つめた。

「お前も本当にアホだな。頭のなかにおがくずでも詰まってるのか？ それとも犬屋の兄ちゃんの有り難い話を聞いてなかったのか？」

「いや、聞いてたけどよ……」

本当は半分ぐらい聞き流していたが、親父には黙っておいた。聞いてないなど言ったら怒鳴られるのは目に見えている。

「なら、わかるだろう。おれっちが鎖を買ったわけを！」

「さっぱりわからねえよ！」

何故鎖を貰うのか？。何故おれが怒鳴られなきゃいけないのか、息子のおれにもさっぱりわからなかった。

「ああもう、お前は本当にお前はわかりん坊だな。仕方ねえ、おれっちが馬鹿なお前にもわかるように丁寧に説明してやるよ」

親父より利口だよ！ と怒鳴ってやりたかったが話が進まないの
で堪えた。

「いいか、世の中には盲導犬が欲しくて欲しくてたまらない可哀
想なちびっ子がいっぱいいるんだよ」

わかるか、一平？ 親父は汚い顔をクシャクシャにしながら泣
き始めた。

いや、おれも結構可哀想じゃねえ？

と言いたかったが、泣きじゃくる親父を見てると言い出せなかった
「だから一平。そういう可哀想なちびっ子のためにお前は盲導犬
を我慢しろ」

ああ。とだけ答えた。何を言っても無駄だと思ったからだ。

親父はおれの気持ちを気づくことなく、ベラベラと喋り続けた。

「と言ってもだ。お前は日本チャンピオンの癖にまともにジャブ
も撃てねえ、不器用もんだ。盲導犬がいなきゃ、一人で便所も行け
ないに違いない」

殴ってやろうか、このクソジジイ。

おれは鼻水を吸る親父に殺意を覚えたが、親父と違って大人なの
で我慢した。

「だから優しいおれっちは考えた。可哀想なちびっ子に盲導犬を
譲りつつ、ソープをねだる童貞小僧のように、盲導犬を欲しがって
いるおめえにプレゼントする方法を」

「いつおれが盲導犬を欲しがったんだよ！」

我慢しきれなくて、思わず叫んだ。

「おれは一言も盲導犬が欲しいなんて言っただろ」

盲導犬という発想すらなかったわ。

「嘘つけ！ いつも視姦するような目でおれっちを見つめていた

ろつ。盲導犬が欲しいって思いながら！」

「気持ち悪い例えかたすんな！ だいたい盲導犬と首輪になんの関係があるんだよ！」

「決まってるじゃねーか。保健所から犬貰ってきて、お前が訓練するだよ。そうすりゃ、バンバンザイだろうが」

親父はしれつとした顔でのたまった。

「馬鹿じゃねえーか！ ド素人のおれが盲導犬の訓練なんかできるわけねえだろうが！」

「やる前からできねーなんて言うな。この根性なしが！ おれっちを見る。お前みたいな才能なしの・根性無しの・玉無し野郎を日本チャンピンに育て上げたろうが！」

「なにほざいてるだ！ おれが日本チャンピオンになれたのはトレーナーの山形さんのお陰だ！」

おれはカツとなつて言い返した。

クソ親父の戯言に慣れてるおれでも、許せないことがある。

根性だけしかないおれが日本チャンピオンになれたのも、山形さんの指導のお陰だった。

山形さんの指導は厳しいけれど、どこか穏やかで、その教える内容は緻密なボクシング理論に裏打ちされていた。

うちのジムじゃなければ、世界チャンピオンを生み出すことができたろう。

それほどのトレーナーなのに、何故うちみたいな貧乏ジムの専属トレーナーしているのか謎だった。

もつと言え、親父見たいな極道な人間と、山形さんのような出来た人間が、親友なのもよくわからない。

「テメー！ おれっちの金玉から生まれてきたくせに、生意気なこといいやがつて……。この精子野郎！ 調子に乗っているともう一度玉金のなかに戻して生み直すぞ。このドンカスが！」

親父の最低の言葉に、周りの通行人がどん引きしていた。

アメリカのチンピラだって、こんな言葉使わない。

「わかったから怒鳴るなよ、親父」

おれは恥ずかしくなって、親父を宥めにかかった。

「ふん、はじめからわかっておけ。こんな常識的なこと」

親父はそう言うたアスファルト目がけて唾を吐いた。死ねばいいのに。

「——まあいいや、お前は馬鹿だからな。勘弁したる。それより早くいくぞ、保健所によ」

呆れ尽くした俺を置いて、親父は意気揚々と保健所にむかって歩き出した。

おれは、親父の背中を見ながら思った。

犬を引き取るかわりに、親父を引き取ってくれればいいのに、と。

保健所に着くと、気の弱そうな係員のおっさんが、犬舎に案内してくれた。

檻の中に入ってる犬たちは、目の悪いおれでもわかるくらい悲しそうに顔していた。

？こいつらだって生きたいだろうに？

一匹の子犬は、物悲しい目でおれを見上げていた。

ガラにもなく胸が締め付けられた。

「——このチビコロはダメだな。育てるのに時間がかかる」

親父は無神経極まりなかった。子犬はクーンと悲しげに泣いた。

「親父、場所を考えろよ」

おれは親父を諭した。

「お前こそ、犬コロなんかに同情してる場合か！」

親父に逆切れされた。

おれは怒鳴り返そうとしたが、係員のおっさんが止めに入っただけで我慢した。

暫く無言で牢屋を眺めた。

「見ろ、一平。こいつらの顔。どいつもこいつも、シメられる前の鶏みたいな顔してるぞ。やっぱ犬コロでも殺されるのは嫌なんだ

な。可哀想によう」

言葉は最低だが、親父の声は湿っていた。親父なりに同情しているようだ。

「そーいやよう、一平。秋田いたころ、棒きれで犬の頭引っぱたいて、よくシメて食ったよな。癖があるけど精がつくだよ、犬肉は夜なんか喰ったら大変なことになるから、おれっちは昼間しか喰わなかったけどな。ガアハハハ」

親父は本当にデリカシーがなかった。

「こーいう茶色の毛のした、小さいのが美味いだよ。こーいうの見つけたら後ろからそつと忍び寄って、棒きれで思い切り殴るんだよ」

親父は檻の中にいる可愛らしいチャウチャウを指さしながら言った。

「こ丁寧に殴る真似までし始めた。」

チャウチャウは、棒きれで殴る真似をしてる親父を悲しげな目で見つめながら、クウーンと鳴いた。

おれは親父の袖を引いた。

「おい、親父。犬鍋の材料探しにきたわけじゃねえぞ」

「うんなのわかつているよ！ おれっちはただ犬コロが可哀想だからちよつと言ってみただけだよ」

「可哀想なら食うなよ！」

てか全然慰めの言葉になつてねーよ。

「仕方ねえだろう、腹がへるんだから。それより、最高の犬を探すぞ」

親父は檻を見て回った。

おれはなるたけ飼うのが楽そう犬を候補にあげるが、親父はそのたびに「こんなもんバター犬にもなれねえよ」と無茶苦茶なイヤモンとつけて却下した。

とうとう最後の檻まできた。

檻の中では赤茶けた毛をもつ不細工な雌犬と、所所に十円禿げが

ある黒犬がいた。

禿げ跡のある黒犬は不細工な雌犬の尻の穴に鼻を近づけると、クンクンと匂い嗅ぎ始めた。

雌犬は嫌そうな顔で黒犬を一瞥すると、後ろ足で蹴っ飛ばそうとした。

黒犬は素早くよけると、雌犬のケツに乗っかろうとする。猛烈に抵抗する雌犬。

こいつは論外だな。さっさとガス室に送り込んだほうがいい。「こいつだ！」

親父はレイプ犬を指さし叫んだ。

「えっ、こんな見るからにダメそうな犬貰ってどうすんだよ」目が腐ってるじゃねえのか。

「馬鹿野郎、死の瞬間まで子孫を残そうとする根性をしろ！ 間違はなくこいつは根性のある犬だぞ、なあおっさん」

親父は保健所のおっさんに加勢を求めた。

「あのう……ここにるのはペットにむかない犬ばかりの集めた檻なので、お譲りするわけにはいかないのですが……」

保健所のおっさんは申し訳なさそうな顔で頭を下げた瞬間、親父はぶち切れた。

「さんざん犬コロ殺してきた癖に、お前は犬を見る目がないのか！……」

「——申し訳ありません」

親父の剣幕にビビって、反射的に頭をさげる保健所のおっさん。

おれはウンザリしながら、仲裁に入った。

結局親父の剣幕に恐れをなした保健所のおっさんは、親父に駄犬を引き渡してしまった。

あの時もつと保健所のおっさんが根性を据えて拒否してくれば、こんな駄犬の世話などせずにすんだろうに。

おれはウンザリしながら、砂浜で寝っ転がり続けている駄犬に目

をむけた。

駄犬は鼾をかいて寝ていた。

「犬鍋にするぞ、この馬鹿犬！」

おれが怒鳴っても、駄犬はなんの反応も示さなかった。

おれは蹴り起こしてやろうとしたその時、駄犬の目がカツと開いた。

おれは何事かと思つて啞然として見てると、駄犬はむくりと起き上がり、海に向かって突撃した。

波打ち際には薄汚れたシヤム猫が歩いていた。猛ダッシュをかます駄犬の瞳は欲情で潤んでいた。

まさか……………

？あの野郎。種族を超えたレイプにチャレンジする気なんじゃ……………？

おれの予想は当たった。

目を血走らせた駄犬は、シヤム猫に襲いかかった。

シヤム猫は、もの凄い勢いで逃げだした。必死に追いつがる駄犬。

？あのクソ犬……………？

おれは哀れなシヤム猫を救うために、駄犬の汚いケツを追いかけた。

——一五分後。おれは駄犬を肩に担ぎながら、海岸を走っていた。こんなうすらデカイ馬鹿犬なんか担ぎたくないが、シヤム猫を追いかけ回したせいで、駄犬の体力は底を尽きていた。

「お前なんでシヤム猫相手にサカろうとするんだよ。あきらかに種族が違つたろうが」

おれは肩に担いだ駄犬を叱りつけると、駄犬は情けない声でプシーと鳴くだけだった。

駄犬の情けない声を聞いた瞬間、反射的に、駄犬を海に放り捨てたくなつたが、飼い主としての責任が、おれの手を止めた。

おれはゼイゼイ息を吐き出しながら灯台の階段までやってきた。

この階段の上にある灯台がゴールだ。

現役時代なら足を止めずに、階段を駆け上がるところである。しかし今は現役ではない。

引退した元ボクサーである。

しかも階段は急で、長い。

「・・・・・・・・けるか」

おれは岬の階段を見上げながら思った。こんなところ今昇ったら心臓を吐いちまう。

現役時代、数え切れないほどのこの階段を昇ったが、楽に感じたことは一度もなかった。

特に中段あたりの辛さは尋常じゃない。

傾斜もきつくなるし、吹き飛ばされるんじゃないかと思うほど、強い海風も吹く。

何度へたり込んだことか。

おれが膝をつくたびに親父の竹刀が飛んできたっけ。

そっぴや、きよしの馬鹿ともよく昇ったな、この階段。

親父に煽られて、よく競争させられたっけ。

はじめのうちはおれが圧勝していたが、そのうちきよしに追いつかれるようになった。

終いの頃は、よく負けていた。

？ けっ？

クソろくでもない階段だ。

ボクサーでもないのに、こんなクソ階段を昇ってスタミナをロスしてもしょうがない。

家でセンスリでもして子種と時間を消費したほうがまだマシだ。

おれが背を向けようとしたそのとき、肩に担いでた駄犬が暴れ出した。

おれはびっくりして、思わず掴んでた前足を離してしまった。

宙に放たれた駄犬は見事に一回転して着地すると、何を思ったのか心臓破りの階段を駆け上がっていった。

「さつきまで死んでたくせになにやってんだ！ お前は」と叫んでみても脳みそが腐ってる駄犬の足は止まらない。尻尾を振りながら階段を駆け上っていく。

？どうせあの駄犬のことだ途中でへたばるだろう？

そこを捕まえればよい。おれは仕方なく心臓破りの階段を昇り始めた。

おれの予想に反して、駄犬の野郎はおれの背中で休んでいたのが功を奏したのか、中々へたばらない。

おれは息するのも辛くなってきた。

それでもなんとか中段まで辿り着いた。

おれの到着を待っていたかのように、強い海風が吹き荒ぶ。それもかなり強いやつが。

おれは思わず階段の手すりにつかまった。

？あんなクソ犬しるか？

おれは罵りながら、疲労のあまり膝をついた。

口から内臓を吐き出す勢いで、空気を求める。

やめだ。やめ。おれは下に降りる。てかあの駄犬を置き去りにして家に帰る。

おれは階段を下り始めた。

駄犬はついてくる様子はない。

？本当に置き去りにすんぞ？

おれはふり返り、駄犬にむかって「置いてくぞ！」と怒鳴ろうとしたが、声が出なかった。

駄犬の野郎にんまりと嗤いながら、階段の上からおれを見下ろしていた

視力は鈍ってるが、間違いなかった。

？あのクソ犬！？

これほどの屈辱は久方ぶりだった。

親父じゃないが、あの犬だけは棒きれで頭を引っぱたいてシメてやらないといけない。

おれは階段を昇り始めた。
待ってるよ、クソ犬が。

屈辱をバネにして、なんとかおれは心臓破りの階段を昇りきった。
しかし現役を退き体力が衰えていたおれはバテきっていた。駄犬
を棒でシメる余裕などない。

立つてるだけで辛い。

力尽きて、地面に倒れ込むおれ。

駄犬をシメるのは後だ。

おれは荒くなつた呼吸を整える。

息が落ち着いてくると、心に余裕ができてきた。

体力と思考力が回復してきた。

？駄犬の野郎、なにしてやがる？

海にでも落ちてくれればこれ幸いだが、他人様に迷惑かけてたら
まずい。

おれは頭を上げ、辺りを見回す。

まず目に入つたのは、駄犬ではなく巨大な金玉であつた。

巨大な金玉を持つ露出狂が突つ立てるわけではない。

金玉は金玉でも、タヌキの石像の金玉である。

？いつみても品がないな？

このクソ下品なタヌキ像がなければ、この灯台ももう少しロマン
チックな場所になるんだろうが、

こんな下品な像でもご神体なのである。

おれも詳しくは知らないが、灯台ができる前ここは神社で、こ
のクソ下品なタヌキ像は権左右衛門様と呼ばれ、崇められていたそ
うだ。

こんなクソ下品なタヌキ像にお祈りしたところで、御利益なんて
まったく期待できなさそうだが、江戸時代は人間が大らかに出来て
たのか、遠く四国からも参拝客がくるほど賑わっていたそうだ。

しかし神様とて時代の流れには逆らえない。

明治になると、どこかの偉い人が、神社をぶっ潰して灯台を建設

することに決めたそうだ。

地元の人間は猛反対したらしいが、親方日の丸には逆らえない。結局、神社は潰されることになった。

が、権左右衛門も神様だけあつてしぶとい。

工事期間中、不可解な事故や病気が多発し、信じ深い年寄り連中が権左右衛門様の祟りだと騒ぎだした。ご神体はこのままで神社だけを取り壊すことになった。

まあ、親父から聞いた話なのでホラ話なのは間違いながら、権左右衛門は今も広場の真ん中で鎮座してることだけはたしかだ。

それはいいのだが、頼むから一つしかないベンチを厳左右衛門の前に設置するのは止めて欲しかった。

品が悪すぎて座る気にもならん。

？まあ、権左右衛門はどうでもいいや？

ウチの馬鹿犬を探さないと。

おれは権左右衛門から視線を外し、再び馬鹿犬を探し始めた。

馬鹿犬、馬鹿犬・・・・・・・・

辺りをキョロキョロと見回す。

馬鹿犬のかわりに、蕾のままの向日葵が目に入る。

物好きな婆さんが灯台の横ちようで作った花壇である。

こんな所に勝手に花壇なんか作っていいのかわからないが、誰も文句をいうヤツはいない。

？そついや、婆さんが見えねえな？

いつも白い犬を連れて、花壇の世話をしてるか、芝生に腰を下ろして海を眺めているのに。

今日に限って婆さんの姿は見あたらなかった。

たまたま来てない、というのはあの婆さんに限ってあり得なかった。

あの婆さんは――

暑い日も

寒い日も

雨の日も

風の日も

雪の日も

いつも灯台にいた。

多分、おれが来てない日も、あの白い犬と一緒に海を眺めている。何故そんなことするのか、アカの他人のおれには見当もつかない。でも、婆さんの姿が見えないのは悲しかった。

見慣れた景色の一部が、無断で切り取られたかのような、喪失感。

「向日葵も婆さんがこなくて寂しいのかもな」

おれは潮風に揺れてる向日葵の蕾を見つめながら呟いた。

去年の今頃なら、大輪の花を咲かせてるだろうに。今年に限って、向日葵は蕾のままだった。

「アイイーン」

感傷を吹き飛ばすかのような間抜けな雄叫びが響いた。

何事かと思つて見ると、駄犬が灯台の入り口にある階段の手すりの柱を猛レイプしていた。

フィニシュが近いのか、ダメな企画系AV女優のようなアヘ顔である。

「お前それがやりたかったのか……」

おれは駄犬の寂しい一人遊びのために、死ぬ思いであの階段を昇ったのか。

そう思つた瞬間、すべての氣力がうせた。

上がつていた顔が下がる。

暫くの間地面とデーパーキスすると、土の味にも飽きてきた。

おれは再び顔を上げる。

駄犬はチンポを柱に擦りつけながら長い舌を使って、錆びた金属の地肌をいやらしく舐め上げていた。

？——柱相手にテクニクを屈指してどうするんだよ？

おれはもつと綺麗な物を見つめたくなつた。仰向に寝転がる。

綺麗な青空が見えるはずだった。でも壊れかけの目に映つたのは

酷く滲んだ空だった。

どこまでが雲でどこまでが青空なのか、それすらよくわからない。青空がもっと近ければわかるのに。

おれは天にむかつて腕を伸ばした。からっぽの手を閉じて青空を引き寄せようとしたが、

手の中にはなにもなかった。

無駄なことだ。

たとえ青空を引き寄せることができても、失明しちまえば見えなくなる。

暗闇を――

引き寄せるようなもんだ。

クソ。

おれは舌打ちして瞼を閉じた。現実から目を背けなくなったのだ。「ワフワフン。ワフーン」

駄犬の間抜けな声のおかげで、すぐ現実に戻された。

またしてもフィニッシュが近いのか。

？勝手にやってる？おれが無視することに決めると、「きゃあー」という可愛らしい悲鳴が響いた。

？きゃあー？？

酷く掠れた声だけど、間違いなく女の声だった。

おれは驚いて声がするほうを見ると、白いワンピースを着た少女がめくれ上がったスカートを手で押さえていた。

駄犬は激しく尻尾を振りながら、スカートのなかに頭を突っ込もうとしている。

少女の飼い犬らしい腰にピンクのリボンを結んだ白い犬が、主人に襲いかかる駄犬の尻尾を一丁懸命引っ張っていた。

が、性獣と化した駄犬には無駄だった。

？種族を超えすぎてんぞ、馬鹿犬が！？

おれは慌てて立ち上がると、少女のスカートのなかに頭を突っ込んで、いる駄犬の腹を蹴り飛ばした。

駄犬はキャヒーンと鳴きながら、無様に倒れた。

「なにやってんだこの馬鹿犬！ 絞め殺すぞ！」

地面に転がってる駄犬にむかつて怒鳴ると、駄犬はすぐに仰向けになって腹を見せた。

反省のポーズだ。それはいいのだが、駄犬の汚らしいチンコは勃起していた。

「うんなことしたって許さねえぞ、馬鹿犬！」

てか、息子を大人しくさせる。

「あの、そんなに怒らないでください。たぶんワンちゃんは、わたしに遊んで貰いたかっただけですから」

「この馬鹿犬にかぎって——」

おれは声を飲んだ。間近でみて初めて気づいたのだ。ワンピースの少女の可憐さに。

「——変ですよ、わたしの声」

少女は悲しげな顔で微笑みながら、勘違いした。

「いや、おれはただ——。そのう……、あれだ。綺麗な足をしてるなっ」

おれのアホな言葉を聞いて、少女の頬は鬼灯のように赤く染まった。

？アホか、おれは？

そろそろ加齢臭が漂いはじめる見知らぬおっさんに、いきなり生足ほめられたら普通引くだろう。

自分のあまりの馬鹿さ加減に、おれは頭を抱えて座り込みたくなつた。

「——あの、ありがとうございます。ちょっと細すぎるかな、と自分では思ってます」

少女は気を使って話をあわせてくれた。ただし顔は真っ赤なまんまだった。

拙い話題を変えなければ。

「こんなところに何しに来たのですか？」

「えっ……」

少女の頬はより赤くなつた。なんか拙いこと言つただろうか、おれ。

「……海を眺めに来たんです。ここからだと海の向こうまで見えそうですから」

景色はいいかもなたしかに。おれは少女の言葉を確認かめるかのように海の向こうを見つめた。

滲んだ灯台と、ぼやけた青が見えた。少女が見たであろう美しい光景は、おれの目には映らなかつた。

なんでも滲んで見える。

おれは目をそらした。

「——どうしたんですか？」

事情を知らない少女は怪訝な顔で尋ねた。

「目にゴミが入つたですよ」

おれは目を擦って誤魔化した。

「そうですか、ここ海風が強いですもんね。はじめわたしも海岸の階段を使おうと思つたんですけど、海風が強すぎて恐くて……結局遠回りして道路のほうの道から来ちゃいましたよ」

「それが正解ですよ。あんな階段地元の人間だつて使いませんよ」

「そうなんですか……。でも一平さんはあの階段昇つてましたよね」

「いやそれは——」

おれはそこではたつと気づいた。

「なんでおれの名前知ってるんですか？」

おれは一応有名人だ。深夜放送とはいえ試合がテレビ中継されたこともある。

だがそれでも年ごろの女の子がおれのことを知ってるとは思えない。

なんせボクシングである。

競技人口が多い野球とかサッカーとは訳が違う。

女、子供なんて見向きもしない。

見るのはボクシングファン。それも大抵ろくでもない人間。

おっさんとか、はじめの一步かぶれとか、それかタニマチのヤクザぐらいである。

なのおれの名前を知ってる。十分おかしい。

「やつぱり……忘れてる」

海風と波の音が、後の言葉を掠っていった。

だから、おれには聞こえなかった。

「なんて言ったですか！」おれは海風に負けないよう叫んだ。

「なんでもありません！」少女は少しむくれた顔で怒鳴り返した。

「なんか怒ってません？」おれは幾分情けない顔で言った。

いい年こいてまともな恋愛経験をしたことないおれは女の気持ちなどまるでわからない。

何も知らない地球人がエイリアンに遭遇したようなもんだ。

もちろんこんな可愛いエイリアンなら毎日でも遭遇したいし、なんだったら食べられてもいい。

「べつに怒ってませんよ」

その言葉とは裏腹に少女はふいと横を向いた。

？なに怒ってるんだかわからないけど、マズイ？

年頃の少女は難しい。話題を変えなければ。

「このワンちゃん可愛いですね——」

おれは少女の飼い犬を褒めようとした。犬好きなら飼い犬を褒められて悪い気はしまい。

しかし少女の足下にいるはずの白い犬はいなかった。

少女も飼い犬がいらないことに気づきキョロキョロと辺りを見回す。

「あつ、いました！」

少女は灯台の方を指さす。おれは目を細め、少女の指が指した先を見つめる。

滲んでよく見えないが、灯台の横穴あたりに白い滲んだ点が見えた。

滲んだ白い点は、少女のほうに駆け寄ってくる。段々と白い点が大きくなり、やがて白い犬となった。

白い犬は口に丸めた紙を咥えていた。

少女は子首を傾げると、白い犬の口から紙を取って目を通した。おれは犬の顔を見てあることに気づいた。

「よく見りゃあ、お前婆さんの犬じゃねえか」

白い犬は物好き婆さんの飼い犬であった。

目がポンコツになったせいで気づかなかった。

「ポンのこと知ってるですか？」

「ええ、ここに毎日来てた物好きの婆さんの飼い犬ですよ。ひよっとしてアンタ婆さんの親戚か何かか？」

「いえ、この子灯台のなかに住んでいたんです」少女は紙から目を離し、答えた。

「灯台に住んでた?!」おれは素っ頓狂な声をあげた。

「ええ。犬小屋もありましたよ。名前まで書いてありました」

おれは犬の顔を覗き込んだ。

「お前、婆さんどうしたんだ？」

おれが問うと、白い犬ことポンは悲しげな声でクーンと泣いた。

「まさかお迎えが来ちまったのか？」

おれが病院に入院している間、逝っちまったのかもしれない。いい年だったしな。

「ワンワン！」ポンは抗議するように吠えた。

「悪い、悪い。おれが悪かった」おれが詫びると、ポンは吠えるのを止めた。

「ポンは訳あり犬なのね——」

少女はそう言つと、ポンの頭を撫でた。おれはその仕草が妙に夢げに見えた。

「——そっぴゃポンが咥えていた紙はなんだったですか？」

おれの目じゃ、滲んで見えない。

「灯台新聞です——。読みます?」

「灯台新聞?」なんで犬が新聞?

「どこかの高校生が作った学校新聞のようですね。青商新聞部発行ってかいてありますから」

「青商かあ、あの馬鹿高にも新聞部なんて洒落たモンあったんだな」

青商は、お世辞にも頭の良い学校とは言えなかった。

学校のレベルでは下の上ぐらいであるが、中学の頃は青商に憧れたものである。

なにせ元女子校なので、女子率が半端なく高い。

勿論低偏差値に比例してズベ公も多かったが、それでもダイヤの原石が混ぜっていたりする。

まあ中卒のおれには、あまり関係のない話だが、中学の時は青商に入りたかった。

あんだけ女がいるんだ、一人ぐらいおれの童貞を貰ってくれるズベ公がいるかもしれない。

たとえ童貞が捨てられなくても、ズリネタには困らないはず。げんに中学時代のおれは青商の女達をネタにセックス&バイオレンスなズリネタストーリーを作り出し、それをネタに毎日センズリをこいてた。

そのせいか今でも、青商の制服を見ると視姦してしまう。

「なかなか面白いですね、この新聞」

おれがド汚い回想している間、少女は新聞を読み終えたようだった。

「——どんな事書いてあるんですか?」

「灯台の歴史のこととか、妖精の追い返す呪文とか、素敵なおまじないのこととか……」

「おまじない?」

「とっても素敵なおまじないですよ」

「どんなおまじないですか」

「——ダメです、一平さんには教えられません」

少女は悪戯っぽく微笑んだ。

「なんでですか？」

「なんでそのうちなんだろう??」

今教えてもいいのに。おれは聞き出そうとしたが、少女は可愛らしい笑みではぐらかしてしまった。

まあいい。青商の新聞なんかよく考えてみればどうでもよかった。おれはもつと重要なこと少女から聞きださなければいけなかった。

「——そう言えば——」

おれはごくさり気なく尋ねようとしたが、緊張してるせいで声が多もらくつていた。

「震えてるじゃねえ、おれの唇？」

名前ぐらい聞き出さねば、この出逢いを明日につなげられねえぞ。

素人童貞、卒業したいだろう、おれ。がんばれよ、おれ。

おれは自分で自分を励ましたが、唇の震えは止まらない。

少女は怪訝な顔で、おれを見上げている。顔が近い。

もう少し距離が縮まれば、少女の吐息まで感じるができるかもしれない。

おれの心臓が烈しく高鳴った。

「どうしたんですか？」少女は問う。

「お名前はなんでおじゃるんですか？」

おれはどもらくつて、インチキ公家さんみたいな言葉を発した。

少女は吹き出した。

少女は笑いながら、おれにむかって何か言おうとしたが笑いすぎて声にならない。

腹を抱えて笑ってる少女を見て、おれはどういいのかわからず、結局おれも笑い出した。

笑っしかねえや。

おれは笑いながら、切なくなっていた。

この恋、終わったな。

早い。あまりに早い恋の終わりだった。仕方ない、おれは素人童貞なんだ。

美少女に恋するなんて、百年早い。

素人童貞は素人童貞らしく、ソープで腰ふってればいいだ。

そうだ、そうしよう。とりあえずソープ行く金ないから、弟から金かりないと。

「一平さん、ずるいですよ、急に笑わそうなんて」

おれが失望を欲望に変換してる間に、少女は笑いを納めていた。

「いや、笑わそうとしたわけじゃあ……」

「じゃあ、なにを言おうとしたんですか？」

気のせいかな、少女の大きな瞳には悪戯ばい光が輝いてた。

「なっ、名前聞いところかなと思って……」

一度恥をかいたせいかな、さほどでもらずにすんだ。

「——名前聞こうとして照れちゃったわけですか——」

少女の声には微量の勝ち誇った色が響きがあるように聞こえた。

気のせいかもしれないが。

「いや下心あるわけじゃなくて、なんて言うのかな、挨拶みたいなもんでしょ」

おれは動転しながら答える。

「なるほど、一平さんは挨拶がわりに女の子の名前を聞いちゃう人なんです」

少女はジッと目でおれを睨むと、「——もっと硬派な人かと思っ
てました」

少女は失望し、大きなため息を吐いた。

「いや硬派ですよ、おれ」

おれは必死にこいて弁解する。そんなおれを見て少女は笑った。

「まあいいです、あまり苛めると一平さんが可哀想ですから」

「なら、名前教えてくれるですか？」

恥をかいたせいかな、度胸がついた。今度はともらなかった。

「——ポン子です」

「ポン子？」おれは素っ頓狂な声で聞き返した。

「そうです。ポン君のお姉さんだからポン子です」

少女ことポン子は、上手くはぐらかした。

「ポンのお姉さんのはずないでしょう？ 犬じゃあるまし」

「実はわたしは犬なんです」

ポン子は頭に両手を当てる、「わん、わん。ポン子だわん」と宣った。

おっさんのハートがキュンとなると同時に、？この女、自分のビジュアルをしってやがる？

自分のビジュアルに自信がある女が繰り出す、男をはめる罠である。

昔キヤバクラでコリン星人そっくりのブリッ子女になけなしの金を巻き上げられたことがあるおれは、

簡単には騙されなかった。

しかしこうも思った

女の嘘は暴いてはいけない。

おれが唯一感心した、親父の言葉である。

たしかにその通りだ。

女と言う生き物は皆白鳥なのである。

優雅に湖面を泳いでるように見えても、水のなかでは必死になって足をジタバタさせてるもんなんである。

男は岸から黙って岸から鑑賞してればいい。

けっして湖に飛び込んで、藻掻いてる足を見てはいけない。

必死になって演技してる女に失礼だし、男の幻想も潰すことになる。

「——納得して頂きましたか？」ポン子は耳に手を当てたまんま上目遣いで問うた。

「——納得しました」おれは騙されることにした。

「そうですか、納得して頂けましたか——。たまに疑り深い人が

いると、くんくんまでやらないと信じない人がいますから——」

「くんくんだとっ！」

ポン子の何気なくはなつた言葉は、おれの心を貫いた。

くんくんと言うのはつまりアレだ。鼻を近づけて男の体臭をかくわけだ。ごく間近に近づけてな。

これだけでも凄い。

こんなことポン子にやられた日には、鼻血と一緒に射精する自信がある。

だが、これだけではないだ。

大抵の犬はクンクンしただけでは終わらない。クンクンした後高確率でペロペロがあるのだ。

わかるかテメー等、ペロペロだぞ、ペロペロ。

おまえそれが顔面だったら大変なことになるぞ。ましてやチンコだつた日には——

どうなつちまつかわからないぞ、おれ。

「……どうしたんですか？」

気づくとポン子は不安げな顔でおれを見つめていた。

惑乱したおっさんを見て、頭の中身が心配になったのかもしれない。

「いや、そのう、ちょっとまあ、なんて言うか——」

頭が混乱して言い訳が思いつかない。なんか格好いい言い訳はないものか……

「——そうだ。むかしの試合を思い出してたんですよ。ほらおれ元ボクサーでしょう。たまに苦戦したときの試合思い出して固まっちまうことがあるんですよ」

まあ、いま硬くなっていたのは息子なんだが。

「——なんか嘘くさい話ですね」

ポン子は疑り深かった。

「なに疑ってるですか、おれは試合に負けたことがあっても嘘だけはついたことないですよ」

おれは大嘘をついた。

「まあ、そう言うことにしておきます」

ポン子は矛を収めようとしたその時、おれはあることを問うた。

「——ところでポン子さんは誰かに今までクンクンしたことあるんですか？」

聞かずにはいらなかった。

「——ポン子はこれでも忠犬なので、ご主人様にしかクンクンはしないです」

言下に、誰にもしたことがないと言っていた。

良かった。それにしてもご主人様にはくんくんかああ。はああ、たまらんな。

「なんか目がエッチです、一平さん。もっと硬派な人だと思ってたのに……」

やつは懂れてる人には会ってはいけませんね、と言ってポン子はため息をついた。

「なに言ってるですか、硬派ですよ。おれは」

おれは情けない顔で、硬派アピールをする。

「言葉だけは信じられません。硬派なら行動でアピールしてください」

「行動って……」

押し倒せ、とかだったらどうしよう。

おじさん素人童貞だから、あんまり難易度の高いのは、ちょっと・

やっていいのなら、是非やらせていただきますけど。

「ポンのお姉さんとしては、これから毎日朝ご飯をポンに差し入れするつもりなんです」

「はああ」

なんかおれの予想と違う方向の話だ。
当たり前か。

「そのついでにランニングをしようかな、と思ってるです。この

所、ハーゲンダッツ食べ過ぎてちよつと肥ってしまいました・・・
・・・」

ポンは小さくなる。

「で、一人で走るとすぐに挫折するので誰か一緒に走ってくれる
人がいないかなと・・・」

「ハイっ！！！」

おれはナチスばりの勢いで手をあげて、立候補した。

マシンガンをぶっ放せ

おれは少女とランニングする約束をし別れた。

走り込んだせいでクソ疲れていたが、家路を辿る足は軽かった。

ルンルン気分で家に帰ると、弟の数馬が朝飯を食っている最中だった。

「おつ。朝からドンブリ飯か。若いんだから、がんがん喰えよ」

おれは機嫌良く、弟の背中を叩いた。

数馬はふり返る。

「痛てえな。それに気持ち悪いだよ。朝からなにニヤニヤしてんだよ」

弟は眼鏡越しからガンをたれてきた。

細いフレームの銀縁の眼鏡、ムースでガチガチに固めたオールバックの髪型。

どこからどう見ても、立派なヤンキーだった。

おれは生意気な弟のダテ眼鏡を取ってやった。

レンズの下から、お袋譲りの子鹿のようなつぶらな瞳が現れる。

「生意気言うのは、その可愛いお目々をなんとかしてからにしろ」

おれが追い打ちをかけると、数馬はガチで恥ずかしくなったのか、耳が真っ赤になった。

天の邪鬼な数馬は、恥ずかしくなると頬を染めるかわりに耳が赤くなるのだ。

「返せよ！ クソ兄貴」

数馬は耳を赤くしながら、おれから眼鏡を奪い取ろうとする。

いつもならゴミ箱にでも叩き込んでやるのだが、今日は機嫌がいいので返してやった。

台所から自分の分の飯と味噌汁を持ってくると、数馬の正面に座った。

おれは頂きますをしてから、箸に手をつける。

しばしの間、無言で飯を食う野郎二人。

茶の間には、タクワンをボリボリと囓る音と、味噌汁をすする音しか聞こえない。

味噌汁をお代わりしたところで、おれは気になっていたことを弟に尋ねた。

「そういえば親父は？」

トラブルメーカーの親父の姿が見えない。

居たらいたでむかつくし鬱陶しいのだが、姿が見えないと外で何かやらかしてるじゃないかと不安になる。

「なんかメロン食いたいから、三宅の婆さんのところ行って貰ってくる、とか言って出て行っただよ」

「貰ってくるって……どうせ盗んでくるんだから止めるよな、お前」

「止めて聞くような親父かよ。それに面倒くさい」

数馬は箸を止めることなく言い返してきた。

「また騒ぎになったらどうすんだよ？」

親父は果物が喰いたいと、幼なじみの三宅の婆さんの畑から、貰ってくる称してよく果物を盗んでくる。

それが原因で三宅の婆さんと壮絶な喧嘩になり、一時は裁判沙汰にもなりかけたが、親父は懲りることなく今も畑泥棒をしている。

親父に言わせると、三宅の婆さんの畑ではじめて種まいたのはおれっちだから、タダで野菜を貰う権利があるそうなんだ。

三宅の婆さんに言わせると、アレは襲われただけなので、果物をくれてやる義理はないと言う。

どちらの言い分が正しいにしろ、犯ったのは間違いないようだ。若い頃の話なんだろうが、ババアとジジイの姿しか見たことないおれにすれば、キモイとしか言いようがない。

玄関の方から、ガラガラと音がした。

親父だ。

「おつ、帰ってきたのか。穀潰し。仕事もしないけど飯だけはしっかり喰うだな」

親父はいつもの通りの、クソ親父だった。

クソ親父の右手には戦利品であるメロンが。左手には不細工なゴリラ人形が抱え込んでいた。

「親父、なんだよ？ そのゴリラの人形は」

「ああ、これが。メロン貰いに行ったら、三宅の婆さんと畑でバツタリ会ったんだよ。三宅の婆さん、皺だらけの小汚い顔を崩してニヤニヤ笑ってお早うなんて言うから、なんかあったのか？ て、聞いてやったら昨日パチンコで大勝ちしたって言うだよ。それで珍しく茶でも飲んで、て言うからよ、大人しく飲んでやったら、帰りパチンコのあまり玉で貰ってきたゴリ公の人形をくれたのよ」

「そんなもん貰ってきてどうすんだよ。邪魔になるだけじゃねえか」

野郎所帯に人形は不要だった。

「それもそうだな」

親父はゴリ公の面をマジマジ見つめながら呟いた。

「親父。ゴリラータンいらなのなら、おれにくれ」

「？ゴリラータン？？」

数馬が突然気色悪いことを言い出した。

「お前。ゴリラータンてなんだよ。オカマにでも目覚めたか？」

「うるせえよ」

数馬がおれを睨みつける。

「人形欲しがるぐらいで、オカマだとか決めつけるなよな、クソ兄貴。ゲーセンにあんだだけUFOキャッチャーがあるんだ。男だつて、人形ぐらい集めるよ」

「なんだよ、UFOキャッチャーって？」

おれの言葉を聞くと、数馬はぽかんと口を開けて驚いた。

「——今どきいるだな、UFOキャッチャー知らない人間が。兄貴、少しはボクシング以外のことに興味もったほうがいいぜ。マジ

で社会復帰できなくなるぞ」

数馬は真顔で忠告した。

「仕方ねえだろう。中卒なんだから、ちつとばかり物知らなくても」

「いや、中卒とかそういう問題じゃ——」

と数馬が言いかけたが、語尾は駄犬の吠え声によってかき消されてしまった。

「うるせえ馬鹿犬だな。兄貴、なんとかしろよ」

数馬はウンザリ顔した顔で、前庭に繋いである駄犬を見た。

さつきまで疲れて寝っ転がってたくせに、駄犬は起き上がって、元氣よくおれ等にむかって吠えていた。

「おい、一平。ロッキーに朝飯ちゃんとやったのか？」

親父は、前庭で吠えまくる駄犬を見つめながら言った。

「やったよ。朝飯なら」

「なら、骨っ子だな。骨っ子喰ってないから苛ついてるだよ、ロッキーは」

親父は一人合点して、ゴリラタンを抱えたまんま台所に消えていった。

親父は、骨っ子とゴリラタンを抱え戻ってきた。

親父は窓をあけて、駄犬に骨っ子をやろうとした。

駄犬は骨っ子には目もくれず、親父にむかって飛びかかってきた。おれは一瞬、駄犬がトチ狂って親父に襲いかかったのかと思った。

しかしそれは勘違いだった。

駄犬が襲いかかったのは親父が抱えているゴリラタンだった。

駄犬は親父からゴリラタンを奪い取ると、首筋に噛みつきながら猛レイプしはじめた。

？レイプするにしても、もう少し優しいやり方はできねえのか？？
おれは猛レイプされている、哀れなゴリラタンを見つめながら思った。

親父は顎に手をやりながら、物知り顔で呟いた。

「——骨つ子じゃなくて、ゴリ公だったか……。盲導犬
つてのは難しいもんだな」

おれは、この家はダメだな思った。

親父と数馬は朝飯を食い終わると、親父はジムへ、数馬は学校へ
と出かけていった。

おれはというと、やることがないので、居間でぼんやりテレビを
眺めた。

画面の中のテレビキャスターは、

覚醒剤を使ったロツカ——

いつまでも不景気な世の中——

すぐ自殺する少年と少女——

について語り始めた。キャスターの隣にいる引退した野球選手は
したり顔で毒にも薬にもならない意見を口から吐き出した。

メチャクチャウンザリしてきた。

？他人なんだからほっといてやれよ？

それが他人ができる唯一の優しさだと思う。

リポーターが、失踪した歌姫のプライベートを暴こうとしたその
時、おれはテレビのスイッチを切った。

静まりかえる部屋に、蝉の鳴き声が響いた。

暇だ。

？点字の勉強でもするか？

暇だし。

二階のおれの部屋には、お節介な弟が買ってきてくれた点字の本
が置いてある。

たとえ失明しなかったとしても、どんどん視力が悪くなるという
現実がある。

視力の悪化にそなえて、目が見えているうちに、点字の一つぐら
い覚えておくべきだろう。

でも、おれは点字を覚えたくなかった。

点字を一つ覚えるごとに、失明に近づくようで嫌だった。目をそむけたい現実が迫ってくるようで嫌だった。

リングを降りたおれはなんて臆病なんだろう。

ため息が出た。それと同時に屁も出る。

「ニートって奴だな、こりゃ」

おれは己の現状に苦笑した。

元日本チャピオンだろうが、元プロボクサーだろうが、他人から見ればおれは立派なニートだった。

過去にどれほど苦労していようが、過去にどれほど偉業を成し遂げていようが、今がダメなら無意味だ。

人間、過去にも未来に生きられないだから。

刹那的に続く今しか生きることができない。

暇になって考えて見てつくづくそう思う。

だって今のおれ、ウンコ製造マシンだし。

またしてもため息が漏れた。

ダメだ。居間でゴロゴロしていると悪いことばかり考える。

こんな時は――

セنزリしかない！

ダークフォースに引きずり込まれそうになった時は、セنزリをぶっこくにかぎる。

本当はセنزリするよりも、ソープに行きたかったが、軽い財布が贅沢を許さなかった。

贅沢はニートの敵なのだ。

ソープへの未練を断ち切るべく、おれはさっさく頭の中でズリネタの選定を始めた。

すぐさま朝の少女の顔が思い浮かんだ。

あの子があんな事したり、あんな事されたりしたことを想像すれ

ば、充実したオナニー

ライフをおくれそうだが――。

「おれの大馬鹿野郎！」

おれは居間で吠えた。

庭で、自分のチンコを懸命に舐めていた駄犬が、ビックリしておれの方に顔を向けた。

おれはといえば、己の浅ましい獣欲に恥じ入っていた。

あの子はAV女優じゃないだ。劣情は、他のもんで解消しないとそうじゃないとおれも庭でチンコを舐めている駄犬と変わらない。おれは少女をズリネタに使うことを断念した。

おれは少女の代わりに、自分の部屋にあるズリネタライブラリーを使うことにした。

？さてなんでブっこくか？

自分の部屋にあるズリネタライブラリーを思い返してみる。

どれもこれもすり切れるくらい使い込まれたネタばかりだった。

？どうもいまいちだな？

レンタルビデオ屋で何か借りてくるか？。

と思ったが、最近のビデオ屋はDVDしか置いてないので、ビデオデッキしかない我が家では使えなかった。

こうなったら親父のネタを借りてみよう。

親父はお気に入りのズリネタを、押し入れの奥に隠しているのは知っている。

正月の大掃除のときに発見したのだ。

親父のことだ。今も押し入れに隠しているに違いない。

おれは親父の部屋に侵入して、押し入れを漁った。

押し入れの奥から花柄がプリントされたメルヘンチックな小箱が出てきた。

？なんだこりゃあ？

まさか、母ちゃんの思い出の品とか、子供の可愛い写真とか、へその尾とか、仕舞ってるんじゃないだろうな。

——あの顔で。

まあ、親父も人間だ。そういう所があるのかもしれない。
覗いちゃ不味いな。

おれは良識に従おうとしたが、結局好奇心に負け、小箱を開けてみた。

中から、たくさんのチケットが出てきた。

はじめは文字が滲んでよく見えなかった。がマジマジとよく見ると、エロ本の付録のソープの割引券だった。

「クソ親父！ もう少し入れるモン考えとけ！」
思わず怒鳴ってしまった。

「——まあ、気持ちはわかるがな」

入浴料半額はデカイ。おれは三枚ほど貰っておいた。

さて半額券ゲットしたところで、ズリネタ探しを再開するか。おれは押し入れをガサゴソと漁る。

五分ほどして、ズリネタの山を発見した。

おれはビデオのラベルに目を思い切り近づけて、題名を確認していった。

親父のズリネタは、青カンものがやたら多かった。

？青カンになにか思い入れでもあるのか、うちの親父は？

そう言えば親父、よく畑の横っちょで蚊帳を張って女とやっていた、とか言ってたな。

千葉で蚊帳を張る優しさがある男は、おれだけだとも自慢していた。

？三宅の婆さんとも、蚊帳のなかで犯ったのか？

ふと思ったが、想像すると気持ち悪くなったので思考するのを止めた。

ズリネタ選定作業を再開する。

考え抜いたうえ、太陽と月と青カン・ぶっかけ五郎渋谷へ行く・人妻美貴の淫らな挑戦をチョイスして、居間に戻った。

おれは居間のカーテンを閉めた。

カーテンを開けっ放しでやると、何故か駄犬が吠えまくるので、おれはセンサーをするときは、必ずカーテンを閉めてやることにしている。

まあ紳士の嗜みだ。

それに一回、庭から侵入してきた三宅の婆さんにセンサーしているところ見られたしな。

警戒するにこしたことはない。

しかしなんで田舎の婆さんは、庭から家に上がりこんでくるんだろっ？

玄関の意味がねえじゃねーか。

まあいいや。三宅の婆さんは。

今はエロビデオだ。

おれはテッシュを用意し、人妻美貴の淫らな挑戦をセットした。見えない目でもよく見えるように、テレビに嚙りついた。

クレーン車らしき物がテレビに映った。

なんだこりゃ？。

エロビデオになんでクレーン車が映るだよ。

おれの息子は、乗り物好きの幼稚園児じゃないだから、こんなモン見せられてもちつとも嬉しくないぞ。

頭に来てビデオを消そうと思った瞬間、おれはとんでもないことに気づいた。

クレーン車には裸の女が吊されていた。

滲んでたから気づかなかった。

何をやるうと言っんだ？。

カメラは、女の真下を映した。

地面にはなんと、竹槍がそそり立っていた。

竹槍だとっ……………。

まさか……………。

INするつもりなのか。

おれは思わずブラウン管を両手で掴んでしまった。

おれを挑発するかのように、人妻美貴は淫らに笑う。

こいつやる気だ！

「馬鹿やめろって！ お前は今、おれ以上に無謀なことしてるだぞ！」

おれはテレビにむかって怒鳴ったが、鎖にぶら下げられた美貴は下に向かって降ろされていく。

股間と竹槍の先端がぶつかろうとした刹那、玄関のチャイムがなかった。

おれは条件反射で、素早くビデオの停止ボタンを押し、センサーポジションを解消した。

いつもならセンサーを邪魔されると機嫌が悪くなるが、今日だけはホッとした。

女が串刺しになるところも、女が竹槍を飲み込むところも見たくない。

おれはズボンをはいて、玄関にむかった。

玄関の扉を開けると、小太りのおっさんが立っていた。

金蠅の異名を誇るフリーライターの野崎国近だ。

異名の由来は、クソにたかる蠅のように、金になるクソにたかるのが上手いからだ。

「よう、チャンピオン。久し振りだな」

野崎の声は酒臭かった。

昼酒をかつ喰らってきたらしい。

いい身分だ。

「元チャンピオンだよ。野崎さん」

おれは不快さを抑えながら言った。

野崎とは付き合い長いが、おれはどうもこいつが苦手だ。

なにかあるとすぐ絡んでくるし、人に聞かれたくないと思った質問もズバズバしてくるし、どうもこいつとは馬が合わない。

「そうだったね、沢村さん。高山が存在感がないから、ついチャンピオンて呼んじゃったよ」

「きよしが存在感がないって、どういう意味だよ」

おれの声は怒りのあまり低くなっていた。

「沢村さん。あんたほどじゃないが、おれもボクシング業界では長くメシを喰ってるんだ。輝いてる人間と、腐ってる人間の見分けぐらい目をつぶってもできるさ」

「きよしが腐ってるとでも言うのか」

握りしめた拳が怒りで震えていた。

きよしのクソ野郎なんて思い出しただけでもむかつくが、おれのボクシング人生にトドメを刺した男だ。

強くあつて欲しかった。

「ああ、腐ってるよ。あの男は。あんたという目標がなくなつて、弱くなつちまったよ。高山きよしという男は、勝つて弱くなる典型だな」

野崎は薄い唇を曲げて笑った。

嫌な野郎だ。

「それにくらべてあんたは違う。勝つても強くなるし、負けても歯を食いしばつて、強くなろうとするタイプだ。あんたみたいに才能のない人間が日本チャンピオンになれたのも、ボクシングに対するキチガイじみた情熱のお陰だな」

「褒めてるのか貶してるのか、どっちなんだかハッキリしてくれよ、野崎さん」

「——これでも褒めてるんだよ、チャンピオン」

とてもそうは聞こえないが。

「なあ、チャンピオン。世間話はこれぐらいにして、本題に移ろうか？」

「本題って、自伝の件か？」

おれが引退をしたとき、野崎は自伝を出版を持ちかけてきた。

おれはその気はなかったので断った。

「そう自伝の件だ。あんたはただ頷いてくれるだけでいい。後はおれが書く。おれの筆の力はあるかも知っているだろう」

知ってるよ。おれは無愛想に答えた。

野崎の言うとおり、おれは野崎の筆の力をよく知っている。

野崎国近という虫の好かない野郎が生き残れるのは、ゴーストライターとしての腕が超一流だからだ。

実際野崎の書いた自伝がきっかけで再ブレイクした芸能人、スポーツ選手は実に多い。

ハイと返事するのがお利口な人間のやることなんだろう。

「なら頷いてくれるのか？」

野崎は、おれに返事を求めた

「いや、悪いが諦めてくれ」

でもおれは馬鹿だから断っちまう。

「意地張るなよ。もう大人だからさ。好き嫌いで仕事選ぶなんて餓鬼のすることだぞ」

野崎はおれの目の色をのぞき込んだ。

そう。たしかに野崎の言うとおりだ。

人間メシを喰わなきゃ生きていけない。

「それに、その目。おシャカになるだろう。金がなくて目が見えないなんて、みじめなもんだぜ、チャンピオン」

「なんで知っているんだ。てっ、商売だからか」

ハエがたかってないクソを見つけように。

野崎は、まだ人がたかってないクソを見つけるのが上手かった。

「そう商売だからだ、チャンピオン。まあ、気が変わったら電話くれよ。おれの携帯番号知ってるだろ？」

「残念ながら覚えてるよ」

「よかった。それじゃあ、今日はお暇するよ。本命はあんたじゃないから、あまり時間はさけないのでね」

野崎は去っていた。

ランニングハイ

翌朝目が覚めると、息子が朝から元気いっぱいだった。

おれは元気な息子の姿を見つめながら、どうして朝からこんなに元気なのか考えた。

昨日、金蠅のせいでセズリし損ねたせいかもしれない。

それとも海岸で待っているポン子のせいかもしれない。

あるいはその両方か。

？元日本チャンピオン、海岸で少女をノックアウト？

ふと、脳裏に東スポの見出しがよぎった。

おれはレイプなんかしたいと思わないし、エロビデオでもレイプ物は大嫌いだ。

しかし男である以上、間違いが起こる可能性はある。

ここは息子を大人しくさせねば。

おれは猛り狂う息子を大人しくさせるため、エロ本を手にとろうとした。

が、やめた。セズリで汚れた手で、あの少女に触る気にはなれなかった。

仕方がない。こうなったら体を苛めて、性欲を抑えるしかない。

幸い元気な息子のおかげで早く目がさめたので、約束の時間まで余裕がある。

おれは布団からたたき起きると、息子を諫めるべく猛烈な勢いで

腕立て伏せを

開始した。

「１・・・・・・・・」

腕を曲げた瞬間、おれの口から「オフウ」という気持ち悪いあえぎ声が漏れた。

息子が勃起しているせいで、腕を曲げると敏感なところが畳に擦りつけられてし

まうのだ。

これじゃあ性欲発散どころか、新手のセズリ方法を開発しただけじゃねーか。

おれは腹筋に切り替えることにした。

これなら息子を刺激しない。

気合い声を発しながら腹を曲げる。

五十回ほど腹筋をすると、部屋のドアが乱暴に開いた。

現れたのは、怒り狂った弟だった。

「なに朝から腹筋なんかしてんだよ、クソ兄貴！　うるさくて寝れねえだろうが！」

と、怒鳴った後、数馬はマジマジとおれの顔を見つめた。

「——まさかカムバックなんか考えてるじゃないよな？」

「安心しろ。いくらおれでもそんなに目出度くできてねーよ。こいつは、おれの

なかにある野生を押さえるためにやってるだけだ」

性欲もきつと野生に違いない。

「ハア？　なにが野生だよ。訳わからねえよ」

数馬は、首を振ると外人のように両手を広げて呆れかえり、ドアを閉めた。

数馬が出て行った後も、おれは腹筋を続けた。

疲れて、息子の頭がだんだん下がってきた。

？よし、こんなもんだらう？

おれは、ポン子と一緒に走るべく、部屋を飛び出し、階段を駆け下りた。

しかし玄関先で親父に捕まった。

「一平！　なに一人でロードワークしに行こうとしてんだ。ロツキーを連れてか

ねーか。二人の絆を強くなんねえと、盲導犬なんざ夢のまた夢だぞ」
おれが絆を強めたいのは海岸で待っている少女であり、駄犬では

なかった。

おれは少女の存在を隠し、駄犬を連れて行きたくないと親父に主張した。

レイプ犬を連れてけば、恥をかくのは目に見えている。しかし親父も譲らない。駄犬を連れてけとうるさい。

おれは焦った。

少女との待ち合わせの時間は刻々と迫っている。

仕方がないので、おれは駄犬を連れて行くことにした。

おれとの口喧嘩に勝って満足げな顔をしている親父に背を向けると、犬小屋で寝

ている駄犬の首にヒモを付けた。

おれはハイペースで走った。

駄犬の性欲を抑えるには、朝のおれと同じく体力を奪うしかない。念には念を入

れて、遠回りまでした。

この作戦は上手くいって、駄犬は地面にへたり込んだ。

これでよし。おれは地面にへたり込む駄犬を肩で担いで走り出す。すぐに息が切れた。

馬鹿犬が重すぎる。

海岸につく前に、おれがくたばりそうだ。

おれは駄犬を路肩に放り捨ててくたくなったが。こんなレイプ犬を野放しにしたら、

近所中の雌犬をレイプしかねない。

？クソ？

おれは駄犬を放り出すのを諦めた。息が切れ、汗が滝のように溢れる。

？最近、自分を甘やかしてるな？

現役の頃は減量で水が飲めなかった。

だから走っても汗なんかたいして出ない。

だが、引退した今は汗が噴き出る。

汗だくのおれに潮風が吹いてきた。

いつもは塩辛いだけの潮風も、今日は砂糖のように甘かった。

？この風の向こうに、少女と一緒に走れる未来がある？

おれができの悪い少女のポエムみたいなことを妄想していると、後ろからおれ

を呼ぶ声がした。

少女の声だ。

おれは急いで振り返った。

少女の姿は酷く滲んで見えるけど、おれの名を呼んでるのはポン子に違いなかった。

恋するおっさんの目は、病をも乗り越えるのだ。

ポン子は走って、おれのところにやってきた。

遠くからでは気づかなかったが、ポン子は小さなリュックを背負っていた。

「——ワンちゃん担いでるのに、走るの早いですね」

ポン子の声は、昨日と同じように声が擦れていた。

おれは気になったが、あえて問うことはしなかった。

誰にでも触れて欲しくないものがある。

「ポン子ちゃんも、背中にリュック背負っているじゃないですか」

「これは、ポンちゃんの朝ご飯が入っているですよ」

ポン子は息を弾ませながら言った。

「沢村さんのワンちゃんのおやつもありますよ。そう言えば、まだこのワンちゃ

んの名前聞いてませんでしたよね」

「こいつは名前負けもいいところですが、ロッキーと言います」

おれは、肩の上でへたばっている駄犬に変わって自己紹介してやった。

「格好いい名前だね、ロッキー」

そう言うとポン子は、駄犬の頭を撫でようと手を伸ばした。

駄犬は長い舌を伸ばして、少女の白い指をなめ回した

汚いスケベ中年親父にナメ回されてるようで、見ていてとても不快だった。

しかも、駄犬の息子の先ちよがおれの首筋に当たっている。
？こいつ、犬のくせに人間様相手に発情してやがる？

おれは、駄犬の足を握りしめている手に力を込めた。

「アヒン！」と情けない声で悲鳴を上げる駄犬。

「ロッキー！どうしたんですか？ 急に悲鳴をあげて」

心配そうな顔で、駄犬の顔をのぞき込むポン子。

「こいつは年食ってボケてるから、変な時に鳴くんですよ」
素知らぬ顔で、おれは嘘をついた。

ポン子はおれの説明に首を傾げたが、深くは追求しなかった。

「さっ、海岸まで走りましょう」

おれはオロナミンCのCMのように爽やかな笑顔で誘った。

「そうですね。走りましょうか」

ポン子は、可愛らしい微笑みを添えて答えた。

二人は肩を並べて、走り出した。

すぐ足が重くなってきた。

肺も、空気を求め悲鳴をあげていた。

おれは齒を食いしばった。

？好きな女の前で、餌を求める金魚みたいな顔できるか！？

おれは、己の情けない足と肺に気合いを入れた。

重い足が、軽やかに駆けだしていく。

肺は、気合いで満たされていく。

走れる。全盛期のモハメド・アリのように

軽やかに走れる。

蝶のように舞い、蜂のように刺す！

刺す？

おれは、隣を走るポン子をちらりと見た。

リズムカルに揺れる胸に目がいく。

？刺してえー！？

リングじゃなく、ベットでポン子と一戦交えたかった。

素人童貞のおれにはアリののような華麗なファイトはできないかもしれない。

だが、何度倒されても立ち上がってくる自信だけはあった。

何度でも、だ。

「――朝の海って、綺麗ですね」

「――そうすっね」

おれは幾分どもりながら答えた。

ポン子の胸を視姦しているのがばれたのかと思って焦ったのだ。

「わたし、生まれも育ちも埼玉だから、海のある風景に憧れるです」
ポン子は海岸を眺めながら言った。

おれもポン子に釣られて、故郷の海を見た。

青く滲んでよく見えないけど、故郷の海は美しかった。

「たしかに綺麗だな。練習中は前しか見てなかったから、気づかなかったわ」

現役時代のおれは海なんざ目に入らなかった。いつもクソ疲れていたし、対戦相

手をブチのめすことしか考えていなかった。

「――沢村さんらしいです。前だけを見て、一直線。わたし憧れます、そういう男

の人」

ポン子の頬は鬼灯のように赤らんでいた。

「あれ、これってひよつとしてー？」

いいパンチ入っちゃった？

なんでポン子のハートにHITしたのかわからねーが、これはラウンドをこな

せばKOできるかもしれねえ。

おれはポン子のハートをKOすべく、前だけを見て走る格好いいおっさんを演

出しようとした。

前からママチャリが猛スピードでこっちに向かって駆けてくる。
ママチャリを漕ぐ男の頭は、朝日を受けて黄金色に輝いていた。
べつに禿げて光っているわけではない。ママチャリを漕いでる男の
髪が金髪なのだ。

千葉のド田舎を、ママチャリで爆走する金髪男は、おれは一人し
か知らない。

舞島直人だ。

数馬の中学時代の先輩で、千葉最強の馬鹿だ。

朝早いせいか、いつも連んでいる馬鹿二人の姿はなかった。

「おっさん、朝からずいぶん元気だな」

すれ違った瞬間、爆笑する舞島。

「うるせえ！ 大きなお世話だ！」

おれは怒鳴り返した。舞島は笑い声だけ残して、走り去っていた。

「—— お知り合いですか？」

横で走っているポン子が尋ねた。

「弟の先輩ですよ」

「—— 格好いい人ですね」

ポン子はうつとりとした声で言った。

「馬鹿ですけどね」おれは吐き捨てた。

？あの野郎、せっかくポン子と良いムードになっていたというの
に？

舞島の頭は鶏以下だが、あの馬鹿の面は男でも見とれるぐらいの
美少年なのだ。

そのせいで舞島の馬鹿はメチャクチャもてる。

数馬が言うには、ファンクラブまであるそうだ。

だが舞島に女はいなかった。

舞島が救いようのない馬鹿だという理由もあるが、入った高校も
悪かった。

千葉県—— いや日本でも有数のバカ校、珠霞高校。通称タマカ
ス。千葉のゴミ箱

と呼ばれる高校だ。

舞島もタマカス入学ぐらいで止めとけばよかった。

その程度なら、ヤンキーに憧れるズベ公とやりまくれたのだろうが、舞島の馬鹿

はなにをトチ狂ったのか、うちのタニマチである片桐組の組長の息子片桐忍と連

み始めた。

親父を刺したあの片桐忍である。

片桐忍は飢えた狂犬に相応しい下品な面と、田舎ヤクザでさえ引くようなファ

シヨンセンスを持つてる男である。

あんな男と連めば、どんなズベ公でも近づくまえに考える。

馬鹿な野郎だ。もう少し友達選べば、バラ色の人生を歩めたのに。しかし舞島の野郎、なんで爆笑したんだ。駄犬を担いでるせい

か？

？たしかに間抜けだが――？

おれはそこで、はたと気づいた。舞島が爆笑した訳を。

？ボツキしてやがる、おれの息子？

おれの息子はジャージを突き破る勢いで、己の存在を回りにアピールしていた。

おれは元気いっぱい息子を見て、頭を抱え込みたくなった。

走ってるせいで、チンコを股に挟むという必殺技は使えなかった。どうしよう。

舞島ならまだしも、もしポン子にバレたら、自殺もんだぞ。

なんとしてもポン子が気づく前に静めねば。

おれは三宅の婆の出来損ないの梅干しのような顔を思い浮かべた。きめえ。

三宅の婆のおかげで、息子の頭が下がってきた。

隣から、切なげに息を切らすポン子の声が聞こえてきた。

新たな闘志を得て、息子は立ち上がり始めた。

？さすが、我が息子？

ポン子の声援がある限り、おれの息子はいくらでも立ち上がってくる。

これがベットのうえならなんの問題もないが、今はベットの上ではなかった。

爽やかな朝の千葉の県道だった。勃起していい場所でも、時間でもなかった。

こうなったら立ちションを装って、一発抜いてくるか。

？ ダメだ。最低すぎる？

初デートで青姦オナニーなんか決めたら、思い出のページが、青姦オナニーの

思い出で埋め尽くされちまう。

そんなの嫌だった。おれが頭に埋め込みたいのは、ちょこんとふれ合う手、顔を

赤らめる二人、さりげなくポン子の肩に手を伸ばすおれ、黙って頭を預けるポン子。

そういうレモンみたいな思い出で埋めたいのである。

思い出したら臭ってくるような、栗の花のような思い出はいらない。

しかしバレたら――。

思い出もクソもなかった。

おれは仕方なく、ちよつとトイレと言いかけたその時、激しい向かい風が吹いて

きた。

辛そうに頭を伏せるポン子。

おれはポン子の姿を見て、頭の中に稲妻が走った。

神風だ。神風がきやがったぜ！

「ポン子ちゃん。おれの後ろ走って。そしたら、少し楽に走れるから」

「えっ、でもわたしだけ楽するのは――」

ポン子は頬をほんのり赤らめながら申し訳なさそうな顔をした。その顔を見て、いきりたつ息子。マズイ――早くポン子を後ろに下がらせないと。

「こんぐらいの風、おれにはどってことないから」

おれは自分の吐いたくさいセリフに、恥ずかしくなっただけでかなりどもってしまった。

しかしポン子はそんな間抜けなおれを笑うことなく、「じゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます」と甘くかすれた声で答えた。

おれは息子をギンギンに勃起させながら、ポン子の前を走った。他人から見たら爆笑もんだが、朝早いせいで誰ともすれ違わなかった。

とりあえずおれは危機を乗り越えることができた。

灯台に着くと、おれは駄犬を放り捨てて座り込んだ。

疲れすぎて、見栄を張る余裕もない。

へたばってるおれを見て、ポン子はコンビニでジュースを買ってくると言い出した。

おれも行くと言いたかったが、さすがに疲れて声が出なかった。

おれはポン子の好意に甘えることにした。

コンビニに向かって小走りに走っていくポン子。

女にあまり接してこなかったおれは、こんな簡単な好意でもえらく感動してしまった。

ポン子の帰りを待っていると、灯台の穴からポンが出てきた。

ポンは、地面にへたり込んでいるおれを見ると、黙って近寄ってきて、疲れているおれを気遣うかのように遠慮がちに手を舐めた。

「お前はウチの駄犬と違って可愛いな」

おれはポンの耳の裏を優しく撫でてやる。

気持ちよさそうな顔をするポン。それを見て和むおれ。
ウチの駄犬とは大違いだ。

おれは、地面に座り込んで自分のチンコを一生懸命舐める駄犬に目をやった。

駄犬もおれの視線に気づいて、顔をあげる。

駄犬は甘えるように、おれの顔を見つめると、なにを思ったのか舌と涎を垂ら

しながら、おれに近寄ってきた。

？さすがに飼い犬としての地位が危ないことに気づいたのだろうか？

そう思うと、こんな薄汚い駄犬でも可愛げがわいた。

駄犬が頭を差し出してきたら、撫でてやろう。

おれの胸にロッキーに対する愛情が芽生えた。

——が、すぐにしぼんだ。

クサれ駄犬はおれに近づいてきたかと思うと、あろうことかおれの足を猛レイ

ブしはじめた。

浅ましい駄犬の姿を見て、ポンはおれの背中に隠れて怯えた。

「死ね！」

おれは駄犬を蹴り倒した。駄犬はキャヒンと鳴いて、地面に倒れた。

この犬だけはダメだ。帰ったら保健所に叩き返してこよう。おれがそんなことを

考えていると、耳に冷たい物が当たった。

おれはびくつとして見上げると、両手にミネラルウォーターを持ったポン子が

立っていた。

「びつくりしました？」

ポン子はペットボトルを差し出しながら尋ねた。

「ちょっとだけ、びつくりした」

「せっかく驚かそうとしたんですから、もっと驚いてくださいよ」
「……………うん。そうする」

おれは小声で答えた。この青春ドラマのページみたいなやり取りに気恥ずかし
くなつたのだ。

ソープの姉ちゃん相手だったら、結構喋れるのに情けない。

「隣座っていいですか？」

「——どうぞ」

おれはかたい声で答えた。恥ずかしいだよ、マジで。

ポン子は、おれの隣に座った。

おれはさりげなく体育座りに座り直した。

ポン子が隣に座ったことによって、息子が復活してきたからだ。

？初めてデートは、勃起との戦いだな？

おれがデートマニュアルを書くなら、デートの前日は念入りに抜
いておけ、と書
いておく。

冗談抜きで大切なことだ。

「——飲まないですか？」

ペットボトルを握りしめて黙り込んでいるおれを見て、ポン子は
不思議そうな顔
して尋ねた。

おれは笑いながら誤魔化し、ペットボトルの蓋を開けた。

「初ランニング記念に乾杯ですね」

ポン子と乾杯した後、おれはほんの少しだけ水を飲んだ。

おれとは対照的に、ポン子は喉を鳴らしながらごくごくと飲んだ。
結構走ったから、喉が渴いてるだろう。

「喉渴いていないですか？ あんまり飲んでいないですけど」

「現役時代の癖ですよ。トレーナーのおっさんに水は嚙んで飲め
と言われてたか

ら、どんなに喉が渴いていても、一気に飲めなくなっちまって」

「ボクサーの人ってやっぱりキツイですね」

「どうってことないですよ。好きで選んだ道ですから」

おれはペットボトルの水を飲みながら答えた。

たしかにポン子の言うとおり、ボクサーは辛い商売だ。

練習は厳しいし、減量の際はマジで地獄だし、リングに上がれば対戦相手にし

こたま殴られ、おれみたいにポンコツにされる可能性もある。

これで 金に恵まれていれば、まだ救いがあるが、金なんぞ雀の涙だ。

コンビニでバイトしたほうが、まだ金になる。

はつきり言えば、やる価値なんか0に近い。

でも、おれはボクサーじゃない人生の方が辛かった。どんなに苦しい思いして

も、リングに上がりたかった。

誰かにゴングを鳴らして欲しかった。

どんなに強い相手でも、対戦相手が欲しかった。

脳裏にきよしの顔が横切った。

？クソっ！？

おれは悔しさと一緒に水を飲み込んだ。

ポン子は真剣な表情で、おれの顔を見つめていた。

「沢村さんは、好きで選んだ道ならどんなに苦しくても挫けないですか？ どん

なに辛い目にあっても後悔しないですか？」

「——わからないです」

おれは首を横に振った。

「自分のことなのにわからないですか？」

「わからないですよ。現役時代はどんなに辛くても耐えられる自信があっただけ

で、今は自信もって言えないです」

今のおれの体たらくを見ると、とても挫けません、なんて言えなかった。

「後悔は？　ボクサーやったことは後悔しているですか？」
ポン子は縋るように問うた。

「――後悔しているかもしれません」
そうですか。それだけ言うと、少女は口を閉ざし俯いた。

惚れた女だろう、格好つけるよ。

うるせえ。

おれは、己に言い返した。

さっきまで、おれは格好つけてボクサーやりたいなんて息込んでいたけど、もし

目の前にタイムマシンがあつたら、おれはきよしの試合を止めに行くような気が

がする。自分の気持ちを裏切るようで格好悪いけど、今のおれは失明の恐怖に怯

えきっていた。先の見えない未来に震えていた。

過去のおれには悪いが耐えられそうになかった。

なら素直にタイムマシンに乗って、過去のおれを止めに行ったほうがいい。

「おい、おれ。お前はきよしみたいに才能がないだから、ここら辺で見切りを付

けるよ。日本チャンピオンのベルトを巻いたまんま引退しとけ」

黙りこくる過去のおれ。

「なに黙りこんでるだよ！　未来の自分を見ろよ？　試合にボロ負けしたあげ

く、失明にリーチ賭けてるだろうが」

おれは過去の自分を怒鳴りつけた。

過去のおれが、未来のおれを睨みつける。

「やって見なきゃわからねーだろう」

過去のおれは、救いようのないほどの大馬鹿野郎だった。

「——やっぱおれ馬鹿ですね」

おれは空を見上げた。

空は青く清んでいるのだろうが、滲んでよく見えなかった。

「何が馬鹿なんですか？」

ポン子は顔を上げて問い返した。

「今のおれが情けなくても、後悔しまくっていても、現役時代のおれはやりますよ。」

戦わないボクサーなんて、鼻くそ以下だから」

ちよつと下品な例えだな。

おれは、面白くもないのに大笑いした。

この場を覆う、重苦しい空気を笑って吹き飛ばしたかった。

ポン子も釣られて笑う。

場から重い空気が吹き飛んだような気がする。

あくまで多少だ。

「そうだ。一平さん。一平さんに渡すものがあつたんです」

ポン子はリュックサックから、小瓶を取り出した。小瓶の中にはイロトリドリの

飴が入っていた。どの飴も形が不揃いだった。

「——もしかして手作りですか？」

「ええ。市販の飴に飽きちゃったから、自分で作ってみたんです。そしたら作り

すぎちゃって。味は保証できませんけど、よかったら貰ってください
い」

「頂かせていただきます！」

？このおれが、まさか手作りのプレゼント貰えるなんて……
・？

信じられない。

おれは興奮に震えながら、ポン子から小瓶を受け取ろうとした。

二人の手が僅かにすれ違った。小瓶が地に落ち、その衝撃で蓋が外れた。

イロトリドリの飴が地面に散らばった。

「くされ目つが!？」

視界が滲んでいるせいで目測を誤っちまった。

「すいません。拾います!」

おれは地面に落ちている飴を拾い集める。

「いいですよ。気にしないで」

ポン子も拾い集めるのを手伝ってくれた。

ポン子はサクサクと飴を拾い集める。

おれはなかなか飴を拾うことができなかった。

飴が、滲んで大きく見えてしまう。

一昨日よりも

一昨日よりも

飴が滲んで見えちまう。

「悪くなってやがる?」

クソが。泣きたくなってきた。

怒りと、それを上回る恐怖がおれに襲いかかってきた。

額からも、掌からも、背中からも、脂汗がじんわり滲んできた。

「恐えエ?」

逃げ出したかった。

どこへ?

逃げる場所など――

どこにもないのに。

誰かが、おれの手を優しく握りしめた。

「大丈夫ですか、一平さん? 顔色悪いですよ」

ポン子だった。

「大丈夫です。暑いからちょっと立ちくらみしちゃって……」

おれは笑って誤魔化した。

「まあ、大丈夫ですか！　後は私が拾いますから、一平さんはベ
ンチで休んでい
てください」

おれは素直にポン子の言葉に甘えることにした。本当は一緒に集
めたかったが、

これ以上の醜態をポン子の前に晒すのが嫌だった。

おれはベンチに腰を下ろそうとした。

目測を誤り、ずり落ちた。

ポン子がびつくりした顔で、こっちを見た。

「ギャグですよ。ギャグ」

おれは笑いながら答えた。ポン子は怪訝な顔をしたが、何も言わ
なかった。

おれは慎重に座り直した。

？泣き喚きてえ？

ポン子の顔が見えなくなると、すぐそう思った。

目の野郎、どんどん悪くなってきやがる。

こりゃあマジで覚悟しねえとな。

失明することに。

だが腹を括ることは出来なかった。

覚悟の変わりに、漠然とした恐怖だけが腹に貯まっていく。

？おれはこんなにも弱虫だったけ？

自分はもつと強かったような気がする。

ボクサー時代だって、試合前は死ぬほど震えていた。試合から逃
げ出したかった。

でもいつだっておれはリングに向かっていた。

強敵に立ち向かってきた。

？だが今にして思えば、それはおれ自身の勇気じゃなかったんだ
ろっ？

ボクサーという肩書きが、おれに勇気を与えてくれた。臆病なお
れを支えてくれた。

肩書きが無くなった今。おれは臆病さを剥き出しにしていた。物思いに耽っていると、ポン子の声がした。

「一平さん、ゴミ箱どこですか？」

「ゴミ箱って……まさか飴捨てる気ですか？」

「ええ。勿体ないけど、土も付いちゃってるから汚いですから……」

「大丈夫です。水で洗えば食べますから」

「そうですか？。でも汚れてますよ？」

ポン子は渋ったが、おれは強引も説得し貰い受けた。

初めての手作りプレゼントだ。

すべてしゃぶりつくしたい。

ポン子と別れると、おれはコンビニによってミネラルウォーターを買い、飴につ

いた汚れを洗い流した。

家に帰ると、机の上に朝飯が置いてあった。

親父と弟はもう家を出たようだ。

おれは朝飯に手を付けず、縁側に座り込みぼんやりした。

片手には飴の入った小瓶が握られてる。

鎖に繋がれた駄犬は、朝ばっから走らされて疲れたのか、庭に寝そべって鼾を

掻いていた。

おれは、犬でも鼾を掻くんだなと思いながら、小瓶から飴を一つ取りだした。

赤い飴だった。色はわかるが酷く滲んでいた。

おれは口に赤い飴を口に放り込んだ。

苺の味がした。あまり甘くはないが、素朴な味で美味かった。

？クサイドラマだと、女の手料理は大抵不味いだかな？

おれはそんなこと考えながら飴を舐めた。

？おれは今、誤魔化している？

本当に考えなければいけないのは、駄犬のことでも、飴のことでもない。

目のことだ。滲みが酷くなったことを医者に相談しにいかねばいけない。

別に考えるようなことではない。

何かあつたら、すぐに来てくれてと医者に言われているんだ。さつさとケツを上げて病院に行くべきだった。

でもおれは病院に行きたくなかった。

行つてなんになる。もうおれの目はとくに手遅れなんだ。

医者話を聞いてウンザリしたくない。現実なんて知りたくもなかった。

？ニートのハローワークと同じだな？

行かなきゃいけないのはわかつている。

でも行きたくない。現実と向き合いたくなかった。

情けねえ。おれはため息をついた。

おれは縁側に座りながら、時間の流れに身を委ねた。

どれぐらい時間が経つただろう。

いつのまにか、家の前の道路から小学生の声が聞こえてくる。

誰かがおれの肩を叩いた。驚いてふり返ると弟が立っていた。

「兄貴。なにボケツとしてんだよ。現役引退したからって、あんまり気を抜いて

いると拳が腐るぞ」

「大きなお世話だ」

おれは顔を前に戻した。情けない顔を弟に見られなくなかったし、それになんと

なく弟の顔を見るのが嫌だった。

「兄貴。ボケつとするのもいいが、朝飯ぐらい食えよ。おれがせっかく作つて

やっただから」

「悪かったな。食欲がなかったんだよ」

「食欲は無くても飴は舐められるのか？」

弟は目ざとかった。

「甘い物は別腹なんだよ」

「別腹ね……」

弟は訝しんだ声を出したが、深くは追求しなかった。

「ところで兄貴。医者行ってるのか？」

「行ってるよ」

おれは嘘をついた。

「本当かよ。面倒臭がらずにちゃんといけよ。なんならおれが付き添ってやろうか？」

「気持ち悪いこというな！ 医者ぐらい一人で行ける」

これも嘘だった。

おれはもう一人で医者に行けそうになかった。もう一人で戦う勇気はなかった。

ボクサーじゃないだから。

「まあいいや。腹減ってるだろう。朝飯暖めなおしてやるから、喰え」

弟はそう言い残すと台所に消えていった。

遅い朝飯を食い終わると、一人になりたくて部屋に籠もった。

ベットでゴロゴロしてるうちに眠気が襲ってきた。

真っ暗で何も見えないのに、おれはリングに立っていた。

リングの周りからは、無責任にも拳を構えて戦えと、野次る人間がいた。

一番クソでかい声を出してるのは、親父だった。その次ぎは数馬で、ほかに聞いた声がある。

？くそつたれが・・・・・・・・？

おれはやけくそ気味で、拳を構えた。

すぐに鍍金が禿げた。暗闇の恐怖に押し潰れ、構えた拳が震えだしたのだ。

対戦相手はそんなおれを嘲笑った。

「クソがつ。目さえ見えればテメーなんか、一発だ」

おれは虚勢を張る。

「嘘つかないでくださいよ、一平さん。目が見えてても、あんたは負けたじゃないですか。このおれに」

おれの前に立っているのはきよしだった。

「きよし・・・・・・・・」

おれの拳がだらりと下がった。その瞬間、容赦なくきよしの拳が、腹にめり込んだ

おれは体を九の字に曲げ、ゲロを吐いた。

「試合中スよ、一平さん。それにほら女も見ている」

きよしの声に答えるように「一平さん頑張ってください！」とポン子が叫んだ。

「何を頑張れって言うんだよ！」

目が――。目が見えないだぞ、おれは。

それでもおれは拳を構えた。

きよしが嘲笑う。おれは唾い声を頼りに、拳を振り回した。

空気の手心えしかなかった。野次馬が失笑し、嘲笑う。ポン子の声援も、段々と

聞こえなくなっていた。

きよしの唾い声すら聞こえなくなった。

おれは暗闇のなかでただ一人取り残された。

「誰かいるんだろう？ 出てこいよ！ 出てきておれを助けてくれよ・・・・・・・・」

おれは迷子の子供のように泣き出した。

目が醒めた。

窓から光りが差し込んでいた。

「よかった。まだ見える……」

涙がぼろぼろ零れた。

「兄貴大丈夫か？」

いつの間にかドアの前に数馬が立っていた。

おれの謔言に気づいて、心配して見に来たようだ。おれは慌てて目をこすった。

「心配すんな。ちよつと変な夢を見ただけだよ」

「おれには、ちよつとは思えないけどな、兄貴」

「今、何時だ」

おれは弟の問いかけを無視した。

「まだ5時ちよい前だ」

「そうか。気晴らしに走ってくる」

おれはポン子に会いたかった。

「おれも付き合おうか？」

「オメーは寝てろ」

おれはそう言つと、ベットから起きて、ジャージに着替えた。

弟はその間、おれのことをジツと見つめていた。

「おい、ホモじゃないだから、あんまり見つめるな」

おれは冗談めかして言つたが、弟は何も言い返してこなかった。着替え終わり、おれは顔を洗いに下に降りようとする。

思ひ切り階段を踏み外した。

盛大な音を立てて、階段から転がり落ちる。

「兄貴、大丈夫か！」

弟は走つて飛んできて、おれを助け起こした。

「大げさに騒ぐな。ちよつと足を踏み外しただけだ」

「おい、なんだよウルセエなあ」

騒ぎを聞きつけた親父が、ちんぽをボリボリ掻きながら現れた。

「なんだ一平。階段から落ちたのか？」

「そうだよ」

「一平。お前また目が悪くなっただろう！」

親父はいつものデリカシーのないデカイ声で、真実を言い当てた。
「べつに悪くなってるええよ。ただちよつとすっ転んだだけだ」

「嘘付け。目を細めて見てるじゃねーか。目が悪くなって、細めないとよく見え

なくなっただろう？」

親父の野郎。いつもは馬鹿な癖に、こういう時だけ鋭かった。

「走り終わって朝飯喰ったら医者だな」

親父はそれだけ言つと、屁をこいて自分の部屋に戻っていた。

ポン子との楽しい朝の一時が終わると、クソのような現実が待っていた。

朝飯を食い終わると、おれはCIAに連行される宇宙人のように病院に連れて行かれた。

医者に症状を話すと、医者はわけのわからぬ検査をして、おれの目のくたばり加減を調べた。

「とりあえずお薬を出しておきます」

医者はそう言っておれを追い出すと、親父達を呼んだ。

待合室のベンチに座りながら、医者が話している内容を想像した。

「覚悟してください」

この一言が医者の中から漏れてるだろう。

おれの目は手遅れなんだから。

おれは壁に貼られているポスターを、ぼんやりと見つめた。

そんなに離れているわけではないが、酷く滲んでいるせいで何のポスターかわからなかった。

翌日。おれは不安を隠しながら、ポン子と海岸を走った。

おれが駄犬を担ぎ、ポン子はおれの後ろを走った。

灯台につくと、くだらない冗談を飛ばして笑い合った。

その次の日も、そのまた次の日もおれ達は走り、そして同じように笑い合った。

でも笑い顔の裏側で、おれは破滅の恐怖に震えていた。

この目も、ポン子との関係も、壊れる日が来ることを、おれは漠然と気づいていた。

それから二日後、破滅がやってきた。

灯台につくと、ポン子はリュックから一冊の本を取り出した。

点字の本だった。

「今度よかったら、一緒に勉強しませんか」

ポン子の声は微かに震えていた。

「なんで知っている？」

おれはかたい声で尋ねた。おれは、バレないように気を使ったつもりだった。

「——ひよっとしたらと思っただけです」

「あんたはひよっとしたら、と思っただけで元ボクサーに点字を勧めるのか？」

おれは詰問するような声で言った。

「いえ……」

ポン子は答えることが出来ず、うつむいた。

ふと脳裏に、大笑いする舞島の馬鹿面が浮かんだ。

舞島を経由して、ポン子の存在が数馬に伝わった可能性は大にある。

見かけによらず、お節介な数馬のことだ。ポン子の存在を知れば、

ポン子に頼む

かもしれない。

おれに、点字の勉強を勧めてくれと。

「数馬か？ 数馬に頼まれたのか」

おれはポン子の肩を揺すって確かめてみた。

ポン子は小さな声で、ごめんなさいと呟いた。

おれの予想は大当たりだった。

？クソったれの数馬め？

おれは、まだポン子と走っていたかった。

現実なんかと戦いたくはなかった。

「数馬になに言われたか知らないが、おれの目のことはほっておいてくれ」

「——ほっておけません。わたし一平さんのこと好きですから」
ポン子の語尾はか細かったが、それでもおれの耳にはつきり届いた。

「同情なんかで言って欲しくない！」

そんなのクソだ。

「同情なんかじゃありません！ わたしは一平さんのことが好きなんです！

戦っている一平さんが、わたしは好きなんです」

「戦っているおれが好きなら、今のおれなんざ相手にするな！

今のおれは、ただの臆病者だ」

おれの目から、大当たりしたパチンコ台みたいに涙が零れた。

？みつともねえ？

大の男が、女の前で泣いてるなんて。恥ずかしくて仕方なかった。
でも涙の野郎は、止めどなく流れた。

「わたしも一緒に戦います！ だから一平さんも一緒に戦ってください！」

ポン子はかすれた声で訴える。

「ふざけるな！ リングの上は一人なんだよ！ おれはいつだって一人で戦ってきた！」

そうおれはいつだって一人で戦ってきた。

「ここはリングじゃありません！ だから一人で戦わなくても大丈夫です。！」

ポン子のかすれた声で言い返した。

言い終わった後、ポン子は酷く辛そうな顔をした。

？もうたくさんだ？

「ウルセエだよ！ もうおれのことほっておいてくれ。朝のロードワークも終

わりだ。おれは二度とあんたに会いたくない」

おれは壊した。ポン子との関係を。

「そんなの嫌です」

彼女は直そうとした。必死な顔で。

おれは背中を向けて逃げ出した。

「一平さん！」

ポン子はおれの後を追った。

おれは速度をあげて振り切ろうとする。

世界が暗転する。

小石一つない砂浜で、おれは転んだ。

何も見えない。おれの目は開いているはずなのに、何も見ることができなかった。

Surrender

おれは医者話をぼんやりと聞いていた。

医者は、おれが失明したことを長々と説いて聞かせた。

おれにはどうでもよかった。

今のおれには怒りはなかった。恐怖もない。

目が見えている時は、失明することをあれほど恐れていたのに、いざ失明してみると恐怖は感じなかった。

——空虚にも似た安堵感。失うことに怯えずにすむという空しい安堵感だけが心を満たした。

「すんませんね、先生。うちの息子が迷惑かけちゃって。ほれ、おめえもブスく

れてないで先生に挨拶しろ」

おれは、親父に促されて医者に頭を下げた。

医者は戸惑い顔で、お礼を言われるようなことはなにも出来ませんでした。と

答えた。

たしかにな。

おれは、親父に手を引かれて部屋を出た。

「——大丈夫ですか。一平さん」

ポン子の声がした。ポン子は、情けないおれのために救急車を呼んでくれ、情け

ないおれを心配して待っていてくれた。

それなのにおれはポン子の善意がうつとうしかった。

心配されたところで、目が見えないのはおれだ。

ポン子ではない。

「大丈夫ですよ、こいつは。目が見えないだけで、別に死ぬわけじゃないですから」

親父は、いつもの調子でこたえた。

おれはそんな親父の声に、いつも以上にイラッとした。

「――そうだ。死ぬわけじゃない。だから、もう心配しなくていいし、見舞いもこなくていい」

ほっておいてくれ。

「そうですか……」

ポン子は震えた声が聞こえたかと思うと、廊下を駆けていく音が響いた。

ポン子が行ってしまったのだ。

おれは遠くなっていくポン子の足音を聞きながら、案山子みたいに突っ立っていた。

誰かに殴り倒された。

「このチンカス野郎！ なにがほっておいてくれ、だ。目が見えないくらいで、

気取りやがって！ お前は石原裕次郎気取りか！ 千葉の勇ちゃんはおれっちに決まってるだろうが！」

親父は訳のわからないことを怒鳴り散らすと、止めとばかりにおれの左頬を殴り飛ばした。

おれは床に膝をつき、口から奥歯を吐き捨てた。

病院の住人達は悲鳴を上げた。

？このクソ親父が？

「訳がわからねえだよ、テメーの説教は！ それにおれが何言おうが、おれの勝

手だろうが！」

言い終わると同時に、おれはパンチを繰り出した。親父がどこに
いるかわからな

いが、それでも手をださないと気が済まなかった。

奇跡的なことにおれの拳は、親父の頬を捉えた。

「目の見えねえテメーの拳なんか避ける必要もねえや。殺し合い
だ、このクソ餓

鬼！」

親父が吠える。

「上等だ、クソ親父！」

おれは見えない親父を睨みつけると、殴りかかろうとした。

「兄貴！」数馬の叫び声が割って入った。

おれの失明のニュースを聞いて、学校から駆けつけてくれたよう
だ。

数馬が止めに入ってくれたおかげで、親父とおれの殺し合いは、
危ういところで回避された。

見舞いどころではなくなった数馬は、怒り狂う親父を家に引きず
っていた。

おれはといえば病院のベッドの上で渴望してた孤独を味わった。
望んでいたわりには、孤独の味は不味かった。

独り暗闇を見つめながら孤独を味わっていると、ドアの開く音がし
た。

「入るよ、一平」

「山形さん……」

声でわかった。

「見舞いにきたよ。奮発して、メロン買ってきたけど喰うかい？」

おれは喰いたくなかったが、頂きますと答えた。

さすがのおれも山形さんには頭が上がりなかった。

現役時代どころか、ガキの頃からいろいろ面倒見て貰ってる。

その恩が、文句を付けようとするおれの唇を縛っている。

それに孤独も飽きた。

山形さんはメロンを切ると、皿に乗せておれに渡してくれた。
おれは右手のフォークで、暗闇に隠れているメロンを刺そうとする。

フォークはメロンを外し、かわりに皿を叩いた。

惨めすぎてで泣きたくなってきた。

「すまんね。気がきかなくなつて」

山形さんは申し訳なさそうな声で謝ると、おれの手握られたフォークをメロン

に誘導してくれた。

おれはメロンに嚙りついた。

ちよつとしよっぱい味がした。

また泣いてるのだ、おれ。

？どうせ目が見えなくなるのなら、このだらしない涙腺も止めてくれりゃあいいのに？

涙で味付けしたメロンなんか喰いたくねえよ。

「一平。顔が腫れてるけど、万ちゃんに殴られたのかい？」

「ええ。奥歯折られましたよ」

年寄りのくせに無駄にパンチが強い。

「奥歯折られたのかい？ アハハハ、現役時代ハードパンチャーだったからな。」

万ちゃんは

「でもたかが六回戦でしょう」おれは磁石のように反発した。

「まあね。でも万ちゃんなら、続けていれば日本ランキングくらい入れたよ」

「でも入らなかつたんでしょ？ 本当あの親父は口だけだよな
おれが毒突くと、「万ちゃんが日本ランキングに入れなかったのは、万ちゃんが弱かつたせいじゃないよ。僕のせいさ」

山形さんは穏やかな声で断言した。

「ひよつとして山形さんが、親父のことを叩きのめしたですか？」

元世界ランキング三位の山形さんなら、親父を叩きのめすことなど容易い。

親父も山形さんに叩きのめされて、自分の才能のなさを思い知らされたのかもしれない。

「いや、万ちゃんとは戦ってないよ。階級は同じだったけど、ジムが一緒だった

からね。僕の所為では、僕がヤクザに借金作って、その尻ぬぐいを万ちゃんがやってくれたせいさ」

「ヤクザに借金って――。山形さん、病気のお袋さんでもいたんですか！」

大人しい山形さんが、ヤクザに借金するとは想像すら出来なかった。

「そんな格好いいもんじゃないよ。僕が借金したのは水商売の女に入れあげた

のが原因。お袋は全然関係ないよ」

「山形さんが、女？」

信じられなかった。

「うん、女。僕だってはじめから枯れて生まれたわけじゃないよ。若い頃は人並

みに女に夢中だったさ。特に水商売系のお姉さんが好きでねえ。近所のスナックの女

に惚れて、ヤクザに借金までして貢いでたよ。でも、結局は女に捨てられ、残っ

たのは借金の山。とても貧乏ボクサーが返せる額じゃなくて、返済せずに逃げ

回っていたら、ジムにヤクザが怒鳴り込んできちゃってさあ」

山形さんは照れ笑いを浮かべながら、とんでもないことを告白しはじめた。

「それで、どうしたんですか？」

「どうしたも、こうしたも。どうにもなるわけないから、怒鳴り込んできたヤク

ザに土下座して、なんとか帰ってもらったよ。

ヤクザが帰ってほつとしてたら、今度は入れ替わりにロードワークを終えた万ちゃんが帰ってきてさ、あのヤー公なにしにジムに来たんだって、恐い顔で僕に尋ねるのよ。僕は怖くなって正直に告白したら、これだよ」

そう言うつと山形さんは大きく口をあけた。

奥歯の二本が金歯になっていた。

「スパーリングじゃ、一度も万ちゃんに負けたことなかったけど、リングの外で

は一度も勝てなかったな、僕は」

なにやら感慨深げに言う、山形さん。

おれはといえば、自分のなかにある山形さん像を修正するのに忙しかった。

穏健で堅実な人だと今まで思っていたのに。実はけっこうとんでもない人なのかもしれない。人間わからないものである。

「それで借金はどうしたんですか？　ちゃんと返したんですか？」

「返せるわけないよ、食うのが精一杯の貧乏ボクサーだもん。世界チャンピオン

にでもならないかぎり、返せるわけがない。

当時の僕も途方に暮れてね。見かねた万ちゃんがヤクザの親分に話しをつけに行

こうつて、て言い出したの。

それを聞いて、若い頃の僕はビビっちゃってね。ヤクザってだけでも怖いの

に、相手は武闘派で有名な組だったからね、そんなところ二人で乗り込む　なん

て、海に沈みにいくようなもんだっと思ってさ。万ちゃんに泣いて

頼んだよ、勘

弁してくれって。でも万ちゃん、あの性格だろう。全然許してくれなくて。

僕は万ちゃんに引きずられながら、組事務所につれていかれたよ」

話は、どんどんバイオレンス色を強めていった。

それと同時におれの好奇心も強まっていた。

「組事務所に連れて行かれて、どうなったんですか？」

「どうしたもこうしたも、行った瞬間、鉄砲とポン刀持った組員に囲まれて、

無理矢理土下座させられたよ。いくらボクシングが強くても鉄砲には叶わないからね」

山形さんはアハハハと笑った。

そこは笑うところじゃないと思う。

「土下座して勘弁してくれたんですか？」

「するわけないじゃん。それぐらいで許してくれたら、ヤクザなんかやってないよ。

土下座させられながら、ヤクザが聞いてきたことは、いつ金を払えるか。て事だけ。

僕は完全にビビっちゃって、何も言えないの、自分の不始末なのにね。情けない。

かわりに万ちゃんが喋ってくれて、僕が世界チャンピオンになったら返すから、

それまで待ってくれ、って言ってくれんだよ。

横で聞いてた僕は、自分のことながらにそれは無茶だろうと思ってたら、案の定

ヤクザの親分が切れちゃって」

山形さんは言葉を切ると、人相を一変させた。

「こんなばんくらが世界チャンピオンになれるはずねーだろう。あんまり調子の

良いこと言つてると、東京湾に沈めるぞ！」

山形さんのヤクザの親分を真似て、怒鳴った。

なかなか迫力のある声だった。こんな声、ジムでも聞いたことない。

「て、怒鳴るのよ。当然だよ、当時の僕はまったく無名だったから。でも、

万ちゃんはそれを聞いて完全にブチ切れちゃって」

山形さんはそこで言葉を切った。

「このクサレ外道！ 土下座までさせといて、借金が待てないだと、このインポ

ヤクザ！ どうせ女をソープに沈めたり、シャブ売ったりして儲けた汚ねえ銭だ

ろつが！ ちつとばかり待てねーのか！」

山形さんは声のボリウムを抑えながら、親父の口まねをした。

そっくりだった。

「万ちゃんの啖呵を聞いて、ヤクザの親分も怒り狂っちゃってね。テメー指つめ

差すぞつて、怒鳴つてドスを床に突き刺したの。

そしたら万ちゃんが、そのドスを掴んで自分の指を詰めちゃつて、親分の顔に自

分の小指を叩き付けたのよ」

「えつ、それ本当ですか？」

うちの親父が火がついたら何をしかすかわからない男であることは、息子のおれ

はよく知っていたが、さすがに勢いで指まで詰めるとは思っていなかった。

「本当だよ。そのおかげで借金チャラになっただもん」

山形さんはあっさりと答えた。

「ヤクザの親分も、万ちゃんのあれにはさすがにビックリしたんだろうね。万

ちゃんの指を慌てて拾って、急いで医者につれて行こうとしたんだよ。どうもそ

の時、親分も弁当持ってた見たいだから、事件になったら不味かったらしいのね。

でも、万ちゃんは病院なんかいかねえとごねて。このおかげで借金
はチャラ。

話がついた後、病院に行って小指を繋げて貰ったんだけど、左の握力が弱くなっちゃってね。万ちゃんも死に物狂いで握力鍛えたんだけど、握力戻らなくてね。

結局、万ちゃんは引退。引退した夜、僕は、万ちゃんに泣きながら土下座したよ。いく

ら僕が屑でも、万ちゃんのボクシング人生を奪ったのは堪えてね」

山形さんの声は、泣いているような笑っているような不思議な声だった。

「僕が泣きながら土下座すると、万ちゃん怒鳴ってね。土下座するぐらいなら、

世界チャンピオンになってみろってね。僕もその言葉を聞いてガラにもなく熱

くなつて、絶対に恩に応えてやろと思ったんだけど、世界の壁は厚くてねえ。結

局五年後にベルトを取ることなく引退。

引退して、職がなくてウジウジしていたら、万ちゃんにまた殴られてね。

ウジウジしているならボクシングジム作るの手伝えって言われて。

僕がきょっとんと

した顔で、ジムを作る金なんかどこにあるだよ、て聞いたたら、腹巻きを開いて見せてね。

腹巻きの中には札束がぎっしり詰まっていたの。

どうも万ちゃん、引退したあと、あのヤクザの親分に可愛がられて、金になる仕事を貰っていたらしいだよ。転んでもしっかりして

るよ、万ちゃんは」

山形さんは笑い声をあげて、ウチのジムの創立秘話を語り終えた。

「——そのヤクザの親分って、ひょっとしてうちのタニマチの片桐組？」

「そう片桐組」

おれは前から疑問に思っていた、片桐組とウチとの関係がようやくわかった。

設立にまで絡んでいるなら、切れないはずだ。

「片桐組の組長と親父が仲良い知っていたが、まさかそんな話があるとは」

「まあ、八百長とかはしてないからその点は安心していいよ。片桐の親分も、純粹に興味でタニマチしてるだけだから。

まあたとえガジろうとしたとしても、なにせうちには万ちゃんがいるだろう？」

あの人がいるかぎり、ヤクザ屋さんも、ウチをガジりたくてもガジれないよ。

下手にさわったら、万ちゃんに何されるかわからないか」

それに金にならないだろう。うち貧乏だから。そう付け足すと山形さんは笑った。

「まあ、あれだよ、一平。万ちゃんの前で、後ろを向いたり、ウジウジしたらダメだよ。すぐ殴られるから。僕も情けない人間だけど、それぐらいは学んだよ。

殴られたくなかったら、万ちゃんの前ではウジウジしない。後ろ向きにならな

い。たとえ人様から笑われるぐらいみつともない歩き方でも、とにかく前 みて

歩く。それしかないよ、万ちゃんと付き合っていくには」

「親父と付き合うの大変なんですな」

おれはしみじみと思った。

どんなときも前みて歩かなきゃいけないなんて、なかなかハードな人生だ。

「うん。万ちゃんは大変な人だからね」

二人して笑った。

「じゃあ、そろそろ僕帰るよ。明日、若い奴が試合するからね。」

ジムに帰って様

子を見てやらないと」

山形さんが席から立つ音が聞こえた。

「——そうそう。長々と説教くさい話して悪かったね、一平。僕はねえ、ボクシング以外のことでは説教しないことにしているんだ。何せ人様に説教できるような立派な人生、僕は歩いてないからね」

「そうすね、山形さん」

おれがそう言うと、山形さんは大笑いして帰っていった。

優しい歌

三日後。おれは病院を退院した。

病院の玄関でボケツと突っ立てると、親父が迎えに来てくれた。

親父はおれの手を乱暴に引っ張ると、家にむかつて歩き出した。

親父が着替えを忘れてきた所為で、寝間着がわりのジャージを着たままだった。

髭も手入れしてないから、外見は可哀想なホームレスのようになってるはずだ。

その上、親父と手を繋いで歩してる。

？ああ恥ずかしい？

おれは照れくさくなり、真つ暗な地面を見つめながら歩いた。

親父は、目の見えないおれを氣遣ってゆつくり歩くなどという細やかな神経な

ど持ち合わせてないので、テメーの歩調で歩いた。

目の見えないおれは一緒に歩くのは辛かった。

かといってゆつくり歩いてくれなど、プライドが邪魔してとても言えなかった。

仕方なく親父に合わせて歩いてると、五分もしないうちに転けた。

「なんだよ、オメエ。何もねえところで転けて。酒でも飲んでるのか？」

糞親父の頭蓋骨をかち割ってやりたかった。

「馬鹿野郎！ 目が見えねえから転けたに決まってるだろが！」

「うんだよ、オメエ。目が見えねえぐらいでまともに歩けねえのか？ 座頭市

を見習え、座頭市を」

親父はあきれ尽くしたと言わんばかりに罵倒した。

おれはプチ切れた。

「映画と現実をごちゃ混ぜにすんな、クソジジイ！ 目が見えな

いで歩くのがど

んなに辛いのかお前にわかんねえだろうが！」

「うんだよ、目が見えないぐらいで、発情期の雌猫みたいに吠えやがって、ま

ともなボクサーなら目なんか見えなくても歩けるだよ！」

「うんじゃあ、親父歩いてみるよ！」

「おう歩いてやらあ！」

売り言葉に買い言葉。

親父はおれの手を振りほどくと、一人で歩き始めた。

三十秒後、大きな水音がした。

「馬鹿かテメーは！ 川に落ちてやがんのか！」

本当に口だけだな、このクソジジイは。

「アホう！ ちよつと暑いから川に飛び込んで涼んだだけだ！」

バチャバチャと水音を立てながら親父は怒鳴り返した。

「いいから目を開けてあがってこい。勘弁してやるから」

「なに戯けたこと言ってるんだ！ このどん百姓が！ 目が見えなくとも、テメー

のところに行くぐらい余裕なんだよ、余裕」親父は叫んだ。

「できるわけねえだろう」

おれは常識で返す。親父は足掻くような水音で返事を返した。

どうやら流れに逆らいながら泳げば、川上の土手の上に立っているおれに辿り着

くことができると考えたらしい。

馬鹿な親父にしては知恵を絞っている。

巧くすれば目を瞑ったまんまでも辿り着くことができるかもしれない。

ただしおれが声を出せばな。おれは地面の上に座り込んだ。

？ちいつとばかり目の見えない苦しみを思い知れ？

おれは死んでも声を出さないことに決めた。

一〇分が経過。

親父はまだバシャバシャやってる。

三〇分が経過

水音は聞こえなくなった。

どうやら泳ぐのを止め、岸に上がったらしい。

一時間が経過

親父はおれの悪口を言いながら、おれを探してる。

おれを怒らせて、怒鳴らせる作戦らしい。頭にきたが意地でも黙っていた。

二時間後

未だに親父はおれを見つけることが出来なかった。怒鳴り声も聞こえない。

？まさか車に引かれたのか？？

アホなオヤジのことだ。目を瞑ったまんま、とんでもないところまで歩いて

行つてた可能性がある。

「親父！」

おれが心配して叫ぶと――

誰かがおれの肩を掴んだ

「あに怒鳴ってんだよ！ この唐変木が！」

親父だった。親父の手は濡れていた。

一瞬水かと思ったが、元ボクサーのおれは、それがなんなのかすぐわかった。

血だ。

「なにつまらねえ意地はってんだ！ テメーは！」

目ぐらい開け。アホ親父が。

こんなクソ親父でも一応親だ。死なれたら後味が悪い。

「意地だあ！？ おれは意地なんてはってねえよ。目を瞑ってお

前のところに

辿り着くなんて、余裕のよっちゃんなんだよ！」

「嘘つけ、二時間も掛かってるじゃねえか！」

「ちつと練習してたんだよ、薄らトンカチが！　いまやったら三分でお前を捕

まえられるからなおれっちは！」

へたに言い返すと、親父は同じチャレンジを挑戦しそうなの勢いなので、「わーた

よ親父。おれの負けだ」

おれは白旗をあげることにした。もう一度やられたらたまったもんじゃない。

「ふん。わかりやあいだよ、わかりやあ」

親父はおれの手を取ると、家路にむかって歩き出した。

親父の手は血でヌルヌルしてる。

「おい、親父。けっこう怪我してるじゃねえか？」

「つまらねえこと聞くな。それよりテメーはこれからどうすんだよ。まさか家

で米つきバツタみたく、穀潰ししてるわけじゃねえだろうな？」

「うるせえな考え中だよ、考え中」

将来のアテなんか丸つきりない。

「考え中だあ？　頭のなかに大鋸屑しか入ってねえのに、考えても無駄だよ無

駄。かわりにおれっちが考えてやる」

親父は一秒ほど考えると「そうだ。テメーあれだ。按摩やれ按摩」ひねりのないことを言い出した。

「按摩なんかやるかよ。どうせ揉むたって、三宅の婆みたいなのしかいねーよ」

おれは脊髄反射で反発した。

「うんなのやって見ねーとわからねえだろうが」

親父の声が途切れる。ポンと手を叩く音がした。

「——ああ、わかった。あの時の娘さんにおめえ操立ててるだろう。飢えた肉棒のオメエのことだ、後家さんの腰なんか揉んだらすぐハメちまうからな。このペンション派め」

憎いね、こいつ。と連呼しながら、親父はおれの頭をバンバン叩いた。

「馬鹿野郎！ 気軽に人の頭叩くな。おれの失明は脳に問題があるんだから。親父も医者話を聞いたろう？」

「脳みそに問題あるのは生まれた時からだから大丈夫だよ。それよりテメー、あの娘さんどうした？ もう涙の連絡船か？」

親父は話したくない話題をふってきた。

「——べつに別れてねえよ」
そもそも付き合ってすらいない。

「なんだもうハメたのか？ どうせおめえのこつたどこぞの砂浜で強引に押し

倒しただろう？ このマメドロ野郎め！」

「ハメてねえよ。」

素人童貞は色々難しいだよ。

「なんだまだハメてねえのか。じゃあ娘さんの名前はなんて言うのだ？」

「知らねーよ。まだ会って日が浅いから」

親父の前でポン子とは、さすがに恥ずかしくて言えなかった。

「あんだよ、まだ名前も聞いてねえのかよ。だらしねーな。これだからペンション派はダメなんだよ」

「——親父。一つ聞くがペンション派って、どういう意味だ？」
どうせ口くでもない意味だろうが、これ以上ポン子の話をされた

ら堪らないので
質問してみた。

「キスするには三回デートしなきゃダメだとか、はじめて犯るのは星空が見える

ペンションじゃなきゃ嫌だとか、どうでもいいことを気にする軟派共をまとめて

ペンション派って言うんだよ。おれっちから言わせてもらえば、どうせやる事は

一つなんだから、そんなもんに頭を使わなくてもいいだよ！ 男は黙って蚊帳

を張る優しさだけがあればいい」

「蚊帳って、今時いねえよ。そんな奴」

親父の時代だっていねえよ。

「まあ、最近の男は軟弱者ばかりだからな。それより、ペンション派のオメーの

ために、おれが仲直りの秘策を書いてきてやったぞ」

親父の声は自信満々だった。

おれは猛烈に嫌な予感がしてきた

「ほれ、これ持ってつけ。優しいおれっちが、目の見えないオメーのために書いておいてやったから」

親父は封筒のような物を押しつけてきた。水でよれよれになっている。

「なんだよ、これ」

「婚姻届だよ。お前が書く欄は、おれっちがすべて書いておいてやったから、後

はこいつを黙って娘っ子に渡せばいい」

親父がとんでもないことを言い出してきた。

「娘っこがサインしてくれればそく結婚、ダメならそく終了。わかりやすくてい

いだろう」

今度あつたら、そく渡してこい。

親父は無茶な注文を付け加えた。

「――渡せるわけねえだろう。会つて一週間も立つてないし。喧嘩別れしたまんまなんだから」

ポン子の泣き顔が、脳裏をよぎる。白い陶磁器のような頬を伝う涙を、おれの手で拭いてやりたかった。

？髭面のおっさんに拭かれたとは思えないが？

しかも泣かしたおれだしな。

「ありゃあ、オメーが悪いだから土下座するなり、腹を切るなりして詫びりゃあ

いいだよ。腹切るのが怖ければ、おれっちが介錯してやるか」

親父の声はマジだった。

おれはちよつと怖くなった。勢いで指を詰める親父なら、実の息子を介錯するぐ

らいガチでやるかもしれない。

「で、切腹した後、婚姻届けを渡すだよ。お前の作った味噌汁が飲みたいとか、適当なことぶっこきながら――」

振られたら、その場で介錯してやる。親父は不吉な言葉を付け加えた。

「切腹した後、渡せるかよ！」

「けつ、情けねえ。土下座しようが切腹しようが、惚れた女相手なら婚姻届けぐらい渡せるだよ。おれっちなんか、母ちゃんと出会った当日大喧嘩して、翌日仲

直りして、その日に即婚姻届けを渡したからな。母ちゃん真つ赤な顔で受け取っ

たよ」

まあ、処女だったから仕方ねえか。

親父はにガハハと、豪快に笑いながらのろけた。

「早すぎなんだよ、オメーは！」

てか、受け取っちゃったのかお袋は。

「いい男は二日もあれば結婚まで持つて行けるだよ。お前も、おれっちの息子な

んだから、せめて一週間ぐらいで渡せるような男になっておけや」

——なれるかよ。あんなに最低なことしたのに。

おれは婚姻届けを放り捨てようとしたが、道に捨てるモンでもな
いと思つて、

ジャージのポケットにねじ込んだ。

家につくと、数馬が驚きの声で迎えた。

「親父、血だらけじゃねえか！　なんで兄貴むかいにいったぐら
いで血だるま

になつて帰つてくるんだよ」

「馬鹿野郎！　こりゃあ血じゃねえよ。赤い汗よ」

「どつからどう見ても血にしか見えねえよ。兄貴、親父なにやら
かしたんだ？

ヤクザと喧嘩でもしたのか？」

おれは数馬に事情を話した。

「——馬鹿も極まりだな。親父もう六〇過ぎてるだから少しは自
重しろ、自重」

数馬は呆れ声で親父を諫めると「このクソンだらあ！　男は丸
くなつたらそ

こで終わりなんだよ」親父はいつもの調子で怒鳴り散らした。

「うつせえな。わかつたからちよつと待つてろ」

数馬は足音を立てておれ達の前から立ち去ると、暫くして戻つて
きた。

「親父。ちよつとしみるぞ」

そう言つと数馬は傷の手当てを始めた。

「――ぬほほっ！」

親父は怪鳥のような笑い声を發した。

べつに發狂したわけでも、賞味期限がとつくに切れた腦みそが腐つて溶け出し

て耳から垂れ出たわけでもない。單純に薬がしみて痛いのだ。

普通の人間なら痛いとかシミるとか叫ぶところだが、全身男の見栄で構成されてる親父は絶対に痛いといわない。

悲鳴の代わりに奇声をあげて笑い出す。

山形さんが言つには現役時代からそうだったらしく、試合中でもやるので相手選

手に相当気味悪がられたらしい。

筋金入りの馬鹿にプライドを持たせても、奇行のタネにしかない。

親父が四回ほど奇声を上げると、傷の手当ては終わった。

「――数馬、今日の晩飯なんだ？」

「誠次さんが退院祝いにしゃぶしゃぶの肉をもつてきてくれたから、しゃぶしゃぶだよ」

「なんだとう！ それ早く言え！」

親父は言い捨てると、自分一人でしゃぶしゃぶのある居間に突撃していった。

「――兄貴、悪かつたな。親父なんか迎えにいかせて」

誠次とは、片桐組の若頭のことだ。

「――べつにいいよ。恥かくのは慣れてるから」

慣れてねえのは、女の涙だけだ。

おれの耳にはポン子の涙声がへばり付いてた。

？どうせへばり付くなら笑い声のほうがよかったな？

おれはそう思いながら、数馬に手を引かれて居間にむかった。

「おう唐変木どもきたか。おれがもう火をいれておいてやったか

ら、早く座つ

て食え」

親父はすでにしゃぶしゃぶをおっぱじめていた。

おれと数馬は座る。それと同時に親父が「頂きます」と叫ぶ。

おれ等も手を合わせる。

鍋の底を箸が突く音が聞こえた。続いて下品な咀嚼音がこだます。見えなくともわかる。親父だ。

おれはというと目が見えないので、どこに鍋があるかわからない。

「兄貴、ほら」

数馬が、気を利かせて肉を小皿に取って渡してくれた。

「おう、そうだった。オメーはまだ修行がたりねーから、肉取るの無理だった

な。ほれ、おれっちも取ってやるぞ」

親父は、おれの小皿に肉を放り込んできた。

これが最後だった。

親父はそれ以後、おれの小皿に肉を放り込んでくることは一切なかった。

自分が食うのに夢中になっているのだ、このクソ親父は。

気の利かない親父に変わって、弟が肉や野菜を小皿に盛ってくれた。

一方の親父のほうといえば、豪華なしゃぶしゃぶに舞い上がってしまい、日本酒を飲みはじめた。

「お前も飲むか、一平。なにせオメーの退院祝いだからな。しかし、この肉うめーな」

親父は、酒臭い息をまき散らしながら喚いた。
「いらねーよ」

おれの退院祝いなのに、親父が一番喜んでる。

しばらくして、親父のいびきの音が聞こえてきた。

目が見えないせいで耳が敏感になっていいのか、いつもよりうるさく感じた。

「兄貴、ちょっと親父捨ててくる」

数馬は、親父を部屋に捨てに行つた。すぐに数馬は戻ってきた。

「兄貴、とりあえず今日は居間で寝るか。二階の部屋だと階段あるから危ない

だろう。トイレも下にしかないしな」

言われてみればそうだ。数馬は、おれより余程考えていた。

「寝るには早いけど、とりあえず布団を引いておくよ」

おれは布団が引き終わるまで、居間の壁に背を預けた。

数馬が部屋をかたす音が聞こえる。目が見えなくなつて、耳に頼ることが多く

なつたせいか、妙にうるさく聞こえた。

「なあ、兄貴」

「なんだよ、数馬」

「——余計なことして悪かつたな」

「もう気にしてねーよ。あの娘に酷いことをしたのはおれなんだから」

そう、おれはあの娘に酷いことをした。

「なあ、兄貴。あの娘も……」数馬は途中で声を飲んだ。

「なんだよ、数馬？ あの娘がどうかしたのか？ なんかトラブルにでも巻き込まれてるのか？」

おれは興奮して声が大きくなった。あの子にもし何かあったら、おれは耐えられそうになかつた。

「そう言つんじゃないから、大丈夫だよ、兄貴。おれはただ、余計なことを言つ

て、しくじるのは二度とゴメンだから言いたくないだけさ。もし、

話を聞きたい

のなら、あの子から直接聞いてくれ。携帯の番号は聞いておいたから」

「——あの娘が無事ならいいさ」

本当は携帯の番号を聞きたく仕方なかった。

しかしどの面下げて、あの娘と話せる？

あんなに酷いことしたのに。

でもポン子に会いたかった。

「なあ数馬。悪いだが、食器棚の奥に飴の入った小瓶があるから取ってくれないか？」

食い意地の張った家族どもに喰われぬよう、おれは飴を隠しておいた

「兄貴。食器棚の飴なら、親父がジムに持って行って、全部喰っちゃまったぞ」

「——嘘！」

せめて飴でもなめて、思い出に浸ろうとおもっていたのに。

「いや本当」

数馬は言葉を切ると「——ひょっとしてあの娘から貰ったのか、

あの飴？」

おれは曖昧に頷いた。ショックでまともに返事を返す気力がなかった。

「小瓶ならあるぞ」

「小瓶だけならいらねえよ」

抱いて寝るとも言うのか。

？悪くないかも？

切なすぎるアイデアが思いついたが、あまりにも寂しすぎるので止めた。

「悪かったな兄貴」

数馬は申し訳なそうな声で謝った。

「いや。べつに気にしてねえからいいよ」

？これは天罰さ。ポン子に酷いことをした天罰だ？

おれが悪い。ついでに言うなら一番悪いのは黙ってあめ玉を食った親父が一番悪い。

布団を敷く音が聞こえる。

「兄貴、布団引きおわったぞ。とりあえず寝っ転がっておけ。眠たくなければ、

テレビでもつけるか？ 目が見えなくても、ラジオがわりにはなるぞ」

「いや、いい」

おれは布団に寝っ転がって、ポン子のことを想った。

眠りに落ちると、ポン子が夢に出てきた。

ポン子の可愛い顔がはつきり見えるので、これが夢だとすぐにわかった。

——現実のおれの目は見えないのだから。

ポン子は笑いながら砂浜を走る。その後をおれが追いかける。

故郷の海は、太陽の光を乱反射してキラキラと光っていた。

おれとポン子は乱反射する光のなかを駆けていく。

だがすっかりとポンコツになちまったおれは、ポン子の速度についていけず、

次第に距離が離れていく。おれは距離を縮めようと必死に走る。

——でも距離は縮まらない。

縮まるどころか、拡がっていく。

おれは焦ってさらに早く走ろうとするが、足がもつれて転けた。頭から砂浜に突っ込む。砂のせいで視界が暗転する。おれは砂だらけの頭を上

げる。

砂を払ったはずなのに、視界は暗いまんだった。

ポン子の姿はもう見えなかった。

「——ポン子！」

おれは絶叫し、けっして届かないものにむかって手を伸ばした。

そこで目が覚めた。

瞼は開いてるはずなのに、あたりは暗闇に包まれていた。

おれは一瞬焦った後、馬鹿馬鹿しくなった。

暗いのは当たり前だ、おれの目は見えないだから。

おれは汗だくの顔をパジャマの裾で拭う。

窓の向こうからは、雨の降る音が聞こえてきた。

「——雨かよ、ちくしょう」

外に出るわけでもないのに、何故かおれはウンザリした。

となりの部屋から、おれを嘲笑うかのように馬鹿親父の大鼾を聞いて眠っている。

「今、何時だ？」

習慣でつい居間の時計に目をやるが、針が見えないのでわからない。

？時間を知るのも、人頼みか？

くそ。おれは、自分一人でままならないことに苛立ちを感じた。

寝直すか。と思ったが目が醒めちまって寝れそうになかった。それに妙に暑い。

雨が降って蒸してるせいかもしれない。

おれは窓を開けることにした。

おれは暗闇の中、手探りで窓の鍵を探り当てる。

幸い二九年間住んでた家なので、二、三回頭をぶつけているうちに探り当てる

ことができた。

おれは窓を開けて、慎重に縁側に腰掛けた。

小雨が頬に当たった。気にせずぼんやりしていると、口のなか

に唾がわいた。

？ 飴舐めたかったな？

おれは唾を飲み込みながら、未練がましく思った。

また唾がわいた。おれは唾を飲み込む。

何度も何度も繰り返すうちに、涙が込み上げてきた。

ポン子に会いてえ

おれはついに、声を押し殺し泣き始めた。

涙は頬をつたわり、おれの唇に届いた。

涙の味はのど飴と違って、酷くしょっぱかった。後悔と悔恨の味だ。

なんであんな事しちゃっただろう？。

ポン子はただおれを助けようとしてくれただけなのに。

おれは自分を殴り飛ばしたくなった。おれは自分の頭を家の壁にぶつけてやった。

手加減抜きでやってやったので、かなり痛かったがあまり気が晴れなかった。

黄昏れているおれに、追い打ちをかけるように駄犬が吠えだした。しばらく無視したが、駄犬は吠えるのを止めなかった。

「うるせえ、シメて犬鍋にすんぞ！」

怒鳴りつけたが、駄犬は吠えるのを止めなかった。

いつもならおれが怒鳴れば、駄犬は吠えるのを止めるのに。おれは不審に思った。

「なんだって言うだよ、テメーは」

おれは文句をつけたが、無論、駄犬は答えない。吠えるだけだ。

駄犬は、おれの足に首を擦りつけてきた。

「なんだまた、かゆいのか」

駄犬は身も心も汚いせいか、よく痒がる。

特に首筋が痒いらしく、よくおれに首輪を外してくれとせがむ。

おれは仕方ないので、首輪を外してやることにした。

「手間かけさせやがって、お前はおれの盲導犬だろうが。ご主人様をこき使って

どうするだよ」

おれが嫌みを言いながら、手探りで駄犬の首輪を外してやった。首輪が外れた途端、駄犬はおれの手から飛び出していった。

「おい、逃げるな！」

目が見えないおれじゃ逃げられたら、捕まえることができない。家の前にある道路から、駄犬の吠え声が聞こえてきた。

？なにやってんだ、あいつ？

逃げ出したらいつもは一直線に好きなところに逃げ出してくのに、今日に限って

駄犬は家の前で吠えまくっている。

？まさか？

「おれを灯台に誘っているのか……」

そんなこと、あるはずがない。妄想だ。理性はそう告げるでも。

それでも。

「ポン子……」

会いてえ――。

感情が溢れだす。おれは庭に飛び出した。

さっそく転けた。

すぐさま起き上がる。

おれは駄犬の吠え声を頼りに、なんとか家を出た。灯台に向かう左手の道の方

から、駄犬の吠え声が聞こえてきた。

間違いない、やつはおれを灯台に導こうとしている。

「おれを灯台に連れてつてくれ、ロッキー。もし連れて行ってく

れたら、おれは

二度とお前を駄犬と呼ばねえからよ！」

おれは駄犬にむかつて叫んだ。駄犬はそれに答えるかのように吠えた。

駄犬は吠え声を上げなら、走り出す。

おれは吠え声を頼りに駆けだす。すぐに転けた。当たり前だ。

なんの訓練もなしに暗闇の中を走れるはずがなかった。

それでもおれは立ち上がり、駆けだした。

今度は電柱に頭をぶつけた。

？これ以上、馬鹿になつたらどうすんだよ？

見えない電柱に毒づくと、おれは走り出した。

おれは灯台を目指して、ノロノロと、薄らみつともなく、暗闇のなかを駆けて

いく。

おれは、何度も、何度も、転び。

何度も、何度もぶつかった。

それでも立ち上がった。

リングの上じゃ、もっと酷い目にあつたんだ。これぐらい屁でもねえ。

と思つた矢先、転けた。しかも盛大に。

おれは土手を転げ落ち、頭から川に落ちた。

「クソたれがっ！」と毒突いた瞬間、激痛で声が詰まった。

足になんか突き刺さつてる。

おれは手探りでさぐると太ももに木の枝が突き刺さつてた。

「なんだってんだ、畜生」

おれは毒突きながら歯を食いしばつた。太ももから枝を引っかく。太ももから枝を引っかく。

痛みのあまり叫ぶことすらできなかった。それでもなんとか枝を抜くと、

ジャージの上着を破いて傷口を縛った。

おれはよろよろと立ち上がり、土手を上ろうとする。
足が地面に触れるたびに激痛が襲ってきた。

？諦めるよ？

理性が囁いた。

？ここで座って、誰かくるの待ってる？

それが利口つてもんだ。おれも理性に同意する。

足が止まった。

？こんな小雨がぱらつくなか、ポン子がいるはずねえだろう。パラついてなく

ても、ポン子はお前みたいな目の見えない、いじけたおっさんなんか 待ってね

えよ？

まったく理性の言うとおりだ。

どう優しく考えても、ポン子は灯台にいるはずなかった。

あんな酷い言葉を浴びせたのだから。

それどころかなんの約束すらしていない。

でもおれは馬鹿だった。

救いようのない馬鹿だから。

一〇〇%ありえないゴールを目指して走っちまう。

おれは再び歩き出した。

苦痛を訴えようとすると口を食い縛り、なんとか土手を昇りきる。

ロッキーの吠え声が、おれを迎えてくれた。

おれは足を引き摺りながら、吠え声を追った。

やがて波音が聞こえてきた。塩辛い潮風が、おれの頬をくすぐる。

「やった！ 海岸はすぐそこだ」

嬉しさのあまり声が出た。

「ロッキーでかした！」

おれはこの時ほど、ロッキーが可愛いと思ったことはなかった。

しかし、喜んだのもつかの間――。

突然ロッキーの吠え声がやんだ。

ロッキーの吠え声がなければ、おれは暗闇のなかで一人だ。

なにかの間違いで車が通ったら、轢かれるかもしれん。田舎とはいえ、県道だ。

早朝とはいえ、何かの間違いで車が走ってくる可能性は十分あった。

そう思った瞬間、恐怖が、おれに襲いかかってきた。

足がぴたりと止まる。

？負けるかよ？

おれは恐怖に向かって毒づくと、むりやり歩き出した。

頭からすっ転んだ。

「畜生、あの馬鹿犬。おれの盲導犬なんだから、吠えろよコンチクシヨウ！」

おれは暗闇にむかって吠えた。

碎け散る波の音が答えた。

「上等じゃねえか！ リングの上じゃ、おれはいつも一人で戦ってきたんだ。こ

んぐらい、なんでもねえだよ」

おれは立ち上がるうとした。

誰かが、おれの腕を取った。

「ここはリングの上じゃないですよ、一平さん――。それに一平さんは一人じゃありませんよ」

甘くかすれた声だ。

ポン子の声だ。

「ポン子………ちゃん？」

あり得ない。理性が否定した。

でもたしかにポン子の声だった。ポン子の手の感触だった。ポン子の匂いだった。

「ポン子ですよ、一平さん。ロッキーが、連れてきてくれました」
すぐそこからロッキーの吠え声が聞こえた。

「ありがとうよ、ロッキー？」

おれは心のなかで、ロッキーに礼を言った。

おれはポン子の手を借りて、立ち上がった。

「ポン子ちゃん、おれは君に謝りたくって……」

「そんなことより傷の手当てのほうが先決です」

ポン子はピシャリと言った。

そしてポン子は一瞬言い淀み、何故かクスリと笑った。

「——幸い、道具はありますし」

ポン子はおれの手を握った。

「ちよつと移動しますよ、一平さん。ここ歩道のど真ん中ですから」

「……ハイ」

おれは小声で答えた。情けないことに、生まれてはじめて女に手を握られたせい

で、痛みを忘れて緊張してしまったのだ。

「どうしたんです、一平さん。顔、赤いですよ。まさか、小雨のなか走って風邪

を引いたんですか」

「顔が赤いのは、あんたのせいだよ？」

と言いたかった。素人童貞には、そんなセリフは吐けなかった。

「大丈夫ですよ、馬鹿は風邪引かないですから」

かわりにそう答えた。

「馬鹿じゃないですよ、一平さんは。大馬鹿ですよ。目が見えないのに、ここ

まで走ってくるなんて……。わたしこんな大馬鹿な人、はじめて見ましたよ」

言い終わると、ポン子は怒ったように手を引っ張った。

おれは黙って引っ張られた。

「さあ、座ってください。傷の手当しますから」

ポン子にうながされて、おれは地面に座った。ポン子は「酷い傷・
・・・・」

と呟いた後、傷口に消毒液を振りかけた。

「——うはははっ！」

突然笑い出すおれ。「どうしんだですか、一平さん！」ポン子は驚く。

「いや、思い出し笑いです」

本当は痛くて悲鳴を上げたかったが、血統書つきの馬鹿であるおれはつまらない見栄を張った。

「へんな人ですね、一平さんって」

ポン子はくすりと笑いながら、おれの体のあちらこちらに絆創膏を貼ったり、

包帯を巻いたりした。

ふと疑問に思った。

女が色々持ち歩くのは知っているが、包帯なんか持ち歩くもんなんだろうか？。

女と付き合ったことないおれにはよくわからなかった。

「——あのう、よく包帯なんか持ってたね」疑問を口にした。

「ポン子には困ったときに助けってくれる妖精さんがいるですよ。だから包帯ぐら

い、妖精さんに頼めば持つてきてくれるんです」

ポン子は、とんでもないことを言い出した。

？妖精さん？ 年頃の少女が考えることはわからない？

まあ、女の子は夢見がちだと言うしな。

おれはあまり深く考えないことにした。

そんなことを考えているうちに、ポン子は傷の手当てを終えた。

「——ポン子ちゃん。おれはあんたに謝らなきゃいけないことが

」

「ストップです、一平さん。話は灯台で聞きます。それに今、妖精を追い出す呪

文を唱えるんで、しばらく待っていてください」

「えっ、妖精ですか？」

おれは、本気でポン子の頭の出来を疑った。

「ええ、妖精です」言い終わると、ポン子は妖精を追い出す呪文を唱えはじめた。

「ちんぽい・ちんぽい・たまたまたーらー、妖精さん、お家に帰ってください」

ポン子のマヌケな呪文を聞きながら、おれはポン子の頭の具合が真剣に心配になってきた。

「まあ、思春期の女の子だから——？
と思った瞬間、ある疑問が浮かんた。

「あの、ポン子さん？」

「なんですか、一平さん。妖精さんなら、わたしの呪文のおかげで帰っていきま
したよ」

「いや、そっちじゃなくて。ポン子ちゃんって、年いくつ？」

「一九歳ですよ、これでも。童顔だからって、馬鹿にしないでください」

ポン子はすねた。

「よかった——。十九歳で？」

一五歳とかだったら、淫行で捕まるよ、おれ。

おれは、胸を撫で下ろした。

「さあ、傷の手当ても終わったことだし、灯台まで走りましょう。
一平さん。

私も灯台で、一平さんに話したいことがあるんです」

ポン子は、おれの手を握りしめた。

「傷が痛かったら、遠慮せず言ってください。肩ぐらい貸します

から」

「大丈夫ですよ。これぐらい」

猛烈に足が痛むが、男の見栄とポン子の甘く掠れた声が、おれの心に麻酔を打つ

てくれた。

「男の人って遅いんですね。わたしだったら痛くて走れないですよ」

「その時は、おれが担いで走りますよ」

沈黙が答えた。おれの手を握りしめるポン子の手が妙に熱い。

「——変なこと言わないでください、一平さん。早く、走りますよ」

ポン子は、おれの手を引つ張った。

おれは、何かポン子を怒らせることを言っただろうか？ 訝かり

ながらも暗闇の

なかを歩き出した。

暗闇の中を走っているというのに、おれは恐怖を感じなかった。

おれはこの手があるかぎり、恐怖を感じないですむようだ。

無言のまま、二人は海岸を歩く。

沈黙に耐えられなくなったおれは口を開いた。

「——ポン子さん、なんで一人で走っていたんですか？」

「一平さんが落ち着いたらマラソンの大会に誘おうと思って」ポン子は答えた。

「マラソンって、目が見えなくても出られるですか？」

「出れますよ。併走ランナーがいれば」

「併走ランナーって、ポン子さんがやってくれるですか？」

「もちろんそのつもりですけど。まさか一平さん、お父さんと走りたいですか？」

「そんな訳ないじゃないですか！」

あのクソ親父と一緒に走るぐらいなら、まだロッキーと走ったほうがいい。

「そんなに否定することないじゃないですか。一平さんのお父さんはいい人ですよ」

ポン子は妙に親父の肩を持った。

「ちらつとしか見たことないからですよ。ウチのクソ親父は、導火線がやたらと短い爆竹と同じですから」

すぐ火がつく。無駄に音がでかい。うるさいだけで意味がない。

爆竹とは、まさに親父のことだ。

「照れくさいからって、憎まれ口叩いてると、子供みたいですよ」
ポン子は辛かった。

「いや、そうじゃないんです——」

おれはいかに親父がどうしようもない男か、ポン子に力説しようとしたが止めた。

ポン子との大切な時間を、クソ親父の話ですり減らしたくなかった。

おれは、親父の話のかわりにボクシング時代の思い出話を語った。はじめてリングに上った時、足の震えが止まらなかったこと。

相手が反則してきた時、それ以上にえぐい反則で返してやったこと。

減量中見た、奇妙な夢。

灯台が見えてくる頃には、ボクシング時代の思い出話はあらかた喋った。

「面白い話ばかりですね、また今度ゆっくり聞かせてください」

岬の階段を上りながら、ポン子は言った。

「ボクシング話はこれで終いです。おれは思い出話より、今の話がしたい。たと

え面白くなくてもね」

ポン子は足を止め、おれを見上げた。

「……一平さん。上に着いたら、灯台のぼってみませんか？」

ポン子は甘くかすれた声で囁いた。

おれとポン子は狭い灯台入り口を潜り、曲がりくねった螺旋階段を昇り、灯台の展望台に出た。

強い潮風が吹いている。足下からは波が砕ける音が聞こえた。

「一平さん。わたしの本当の名前秋月舞って言うです。聞いたことありますか？」

「いや、ないです」

全然聞いたことなかった。

「——これでもわたし歌手なんです。今は喉がこんなんだけど、こうなる前は結構売れてました」

「マジですか……」

おれは驚きのあまり二の句が継げなかった。すげえ美人だとは思っていたけど、

まさか芸能人だったとは……。

「だから初めてあったとき、一平さんがわたしの顔見ても全然気づいてくれな

かったとき結構ショックでした。ああ、わたし過去の人になってるって」

「いや、おれって、その、芸能人とか興味がないというか——」

「わたしにも興味ないですか？」

小悪魔のような口調で秋月は問うた。

「——いや、ポンじゃなかった秋月さんは別です。その、——凄く興味あります」

おれはどもりながら弁解した。

「そんなに慌てなくていいですよ、一平さん。ちょっとからかって見ただけですから」

秋月は笑いながら答えた。

おれは胸を撫で下ろした。

「逆にわたしのこと、一平さんが知らなくてよかったと思いました。」

わたし逃げ出してきたんです。歌手であることから。声を取り戻す訓練が辛くて――」

声がやんだ。

？秋月は泣いているのだろうか？

目が見えないので、よくわからない。

「そんなに訓練が辛かったですか？」

辛かったです。声には涙の痕があった。

「普通に喋ってるぶんには、そんなには痛くないですけど、歌う
ともの凄く喉が

痛くなるです。でも、痛みは我慢出来るです。

我慢できないのは、自分の酷い歌声を聞くことなんです」

秋月の泣き声が後に続いた。

おれはなんて慰めていいかわからず、ただ暗闇を見つめていた。

「スタッフのみんなやマネージャー、お医者さんや、ボイストレ

ーニングの先

生、みんながみんな、いつか声は戻るからと励ましてくれましたけど、わたしに

は信じることはできなかった。戦うことができなかった。

でも、歌手をやめて別の道を歩くことも出来なかった。だから逃げ出して、一平

さんの生まれ故郷に来たんです。一平さんに会えば、なにか変わる
じゃないかと

思ってた

「なんでおれなんか追っかけて来たんですか？」

ただのファンにしては、行動がエキサイティングすぎる。

「一平さんは綺麗に忘れてるみたいですけど。わたしと一平さん、
一回会った

ことがあるんですよ」

「………本当ですか？」

こんな可愛い子と、いつ出会ったんだおれ。

「本当です。五年前の岸本選手のタイトル戦のとき——」

「——思い出した！ 金城戦のときの、髪の短いあの子か！」

「そう、その子です。廊下で震えてたその子ですよ」

秋月の言葉で おれは完全に思い出した。

5年前、おれはタイトルマッチの前座の前座として、後樂園にいた。

日本チャンピオンの岸本と挑戦者の元橋は、当時のフェザー級の人気選手で、そ

の二人がやると言うことで、後樂園のスタンドはびっしり人で埋まっていた。

おれはといえば、駆け出しのぺいぺいボクサーで、大舞台の前にしてガチガチ

に緊張していた。しかも対戦相手は、華麗なフットワークと鋭い力ウン ターで

知られた金城だった。

ボクシング雑誌の予想では、八対二でおれが不利だった。

実力もランキングも相手のほうが上だから当たり前である。

だが、おれは勝つ気だった。

勝てば、チャンピオンに挑戦できる権利をもぎ取れる。

勝てば、おれが主役の試合ができる。

負ければ、挑戦権を得るのは最短でも一年はかかるだろう。

いやうちのジムは弱小だ。もっとかかるかもしれない。

いや絶対かかる。

ボクサー生命など、蟬のように短い。

うだうだしてたら、チャンピオンに挑戦するまえに引退しちゃう。

若いおれは待つことよりも、駆け上がりたかった。

だが金城のカウンターですでに二人のボクサーが引退に追い込ま

れていた。

恐かった。

さつきからボクサーの汗と涙を染みこんだ控え室の床を、小刻みに足で踏み続けてた。

それでも恐怖は消えなかった。

おれは立ち上がっては意味のない シャドーをして無駄に体力を消耗した。

控え室の扉が開け、親父が、時間だと告げた。

おれはオウと答えて控え室を出た。

廊下の隅で花束が震えていた。

よく見ると、花束を抱えた小さな少女だった。

「なに震えてるんだい？」

おれは小さな少女に声をかけた。優しさというより、恐怖を紛らせたかったからだ。

「・・・・・・・・こんなに大勢の人初めてなの・・・・・・・・」

少女の声は緊張のあまり震えていた。

「おれもだよ。足を見てごらん」

おれは自分の足を指さした。

「・・・・・・・・震えている」

「誰だってリングに上がるのは怖いのか。でも、リングに上がったら震えは止まる」

「どうして？」

「馬鹿だからさ」

少女はキョトンとした顔で、おれの顔を見つめた。

馬鹿じゃなきゃ、夢なんか追っかけねえよ。

親父の馬鹿が後ろで、早くしろと怒鳴っている。

おれは少女に背を向け、リングへと向かった。

試合は、一方的な展開だった。

赤マントに向かって突進するダメな牛みたいなおれを、金城はスペインの闘牛

士よろしく華麗なフットワークで捌いた。

しかも隙を見つけては、おれの顔面にカウンターをぶち込んだ。た。

勝つどころか、倒れないだけで精一杯だった。おれは反撃のチャンスを抑えな

いまま、ラウンドだけを重ねていった。

そして五ラウンド目。

ゾンビのように立ち上がるおれを見て、いらついた金城が、空振りした右フック

を利用して、おれの顎に肘を入れてきた。

おれは前のめりに倒れた。

レフリーには死角だったらしく、反則は取らなかった。

おれは猛抗議する親父の声を聞きながら、完全に気持ちよくなっていた。

薄れていく意識のなか、おれはなぜ金城が肘を入れたか不思議に思った。

そんなことしなくても勝てるのに。

？金城の野郎、ひよつとしてスタミナ切れてるじゃあねえか？？

おれは下から金城を見上げた。

金城は滝のように汗をたらし、肩で息をし、おれを見下ろしていた。

金城の顔には不安の色があった。

？こいつスタミナ切れてやがる？

だから勝負を焦ったのか。

敵の弱みを発見した途端、おれの指先に力が蘇った。

カウント9で、なんとか立ち上がった。

レフリーは試合を再開させた。

おれは背を丸めて金城に突っかかっていた。

金城はボディーブローを警戒して、ガードを固めた。

「違げーよ」

おれは金城に向かって囁くと同時に、レフリーが見てない一瞬の隙について、金城の足の甲を思いつきり踏みつけてやった。

顔をゆがめる金城。ガードが開いた。

おれはすかさず金城の横っ腹に拳を叩き込んだ。

金城はこの試合初めてリングに倒れた。金城陣営が猛抗議してきたが、レフリーは反則を取らなかった。

親父の馬鹿はよくやったと、リングを叩きながら叫んでいる。

「ざまあ、みやがれ？お返しだ。」

寝てればいいのに、金城はカウント6で立ち上がってきた。

おれは、立ち上がってきた金城を睨みつけた。

金城も憎しみを込めてメンチを返してきた。

いい目だ。余裕綽々という面より余程いい。

レフリーが、試合を再開させる。

赤コーナーからは、親父がリングを叩きながら、何が何でも勝てと、叫んでいた。

「そのつもりだよ？」

おれと金城は、リングの中央で殴り合いを再開した。

おれは今イチパンチ力のない一歩のようなインファighter。

相手は翼をもがれたアウトボクサー。

その二人に残されたのは足を止めた撃ち合いだった。

泥試合と化した試合は、最終ラウンドにもつれ込み、おれは金城を倒すことが出来ず判定で負けた。

おれと金城は、互いにセコンドに抱えられながらリングを後にした。

花道から控え室の廊下に戻ると、あの少女が立っていた。

「——格好つけそこなった。お嬢ちゃん、おれのかわりに格好つ

けてくれ」

おれは小さな女の子の背を叩くと、医務室に向かって歩き出した。

「思い出しましたか？」

あの時よりも大きくなつた少女が問うた。

「思い出したよ。恥ずかしいな」

おれは頭を掻いた。

「反則はするわ、負けて帰ってくるは良いとこなしだったな、あの試合」

はじめの一步なら、青木の試合と同じ扱いにされるような試合だった。

「でも、リングには上がったじゃないですか」

「たしかにリングには上がったけど、負けたからな」

ボクシングは勝つてナンボの世界だ。

負けて良かった試合など一つも存在しない。

「負け試合で始まつて、負け試合で終わるか。冴えない話だ」

「一平さんは、人生には負けてないですね。こんな可愛い彼女がいるんですから」

声がしたと思つた瞬間、柔らかな感触が唇に広がった。

秋月が、おれの唇にキスをしたのだ。

柔らかな唇には、微かに甘酸っぱいレモンの味があつた。

比喻ではない。秋月は、おれに会う前にきつとキャンディーを舐めていたのだ。

おれは秋月を抱きしめた。

一瞬。

本当に一瞬だけ――

秋月の綺麗な顔が見えた。

すぐ暗闇に閉ざされたけど、たしかに見えた。

この一瞬の奇跡で、おれのすべてが報われたような気がした。

「……………一平さん？」

おれの名を呼ぶ秋月の声で、おれは我に返った。

「大胆なキスですね。一平さんが舌入れてくるから、わたし少しびっくりしちゃ

いました。わたしの知らない綺麗な人とご経験を積まれたのですか？」

秋月の声には嫉妬の色があつた。

「やべえ、ついソープの癖が出ちまつた？」

おれは焦りに、焦った。

まさかソープで修行を積んできたとも言えない。

「——それは、ですね」

言い訳を考える。必死で考えるも思いつかなくて、額から汗が噴き出た。

おれは反射的にポケットに手をつ突っ込んで、タオルで汗をふこうとした。

無論、家を飛び出したおれにタオルなんぞ持っていなかった。

おれはタオルのかわりに、紙を握りしめていた。

「一平さん、その紙なんですか」

「——なんででしょう？」

目が見えないおれには、当然わからない。

「見せてください」

おれは言われた通り、秋月に紙を渡した。

「ホテトルとかテレクラのティッシュとかエロビデオのチラシかなんかだったらどうしよう？」

秋月に渡した瞬間そう思ったが、後悔するにはすでに遅かった。

「——一平さん。これが返事なんですか？」秋月の声は何故か震えていた。

「返事って？」

「とばけないでください、婚姻届けのことですよ」
婚姻と聞いた瞬間、おれは思い出した。

親父の書いた婚姻届けだ。そういや、ポケットにねじ込んだままだった。

？畜生、どうする??

今更、親父が書いたもんだとも言えない。

「——好きです。結婚してください」

？こうなったら、破れかぶれだ？

長い沈黙の後。

「——考えておきます」

「えっ、即答じゃないですか？」

ドラマだと、ここでハッピーエンドなんだけど……

「映画じゃあるまし、すぐに返事できるわけじゃないじゃないですか。

一生の事ですし」

秋月の言うとおりだった。

ごもつともです。おれはただ頷くしかなかった。

「それに一平さんが、やらしいキスする人だとわかった今はよく考えて返事しない」と、結婚したあと、わたし一平さんの浮気で泣かされそうです」

「——浮気なんかするわけじゃないですか！」

おれは情けない声で訴える。

「言葉じゃ説得力ないですよ。信じて貰いたかったら、行動でしめしてください」

「行動で？」

？まさかもう一回キスしろとか？

それなら何度でも、証明しますよおれは。

おれの鼻息が荒くなった。

「冬の馬拉ソン大会で、一位とってください。わたしも併走しますから」

「一位とれなかったら？」

「取れなかったら、一位取れるまで返事はお預けです」

「そんな——」

生殺しもいいところだった。

「そんな顔しないでください。一位取れるまでの間、ずっとわたしが隣で走りま
すから」

秋月は甘くかすれた声で、付け足した。

これはひよつとしたら、連チャンサインか？

「秋月——」

おれはもう一度、ラブシーンを演じようとした。

その時——。

「——熱いね、チャンピオン」

後ろから聞き覚えのある声がした。

「野崎さん!？」

秋月が驚きの声をあげる。

「声を失った歌姫、失明した元ボクサーとラブロマンス。馬鹿な

大衆が食い付き

そうなお涙頂戴だ」

最高だよ。野崎はパチパチと手を鳴らした。

「これなら金が稼げる。告白本だけじゃない、上手くやればドラマに映画もいけ

る。偽善者相手のバラエティーも出れる。もう少し、品が良いのいいのがお望み

なら、講演でもして、文化人気取りもいい。一本五〇万はかたいよ」

野崎の声がどんどん近くなってきた。

野崎は、おれ達にむかって近づいてきてるのだ。

「野崎、やめろ!」

こんな蠅野郎に、おれ達の人生を計られたくなかった。

「何を怒っているだ、チャンピオン。喜べよ。失明したボクサーと、声を失っ

た歌姫が金を稼げるだ。もう一度、スポットライトを浴びれるだよ。
そのチャ

ンスを呉れてやろうとするおれに、何を怒鳴ってるだ？ えっ、チヤンピオン？

まさかあんな頑張れば目が見えるようになると思ってるのかい？
頑張れ

ばもう一度、歌えると思ってる——」

野崎は最後まで喋ることが出来なかった。

おれは、近づいてくる野崎に向かってパンチを放ったのだ。

おれの拳は、野崎の鼻先に触れていた。

野崎の鼻の感触はすぐに消えた。野崎が驚いて、尻餅をついたのだ。

「——野崎さん」

秋月の声がした。

？ビンタでもするのか？？

おれは、秋月が何をするか見当もつかなかった。

「——8・2だったら考えますよ。もちろん、8がわたし達で、2が野崎さんの取り分です」

秋月はすました声で言った。

野崎は、へっ、と情けない声を出した。

さすがの野崎も、秋月のこの問いは予想外だったようだ。

「後、本の内容と出版する時期もわたし達が決めます。それで良ければ、契約を

考えても良いです」

「——わかった。それでいい」野崎は答えた。

「じゃあ、後で事務所を交えて話しましょう。後、これはお願いですけど、野崎

さんの力で、しばらく他のマスコミにこの事が漏れないようにして欲しいです」

ど。たかる蠅は、野崎さん一人で十分です。野崎さんだって、独り占めしたいでしょう？」

「わかった。おれも金蠅と呼ばれた男だ。金になるクソは独り占めしたい」

野崎の声は、落ち着きを取り戻していた。

「じゃあ、決まりです」

秋月の声には笑みがあつた。

「あんたはチャンピオンと違って、冷静だな」

野崎は背広の埃を叩きながら言った。

「野崎さん。わたしはまだ歌うことを諦めてません。だから利用できるものは何でも利用することにしました」

「——そうか。じゃあおれも奇跡のカムバック物語を書けるよう祈っているよ。」

そっちのほうに儲かるしな」

じゃあな、チャンピオン。お邪魔虫は去るよ、野崎は灯台を降りていった。

しばらくして、秋月が口を開いた。

「なんか勝手に話を進めてご免なさい。一平さんが嫌でしたら、この話断ります」

「いやいいよ、おれは。なんか、あんたの話を聞いてたら変に拘ってるのが馬鹿らしくなった」

あんたの踏み台になれるのなら、おれはいつだって喜んで踏まれるよ。

「よかった。賛成してくれて。わたしも、灯台に上る前だったら、絶対あんな話

受けなかったです。でもここに昇って一平さんに告白したら、どんなことしても

歌手に戻ってやるぞ、て気になって。そしたら告白本もありかな、と思って。

ちよっとやり方があざといかな」

秋月は苦笑いした。

「仕方ないさ。人間、綺麗だけじゃ生きていけない。時には足を踏む必要もある」

おれは一言付け足した。

「ただしおれみたいに負けるなよ。反則した以上、死んでも勝てよ」

「それでもＫＯ勝ち狙ってます」

おれ達は二人して笑った後、灯台を降りた。

秋月はおれの手を握りしめながら、ゆっくりと螺旋階段を下りていく。

「ロッキーにデカイ借りができたな？」

あいつのおかげで、この手がある。今のこの状況がある。

帰ったら、ステーキでも奢ってやるか。

そんなことを思いながら、おれは外に出た。

「——あのう」

秋月は困ったような声を出した。

「どうかしたんですか？」

「ロッキーが、そのう——鉄棒と……喧嘩しているですけど……」

秋月の声色からして、喧嘩じゃないことだけはわかった。

「死ね、駄犬！」

おれは、駄犬を怒鳴りつけた。

駄犬を鉄棒から引き離れた後、秋月は家まで送ってくれた。

おれは家に帰るまでの間、秋月とマラソンの話をした。

秋月と話せば話すほど、マラソンに対する闘志がわいてきた。

「マラソンで決めて、秋月と一発決めてやる？」

「人生で腐るほど走ってきたから、絶対に勝ちますよ、おれ」

おれは秋月に勝利を誓うところで、残念なことに我が家についた。もっと帰り道が長ければいいのに。

おれはそう思った瞬間、重要なことに気づいた。

「親父たちがいたらどうしよう？」

数馬はともかく、親父はマズイ。マズすぎる。

今になってようやく事態のまずさに気づいたが、家まで来た以上しかたなかった。

玄関のドアが乱暴に開く音がした。

「おつ、帰ってきたな。この恩知らず野郎が！」

親父は怒鳴り声を上げた後、下品な笑い声をあげた。

「何が恩知らずなんだよ！」

脊髄反射で、おれは怒鳴り返した。

「テメーに決まってるだろう、この恩知らずが！ おれっちと言う優秀なセコン

ドが居ながら、なにが、おれはリングで一人で戦ってきたんだよ！、だ。恩知ら

ずにも程があるぞ、このミソカスが！」

「アン！？ 何わけのわからないこと叫んでる……………」

おれはそこではたと気づいた。

「なんでテメーが……………、知っているだよ！？」

「知っているに決まってるだろう。おれっちは妖精なんだから」

まさか――

「兄貴、悪い。後つけてたわ、おれ達」

親父の後ろから、数馬の声が聞こえてきた。

「えっ？」

「――後をつけてたって、いつから？」

それだけ言うのがやっとだった。

「家の前で、兄貴がロッキーに頼み込んでるあたりから」

数馬は平然と答えた。

それってほぼ最初からじゃねーか。

「安心しろよ、兄貴。ポン子さんと一緒になった後は、後付けてないから」

「安心できねーよ！ てか、ポン子ちゃんは知ってたの？」

激しく動揺したおれは、昔の呼び方に戻っていた。

「ええ。一平さんの後ろに、救急箱をもった数馬君とお父さんがいたから」

あの時一瞬笑ったのは、おれの背中の後ろに親父がいたからか。

「じゃあ、あの包帯は親父達の・・・・・・・・？ 妖精とはこいつら？」

はい。ポン子は返事をした。

「なんで言ってくれなかっただよ！」

「一平さんにバラしたら、グデグデになって、灯台どころの話じゃなくなるじゃ

ないですか。

だからわたしは呪文を唱えて、妖精さんに帰ってもらったんですよ。それとも――

平さんは、わたしと灯台行きたくはなかったんですか？ わたしの知らない綺麗

な人と二人きりで灯台行きたかったんですか？」

おれは、小声で「いえ、そんなことはありません」としか言えなかった。

「姉ちゃん、心配するなよ。この馬鹿は素人章――」

おれは余計なこといいそうな親父の腹にむかって、拳を放りこんだ。

幸い、目が見えなくてもKOできた。

「おめえ・・・・・・・・」

親父の声はずいぶん低い位置から聞こえてきた。

くの字になっているだ、この親父。

「人の恋路を覗いた罰だ」

ざま見ろってんだ。

「兄貴、おれ今日用事あるから、親父頼むぞ」

「何が用事だよ！ おれはどうするだよ」

弟がいなければ、目の見えないおれはなにもできない。

「ポン子さん。今日だけ、うちの兄貴お願いしてもいいですか？」

おれどうし

ても用事あるんで」

ポン子は力強く、任せてと言った。

「兄貴、うまくやれよ」

お節介な弟は兄の耳元で囁くと、おれ達を置いてどこかへ行ってしまった。

優しい歌（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

できれば、第一部を読んだ感想などをお書きになってくださると嬉しいです。

第二部は主人公変わります。作者の構成力不足で、話もちと長いです。

お暇でしたら、読んでやってください。

クラスメイト前編（前書き）

第二部開始です。

今回は学園物です。

女性キャラも一気に増えますし、幼女も出てきます。
でも話は相変わらずガロくさいです。

せめてアフタヌーンと呼ばれるよう頑張りたいです。

クラスメイト前編

カブ太は、おれの作ったスペシャル餌にむしゃぶりついていた。自慢じゃないが、おれの作ったスペシャル餌は、スイカに黒蜜と砂糖それに秘伝の

タレを加えた、カブト虫なら貪らずにはいられない御馳走であった。いつものおれなら自分の作ったスペシャル餌の出来に満足し、世界を創造し終えた神のような気分になるのだが、今日のおれはイマイチ気分が冴えなかった。

？カブ太は孤独だ？

健全な雄カブト虫なら、そろそろ雌カブト虫のケツに乗っからなといけない時

期なのに、カブ太は一人寂しくスペシャル餌を食っている。

？カブ太がモテないから、一人寂しくスイカを食ってるわけではない？

カブ太は、おれが惚れこんだカブト虫だ。

カブ太が野生の世界に身を置いていれば、今頃ライオンのようにハーレムを築いてたことだろう。

だが悲しいことに、カブ太は野生のカブト虫ではない。飼われカブト虫だ。

そしておれは弱い飼い主だった。

「——なあ、加藤」

おれは、隣の席に座っている加藤唯に声をかけた。

封筒の封にのりを塗っていた加藤が、手を止めてこっちを向いた。

「なに舞島？ 昨日貸した一万円、返す気になったの？」

加藤の顔を覆う厚い瓶底眼鏡のせいで、加藤がどういう面しているのかわか

らない。

が、機嫌が悪いことは容易に予想できた。

加藤は学校に内職を持ち込むほどの貧乏人なので、金にうるさいのは仕方がない

と思うが、金を借りているおれとしてはアラブの石油成金のような大らかな心を

加藤には持つて欲しかった。

「お前なあ、いきなり金の話をするなよな。いくら貧乏だからって。心まで貧乏

になつたらカネカネマンになっちまうぞ」

「——カネカネマンって——」

——なに？

加藤の厚い瓶底眼鏡にはクエスチョンマークが浮かんでいた。

自分のことを言われたことに気づいてないようだ。

？貧乏しすぎて碌なモン食ってないから、頭に栄養が回ってないのかもしれない？

こいつにもスペシャル餌を食わしたほうがいいかもな。

甘いモンは頭に良いと言うしな。

しかしスペシャル餌は、熟練したスペシャル餌職人であるおれでも作るのに二時

間にかかる代物だ。こんな眼鏡なんだか女なんだかよくわからない生き物に食わせるのは勿体ない。

だからおれは加藤に糖分を摂取させるより、道理を諭すことにした。

「金のことしか、考えてねえ人間のことだよ。そんなこともわからねえで、よく

高校通つてられんなあ」

「わたしは舞島より成績いいから！」

加藤は怒鳴った後「で、なんなの話って？ こっちは内職で忙し

いだから、話
すなら早く話してよ」

「——カブ太のことだよ」

おれは飼育箱を指さした。カブ太は一人寂しくスペシャル餌を舐めていた。

「カブ太がどうかしたの？——まさかカブト虫捕まえるの手伝ってくれって言う

んじゃないでしょうね？」

加藤は露骨に嫌な顔した。

？加藤は自分てものを勘違いしてやがる？

どんくさい加藤を森ん中連れて行ったところで、蟬に小便引っ掛けられるのが関の山だ。

「バカ、カブト虫を捕まえに行くんだったら、お前なんか誘わねーよ。おれが聞

きたいのは、カブ太の嫁さんをどうするかってことだよ」

「それこそ舞島が捕まえてくればいいじゃない」

「捕まえてくるのは簡単だよ。なにせおれは千葉県——。いや、

アマゾンーのカブ

ト虫名人だからな」

アマゾンに行ったことはないが、五歳のときからカブト虫をとり続けてきたんだ。

アマゾンで頭を張るぐらい楽勝だろう。

「見栄張るなら、素直に世界一って言いなさいよ」

「世界は広いだよ。さすがのおれもアフリカのボンジョさんには勝てねえ」

おれは謙遜という言葉を知っていた。

「だれボンジョさんって？」

？知るかよ？

今適当に考えたんだから。

「アフリカのどっかにすんでる伝説のカブト虫名人だよ。すごい名人すぎて、カ

ブト虫取りすぎて、今はアフリカ追い出されて、ケニアでクワガタ捕まえてるらしいぞ」

おれは適当なことをふかしておいた。

「——舞島。ケニアもアフリカだから」

加藤はすまし顔で突っ込んできた。

「——愛くない女だな、お前は」

？そこは黙ってスルーしておくところだろう？

「舞島相手に可愛くなっても仕方ないでしょう。で、カブ太の話は？」

「おおつ、そうだった。この前の日曜日、昆虫奇想天外でカブト虫特集やるって

言うから見たのよ。そしたらミノのヤツ、とんでもない言い出しやがっただよ」

「とんでもないこと——？」

加藤は怪訝な顔で問い返した。

「ああ。ミノが言うには、カブト虫って交尾すると、体力が消耗して寿命が縮む

だってよ。そんな話聞いちゃったら、脳天気な雌とやらすわけいかねえだろう。

カブ太の飼育係のおれとしてはよ」

「——頭が痛くなってきた」

加藤はこめかめを指で押さえた。糖分不足でただでさえたりない脳みそが悲鳴を

上げたのだろうか？

「糖分たりねえのか？ スペシャル餌ちよつと舐めとくか？」

おれはスペシャル餌を指ですくって、加藤に差し出した。

加藤は蜜で濡れたおれの指を見て、何故か顔を赤らめた。
糖分に飢えてるのだろうか？

「……わっ、わたしはカブト虫じゃないからいらないわよ！」

たしかにこんな可愛げのないカブト虫はいない。

「——なら風邪か？ 風邪なら学校フケたほうがいいぞ？ 無理して通うほどの

学校じゃないだから、うちの学校は」

ウチの学校なんて暇なとき行くぐらいがちょうどいい。

「こんな学校でも真面目に通わないと推薦貰えないの！」

加藤は言い捨てると、内職を再開しはじめた

「——なあ推薦ってなんだ？」

「推薦も知らないの、あんたは」

加藤は深いため息をついた。

「なんだよ、知らねーとヤベエのかよ？」

「ヤバイもなにも、舞島だって推薦使ったでしょう？」

「どこで？」 推薦なんて使った覚えないぞ。

「ここで」

加藤は指で下をさした。おれは顎に手を当て考え込む。

「——言われてみれば、中学のとき先生が推薦がどうたらこうたら言ってたよ

うな気がする」

「気がするもなにも、ここにするか、中卒やるか、どっちか選べって言われた

でしょうが」

加藤は宣告されたおれよりも、しっかり覚えていた。

「そうだった、そうだった。たしか言ってたわ。しかしひでえな先生も。もう

少しマシな高校選ばせてくれてもいいのに」

タマカスには、ヤンキーと底なしの馬鹿、それと少数の運の悪い

人間しかいない。

「無理。舞島の頭じゃあ絶対むり」

加藤は断言した。

可愛くねえ女だ。

「オメーだって、同じ学校だろう」

「わたしは舞島と違って、青商の推薦貰えたモン」

加藤は薄い胸を反り返し勝ち誇った。クソ面白くないが、加藤が勝ち誇るのも

無理はない。

青商も馬鹿校に違いないが、うちよりも数段ランクが上だ。

しかも元女子校なので生徒の三分の二が女子で構成されているという、天国みたいな学校である。

生徒の九割がヤンキーで構成されてるうちとは大違いだった。

「おれも青商行きたかったなあ」

「——舞島が青商行つてたら大変なことになってるわよ」

加藤はぼそりと呟いた。

「なんで大変なんだよ？」

「なんでもない」

加藤はブスくれた。

「なにブスくれてるだよ」

「べつにブスくれてないわよ。いつもの通り美人ですから」

「なにが美人だ。眼鏡のくせに。ところでお前なんで青商蹴って、タマカスな

んて選んだんだよ？」

「えっ!？」

理由なんてべつに……。加藤は急にしどろもどろし始めた。

「理由なくはないだろう。普通なら絶対青商選ぶだろう」

「——いや、そのう……」

加藤はダメなコオロギみたいにモジモジしてる。

「——わかった！ あれだ。タマカスのほうが入学金が安いだろう。お前は貧乏人だから、高いのと安いの選べって言われたら、絶対安いほう選ぶかな」

「大きなお世話だっ！ トウモロコシ頭っ！」

急に元気を取り戻した加藤は、おれの頭をグウで殴った。

「ちよつと本当のこと言っただくらいで、切れるなよな」

おれは頭をさすりながら抗議した。

「黙れ、トウモロコシ頭」

加藤はおれの顔を睨みつけると、ふて腐れた顔で内職を再開した。

「おい、まだカブ太の話終わってないぞ？」

「舞島の好きにしたら」加藤はむっつりした声で答えた。

「好きにしたらって、お前これクラスで飼ってるやつだぜ。おれが好きにするわけいかなーだろうが」

「大丈夫。舞島の好きにしたって、誰も文句言わないから？」おれがクラスの連中に信頼されていると言ったことか？

「まあな。おれはアマゾンーのカブト虫名人だからな」

おれは胸を張った。

「——舞島、あんた長生きするわ」

「健康には気を——」と答えようとすると「チャース！！！」直人兄貴！」

おれの耳元で怒鳴り声が炸裂した。

おれは驚いて、思わず「うおっ」と言ってしまった。

「びつくりさせんな。亀吉」

おれは怒鳴り声の主である、川村亀吉に文句をつけた。

「すみません、直人兄貴！」

亀吉はもの凄い勢いで謝り出した。

「いいよ、うんな勢いで謝なんくてもよ」

おれはいささかウンザリした。

亀吉は、チビに出っ歯というキングオブ子分みたいな顔している
ので、ヘコヘコ

頭さげていると似合いすぎて嫌だった。

「でもおれの気が済まないスよ！」

ニキビだらけの顔を真っ赤にして、亀吉は吠えた。

「馬鹿野郎！ 男って言うのはなあ、兄貴分相手でも簡単に頭さ
げーなんだよ！

貫目が下がるだろうが」

おれは昨日みたVシネマのセリフをそのままパクった。

「——深けえ。深いすよ直人兄貴！ おれこんな深い言葉聞いた
の生まれて初めて
スよ」

おれの言葉に感動し、亀吉の目は潤んでいた。

？さすが健さんの言葉だ。男の心をビンビン突きやがる？

亀吉は懷からボールペンとメモ帳を取り出した。

「直人兄貴、もう一回言ってください。忘れないようメモします
から」

亀吉はボールペンの先っぽを舐めながら尋ねた。

「しょうがねえな。もう一回言ってやるから、ちゃんとメモして
おけよ」

亀吉は出っ歯むき出しにして頷く。

「カメ。舞島おだてないの。すぐ調子に乗るだから」

封筒にノリを塗りながら、加藤が嘴を挟んできた。

「唯姐さん、言い過ぎスよ」

「何度言ったらわかるの、カメ。わたし姐さんじゃないから」

加藤は露骨に顔をしかめた。

「すみません、唯姐さん……」

亀吉はしよげ返って頭を下げる。

「コラ亀吉！ 簡単に頭下げるなって言っただろう！」

おれは頭にきて、亀吉の太ももを蹴つ飛ばした。

もの凄い勢いで、おれにむかつて頭を下げる亀吉。

「こいつ、おれの話し聞いてねーな？」

「男が簡単に頭さげるな——」

おれが言いかけたとき、加藤が突然右手を突き出してきた。

「なんだよ、いきなり」

「偉そうなと言う前に、一万円返して」

そういや、こいつから金借りてたの、すっかり忘れてた。

「——バカあ、今はねえよ。サントモニカのお婆ちゃんがお年玉くれたら返すから。ちよつと待ってくれよ」

「——お年玉って。今は夏なんですけど」

加藤は冷たい目で、おれを睨みつけてきた。
痛いところついてきやがる。

ここは一発——。

「加藤。そう恐い顔するなよな？。利子つけてちゃんと返すから。
——肩とか凝つてないか？」

—— 拝み倒すしかない。情けないが金がないので仕方ない。

「——ちよつと凝ってるかも」

加藤は態とらしく肩を鳴らした。

「わかった。おれが揉んでやるから」

おれは加藤の肩を揉み始めた。

「カメ。舞島なんて勢いだけで話してるだけだから、真に受けたらダメよ」

加藤は調子に乗って、亀吉に口クでもないこと吹き込んだ。

「？くそう、金さえあれば加藤ごときに頭下げたりしねーのによ？
おれが憎しみのオーラを込めながら加藤の肩を揉んでいると——」

教室の後ろのドアが吹っ飛んだ。

いや、ドアだけじゃない。

ドアと一緒に鼻血をたらした男も一緒に吹っ飛んできた。

それはいい。

テカテカのリーゼントを見れば、鼻血男がタマカスではゴキブリなみに珍しくな

いヤンキーの一人あることは間違いないだろうから、ドアと一緒に吹っ飛んでこよう

が、手足がもげようがどうでもいい。

が、この鼻血男が机を派手に倒したせいで、カブ太の飼育箱が乗っているおれの机まで

倒れてしまった。

落ちた拍子に、飼育箱の蓋は外れてしまった。

カブ太は羽をはためかせ、教室の外に飛んで行ってしまった。

おれは呆然と、飛び去っていくカブ太のケツを見つめた。

おれはゆつくりと教室の後ろのドアに顔を向けた。

砕け散ったガラス片踏みにじりながら、一人の男が立っていた。

男は下品な長ランを纏い、胸にはデカデカと片桐組と刺繍されていた。

その下品な服装に負けないぐらい、首の上に乗ってる顔は下品な下駄顔であった。

——ダチの片桐忍だ。

「このドグサレが……！ 人の肩ぶつかって詫びなしか！ お前のお袋と妹シャ

ブ漬けにして、ソープに叩き売るぞ！」

詫びを入れたくても、床に転がっている男は気絶していた。

「片桐！、テメー怒鳴ってる場合か！」

「アン！？ 舞ちゃん、おれになんか文句あんのかよ？」

片桐は片眉を上げ、メンチを切ってきた。

「あんに決まってるだろうが！ お前がバ力を転がしたせいで、カブ太が逃げち

まっただろうが！」

「……カブ太って。舞ちゃんの飼っているカブト虫のことか？」

きょとした顔で、片桐は聞き返した。

「カブ太のことに決まってるだろうが！」

せっかく飼育係のおれが、クラスみんなのために捕まえてきたって言うのによ

う、逃がしやがって」

「悪いな、舞ちゃん。勘弁してくれや。今度おれも付き合うからさ、カブト虫

捕まえるの」

片桐はおれに向かって手を合わせた。

「まあ、いいよ。おれもまだまだカブト虫を飼う資格ねえから？ 生かすべきか、犯らしてやるべきか？」

おれの中で答えが出ない以上、カブト虫を飼う資格はなかった。

「飼う資格って。カブト虫飼うのに資格なんていんのかよ、舞ちゃん？」

「いるんだよ」

おれはカブト虫を飼う難しさと悲しさを切々と説いてやった。

「ぶへへへ。あんだよ、舞ちゃん。カブ太に女を当てがうかどうか迷ってたんか

よ。うんなもんバンバンやらしてやりやあいだよ」

——こういう風によ。片桐はやさしい笑みを浮かべながら、腰をやらしく動かした。

「簡単に言うけどよう。雌とやったら寿命がヶ月も減るんだぜ」

「舞ちゃん、相変わらず優しいな。おれも舞ちゃんのそういうところ好きだけど

よう。優しいだけじゃヤクザやっていけねーぞ」

「おれはヤクザじゃねーて！」

片桐とは一緒にしないで欲しい。

「——そうだったな」

片桐は頬を掻いた。

「そうだよ。ところで朝からなに怒ってんだよ、片桐？」

「おう、それよ。それ。聞いてくれよ、舞ちゃん」

片桐は気絶した男の背中を踏みつけながら、おれの方に向かって歩いてきた。

おれの前に座っているオタクの本田がもの凄い速度で、椅子から離れる。

片桐はまるで自分の椅子かのように、本田の椅子に腰を下ろした。

片桐は無言で片手を上げる。

亀吉はいつも持ち歩いてるクーラーボックスから、生ビールとコップを取り出した。

片桐はコップを軽く持ち上げると、亀吉は慣れた手つきで生ビールを注いだ。

「どうぞ、忍兄貴」

「おう」

片桐は一杯煽った。みるみるコップが空になる。亀吉はビールを注ぎ足す。

「——コップも冷えてやがる。亀公も気がきくようになったじゃねーか」

冷たいビールのおかげで片桐の怒りも冷えたかに見えた。

——が、それは気のせいだった。

「それに比べてテメーときたら、人様の肩にぶつかりやがってよ
う！！！！」

片桐は怒りがぶり返したらしく、気絶している男に向かってコップを投げつけた。

コップは気絶している男の頭に命中し、ガラスの破片とビール、

それに血を撒き

散らした。かなり痛そうである。

だがそのおかげで男は目を覚ました。

「ヒイイイイ」

男は、人食い鬼のような片桐の顔を見るなり、教室の外へ逃げ出す。

「詫びも入れず逃げるとはいいい度胸してるじゃねえか！！！」

片桐は木刀を握りしめて、立ち上がる。

「やばい？」

おれは慌てて、止めを刺しに行こうとする片桐を羽交い締めにした。

「片桐、落ち着け。また少刑に放り込まれんぞ」

片桐は一年のとき、チンピラを半殺しにして、強盗傷害で少刑にぶち込まれている。

そのせいで、おれより三つも年上なのに、未だに卒業できずにいる。

「バカ！ 舞ちゃん、おれはもう二十歳すぎってから、次は刑務所よ！」

片桐は怒鳴り返す。

「だったらなおさらだろうが！」

おれが怒鳴り返すと、片桐の動きがピタリと止まった。

「——言われてみればそうだな。あんなクソバカ殺して懲役いくのもバカらしいよな」

片桐の体から力が抜けていった。

「——舞ちゃんのおかげで頭冷めたよ。おれはどうも気が短くて仕方ねえ」

おれは羽交い締めを解いた

「短すぎるだよ、オメーは」

「舞ちゃんの言うとおりだよ」

片桐は笑いながら席に座り直した。おれも腰を下ろす。

「でも今日は気が短くなっても仕方ねえのよ、舞ちゃん」

「なんかあったのかよ」

「これよ」

片桐は左手を上げた。今まで気づかなかったが、左手の小指には包帯が巻かれて

いた。

「小指が短くなっていやがる？」

「——片桐。お前まさか、ゆび詰めたのか？」

「ただでさえ気が短いのに、指まで短くしてどうすんだよ？」

「そのまさかよ。親父の野郎、実子相手なのに指なんか詰めさせやがって。ちつ

とは優しくしろよな」

終いにはグレンぞおれ——片桐は毒突いた。

「これ以上どうやってグレつもりなんだよ、片桐？」

おれは可笑しくなって大笑いした。

片桐は、幼稚園の頃は暴れ者すぎて幼稚園から退園を命じられ、

小学校の頃は教

育実習にきた女子大生を強姦しようとして体育教師にフクロにされ、
中学校時代

は職員室にガソリンぶちまけて放火して新聞デビューを果たし、高
校に入ったら

入ったでチンピラを橋から放り捨て重傷を負わせ、少刑に放り込ま
れた男である。

筋金入りのゴロツキである。

そんな男がどうやってこれ以上グレルつもりなんだろう。片桐の
ならず者歴史を

思い出したら、余計可笑しくなった。

おれはゲラゲラ笑い出す。

笑い声がクラス中に響き渡る。

「ウン??」

気のせいかな、教室が静かだった。おれの笑い声以外聞こえない。いつもはクソうるさいのに。

？なんでだろう？

おれは疑問に思ってたあたりを見回すと、クラスの連中の大半が顔を伏せて黙り込んでいた。

？——片桐にビビってるのか？

大人しいヤツやオタク連中はともかく、ヤンキー連中まで顔を下にむけているのは情けない。

普段無駄にデカイ面して街のなか歩いてるだから、こんなときこそ顔を上げて欲しい。

「うんなに笑うなよ、舞ちゃん」

片桐が苦笑いした。

「あれよ。舞ちゃん」

ビール片手に喋る片桐。

「おれが真面目になって勉強すりゃあいだよ。うちはヤクザだからよ、ある意味優等生になればグレるようなもんだから」

「片桐が真面目？ そりゃ無理だ」

「そりゃあねえよ舞ちゃん。指つめても学校に通ってるだから、おれはクラス一の真面目小僧よ」

「——バカ。それは真面目とは言わず、いい迷惑っていうだよ。おれは大笑いした。片桐も熊のように笑う。

「しかし片桐。何して、指詰めるハメになったんだよ？」

「これが原因よ」

そう言つと片桐は短くなった小指を立てた。

「女か？」

「おうよ、女よ」

「どんな女だよ？」

おれは興味がわいた。片桐は女の体は好きだが、間違っても恋に落ちたりする

ような男じゃない。

「アゲハっていう名前の女でよう」

「――アゲハ？ 片桐の女にしちゃあ洒落た名前じゃねーか」

片桐の女なんてズベ子とかヤリマン子とか、そういう名前が相應しい気がする

んだが。

おれの偏見だったんだろうか？

「別に洒落てねーよ。源氏名だし」

「源氏名って、キャバクラの姉ちゃんか？」

「ちげえよ。ピンサロの女だよ」

「なんでまたピンサロの女となんか付きあい始めたんだよ」

「それがよう、舞ちゃん。うちの若いのが副業でピンサロ始めたんだよ。暇だから

ら冷やかしにいったのよ。そしたら手がたりーねえから、女の面接頼まれちまつ

て。面倒くせえけど、おれも暇だから安請け合いしたのよ」

「で、その面接した女がアゲハなのか？」

「そうそう。これが頭がイカレた女でさあおれに会うなり、前の店でアソコが震

えてるから、首になったんですけど、それでも雇ってくれますか？

とか言い出

してよう」

「マジかよ、それ！ フカシじゃねえのか？」

「フカシじゃねえって。マジだって。おれも舞ちゃんと同じく、はじめはフカシ

だと思ったのよ。で、女にテメー嘘つくなよ、と言ったら、嘘だと

思うなら触っ

て確かめてください、とか言っておっぴろげてくるんだよ。でっ、触って見たら

本当に震えてるの。プルプルっと」

「すげえなその女。ビラビラが震えるなんて半端ねえぞ。空でも飛ぶ気か？」

「おれもそう思って、源氏名アゲハにしてやった。蝶々みたいに空を飛べるように」

「なるほど。それでアゲハか。まあ、片桐にしてはいいセンスだが、おれならモスラと名付けるな」

「おいおい舞ちゃん、モスラはねえだろう。たしかに顔がカネゴンに似てるか

らつてよう。うちはサロンだから。怪獣墓場じゃねえから！」

片桐は膝を叩きながら大笑いした。おれも亀吉も大爆笑した。

「ぶへへへ、で、その女が震えるのはわかったけど。それとお前の小指どう関係あるんだよ？」

「関係大ありよ。自慢するわけじゃねえけど。おれは短い人生のなかで、いろいろな穴に突っ込んできたのよ。濡れた穴、若い穴、臭い穴、皺だらけの穴、でも震えてる

穴にはさすがに突っ込んだことはなかった。だから押し倒して突っ込んでみたの

よ。そしたらこれが名器で、なんていうの痺れ河豚？ そんな感じなんだよ」

片桐はそのときのことを思い出したのか、厭らしい笑みを浮かべた。

「おい待てよ、片桐。思わずスルーするところだったが、それってレイプじゃねえか？」

「馬鹿だな舞ちゃん。二千円のピンサロに来る女にレイプもクソもねえだろう」

片桐が呆れた顔した。

「そういう問題か？」

「そういう問題だろう」

おれは納得できずに黙っていると――

「大丈夫っスよ、直人兄貴。アゲハの姐さん、忍兄貴に気に入られたのいいこと

に、店でデカイ顔したあげく、忍兄貴から小遣い貰ってブランド品買いまくって

ましたから」

すかさず亀吉がフロアをいれた。

「そんな女に貢いでたのか、片桐？」

怪獣としてなら、おれも貢ぎ物の一つも捧げようと思うが、女としては貢ぎ物捧

げたいとは思わないぞ。

「――若気の至りだな。おれも格好つけたい年ごろだから、女からねだられると、っ

い粹がつてプレゼントとか買っちゃった。まあ、テメーの金でやってる分にはお

れの器量だからいいけどよう。親父が誕生日プレゼントにくれた刺青用の金まで

使い込んだしまったのは不味かったな」

――おかげでこれよ。

片桐は短くなった小指を立てた。

「親父も実子なんだから、少しは手加減しろよな」

「片桐の親父さんは金には厳しいからな」

片桐の親父は金に厳しい人で、組の金を使い込んだ若い衆の金玉を握りつぶして
いる所を見たことがある。

あの親父さんなら、実子の小指ぐらい平気で千切るだろう。

「敵しすぎんだよ」

片桐はぶーたれた。

「しかしよく小指なんか詰めれたな。おれなら絶対むりだぞ」

「いやおれだって多少ビビったよ。その証拠にやるまえポン決めたもん」

「ポンってなに？」

「シャブ」

と言いながら注射を打つ真似をする片桐。

本当ろくでもねえ、男だな。

「お前大丈夫なのかよ、シャブなんかキメて？ テレビでもやってるだろう、人間止めますかって？」

「でえ丈夫よ。麻酔がわりにキメただけだから。おれも産湯につ

かると同時に、

この業界にゲソをつけたような男だから、ポン喰って落ちぶれた馬

鹿は散散見て

きてるからな」

そうすよ、直人兄貴。亀吉がすかさず援護射撃を打ってくる。

「——ならいいけどよう」

イマイチ納得できないが、おれは矛を納めた。

「それより刺青みてくれよ。まだ完成してないけどよう。なかなかの出来だからよ」

そう言うつと、片桐は諸肌を脱いだ。

背中には鬼を踏みつぶしてる武士が描かれてた。武士の横には日本一の悪太

郎と彫られていた。

自慢するだけであって中々迫力がある。

「どうよ、舞ちゃん。気合い入ってるだろう」

「気合い入ってるけど、色がまだ全部入ってねえじゃん」

「色は、アゲハに金買いしまったから、まだ全部入れてねえだよ。まあ、アゲハをソーブに叩き売ったから、三ヶ月もすれば完成よう」

「相変わらずヒデ工男だな、オメーは」

アゲハも虫かごに捕まっちゃったか。

「別に酷くねえから。貢いだ金分返せば自由にしてやるし。だいたいあの河豚のせいでおれの小指が短くなってるだから、おれのほうが絶対酷い目にあってるよ」

「まあそうかも知れねえけど、オメーも少しは女に優しくしねえとモテねえぞ」

「ソーブで童貞捨てようとした舞ちゃんに言われたくねえよ」

片桐はそこでまで言つと、吠えるように笑った。

「で、昨日のソーブどうだった？」

「——おう、それよ。それがひでえだよ。おれもいよいよ大人の階段を昇るかと

思つて期待して部屋に入ったら、オデコにブツタみたいなホクロをつけた婆さん

が出てきてさ。おれがびっくりして目を丸くしていると、服を脱ぎ始めただよ。

頼んでもないのに」

思い出したくなかったが、おれの脳裏には萎びた垂れ乳が浮かんだ。

「なんだよ、ブツタつて」

片桐は自分の太ももをバンバン叩き爆笑した。

「笑い事じゃねーよ。ソーブ行つて、ブツタみたいな婆さんが出てきたら泣きたくなるだろう」

「でつ、犯つたのかよ？」

片桐は目に涙を浮かべながら聞いてきた。

もちろん同情の涙ではない。

「できるわけねえだろう。そんな有り難い婆さん相手じゃ、立つモンも立たねえ

よ。でもなにもしねえのもなんだから、腰もんでもらったのよ。

そしたら婆さんのやつ、腰を揉みながら戦争の話をしはじめてさ。やれ息子が

ジャングルで殺されたあの言い出すから、気がめいてしかたなかった。最後のほ

うは、なんかおれが婆さんの腰揉んでたし」

「——ソープ行つて仏さんの腰もんでりゃ世話ねえな」

片桐は腹を抱えて大笑いした。

「しかし、おれがいりゃあ良かったな。おれがいりゃあ、ソープの親父ブチのめ

して、ワビ料の一つぐらい取つてやったのに」

いなくてよかった。

隣に立っている亀吉が、おれの脇腹を突つてきた。

「うん？ どうした亀吉——」

「どうした亀吉じゃないわよ！ このトウモロコシ頭！」

おれの後ろにはいつの間にか、加藤が立っていた。

「なに怒つてるだよ、加藤」

？生理か？？

「怒るにきまつてるでしょう！。汗と涙の結晶で出来た一万円をよりによつて、

ソープに使うなんて！」

加藤は怒りのあまり、全身が小刻みに震えている。

？やべえ。そういえばソープの金、加藤から借りてたんだっけ？ 勢いで加藤の前でしゃべっちゃった。

「——加藤。全部加藤の金つてわけじゃないだ。一万三千五百円のうち、入浴料の

三千五百円はおれが出したんだから、そんなに怒るなよ」

「全然、慰めにならないわよ！」

加藤はおれの顔をグーで殴った。

「加藤、拳で殴るなよ！」

「女に拳で殴られたぐらいで、泣き入れるなスケベトウモロコシ頭！」

「ちげーよ。おれの頭なんか殴ったら、加藤の拳痛めるだろう」「えっ——？」

加藤はきょつとんして、おれの顔を見つめた。

おれは加藤の右腕を掴んだ。

小さな手が赤く腫れていた。

加藤はこの小さな手でチビどもを食わせてきた。殴るのに使うにはもったいなさすぎる。

「ほら、腫れてんだろが。お前には食わせなきゃならねえチビどもがいるだろう。もつと自分を大切にしろよ」

「あつ——うん」加藤は小さく頷いた。

「ほら、平手ならいくら殴ってもいいからよ」

殴りやすいように、加藤の顔の前に、顔を突き出してやった。

何故か加藤の顔が真っ赤になった。

「怒りが増したか??」

「——もういいよ、舞島。それより叩いたところ大丈夫？」

「そんぐらい大丈夫だよ」

これぐらいで痛がつていたら、片桐と付き合えない。

「それより本当に殴らなくていいのか？」

おれは自分の頬ペシペシ叩いた。

女にビンタされるぐらいどうってことない。

それに悪いのはおれだし。

「——いいよ、もう。舞島なんか叩いて、怪我したらバカらしいもの」

何故だか知らないが、加藤は急にモジモジしはじめた。
「腹でも悪いのか？」

「——あのさ、舞島。お金返さなくていいから、わたしの家にきてチビどもの面倒みてくれない」

加藤は横を向きながら言った。

「別にいいけどよう、マジで金返さなくていいのかよ？」
「すげえ助かるんだけど。」

「いいよ。サンタモニカのお婆ちゃん当てにしてたら、いつになるかわからないから」

加藤は顔を改めた。

「——それに舞島に頼みたいことがあるのよ」

「なんだよ？ 改まって」

「まあ立って話すのもなんだから、座ってよ」

たしかに突っ立て話すのも何なので、おれは言われた通り椅子に座った。

加藤も椅子に座り、そして話し始めた。

「実はね、舞島。うち子供が増えたのよ」

「子供って、親父さんか？」

「そう。うちのダメダメ親父がまた子供を置いていったのよ」

目には怒りの色があったが、加藤の口から出たのはため息だった。無理もない。

加藤の家の子供は全員腹違いの子供で構成されているのだから。

「しかも二人も」

加藤はこれから背負い込む苦労を思っただけ、盛大なため息をついた。

「もうどうするのよ生活費は。今でさえ苦しいのに」

「おい、まさかおれに生活費どうにかしてくれて相談か？」

金ならないぞ。おれははっきり言っておいた。助けるのは構わな

いが、ないもの

当てにされても困る。

「貧乏人の家からお金を巻き上げる男に、お金の相談なんかしないわよ。それに

バイト増やしたから、お金はなんとかなりそうなの」

「じゃあなんか問題でもあるのか？」

「いや新しくきた子が、どうもウチのチビどもと仲良くやってないのよ」

「なんだチビどもにハブられてるのか？」

「ハブってるわけじゃないでしょうけど、まだ二人とも幼稚園だから興味がない

でしょう。だから舞島が上手く仲を取り持ってあげてよ。舞島ならチビにも好かれてるし

そついうの得意でしょう」

「ふーん。わかった。なんとかするよ。ところで子守りのバイトはいつまでや

りやあいいだ？」

「とりあえず一ヶ月ぐらいかな」

「わかった。チビどもはおれがバッチシ世話してやるから心配すんな」

それで借金チャラならお安いご用だ。

「——一ヶ月って、まともにバイトしたほうがまだ金になるんじゃないかねの？」

片桐がぼそりと呟いた。

「うつさい、下駄男！細かい計算はしなくていいの」

加藤は、片桐を黙らせた。

教室の前の扉がガラガラと音を立てて開いた。若禿げ気味の男が教室に入ってくる。

担任の宮田治だ。

「おーい。お前等席につけ」

宮田は出席簿で教卓をバンバン叩いた。

「片桐。刺青を自慢したい年ごろなのはわかるが、学校にも体面でもんがあるか

ら服きとけ。なっ？」

へーい。片桐はやる気なさげに返事をして、制服を着た。

「で、教室の後ろのドアを破壊したのは誰だ？ 片桐か、舞島か？」

「先生、なんでおれの名前が出るんだよ」

片桐と一緒にされてはたまらない。

「舞島は元気がいいからな。まあ誰が犯人でもいいけど、危ないから後ろのやつ

片付けてくれ」

おれの席が一番後ろなので、結局片付けるハメになった。

片桐はシラばくれて、手酌でビールを飲んだ。後で覚えてるよ、あの野郎。

「片付け終わったところでプリント配るぞ。進路についてのアンケートだ。お前

らも色々と考えてると思うが、大学進学とか冗談でも書くなよ。お前等じゃ絶対

無理だから。それと専門学校も、先生お勧めしないぞ。どうせ入学したってお前等遊ぶだ

けだからな。親御さんに無駄金使わせないようしろよ」

ようは就職しろってことか。

勉強嫌いだから言われなくてもそうするつもりだが、はなから出来ないと云われ

ると何故かむかつく。

前からプリントが配られてきた。

ご丁寧に第三志望まである。

就職は決まりにしても、なんの仕事するかまで決めてねえしな。やっぱ自分が活かせる仕事がいいよな。

おれの特技ってなんだろう。

カブト虫取りに関してはいっぱしの自信がある。早飯もなかなかのものだ。

あと喧嘩も誰にも負けねえ自信がある。

これを活かせる仕事ってなんだろう？

——さっぱり思いつかない。

「なあ、片桐。お前なんて書いた」

本田の席に座っている片桐に声をかけた。

「決まってるじゃん」

片桐はアンケート用紙を見せてくれた。

ヤクザ・ヤクザ・ヤクザ。

「まあ、そうだろうな？」

「片桐じゃ、やっぱ参考になんねーな」

「なんだよ舞ちゃん。人に聞いというて」

片桐は文句を付けようとしたが、無視して亀吉に聞いてみた。

「おれっすか。忍兄貴のところでお世話になろうと思ってます」

亀吉のアンケート用紙には、片桐興業と神経質そうな硬い字で書いてあった。

「マジかよ。片桐のところヤクザだぞ。それもバリバリの武闘派の」

「たしかに修行は厳しいかも知れないスけど、おれ頭悪いし、顔も悪いし、家貧

乏だし、世の中出てもずっと底辺だと思っんスよ。だったらヤクザやってみるの

も悪くないかなと思って」

「？亀吉のやつも馬鹿なりに考えてるだな？」

なんも考えてない、おれより百倍マシだ。

片桐が顔を突っ込んできた。

「亀公はよう考えとる。それに比べて舞ちゃんはダメだな」

「あん？ 喧嘩売ってるのか？」

おれの片眉は跳ね上がった。

「別に売ってねーよ。ただおれはよう、舞ちゃんの将来心配でよう」

片桐は、横からおれの目を覗き込んできた。

「——どうせ先のことなんてなんも考えてないだろう？」

「痛いところついてきやがる？」

「ならよ。おれと亀公と三人でヤクザやろうぜ」

「ヤクザ!？」

全然考えたことなかった。

「おうよ。ヤクザよ。ヤクザ。おれと亀公は、高校卒業したら大阪の本家に部屋

住みすることになってんだ。部屋住みはキツイけどよう、なに一年もしたら終わ

る。そしたら地元帰って、おれら三人で大暴れよ。金も女も好き放題だぜ」

片桐はニヤリと笑った。

「でもよう、ヤクザって人殺しとかすんだろう？」

喧嘩は好きだが、人殺しなんてやりたくなかった。

「そりゃあ、あるけどよう。ヤクザだって人ばっか殺してるわけじゃねーよ。武

闘派のウチだって、人殺したことあるやつなんて、四人ぐらいしかいねーよ」

「四人もいんのかよ!」

「そりゃあいるよ。うちヤクザだもん。でも、百人中たったの四人だけ。消費税

より低いんだぜ。おれ等が鉄砲玉やるなんて確率的にねえから安心しろ」

「一つ聞いていいか？」

「あによ、舞ちゃん」

「片桐の親父さん。人、殺したことあるのか？」

「――表に出てるのは一人だけかな」

片桐はちよつと考え込んだ後、「――裏じゃ、5人ぐらいいったけな」と付け加えた。

「思いきつし殺してるじゃねーか！」

「――親父は荒ぽいからな」

片桐は他人事のように言った後、笑い声をあげた。

お前はその親父の息子じゃねーかよ。

おれは心の中で突っ込んだ。

それに――。

？片桐は絶対人を殺す？

ヤクザの息子とか、そんなもんで言ってるじゃない。

ダチだからわかちまう。片桐忍は人を殺す。

堅気の人生歩いてても、何かの弾みで殺しちまうかもしれない。片

桐忍という人間

はそういう人間なのだ。

だいたい今まで片桐が人を殺してないこと自体が奇跡だ。

医学が発達したおかげで、病院送りにされたやつも命だけは助か

ったが、医学が発達してない江戸時代なら、すでに三人ぐらい殺してたろう。

？片桐と一緒にヤクザをやるということが、いつか人を殺さなき

やいけないとい

うことだ？

人を殺してる自分を想像してみる。

――全然思いつかなかった。

「――ヤクザ。おれには無理そうだな」

悪さするのはいいが、人殺しまでしたくない。

「簡単に袖にするなよ、舞ちゃん。ヤクザが無理ならテキ屋だっ

てあるんだから」

「――テキ屋って、あの祭りるとき出てる屋台のことか？」

それなら出来そうな気がする。

「おうよ。うちは元々神農系だからテキ屋は得意中の得意よ。舞ちゃんは、顔が

いいから絶対テキ屋むいてるって」

なあ、亀公。片桐は亀吉に同意を求めた。

「もちろんすよ。直人兄貴がトウモロコシなんて売ったら、女は股濡らしながら

買いますよ。もちろん、トウモロコシは下の口でパクリするためですよ」

「わかつてるじゃねーか。亀公！」

片桐は大笑いしながら亀吉の肩をバンバン叩いた。

「——マジで濡れるかな？」

なんか話聞いてたら、その気になってきた。

「濡れますって。それに直人兄貴の好きなカブト虫もトウモロコシと一緒に売れ

ばいいじゃないすか！」

「カブト虫とトウモロコシか——。なかなかレボリューションな組み合わせだな」

おれは今までカブト虫とトウモロコシを一緒に売ってる屋台など見たことがない。

「でしよう——」

亀吉が調子を合わせる。

「舞ちゃん。決まりだな。就職先はテキ屋で決定」

片桐が満面の笑みを浮かべた。

どん！ 誰かが机を叩いた。

見ると、加藤が仁王立ちで立っていた。

「騙されるな、舞島！ 屋台だろうが、ダフ屋だろうが、花屋だろうが。ヤクザ

はヤクザなんだから！」

加藤の怒りに反応しているのか、分厚い瓶底眼鏡は震えていた。顔色も蒼白だ。

片桐がすくりと立つ。

「おい、コラ。極道も勤まらない半チク野郎の娘が、なに説教こいてんだ。輪姦すんぞ」

片桐は低い声で、加藤を脅した。

「いや、脅しじゃない？」

ガチ切れた。

怒鳴っている片桐より、静かな片桐のほうがはるかに危険だった。おれは片桐の前に立ちはだかった。

「なんだ、舞ちゃん？」

「座れや、片桐」

おれの視線と、片桐の視線が宙でぶつかる。

「どういう意味だ？」

おれは答えずに、片桐の目を見据えた。

クラス中が静まりかえる。

亀吉が指をくわえてオロオロしている。

加藤は息を飲んで、にらみ合う馬鹿二人を見つめていた。

「舞ちゃん、よう考えてみいや。こんなドンカスの高校出たところで、屁の足し

にもなんねえ。ここに居る連中なんざ、所詮高校出たらツっぱった頭丸めて、派

遣かフリーターやんのが関の山よ。そんな一山いくらのクズにはなりたくねえだろう？」

——こいつ等みたいに。片桐は近くにいたヤンキーを蹴り飛ばした。

ヤンキーは机と共に倒れたが、怒り狂ってる片桐に喧嘩を売るような愚かな真似はしなかった。

「——片桐。座れよ」おれは片桐の演説に付き合わなかった。

片桐はおれの目を睨み据えた後、天を仰いだ。

「——ちやつ。舞ちゃんは女子供に甘えだから」

片桐は、ドスンと椅子にケツを落とすと、頬杖をついてふて腐れた。

？小学生か、お前は？

おれは加藤の方に顔を向けた。

「加藤、ありがとうよ。もういいから、加藤も座ってくれ」

うん。加藤は震える声で返事をしたが、座ろうとしない。

恐怖で体が固まっちまっているだ。

顔色も悪い。

加藤の体がゆらりと揺れたかと思うと、床にむかって倒れそうになる。

おれは加藤の体を受け止めると、そのまま抱き上げた。

柑橘系の爽やかな匂いが鼻孔を擦った。

加藤の髪から匂ってくる。加藤の使ってるシャンプーの匂いだらう。

？加藤も女なんだな？

金がなくても、シャンプーには金をかける。

もつとも、どうせ金をかけるならそのださい眼鏡買い換えればいいのに。

「——ちよつと。舞島」

加藤の声は驚きのせいだ、声は小さかった。

「お前も女なんだな」おれは思ったことをそのまま口にだした。

「なつ……なに言ってるの急に」

「可愛いところがあるってことだよ」

加藤はゴニョゴニョとなにか呟いたが、声が小さくてなに言ってるか聞こえない。

おれもそれ以上加藤と言葉を交わす気はなかった。

「体、大丈夫か？」

「ちよつと風邪気味で調子悪いだけだから大丈夫」

おれは加藤の言葉を確かめるため、額を加藤のおでこに当てた。

少し熱い。

「――まっ、舞島」

風邪のせいか加藤の声は熱ぼつかた。

おれは加藤を無視して、宮田に顔をむけた。

「先生。加藤、保健室に連れて行っていいですか？」

宮本は、アアとだけ言った。

クラスメイト 後編

昼休み。

おれの机の上には封筒の山が築かれていた。

加藤の内職の残りだ

加藤は家に持って帰ると言い張ったが、おれが届けてやると言うて帰らせた。

あのアホのことだ。内職を持って帰れば、寝ながらもやるに決まってる。

「なあ、舞ちゃん。なんでおれまで糊張りしなきゃいけないーだよ」

片桐は面倒くさげに封筒に糊を塗りながら言った。

「いいから黙って糊塗つとけ」

まだ段ボールには腐るほど封筒が入っている。どうせやるなら全部片付け

てしまいたい。

？それに加藤には借りがある？

自分が女だと言うこと忘れて、片桐に文句なんかつけやがって。

やつぱあいつは

馬鹿な女だ。

「舞ちゃん、加藤のところの餓鬼の世話って、何時までやるんだ？」

「さあ、よくわからねーけど。8時までには終わるじゃないか。

チビの世話だけ

だし」

それがどうかしたのかよ？ おれは片桐に問い返した。

？まさかおれがない時間を調べて、加藤に意趣返しでもしようってのか？？

片桐は、おれの顔色の变化に気づいた。

「うんなに警戒するなよ、舞ちゃん。もう加藤のことは気にして

ねーよ」

片桐は手を止めて、頬かいた。

「——まあおれも急ぎすぎた。ヤクザやるには覚悟が必要だからな。舞ちゃんも、

卒業までには考えておいてくれや」

片桐は糊張りを再開した。

「おれは冗談抜きで誘っているだからよ」

糊張りしているせいで、片桐がどんな面して言ってるのかわからなかった。

「でも、ガチなんだろうな？」

「——わあつたよ。おれも性根すえて考えてみるわ」

「ありがとうよ、舞ちゃん。ところで話戻すけどよう、舞ちゃんウチでバイトする気ねーか？」

「バイト？」

「堅気のバイトよ。うち土建やってるの知ってんだろう？」

「ああ。片桐建設だろう？ 土方でもやれっていうのか？」

おれはツルハシを振るフリをした。

「いや、そつちじゃねーよ」

片桐は手を振って否定すると、急に声を落とした。

「——実はよう、組の恥だからあんまりデカイ声で言えねえだが、ウチの資材置き

場から、資材や道具を盗む舐めた野郎がいるんだよ」

片桐の額に青筋が浮かんだ。片桐は怒りを堪えるため、歯を噛みしめた。

「？命知らずの泥棒もいるもんだ？」

見つかったらヘタしたら殺されるぞ。

「捕まえてシメてやろうと思って、見回しているんだが、人手がたりねえ」

「なんか忙しいのか？」

片桐の組は千葉で一番デカイ組なので、暇な若いモンぐらい居そうなもんだが。

「夏祭りやら野球賭博やら、盆の挨拶だの、義理だの、夏は忙しいだよ。それに工事も重なっているから、見回りに組員さくほどウチも暇じゃない」

「そこでおれか」

「そう。そこで舞ちゃんの出番よ。ウチが一段落するまで現場の見回り手伝って

くれよ。日当二万ですから」

「二万もっ！ いいのかよ、片桐」

「一日働けばソーブいけるじゃねーか？ しかも釣りが出る。

「そんぐれえ出すさ。危険手当も込みだからな」

「危険手当？ なんか危険なことがあるのか？」

片桐は呆れ顔になった。

「舞ちゃん、ウチはヤクザだぜ。泥棒野郎が青竜刀もったチャイニーズマフィア

でも、警察呼ぶわけにやいかねーだよ」

「——そりゃあそうだな」

たしかに危険がありそうだ。

「舞ちゃんなら喧嘩も強いし、相手がやばくてもなんとかするだろう。人数多く

てフクロにされそうだったら、おれに電話くれ。すぐ組員つれてすぐ飛んでくか

ら」

わあつたよ。おれは思わずそう返事しそうになった。
が——

「なあ、捕まえた泥棒野郎殺すとかないよな？」

まさかとは思うが念のため聞いておいた。

片桐は吹き出した。

「いくらウチでも、泥棒なんかイチイチ殺さねーよ。シメて、金

にして終わり

よ。泥棒野郎もそのほうがいいだろう。懲役いくよりか」

片桐は大笑いした後、ぼそりと「――まあ、おれはぶち殺したほうがスツキリする

んだがな」と呟いた。

？片桐ならやりかねん？

「これなら安心だろう、舞ちゃん」

イマイチ安心できないだが。

おれが返事を濁していると、亀吉が口を突っ込んできた。

「頼みますよ、直人兄貴。おれも見回りやるんですけど、一人じや心細くて」

「なんだ亀吉もやるのか？」

亀吉は頷いた。

？心配だな？

連み始めた頃に比べれば、亀吉は格段と強くなった。

亀吉が、格闘技を習ったと言う訳でもない。

トラブルメーカーの片桐と、何故かよく喧嘩に巻き込まれるおれと連んでいれ

ば、喧嘩のネタには不足しない。嫌でも喧嘩の場数を踏むハメになる。

その結果、亀吉は喧嘩慣れして強くなった。それだけのことであ

る。
素人相手なら亀吉でも対抗できるが、玄人相手となると微妙だった。

「ならやってやるか。亀吉一人じゃ不安だもんな」

「ありがとうございます、直人兄貴」

亀吉は椅子から立って深々と頭を下げた。

？そこまで頭下げなくてもいいのに？

「決まりだな、舞ちゃん。さっそくだけど子守り終わったらウチきてくれ」

おう。おれは返事をした。

「——それとよ。これで加藤となんか美味しいもんでも食ってくれよ」

片桐は鰐皮の財布から諭吉先生を出してきた。

「いいのかよ、片桐？」

「こんぐれい別に良いよ。加藤になんか含んでると思われるのも嫌だしよ。加藤

の馬鹿に頭下げるのはもつと嫌だから、これでチャラにしようや」

片桐は諭吉先生をヒラヒラ振った。

「わかった。貰つとくよ。ありがとうな、片桐」

やった。今日はすき焼き食うぞ。

ひさしぶりのすき焼きにテンションが上がってきた。

「よし、内職がんばろ！」

すき焼き、すき焼き。おれはルンルン気分で、糊を塗り始めた。

「まだやんのか、これ」

片桐は露骨に顔をしかめた。

「やらなきや、おれの格好がつかねえだろうが」

「——おれに任せろよ、舞ちゃん」

片桐はニヤリと笑うと、封筒を放り出し椅子から立ち上がった。

「おう、テメー等！ よく聞けや。昼休み終わる前に、これ全部やっておけ。終

わつてなかったら焼き入れるからな」

実に片桐らしい解決方法だった。

「さておれ等は苺牛乳でも飲んで一服しようぜ。ひさしぶりの堅気の仕事して疲れちまったよ」

やっぱ堅気なんざやるもんじゃないな。片桐はそう言つと吠えるように笑った。

羊、吠える

朱く染まった土手を亀吉と二人で歩いていった。

亀吉の背中には封筒の詰まった段ボールが。おれの両手には山ほどの肉と野菜詰まったビニール袋がぶら下がっている。

亀吉は最初全部持つと言ったが、そこまでタダでやらすのもなんなので、野菜と肉はおれが持った。

「悪いな、亀吉重いもん待たせちまって」

「いいすヨ、おれは弟分ですから」

亀吉は照れた。

「おれはヤクザじゃねーだから、兄貴はよせよ」

いつも言いたいと思っていた。

「ヤクザじゃなくても、直人兄貴はおれの兄貴です」

「——そつか。なら勝手にしろ」

おれ等は黙って歩いた。

？今日の夕日はデカイな？

気のせいかもしれないけど、街並みのなかに消えていく夕日はいつもより大きく見えた。

「——直人の兄貴、一つ聞いていいすか？」

「荷物持つてもらってんだ。なんでも聞いてくれよ」

おれは夕日を見つめたまま答えた。だから亀吉の顔は見えない。

「——おれがヤクザになっても、直人兄貴はおれの兄貴でいてくれますよね？」

おれは夕日から目を離し、亀吉に顔を向けた。

亀吉もおれの顔を見上げていた。縋るような目でおれを見つめていた。

おれは亀吉の背に目を移した。

亀吉の背中には、重たそうな段ボールと、目に見えないしがらみやら、お袋さんやら何やらを背負っていた。

？チビの癖に、重そうな荷物を背負ってやがる？

亀吉の背中はあるなに小さいのにな。

「――亀吉。お前がヤクザになって、おれが堅気だったら、お前はおれの弟分やめんのかよ？」

「やめないスよ、おれ」亀吉は声を荒げた。

「なら、お前は一生おれの弟分だよ」

「ありがとうございます、直人兄貴！」

亀吉の目は輝いていた。

おれは恥ずかしくなって、前を見た。

夕日は赤々と輝いていた。

「亀吉、お前も変なヤツだな。弟分になりたがるなんて」

人の弟分になろうとも、兄貴分になろうとも、おれは考えたことなかった。

人付き合いなど、タメの関係で十分だ。

「直人兄貴は、おれのヒーローズから」

「――素で恥ずかしいこと言うなよ」

おれは恥ずかしくなって黙った。

暫く、夕日を眺めながら歩いた。

一羽のガラスが、夕日に向かって飛んでいった。

？そんなに夕日に近づいたら、燃えちまうぞ？

夕日は美しく巨大に見えても、近づいてくるものに容赦なく燃やすのだから。

「――なあ、亀吉。本当にヤクザやんのかよ？」

「――やりますよ、おれ。おれ、直人兄貴や忍兄貴とは違いますもん」

亀吉の声には怯えを隠す気負いがあつた。

「何が違うだよ。同じクソ餓鬼だろう。おれ等」 亀吉は歩くのをやめて、おれの顔を見上げた。ニキビだらけの亀吉の顔が震えていた。

「――違いますよ！」怒鳴り声を上げた。

？亀吉の怒鳴り声なんてはじめて聞いた？

おれは思わず立ち止まって、亀吉の顔を見直した。
瞼の隅に涙の影があった。

「直人兄貴とおれじゃ全然違いますよ。顔も、腕っ節も、根性も、金だって、直人兄貴のほうが持つてるじゃないスか！」

そうだな。おれは逆らわず返事した。

実際そうだ。加藤の家よりマシとはいえ、亀吉の家は母子家庭で生活保護で喰ってる。おまけにサラ金にも借金があった。

おれとは違う。

「——おれは直人兄貴や忍兄貴にはなれないスよ。五分の関係には絶対なれないスよ。だって兄貴達はどこの世界に行っても上に立つ人間スよ」

？片桐はともかく、おれは買いかぶりすぎだ？

——と思ったが口には出さなかった。

亀吉の邪魔をしたくなかったからだ。

「おれはどこの世界に行ってたって、下の人間なんですよ。どん尻やるしかない人間なんですよ」

——違う。と言ってやりたかった。

だが、おれの口は閉じたまんまだった。

「だったら強い人間の下につきたいじゃないですか……………」
それで片桐か。

「おれは……………おれは……………」

亀吉は声を震わし、懸命に思いを言葉にしようとした。

無駄な努力に終わった。思いは言葉にならずに激情となり、亀吉の小さな体をよりいっそう激しく震わせた。

目にも涙が貯まっていた。

亀吉は涙を零すまいと、唇を噛み懸命に堪えている。

でも、涙は今にも零れちまいそうなほど瞳に貯まっていた。

「亀吉！」おれは大声を張り上げた。

「なんすか、直人兄貴！」

亀吉はびつくりして顔を上げた。

「——ちつと立ちションしてくる。お前はここで待っている」

おれは、ばかーんとしてゐる亀吉に肉と野菜を押しつけると、土手を降りていった。

河川敷に降りると、青々と茂つてゐる雑草の山の前に立ち、おれはズボンのジッパーを下げ、息子を出した。

スーパーで済ましてきたから、小便なんざでない。

？ 亀吉のやつ。おれとの約束を守ろうとしてやがる？

息子を握りながら、おれは亀吉との最初の出逢いを思い出していた。

初めて亀吉と出会つたのはタマカスの汚い便所であつた。

おれが小便をしようと、便所のドアを開けると、亀吉が卑屈な笑みを浮かべながら突つ立つてた。亀吉の前には、そり込みを入れたパンチパーマの大男がホースを握りしめ立っていた。

一中で番を張っていたダニ森だ。

中学時代、強姦した女から毛ジラミを貰つたことと、兄貴が生首とかいうしょぼい族の頭をやつてることだけが自慢のクズ男だ。

こんな男の経歴など耳に入れるだけウンザリするから耳になんぞ入れたくないが、おれはよく知っていた。

タマカスに入学したとき、このアホは何を勘違いしたのか、おれに生首に入らないかとしつこく勧誘してきた。

盗んだバイクで走り出すのは尾崎一人で沢山なのでおれは断つたが、ダニ森はしつこく

生首の凄さや、自分のヤンチャぶりを語り出した。

おかげで、知りたくもなかったダニ森の情報をゲットしてしまつた。

「三森君。水出しますよ」

便所の水道から声がした。ダニ森の腰巾着のギリ野だ。

シンナーをギってくることが得意なことから、パン中連中から重

宝がられてるゴミ男だ。

勿論ダニ森にも重宝がられている。

ダニ森が握ってるホースの先から勢い良く水が噴き出る。

「亀吉。頭を甲羅に引っ込めるなよな。皮被っているから大丈夫だろう、水ぐれえよう」

ダニ森がにやけ面で辛かった。

「三森君、それ最高！」ギリ野のおべんちやらが続く。

「勘弁してください、三森さん」

亀吉は媚びと恐怖が混じった声で許しを請うた。

「亀、テメーが悪いだろうが。テメーが転けたから、アンパンが零れちまっただよ。本当ならボコるところだけどよう。おれ優しいから、水攻めの刑で勘弁してやってんだぞ。感謝しろよな」

——それともボコられてえのか？

ダニ森が凄むと、亀吉は黙りこくった。

？うぜえ？

おれはズボンから息子を取り出すと、ダニ森にむかって小便を垂れた。

息子はよほど我慢していたらしく、小便は勢いよく迸った。

ダニ森の学ランがみると黄色く濡れていった。

「——舞島テメーなにやってんだよ！」

小便塗れのダニ森が叫ぶ。

「便器にむかって小便してるだけだよ」

おれは最後の雫を振り落としながら答えた。

ダニ森はホースを捨てると、拳を振り上げ殴りかかってきた。

おれはひょいと避けると、ダニ森の顔面にカウンターパンチを叩き込んだ。

ダニ森の鼻が折れる。

「——おれの兄貴は生首の……」

ダニ森は吹き出す鼻血を抑えながら、虚勢を張った。

族の頭をやってる兄貴の名前だしやあ、なんとかなると思ってい

るらしい。

大間違いだ。

おれはダニ森の左頬に拳を放り込んだ。

ダニ森は口から折れた歯をまき散らしながら、便所の汚い床に倒れ込んだ。

起き上がってくる気配はない。どうやら歯も気も失なっちまったようだ。

「——知らねえよ。お前の兄貴なんて」

おれは気絶しているダニ森に言い捨てると、相方のギリ野をチラリと見た。

相方のギリ野は、汚水のなかに沈んでいるダニ森の歯を青い顔で見つめていた。

ギリ野は、おれの視線に気づいた。

「ヒイイイイ。勘弁してくれよ、舞島」

ギリ野は、おれに殴られると思ったのか、両手で頭を庇った。

「テメーなんかやねえよ、万引き野郎。いいから、気絶してる毛ジラミ連れて消えろ」ギリ野は言われた通りにした。

便所のなかには、おれと亀吉だけが残った。亀吉のちんぽはまだ縮み上がっていた。

「——ありがとうございます」

亀吉は泣きじゃくりながら、おれに頭を下げた。

愛想のつもりか、泣きながら笑い顔を浮かべていた。

？嫌な顔だ？

亀吉のこれまでの生き方を見るようで胸くそ悪かった。

おれは無性に腹が立ったので、亀吉の面を思い切りビンタした。

亀吉は、水浸しの便所の床に倒れた。

おれは便所を出て行った。

翌日。

亀吉は、おれのまわりをウロウロしだした。

一時間目の休みも

二時間目の休みも

三時間目の休みも

四時間目の休みも

昼休も――。

「舞島さん、これ昨日のお礼ス」

弁当を食っているおれに向かって、亀吉はコーヒー牛乳を差し出してきた。

顔を伏せているせいでどんな面してるかわからないが、亀吉の声には怯えと媚びがあった。

？ 氣にくわねえ？

おれは正義の味方じゃないが、パシリを使う趣味もなかった。

コーヒー牛乳飲みたかったら、テメーで買ってくる。

？ それにおれが好きなのは苺牛乳だ？

おれはウンザリして手を振った。

「いらねえよ、うんなもん」

亀吉はいきなり土下座した。

「舞島さん！ なんでもしますから、おれを子分にしてください」

亀吉は額を床に擦りつけた。

おれは呆れた。いきなりタメ相手に土下座する馬鹿がどこにいる。

「子分ならいらねえよ」

土下座している亀吉の顔が真っ青になった。

「――ダチならなつてやるよ。だからさん付けやめろ。気持ち悪い」

「本当スカ、直人の兄貴！」

亀吉はニキビ面を上げた。喜びのせいか、目から涙が零れていた。

「――ただし泣き入れるなよ、亀吉」

亀吉はデカイ声でハイと返事した。

放課後。ダニ森の兄貴が族の連中引き連れて乗り込んできた。使えない弟のケツを拭きに来たそつだ。

ダニ森の兄貴は、おれに向かって詫び料十万よこせと言ってきた。

一円たりとも払う気はなかった。おれは人数に頼って余裕こいてる、ダニ森の兄貴の顔面を殴り飛ばした。
当然乱闘になる。

亀吉も参加したが、ぼこすかにやられるだけで全然役に立たなかった。

——でも、泣きは入れなかった。

二年と喧嘩になったときも、三年と喧嘩になったときも、族と喧嘩になったときも、ヤー公と揉めたときも、亀吉は泣きだけは入れなかった。

いつも半べそかきながら、おれの背中にへばりついてきた。

？あの片桐と喧嘩したときでさえ、あの馬鹿は泣かなかった？

おれなんざ約束したことさえ、今の今まで忘れていたのに——。

あの馬鹿だけが律儀に覚え、約束を守っていた。

？なら最後まで守らしてやりたかった？

そろそろ落ち着いた頃か。おれは亀吉がいるはずの土手を見上げた。

夕焼けのせいでよく見えなかった。

まあいい。

外に出てる息子をしまう。

よく考えてみれば、芝居なんだから息子まで出す必要はなかったな。

おれは苦笑いを浮かべると、土手を昇っていた。

「長かったすね、兄貴」

亀吉の声は落ち着いてた。

でも、目は真っ赤に染まっていた。おれは気づかぬふりをした。

「切れが悪いだよ、おれの息子は」

おれは笑いながら嘘をついた。

「——それより亀吉。加藤の家まで競走すんぞ！」

「競走スか？」

亀吉は間抜けな顔で聞き返す。

「おう競走だよ。肉と野菜おれに寄こせ」

亀吉から肉と野菜を奪う。おれは号令をかける。

二人の馬鹿夕日にむかつて走り出した。

？道があるなら、突っ走れ？

それがどんな道であつてもだ。

五分も猛ダッシュすると、鶏小屋が見えてきた。加藤の家である。

もとは鶏小屋なので、鶏小屋のようにみえるのは仕方なかった。元鶏小屋の前に立って、亀吉を待った。

しばらくすると、亀吉が息を切らしながらゴールした。

亀吉は今にも死にそうな顔していた。

なんも考えずに走り出したけど、そっぴゃ結構距離あつたな。

「亀吉、遅すぎだぞ」

「——無理っすよ。おれ、直人兄貴より足遅いし、段ボール背負つてるすよ」

おれは泣きを入れる亀吉の太ももを蹴った。

「バー力。段ボールが重けりゃ、途中で捨てちまえばよかったんだよ。そんなもん。」

そしたら、おれの両手が塞がっているんだ。勝てたかもしれねーだらう」

「でも、これ唯姐さんの大切な——」

「全然大切じゃねーよ、こんなもん」

片桐だつたら絶対捨ててる。

てか、走り出した瞬間、おれに投げつけてくるぞ、あいつなら。

「亀吉。おれや片桐のケツを拝むのは仕方ないにしろ、オメーはヤクザやるだらう。簡単に人のケツ追っかけるな。安く見られんぞ」

堅気なら、段ボールを背負って一生懸命走るべきだ。

でもヤクザなら段ボール捨ててでも、勝負に勝たなきゃいけない。弱いヤクザなんざ、鼻くそ以下なんだから。

「おれのために……」

亀吉は絶句した後「——ありがとうございます、直人兄貴」

深々と頭を下げた。それだけならまだしも、

亀吉の馬鹿。また涙ぐんでやがる。

おれは亀吉の頭を叩いた。

「いちいち頭さげるな」

「すんま——」で、亀吉の口は止まった。

「——簡単に謝らないすよね」

「そつだよ」

？人に謝らない生き方は辛いぞ、亀吉？

「——亀吉。加藤の家ですき焼き食ってくか？」

「ありがとうございます。でも、遠慮しておきます」

「遠慮すんな。肉と野菜なら腐るほどあるんだから」

「——いや、そのう。なんかわかんないスけど、おれが唯姐さんの家の敷居またいじやいけないような気がするんです」

つまらないことに拘りやがる。でも——

「………そつか。なら、片桐の家で落ち合うか」正論のよ
うな気がした。

亀吉は段ボール箱そつと地面に置くと、加藤の家から去っていた。

幸福な食卓

盗られるもんなんて何もないのに、玄関の鍵は閉まっていた。
？鍵かけたって無駄だろう？

加藤の家は、家と言っても鶏小屋を改造して造った掘っ建て小屋である。

入りたければ、壁でも蹴っ飛ばせば簡単に穴が空く。

二、三回蹴飛ばせば、人が入れるぐらいの穴があくだろう。

泥棒に同情されそうな加藤の家に入りたがる奴なんて、借金取りぐらいしかないだろうが。

「おい加藤。玄関開けてくれ」

インターホンなんて洒落たモンはないので、怒鳴った。

「——舞島？ 今開けるから」

どたどたと走る音がしたあと、玄関の扉が開いた。

加藤が顔を出した。

加藤の顔に妙な違和感を感じた。

いつもあるのに、ないようなそんな違和感だ。

「早かったわね、舞島。それに凄く汗をかいてるけどどうかしたの？」

「お前の家に早く来たかっただよ」

亀吉の話を持ち出すと面倒くさくなりそうなので、適当なことをふかす。

「・・・・・・・・そう」

加藤の顔が赤らんだ。

まだ熱が冷めてないだろうか？

「ところで大丈夫なのか、体のほうは？」 おれは心配になって

尋ねた。

「うん。家でゴロゴロしながらテレビ見てたら治った」

「——そうか。丈夫でよかったな、加藤」

？踏ん張れよ、加藤？

「人を超合金みたいに言わな——」

加藤の言葉は止まった。加藤のスカートが派手に捲れたからだ。黒いパンツが丸見えだった。

「黒パンだ！ ババアが色気づいて黒パンはいてるぞ！」

加藤家の長男である桂太が大声でからかう。

まだ小学五年生だからやんちゃ盛りである。

「こらあ！ 桂太。梅干し食らわすよ！」

「もう食らわしてるじゃねーかよ！ 黒パンババア！」

桂太の言つとおり、加藤の両拳は桂太の頭をがっちり挟んでいた。

加藤は容赦なく拳をぐりぐりと擦りつける。

桂太は悲鳴を上げた。

「加藤。もう放してやれよ。それより何で黒いパンツなんか履いてるだ？ 今日

は黒パン記念日か？」

「——そんな変な記念日あるわけないでしょう！」

加藤が怒鳴ると、拘束がゆるまったのか桂太はすかさず脱出して、居間に逃げ込んでいた。

「あの野郎！」加藤は地団駄をふんだ。

「桂太も相変わらず馬鹿だな。姉ちゃんのスカートなんか捲ったって、なんも楽しくないだろうに」

「学校でスカートめくりが流行ってるのよ」

加藤の声には怒気が残っていた。余程黒パンを見られたのが恥ずかしいらしい。

だったら履かなきゃいいのに。おれは玄関脇に段ボールを置いた。

「加藤。全部やっておいたぞ」

「ありがとう舞島」

「礼なら、おれじゃなくクラスの連中にいえ」

おれ等のやった量など、四分の一にも満たない。

「クラスの連中って？」

「手伝ってくれたんだよ」

嫌々で、しかも強制だけど。

「うちのクラスの連中も、良いところあるのね」

加藤は完全に勘違いして、クラスメイトの友情に感動していた。勘違いも甚だしいが、面倒くさいから正さずにおくことにした。

「ところでそのお肉と野菜は？」

「片桐のおごりだよ」

「なんで片桐が？」

加藤は怪訝な顔を浮かべた。

「あいつなりの仲直りのサインだよ。色々言いたいことあるかもしれないけど、

金は肉に化けちまったんだ。全部喰おうぜ」

——うん。加藤は納得できない顔だが、それでも頷いた。

おれは家に上がりこみ、居間の引き戸を開けた。

「わあ！」

引き戸の影から、いきなり声がした。

びつくりして固まると「引つかかった直兄い！」

引き戸の影には、三女の絵里花が隠れていた。

可愛らしい顔しているが、加藤家では一番生意気な性格をしている。

「なんだよ、びつくりさせやがって」

おれは肉と野菜を畳の上に置くと、絵里花の脇の下をくすぐってやった。

「ちよつ、直兄いダメ。私もう女なんだから、そんなに気軽にさわちやあだめえ！」

ゲラゲラ笑いながらも絵里花は叫ぶ。

「そういう言葉は、熊のパンツ卒業してからいえ」

姉ちゃんみたいに黒パン履かれるのも困るけど。

「直兄いのエツチ。絵里花のスカート覗かないでよ」

絵里花はハムスターのように頬膨らませ、むくれた。

「あんなに足をバタバタさせりゃあ嫌でも見えるよ」

おれはそれだけ言うと、部屋の隅を目をやった。

借金取りが突き刺していった包丁（おれはエクスカリバーと呼んでいる）の

となりに幼稚園ぐらいのおかっぱ頭の女の子と男の子がいた。

？あれが新しくきたチビか？

新しいチビ以外にも、珍しい人物がちやぶ台の前に座っていた。

「黒田じゃねえか。なんでお前が加藤の家にいるんだ？」

見栄っ張りな加藤は、貧乏くさい我が家に客を呼ぶことは滅多になかった。

「いや、ちよつと用があつて。加藤さんのお見舞いもしたかつたしね」

黒田の横にはスイカとペットボトルのジュースが置いてあった。
実用的な見舞い品だ。黒田らしい。

「それより相変わらず賑やかな登場だな、舞島」

「おれが賑やかなんじゃないよ。加藤の家が賑やかなんだよ」

「——そうかもな」

黒田はちやぶ台の上のコーヒーを啜った。その姿が妙におっさんくさい。

おれは黒田の隣に腰を下ろした。

黒田清春とおれは中学時代からのダチで、きちんと二つに分かれた髪型と、校則

通りの制服でわかるように、根っからの真面目小僧だ。

おれから見れば勉強もできる。

だが受験に大失敗して、高校はおれと同じタマカスに通うことになってしまった。

真面目かつ地味に生きることを信条にしていた黒田にとって、バ

力か、いかれた

バカしかないタマカスでの日々は衝撃的だったらしく、白髪がやたらと増えた。

タマカスなんかで生徒会長やったのも白髪を増やす原因かもしれない。

なにせ黒田が演説している最中、シンナーの入った空き缶を投げつけてくるような学校な

んだから……。

「舞島、なに飲む？」

台所から加藤が尋ねた。

「水でいい」

「絵里花はオレンジジュース飲みたい！」

「おれも！」桂太も続いた。

「ジュースはご飯食べた後って言ったでしょう！」

加藤の声は、怒った母ちゃんの声そっくりだった。

「チビちゃんは飲みたくないのか？」

部屋の隅っこにいる二人組にチビに水を向けた。

おれの顔を見ると、二人組のチビは恥ずかしいのか、金髪のおれが恐いのかかわか

らないが、すぐに俯いてしまった。

「釣ってみるか？」

まずは餌をゲットしないと。おれは絵里花を餌にすることにした。

「絵里花。タカイタカイしてやろうか」

「ええっ」。絵里花もう三年生だから、タカイタカイなんて恥ずかしいからいいよ」

保育園のころは喜んでいたくせに。

生意気になったもんだ。

「うるせえ。いいからタカイタカイやらせろ！」

おれは絵里花を捕まえると、タカイタカイをしてやった。

やりたくないとか言ってたくせに、抱き上げると絵里花は歓声を

あげた。

部屋の隅にいる二人のチビは、タカイタカイされる絵里花を羨ましそうに見つめた。

「釣れたか??」

「絵里花。姉ちゃんと違って軽いな」

「うん。女の子だから体重にはいつも気をつけてるもん」

「そうか。でも軽いとタカイタカイのし甲斐がないな」

「リールを巻かないとな?」

おれは絵里花を抱っこしたまんま、新参のチビたちに近づいていた。

おかっぱの女の子の前で、屈んだ。

「なあ、お兄ちゃん助けてくれないか?」

「――助ける?」

おかっぱの幼女は小首をかしげる。

「絵里花だけだと軽すぎて、空に飛んでちゃうから、おかっぱちゃんも一緒に

やってくれと、お兄ちゃん助かるだけど」

絵里花は飛んでくわけないじゃん。と言ったが、おれは無視した。

「――うん。いいよ」

「そっか。ありがとうな」

おれは絵里花とおかっぱを抱き上げ、

三、四回タカイタカイしてやる。

もつとも二人抱えてるので、足を曲げたりジャンプしているだけなのだが、それ

でも二人とも大喜びした。

「おかっぱちゃん。名前なんて言っんだ」

「久美子っていうの。直兄い」

久美子はまだおれの名を呼ぶのが恥ずかしいのか、語尾に近づくなつていた。

「そうか。弟はなんて言うんだ？」

「光輝っていうの」

おれは床に膝をついた。

「光輝。お姉ちゃんと一緒にやるか」

光輝は、おれの顔と久美子の顔を交互に見た後、頷いた。おれは
絵里花を下ろ

し、光輝を抱き上げた。

「よし、あげるぞ」

二人して歓声を上げる。

「直兄い、絵里花も」

絵里花はおれの学ランを引つ張った。

「やる前は嫌がつてたくせに？」

おれは心のなかで苦笑いした。

「絵里花はさっきやったばつかしだろう」

「それでも絵里花はやりたいの」

「そうか。じゃあ、久美子に順番譲つててお願いしろ」

「久美ちゃん、わたしに順番ゆずって」

「うん」

久美は小声で頷いた。

おれは久美子を下ろし、変わりに絵里花を抱き上げた。

「絵里花。光輝が落ちちゃわないように、手をしっかり握ってやりな」

絵里花はウンと頷くと、「光輝、絵里花が手握つてあげるね」と
言った。

光輝はおずおずと、絵里花は無造作に、手を握りあつた。

おれは二人を高く舞あげた。

この後、いい年こいて桂太もやってくれと言い出したので、桂太
も混ぜてやった。

さすがのおれも体のでかい桂太が混ざると、辛くなってきた。

「チビ達。いいかげん舞島離しなさい。舞島だって、一応お客さ

「なんだから」

「一応かよ？」

「なんだよ、うるせえなあ。ホクロババアは黙ってるよな！」
年中反抗期の桂太が、怒鳴り返した。

「——なんですって！」

加藤はまなじりを上げ、戦闘態勢に入ろうとする。

ふと、加藤の右目にある泣き黒子が目に入る。

普段なら眼鏡に隠れて見えない。

「——加藤。珍しいなあ。お前が眼鏡かけてないなんて」

何故かは知らないが、加藤は眼鏡をかけてなかった。そういえば
玄関で加藤見た

ときも、なんか引っかけたが、眼鏡をかけてなかったからか。

加藤の顔なんて見飽きてるので気づかなかった。

眼鏡をかけてないと加藤は、けっこう色ぽかった。

？いつもはたんなる眼鏡だからな？

「加藤。お前も眼鏡外すと、結構可愛いなあ」素直な感想を口に
した。

「えっ……」

暫しの沈黙の後。

「あつ、ありがとう、舞島」

加藤は真っ赤な顔で答えた。

「黒子ババアが色気づいた！」桂太が囁す。

「——桂太！」

加藤に睨まれると、桂太は素早くおれの背中に隠れ、姉にむかっ
て舌を出してた。

「——桂太あとで覚えてなさいよ」

加藤が怒りのあまりプルプルし始めたとき、玄関でドアが開く音
がした。

「恵か??」

居間の扉が開いた。加藤家の知恵袋である次女の恵が、トレード

マークの三つ編

みを揺らしながら、茶の間に上がりこんできた。

小脇には本を抱えている。

「ただいま」

恵は愛想のない声で挨拶をした。

別に機嫌が悪いわけではない。加藤恵という女は機嫌が良からうが悪からうが、

無愛想な女なのだ。

恵の顔を見ると、黒田は戸惑いの色を何か言おうとしたが黙った。

黒田は昔か

ら、この無愛想な小娘が苦手であつた。

「おつ、帰ってきたか無愛想女」

おれは苦手ではなかつた。

「いきなりご挨拶ですね、直人さん」

恵の声には棘があつた。機嫌を悪くしたらしい。

「拗ねるな。お前だつて化粧して愛想良く笑えば可愛いよ」

「大きなお世話です。だいたい校則で化粧は禁じられています！」

「わかつた、わかつた。そう怒鳴るなよ。ところで何の本を読んでいるだ？」

おれは恵の機嫌をとるため、本の話題をふつた。

「文芸部の文集ですよ。市の図書館で借りてきたんです」

「文芸部って、恵の学校のか？」

「違います。毎年こちら辺一帯の文芸部が夏になると文集を収めるですよ。今年は

わたしも書かないといけないので、参考にするために借りてきたです」

「素人が書いたんだろ。面白いのかそんなもん？」

「駄作も多いですが、稀に面白いのもありますよ。向日葵の咲く丘は面白かつたです」

「どういうストーリーだ？ ランボーみたいな出てくるのか？」

「——直人さんはアクション要素がないと、本を読まないのですか？」

「有ったって滅多に読まねーよ」

「本は、心の栄養です。直人さんも少しは読んだほうがいいですよ。なんでしたら今度

一緒に図書館行きましょうか？」

「クーラーが壊れたら考えてみるよ」

図書館なんて涼みに行くぐらいしか用事がない。

「直人さんは相変わらずですね。ところで、直人さん。今日はど
ういう風の吹き回しなんですか。すき焼きのお肉なんてもってきて
すき焼きという言葉が出た途端、チビ共はざわめきだした。

「どうしておれが持ってきたってわかるだよ。黒田かもしれない
だろう？」

「肉の量ですよ。黒田さんならごく常識的な量を持ってくるでし
ょうけど、台

所にあつたお肉もの凄い量でしたから、絶対直人さんだと思いまし
た」

恵は冷静に指摘した。可愛くないガキだ。

「直人！ すき焼きってマジかよ」

桂太が驚きの声を上げる。

「アフリカの飢えた子供みたいな目だな？」

「おう。マジだぞ」

おれが答えた途端、チビ共は一斉に万歳した。

「やったあ」

桂太が喜びの声を上げる。

「今日すき焼きなら、恵ネエが釣ってきた鯉どうするの？」

絵里花は唇に指を当てながら質問した。

絵里花の言葉を聞いて、黒田が引いていた。

無理もない。

「今どき、川で鯉捕まえてきて食う家なんて、加藤の家ぐらいな

もんだ？

「鯉なんかタライに入れっぱなしにしとけよ。すき焼きの残りで三日は持つぞ」

桂太は言った。鯉は台所から、庭のタライに移された。

「——うんじゃあ、すき焼き作るとするか。加藤、エプロンあるか？」

「舞島が作るの？」

「おれが作るよ。子守りのついでだ。お前はテレビでも見てろ」

「そこまですて貰わなくても大丈夫よ」

「いいから加藤はゴロゴロしてろよ。だいたいお前すき焼きの作り方知ってるのかよ？」

「醤油で煮とけばいいじゃないの？」加藤は平然と宣った。

貧乏生活が長いせいか、加藤の料理に対する関心は、値段と楽に作れるか、この

二つしかない。味にはまったく関心がなかった。

「まあ、おれに任せとけ」

おれは加藤を押しやると「恵、福引きで当てたガスコンロあるだろう。あれまだあるか？」

恵はこくりと頷いた。

「なら用意しておいてくれ。おれは肉と野菜を切るから」

おれが台所に立つと、チビどももついてきた。

「直兄い、絵里花も手伝う」

「久美も手伝っていい？」

二人のチビが立候補してきた。久美子の背中には光輝が隠れていた。

「さて何やらせるか？」

「そうか。なら絵里花は野菜洗ってくれ」

絵里花は、わかったと返事すると野菜を洗い始めた。

「久美子と光輝は、椎茸のへたをちぎってくれ」

おれは二人に椎茸のへたをちぎって見せた。

二人とも見よう見まねでやり始める。

「おれは？」桂太は尋ねた。

特にない。

「――桂太か。お前はすき焼きの歌でも歌ってテンション上げとけ」

「なんだよ、すき焼きの歌って！」

「頭ついてるだから適当に考えろ」

おれが突き放すと、桂太は考え込みはじめた。

おれはまな板に肉の塊を置いた。

かなりデカイ。安さを追求した結果、肉は切れてないブロック肉になったからだ。

「うおおおおおおおおおお！。なんだよこの肉。マンモスかよ」

桂太が雄叫びを上げた。

「マンモス死んじゃっただから、象の肉に決まってるじゃん。ねえ、直兄い？」

絵里花は同意を求めてきた。

「ああ。正確に言うとなウマン象の肉だ」

おれは適当なことをふかしておいた。

ナウマン象に興奮したのか、桂太が歌を歌い出した。

おれん家のすき焼き肉は、ナウマン象

とにかくでっかい

食べるのに三日かかるほどでっかい

とにかく美味しい

鯉より美味しい

給食のカレーより美味しい

全部食うぞ、おう！

小学生らしい、欲望に満ちた歌だった。

おれは桂太の歌を聞きながら、肉を切り始めた。

小一時間ほどして、大量の肉と野菜が大皿に盛られた。

割り下も作った。

完成したすき焼きを茶の間に運ぶ。

ちゃぶ台には、ジューズのペットボトルとどんぶり飯が乗っかていた。

「——ビールねえの？」

ジューズでは物足りない。

「舞島。僕等はまだ高校生だろう。ビールなんて百年早いよ」

黒田は真面目くさった顔で言った。

とても同じタマカスに通つてるとは思えん

「——入る高校間違えたな、黒田」

「——それを言うな。舞島」

黒田は苦虫を噛みつぶした。

おれは肉の脂身を使って油を引くと、肉を軽く焼いた。肉の上に割り下をかける。

肉と甘い醤油の匂いが混じり合い、食欲を刺激した。

おれは焼くのに時間がかかるネギと白菜を投入した。

桂太と絵里花が、すかさず箸を伸ばした。

加藤は二人を制した。

「——コラッ、まだ煮えてないでしょう。それにまだ頂きます、言っでないでしょう」

「よし、頂きます。すんぞ」

おれが音頭を取り、頂きますと言うと、鍋に向かって一斉に箸が伸びた。

加藤と桂太の箸が同じ肉を掴んだ。

「なんだよ、唯姉え。まだ煮えてないじゃないのかよ」桂太が文句をつける。

「お姉ちゃんとは病気で体が弱ってるから、お肉を食べて体力つけないといけない」

の！」 加藤が肉を奪い取りながら言い返す。

絵里花はその隙に他の肉を箸でつまんだ。

「ナウマン美味しい！」

絵里花が幸せを噛みしめる。

久美子も光輝も遠慮しながらも箸を伸ばした。

おれも肉をつまんだ。

肉屋の特売品をさらに値切った肉のわりには旨かった。

すぐ肉がなくなる。

桂太と絵里花がわめき出す。

「今、肉入ってるから少し持ちなさい」

鍋に肉を放り込んでいる恵が、二人を叱った。

桂太と絵里花がブうたれる。

文句を言っていないのは、おれの隣にいる久美子と光輝だけだった。

二人の取り皿に入ってるのは卵だけだった。

卑しく遅しい加藤家ノリについて行けないようだ。

おれは自分の肉を箸で二つに千切った。

「久美子、光輝。ナウマンの肉だぞ」

二人の取り皿にナウマン肉を放り込んでやった。

「直兄い。久美子ばかりずるい。絵里花も肉頂戴！」

絵里花が唇をタコにして抗議する。

「待ってる。つぎ煮えたらやるから」

「いいよ、絵里花自分で取るから。だからね、直兄いの隣に座っ

ていい？」

おれの隣に座っていた加藤が青筋を浮かべた。

「絵里花、あんたいい加減にしなさいよ！」

「お姉ちゃんはいいいじゃん。いつも学校で直兄いと一緒なんだか

ら。絵里花はた

まにしか会えないだから。ねえ、直兄い？」

絵里花は笑顔を振りまきながら、おれに同意を求めた。

おれは加藤が隣でも絵里花が隣でも、どっちでも良かった。

「——加藤。席ぐらいいじゃねーか。どこでも」

「——まあ。いいんだけどさ」

加藤は頬を膨らませるふて腐れると、絵里花に席を譲った。

「絵里花が直兄いのナウマン肉取ってあげるから、直兄いは久美とミツの肉とつ

てあげなよ」

絵里花はすでにミツ呼ばわりだった。

まああだ名で呼ぶのは、仲良くなってきた証拠だから別にいいだけだ。

「——そうだな。そうするか」

絵里花は生煮えの肉を、おれの取り皿に放り込んできた。

——一時間後。大量の肉を食って満足したチビどもは、ボロテレビに嚙りつきながら、デザートのスイカを食っていた。

「——黒田。ところで加藤の家なんかは何しにきたの？」

黒田は、何故か一瞬狼狽えたが、すぐ元の表情に戻った。

「——いや。お見舞いだよ、加藤さんの」

「そうか。お前も物好きだな。加藤なんざ、叩いたって壊れないぞ」

「——大きなお世話よ」加藤はスイカを食べながらブウたれた。

台所から、恵がお盆に湯飲みと二つの急須を載せて出てきた。

恵は黙って、欠けた茶碗をちゃぶ台に置き、茶を注いだ。

おれの茶だけは、別の急須で入れた。

みんなの茶は湯気が立っていたが、おれの茶だけは湯気が立っていないかった。

おれは茶を飲んだ。茶は温かった。

「——恵。よく覚えてたな、おれが温い茶が好きだって」

「あれだけ熱い、熱いと文句言われたら、誰だって覚えます」
恵は無愛想な顔で答えた。

「もうちつと愛想よくしろ？」と思ったが口には出さなかった。
恵は勉強が出来るせい、頭の回転が速く、口もよく回る。
へたなことを言つと、十倍ぐらい辛辣な言葉で返ってくる。

だからあまり余計な言葉を言わないほう利口だった。

「ところで舞島、片桐と喧嘩したんだって？」黒田は言った。

「喧嘩？ あんなもん喧嘩のうちに入らねーよ」

片桐と喧嘩したら、それは喧嘩ではなく、殺し合いだ。

「——舞島の友達を悪く言うのは気が引けるが、片桐には気をつけるよ」

ヤクザなんだから。黒田はそう付け加えたかったんだろうが、茶と一緒にその言葉

を呑み込んだ。

「——ありがとうよ、黒田。心配してくれて」

黒田の心遣いが素直に嬉しかった。

黒田は、おれの言葉を聞くと、顔を赤くした。照れたらしい。

「ところで舞島。進路どうするんだ？」

黒田は照れを誤魔化すためか、話題を変えた。

「進路って、就職に決まってるだろうが」

「だからその就職先だよ。ヤクザやらないなら、本気で進路を考えないとな」

黒田は真面目な顔で言った。

「お前はおれの親父か」

「もつともおれの親父はそんなこと言わないが？アメリカで遊びほうけてる親父

の顔が横切った。

「茶化すな、こつちは本気で心配しているんだから」

「黒田はどうすんだよ？」

おれは話を逸らした。

「推薦もらって大学狙う」

「推薦もらわねーと、ウチじゃ大学受からないもんな」

うちの高校は創立以来、推薦以外で大学に行ったやつは一人もいなかった。

「加藤は？」

「バイト先の店長から正社員にならないかって誘われているけど、奨学生になれ

るなら簿記の専門学校通うかもしれない。資格を取っておけば潰しが利くしね」

「専門学校か。なら黒田に頼めば一発じゃねーか」

黒田の父親は専門学校のグループを経営している。黒田は結構なボンボンなのだ。

「ばーか。そんなこと頼めるわけないでしょう」

「お前の色気じゃ、黒田も首を縦に振らないもんな」

「――加藤さんに失礼だぞ、舞島」

加藤ではなく、何故か黒田が噛みついてきた。

？なにムキになってんだ、こいつ？

加藤がムキになるのならば話はわかるが。

「冗談だよ、黒田。しかし、みんな考えてるだな」

おれだけかよ、考えてないの。

加藤は温い茶を口に含んだ。

「この時期になってなんも考えてないの、舞島だけよ」
返す言葉もない。

おれは温い茶を啜った。

「舞島。専門学校も視野に入れて考えてみたらどうだ」黒田は言った。

「専門学校だあ？」

「大学進学は現実的じゃないにしろ、専門学校なら、今から勉強すれば舞島でもなんとかなるよ」

「専門学校ねえ……」

おれは考え込んだ。専門学校に通っている自分を。

自分が真面目な顔して、机に向かっていている姿が想像できない。

「なんかピンとこねえな」

「パンフレット見れば少しはピンとくるんじゃないか」

黒田は鞆から、専門学校のパンフレットの束を取り出した。

勿論、黒田グループのヤツだ。

「お前はセールスマンか」

おれが呆れると、「普段は持ち歩いてないよ。今日は加藤さんに頼まれて持ってきたんだ」

黒田は嫌そうな顔でそう言うと、パンフレットの束をおれに渡した。

ペラペラとパンフレットを捲ってみる。

もの凄い数字を発見した。

「おい、黒田！」

「なんだ舞島」

「これ凄くねえか。就職率が100%超えてんぞ」

おれは感心しながら、アニメ専門学校のパンフレットを指さした。パンフレットには就職率120%とデカデカと書いてあった。

ほかのところは90%程度なのに、アニメの専門学校だけは100%を超えている。

最近のオタクは半端じゃないと言うし、不景気の波を乗り切るにはアニメしかない。

「加藤ここにしろよ。アニメーターとか声優とかいろいろあんぞ」
ほかにもシナリオ科、キャラクターデザイン科、なにをやるのか、おれにはさっ

ぱりわからないが選り取り見取りだった。

「——絶対いや」せっかく選んでやったのに、加藤はつれなかつ

た。

「なんでだよ。就職率120%だぞ。この不景気な世の中に、インチキでもしねえかぎり、こんな数字だせねーぞ」

「――舞島。そこはアレだ。うちのグループでも特殊なところなんだ」

黒田の声は心なしに冴えない。

「まあ、そうだろうな。アニメで喰ってるやつなんておれの周りに一人もいない

し。加藤がその第一号になってこいよ」

姉のかわりに妹が答えた。

「直人さん。唯姉さんはオタクじゃないし、直人さんもオタクじゃないでしょ

う。アニメの専門学校は夢を追う人が入学する所なの。そういう人じゃないと、入学できないし、就職率120%達成できないです」

そうでしょう、黒田さん。恵は黒田に同意を求めた。

黒田はホッとした顔で「そうなんだよ、舞島」と言った。

「――そうか。言われてみればそうかもしれないな」

次行くか、次。おれはアニメの専門学校のパンフレットを放り投げた。

「おつ、調理師だつてよ。加藤ここにしろよ。花嫁修業にもなんぞ」

「大きなお世話よ！ だいたいさつきからなんで私の学校を探してるのよ。舞島

の話しているでしょう！」

加藤が切れた。

「――いや、ついノリで加藤の探しちゃった。よし、おれに合いそうなヤツを探してくれ」

おれは気を取り直して、自分の進学先を探すことにした。

みんなしてパンフレットを読み始める。

「舞島の性格からして、パソコン系はダメね」

加藤はそう言って、情報処理系の専門学校を横に置いた。

「舞島はどう見ても公務員で顔じゃないしな。成績からしても絶望的だし」

黒田は公務員の専門学校を横に置いた。

「観光系も無理ね。直人さんインチキ外人だから、英語喋れないし」

恵は観光系の専門学校を横に置いた。

パンフレットの束がみるみる薄くなっていく。

「おい。これだけあるのに、おれに合う専門学校は一つもないのか？」

専門学校に通う気などあまりないが、それでも自分の選択肢が薄くなっていくの

は面白くなかった。

「黒田のグループも大したことないな」

「舞島が社会不適合者なだけだよ」

おれの顔すら見ず、黒田は言い返した。

何か言い返そうとしたその時――

「直人さん、保育士とか介護系の学校はどうですか？」恵が声をあげた。

「介護系？」

考えたことすらなかった。

「ガキとか爺さんとパラリンピックにでてるようなの連中を世話するやつか？」

「障がい児や高齢者や肢体不自由な人を介護をするやつです」

恵は言い直した。

「――タマカスのおれが？」

弱い者を見たら殴れ。

弱肉強食を地でいくタマカスで生きてるおれが弱い者の世話をす

る。

「なんか違うねーか？」

北斗の拳でたとえると、モヒカンが子供の世話するようなもんだぞ。

「そうですか。結構あうような気がしますよ、直人さんなら」

そうかな。いまいち納得できなかった。

しかし恵のヤツは年の割には、人をよく見てるしな。

おれには隠れた才能があるのかもしれない。

「——合ってるかも。舞島、人の世話焼くの好きだし」

姉も妹の意見に同意した。

「おれが世話好き？」

はじめて聞いた。

「舞島は世話好きよ。亀だって片桐だって、普通の人なら見て見ぬふりするもの」

「亀吉はともかく。片桐なんざ大喧嘩しただけじゃねーか」

喧嘩というより殺し合いだったけど。

「でも片桐がチンピラに掠られたとき、助けに行ったの舞島だけでしょう」

加藤はつまらない言い出した。

「ありゃあ、ただ単に喧嘩のけりがついてねえから、ケリをつけに行っただけだよ」

じゃなかったら行かねーよ。おれは付け足した。

「普通の人はそんな理由で、チンピラの巣に飛び込んでいかないわよ」

「そうか？」

「そうよ」

それまで黙っていた黒田が口を開いた。

「すき焼き作っている舞島を見ると、子供の世話も得意そうだしな。結構いい」

じゃないか、舞島」

「子供の世話は、ボーイスカウトしてたときの癖だよ」

「舞島、ボーイスカウトやってたの？」

加藤が驚いた顔で言った。

「やってたよ。下のガキンちよどもの世話を良くやらされたよ。

面倒くせえこと

も色々あったが、山やら海やら行けたから面白かったよ」

高原、山登り、海水浴、いろいろ行っただけ。おれボーイスカウト活動に参加しにくってたからな。

「たしか少年野球と古武道の道場も通っていたんだよね、舞島って」黒田は言った。

「よく覚えてるな。通ってたよ」

「よく体が持つわね」

加藤はおれの頑丈さに呆れた。

「お前だって、ガキの頃から働いてただろう」おれは言い返した。
「直人さん、ひよっとしたら少年野球や古武道の道場でも、下の子供の世話とか

してませんでした？」恵が尋ねた。

「——言われてみれば、少年野球はおれがキャプテンだったし、古武道の方は、中

学のととき幼児部の指導員やってたな」

古武道の幼児部は、ジジイにむりやりやらされたんだけど。

「舞島、十分世話好きじゃないか」

黒田は呆れた。

「馬鹿言っな。たまたまだよ。たまたま」

「たまたまだって、普通やらないよ。そんなに。だいたい舞島は、なんでさっき

から自分が世話好きだということ否定するだよ」

世話好きで、良いじゃないか。黒田は念を押すように、言葉を重ねた。

「いや、だつて自分が世話好きだと思つたこと、一度もないからな。なんか違和感感じるだよ」

それにどうも他人から言われると否定したくなる。
まあ、ようはおれが天の邪鬼だつてことだ。

「意外と自分の性格つて、自分じゃわからないもんな」
黒田は勝手に、人の性格を決めつけた。

なにか黒田に言つてやろうとしたその時、機制を制するかのよう
に、恵が口を開いた。

「一つ聞いていいですか、直人さん」恵は改まった顔で尋ねる。

「なんだ、恵」

「それだけ色々と活動してたら、後輩の女の子からラブレターと
か貰つたりしま
せんでしたか？」

「ああ、貰つたよ。ボーイスカウトのときは下の子とかから、タ
メからも貰つたな」

「どれぐらい貰つたんですか？」

恵は、おれの顔を見据えた。おれは思い返してみる。

「――数えたことないけど、山にはなつたな」

「山！」

みんな一斉に驚きの声をあげた。

「うんなに驚くなよ。恥ずかしいだろう」

急に照れくさくなった。

「驚くつて。リアルで、ラブレター山ほど貰つた男はじめて見た
もの」加藤は言つた。

「うんなことねーよ。黒田だつて貰つたろう」

「――一枚も貰つたことないよ」

黒田はブスとした顔で答えた。

「マジで？」

「マジだ、舞島」

黒田の顔は真剣そのものだった。

「人間生きてりゃ、ラブレター一枚ぐらいもらうだろう」

おれは信じられなかった。

世の中の半分は女なんだから。

「それ以上追い打ちかけるなら、友達辞めるぞ舞島」

黒田は、静かに怒っていた。

「やばい？」

黒田は怒ると、グジグジうるさい。しかも長い。

「まあ、あれだ。小学生ときは、一生に一度のモテ期だったんだよ」

おれは慌てて黒田をフォローした。

「中学生のときは貰わなかったですか？」

恵がまた質問してきた。

「貰ってたわよ、舞島は」

忌々しげに加藤が答える。

「なんでお前が知っているだよ！」

「あんだけ貰ってれば、猫だつて気づくわよ」

何だか知らないが、加藤は苛ついていた。

「道場では？」恵はしつこかった。

「道場？ 園児の子からも貰ったなそういや。後、お母さんから貰った」

「中学生で人妻！」

おれを除く全員が声を驚きの上げた。

「デカイ声だすな！ 単純にからかわれただけだよ」

「——絶対本気でしたよ、直人さん」

恵は冷たい目で、おれを睨んだ。

「本気って——。考えすぎだよ。だいたい本気だったら、不倫じやねーか。旦那さんがいるんだし」

「直人さん、不倫はNGなんですか？」

「NGに決まっているだろう。人の女に手を出すほど、おれは趣味が悪くねえよ。」

「だいたい、ガキが可哀想だろうが。母ちゃんが金髪の若い男を家に連れてきたら」

「——直人さんって、そういう所はモラリストなんですね」恵はつまらない本の感想を述べるように言った。

「おれをなんだっと思っていたんだ、恵の奴は？」

「——どうだか。人からお金借りてソープ行く男が、モラリストとは到底思えないんだけど、私は」

加藤は冷やかな目で睨んだ。

「——あの時、血相かえてお金を借りにきたのはそういうわけだったですか」

恵は冷静に過去をふり返ると、一言。

「——最低ですね、直人さん」

「おい、最低はねえだろう。男にはどうしても断れねえ付き合いもあるだよ、なあ黒田」

男の黒田ならわかつてくれるはずだ。

「最低だな、舞島」

黒田は男の癖に、女の味方をした。

その後も弁明を試みるが、女どもの冷やかさは増すばかりだった。

仕方がないので、黙って醒めた茶をちびちび飲んでいると、恵が口を開いた。

「で、直人さん。どうするつもりなんですか？」

「どうするつもりって？」

「進学の事です。いくら専門学校とはいえ、勉強しないと入れ

ませんよ。直人

さんの頭なら、今から猛勉強しないと間に合いません」

「猛勉強ね……」

一発で気が萎えた。

「まだ進学すると決めたわけじゃないし、もう少し考えるわ」

今の正直な気分だった。

「……そうですか。気が変わったら、私に言ってください。直人さんな

らタダで勉強見てあげますよ」

恵はやや視線を下に落としながら、早口で言った。

「なんだよ、タダかよ。悪いな、恵」

受験勉強もあるのに、おれ見たいな馬鹿にタダで勉強教えるなんて、友達にノー

トを貸すにも金を取る恵にしては物好きな行動である。

「——いいんです。直人さんには、インフルエンザのときお世話になりましたから」

「インフルエンザって、お前知っていたのか」恵は黙って頷いた。

「——あん時は焦ったよな、加藤」おれは過去を思い返した。

「たしかに焦ったわ、あんなときは」

おれと加藤は顔を見合わせ、頷き合った。

「インフルエンザって、恵君になにかあったのか？」

事情を知らない黒田が問う。

「たいした話じゃねえよ。昔、恵がインフルエンザで倒れたとき、おれが背負っ

て病院まで走っていただけのことよ」

「病院って、どこの？」

「八千代だけど」

「……八千代って、ここから十キロぐらい離れているぞ」
黒田は驚きの声を上げた後、「よく走れたな」と言った。

「ああ、たしかにあんなときは疲れたな。恵は死にそんな面でハア

ハア言うから、

おれもあせつてダッシュしたもんな」

「——ひよつとして全部走ったのか、舞島」

「うん。軽い恵だからなんとかあった。あれがクソ重たい加藤だったら、途中の

田んぼで放り捨てたな」

おれは大笑いした。

「そんなに重くないわよ、わたしは」

加藤がブスくれる。

「どうして救急車を呼ばなかったんだ、舞島？」

「ああ、そんな時たまたま救急車が出払っていて、緊急隊員の兄ちゃん着急いでる

なら病院までタクシーで行ってくれて言われてさ。まさか緊急隊員の兄ちゃん

も、加藤の家がチャリンコもないような貧乏な家だとは思わなかったんだろうよう」

「——自転車ぐらい、今ならあるわよ」

加藤が横目でおれのことを睨んだ。

「——まあ、加藤さん落ち着いて」

黒田が加藤をなだめた。

「舞島も口が過ぎるぞ」黒田は小声でおれを叱った。

「——直人さん」恵は思い詰めたような声を出した。

「なんだ？」

「なんで黙っていたですか。姉さんや桂太にも口止めして」

——言ってくればお礼の一つくらい言ったのに。今にも消えてしまいそうな声で、

恵は呟いた。

「……そんな照れくさいこと言えるかよ」

本当の理由は違った。全部加藤がやったことにしといた方が、恵も早く、加藤と

打ち解けるような気がしたからだ。

あの頃はまだ一緒に住みはじめたばかりで、お互いギクシャクしていて、姉妹には見えなかった。

「それにしても何でおれが運んだって気づいただよ」
意識が朦朧としてたから、憶えてないはずなんだが。

「この前風邪引いて、病院に行ったとき、担当の先生が言ってくれたですよ。あ

の時、君を背負ってきた金髪のお兄ちゃんは元気かね？、って」

「医者って、あのヨボヨボの爺さんか」
まだ医者やっていたのか。

「その人です」

「——お喋りな爺さんだ」

「とにかくあの時はありがとう御座いました」

恵は深々と頭を下げた。

「水くさい真似すんな。恵はおれの可愛い妹分だ。何回だって運んでやるよ」

「……妹分ですか」

恵は不満げな顔で呟いた。

「なんか言ったか、恵？」

「——なんでもありません！」

恵はそれだけ言つと、顔をツンをさせてそっぽを向いた。
？なに怒ってるだ。恵のヤツだ？

頭のいい奴はなに考えてるのかわからん。

おれはふて腐れる恵をほっておくことにした。

柱の時計にふと目をやる。

柱の時計は10時を指していた。

「そろそろ帰るわ」おれは立ち上がった。

「僕も、もう遅いからお暇するよ」黒田も帰ると言い出した。
テレビを見ていたチビどもが、おれの方に寄ってきた。

「直兄い、もう行っちゃうの。テレビ見終わったら絵里花、直兄いと人生ゲー

ムをやるつもりだったのに」

絵里花がぶうたれる

「明日も来るから、そんときやろうぜ」

「直兄い、明日もくるの？」

「お前の姉ちゃんに首輪つけられちまったからな」

一万もする、高い首輪をな。

「可哀想、直兄い。絵里花が取ってあげるから屈んで」

？冗談に決まってるのに。可愛いモンだ？

生意気とはいえ、まだガキだな。

おれは心の中で苦笑しながら、屈み込んだ。

絵里花は見えない首輪にむかつて手を伸ばした。

唇に柔らかな感触が触れた。

絵里花がおれの唇にキスしたのだ。

おれが目を白黒していると、絵里花は唇を離した。

「直兄い。お仕事決まらなかったら、絵里花のお嬢さんにしてあげる」

絵里花は、おれの瞳を見つめながら言った。

テレビを夢中で見ていたくせに、おれ達の話をしつかり聞いていたようだ。

「絵里花……」加藤が絶句する。

久美子はおれを見上げていた。

「直兄い。……わたしも……」久美子は恥ずかしそうに俯いた
まま、呟いた。

「おうそうか。忘れてた」

おれは久美子を抱き上げ、唇とほっぺにキスした。

「——唯姉さんは立候補しなくていいの？」

恵が、加藤をからかう。

「——なにっ言ってるのよ」

加藤は真っ赤な顔で否定した。

「またババアが色気づいた」

桂太がからかう。加藤は思いきり桂太の頭を叩いた。

S o L e t ' s G e t T r u t h

加藤一家に見送れて、おれと黒田は外に出た。二人して土手沿いの道を歩いた。

夜が濃いせいか、加藤達の姿はあつという間に見えなくなった。おれは暇だからなにか喋ろうかと思ったが、黒田の奴が思い詰めた顔をしている

ので、黙つてることにした。

なにもやることがないので、夜空を眺めた。星空が綺麗だった。

「——なあ、舞島」

「あんだよ、黒田」おれは星空を眺めながら答えた。

「——加藤さんつて美人だよな」

突然黒田が、加藤のことを褒め始めた。おれは驚いて黒田の顔を見た。

黒田は俯きながら地面を眺めていた。

「——そうか？ おれにはたんなる眼鏡の付属品にしか見えないけどな」

「今日は眼鏡外してたろう！」

黒田はムキになって反論する。

「あんだつて言うんだよ？ 加藤の面なんかどうでもいいだろう。」

「眼鏡外してたからつて、どうなんだよ？」

「そんなこともわからないのかよ、舞島は！」黒田は怒鳴った。

「——そんなことつて？」

おれは黒田の怒りに戸惑った。

なにが言いたいというのだろう、このとつつあん坊やは。

「——なんでもない」黒田はむつつりした顔で答えた。

「なんでもなくはねえだろう。怒鳴るぐらいなんだから」

「いや忘れてくれ、舞島」

「そうか」

おれは喋るのが面倒くさくなったので、黒田の言うとおりに忘れることにした。

黒田とおれは再び無言で歩いた。なんだか気まずい。

おれは空気を変えるため、適当な話題を振ることにした。

「そついやよう、加藤つてむかし黒田が見せてくれた眼鏡女に少し似てるよな」

黒田の大好きな小説の話をつてやった。

「そうだろう！ 似てるだろう舞島！」

黒田は思いきり食いついてきた。

「加藤さんは眼鏡かけてると長門に似てるだよ」

黒田は目を輝かしながら、加藤と長門とやらがいかにも似てるか力説しはじめた。

話を振つておいて何なのだが、小説を読んでないおれには正直うざかった。

かといって喋るのを遮ると、また黒田が怒り出しそうなので適当に相づちを打った。

黒田の話は止まらない。

いい加減ウンザリしてきた。

ラブホテル街が見えてきた。

？そうだ？

「おい黒田。こつちのほうが近道だからおれはこつちからいくぞ」

おれはラブホテル街を指さした。真面目な黒田はラブホテル街が死ぬほど嫌い

なので、付いてこないと思ったのだが……。

「舞島がいくならいくよ」と黒田は気負いこんだ顔で宣言した。

「いいのかよ、おまえの嫌いなラブホテル街だぞ」おれは露骨に顔をしかめた。

「まだ話おわってないから」黒田が言い張る。

空気読んで終えるよいい加減。と心のなかで呟いた。

おれは黒田と一緒にラブホテル街に突入する。

黒田は長門から、おれの知らないほかのキャラクターに話を移した。

おれはああ、とかそうだなとか適当に相づちを打ちながら、ラブホテル街をぶらぶらと歩いた。

薄暗い路地には、人影が並んでいた。

勿論お地蔵さんではない。ホテル街名物の立ちんぼうである。

お地蔵さんと同じく道ばたに立ってるが、こちらは種類は豊富だった。

くたびれた日本人のおばさん、中国人、国籍不明の女。選り取り見取りである。

ただしあまり可愛くないので、とてもじゃないが買う気にならな

いが。

立ちんぼうの何人かが、おれ達の袖を引いた。
おれは悪いねえと言って断った。黒田は汚らしい物でもみるかのように立ちん

ぼうを一瞥すると乱暴に振り払った。

「――舞島」

「あんだよ、黒田」おれはゲルゲンガーみたいなおばさんの手をかわしながら答えた。

「なんで警察はほったらかしてるだ、このスラム街を」

「いやスラム街じゃなくてラブホテル街だから」

「ここがスラム街なら、加藤の家なんて貧民窟じゃねえか。」

「だいたいラブホテルなんか作ること自体間違いないんだ」

何だか知らないが黒田は怒り出した。

「女性は結婚するまで処女を守るべきなんだ」

「あんで？」

意味がわからない。女だってやりたいだろう、セックス。

「あんでって……。そんなの当たり前だろう、簡単にセ

ツクスするよ

うな女は最低だし、それ以前に性病に罹る危険もあるだろう。それに舞島だっ

て処女と中古女どっち選べと言われたら、処女を選ぶだろう?」

「おれは惚れたほう選ぶよ」

おれは些かむっとしながら答えた。黒田の中古女という響きが気に入らなかつたのだ。

「そんなの絶対うそだよ、男なら絶対処女を選ぶ。その証拠に少年漫画に出て

くるヒロインはみんな処女だろう」黒田は目を怒らせながら、おれと中古女を否定した。

「そんなに処女が好きなら、立ちんぼうの姉ちゃんの股にサランラップでも巻いておけ」

おれがそう言い捨てたとき、人一倍貧相で幸の薄そうな眉をした出っ歯のおばさんが、おれの袖を引いた。

亀吉の母ちゃんだった。

二人の目が合う。ザ・ワールドなみに時が止まる。

さきに我に返ったのは亀吉の母ちゃんだった。

「……………直人君、お久しぶりね」

「……………久しぶりス」

おれも亀吉の母ちゃんも声が裏返ってた。

?こんな地元で客引くなよ?息子がいんだからよ。そう言ってやりたいが、隣には黒田がいる。

「——これ食べて、直人君」

亀吉の母ちゃんは手に持っていた弁当をおれに押しつけてきた。
「弁当持参で客引くなよ？」

「それじゃあね、直人君。おばさん帰るけど、直人君も学生なんだからこんな

とこいないで早く家に帰りなさい」

と、言うや亀吉の母ちゃんは逃げるように去っていた。

「舞島、スープに飽きたらず、あんな売春婦まで買ったのか？」

黒田の声は怒りに震えていた。

「買ったわけねえだろう、亀吉の母ちゃんなんだから？」

と怒鳴ってやりたかったが、言えるわけなかった。

おれは答えるかわりに、亀吉の母ちゃんからもらった弁当箱を開けた。

いなり寿司が入ってた。体を買っても亀吉の母ちゃんじゃ、稼ぎ
なんかたかが

知れてる。

弁当持参して金を節約したいだろう。

おれはいなり寿司をつまんだ。

「――黒田くうか？」

「食わないよ、そんな汚らしい物」

おれは一瞬かちんときたが、すぐに怒りは醒めた。

世界が違う。亀吉と黒田じゃ、住んでいる世界が違う。同じ学校、
同じ日本人

だが、住む世界が違う。背負ってる荷物も違う。

おれは怒鳴る変わりにいなり寿司を口に放り込んだ。

「――少ししよっぺえな」

ラブホテル街を出るとおれ達は別れた。

黒田は自分の家へ。おれはヤクザの豪邸にむかった。

一五分ほど歩くと、鬱蒼としげる雑木林が見えてきた。

あの雑木林のなかに片桐邸はある。

雑木林に囲まれてるせいで片桐邸は見えない。

隣に家もない。

あの家で拳銃が発砲されても、だれも気づかない。

千葉でもっとも危険な場所である。

おれは雑木林に通じる脇道に入っていた。

鬱蒼としげる木々のせいで、月も星空も見えない。

そのかわりライトアップされた片桐邸が、闇の中で強烈な光を放っている。

おれは光を頼りに、暗い夜道を歩いた。

片桐邸の門番である半笑いのトーテムポールがおれを出迎えてくれた。

なぜ数寄屋作りの屋敷のまえに、半笑いのトーテムポールが立ってるかというと、

キワモノ揃いの組員のなかにインディアンが混ざってるわけではない。

片桐の親父の単なる趣味である。

暴力団の親分にしてはなかなか良いセンスである。

トーテムポールと数寄屋作りの屋敷を合わせるなんて、日本広しといえども片桐の親父にしかない。

しかもこのトーテムポールはただのインテリアではない。

なんと半開きの口に手紙を入れることができるのだ。

門番でもあり、インテリアでもあり、郵便受けとしても使える。

まさに一石三鳥の存在だが、欠点がないわけでもない。

郵便受けに見えないため、誰も手紙を放り込まない。

「お前も口ばっかあけてないで、たまには手紙を受け取れよ」

おれは半笑いの面をかるく叩くと、片桐邸の裏庭に回った。

表玄関から入ってもいいのだが、全身にモンモン入れた下足番の兄ちゃんが気

合いの入った挨拶をカマしてくるので、一般ピープルのおれには入りづらかった。

裏の勝手口なら、下足番がいないので気軽に入れる。
裏庭に回ると、ハイセンスなおっさんが立っていた。

どこらへんがハイセンスかと言うと、どこで売ってるのか見当もつかない般若のベルトが腰ではなく腹に巻かれてるところが、まずハイセンスである。

勿論着ているスーツも一般ピープルには理解できないハイセンスなスーツで、肩にデカデカと片桐組と刺繍してある。

このスーツを着て外をノシノシ歩いたら、速攻で警察にナンパされそうである。

しかし名刺に組の名前書いてあるだけでパクられるのに、スーツに組の名前が刺繍してある場合はどうなんだろう。

おれはふと疑問に思った。

しかし今は疑問の答えを探してる場合じゃなかった。

般若の足下には血だらけのおっさんが土下座していた。

？表玄関から入りやあよかった？

おれは猛烈に後悔した。

「なにが親父に話があるだあ！ この腐れ貧乏人があ！ 話しつ

うのはなあ、銭

を詰んでからするもんじゃい！」

ドスの効いたバイオレンスな声が裏庭に響き渡る。

「この通りです、外村さん。五分でいいです。片桐の親分に会わせてくれませんか？」

か？」

「馬鹿たれこのう！ 親父は忙しいじゃい。話ならおれがしてやるから、詳しく

くて話してみーや」

外村は最後は猫撫で声で、血だらけのおっさんの耳元で囁いた。

「——お願いします。片桐の親分に会わせてください」

「——テメー、おれの器量じゃあ不足だって言うのか、コラア！」

外村は、土下座してるおっさんの頭を蹴り飛ばした。

血だらけの前歯が、おれの足下まで転がってきた。
「しゃーねな？」

「おじさん、その辺で勘弁してやったらどうだ」

外村はガンくれながら、おれに向かつてノシノシ歩いてくる。
ガンをくれてる外村の瞳孔はやたらと開いてた。

「シャブキメてるじゃねーのおっさん？」

シャブをキメてると、片桐曰く瞳孔が開くそうである。

知りたくもない豆知識だが、このおっさんのイカれぐらいを知る
のには役に立った。

もつとも切り抜けられるかどうかは別の問題だが。

「おおう？　　なんの資格があつておれのシノギに文句つけてんだ
？　金髪の兄
ちゃん」

外村はおれの頭に手を伸ばし、髪を掴もうとする。

おれは伸びてくる外村の手を掴んだ。

「人の頭気軽に触んなよ、おっさん」

「そりゃあ、おれのセリフだ。クソ餓鬼！人の腕やすう掴みやが
つて、おう？　　間に入るなら金もつてきてから、間にはいらんかい
！」

「金なんかねえよ」

ねえから片桐の家にきてんだから。

「――舐めた餓鬼だ」外村が呟いた瞬間、背中がぞくつとした。

外村の片手が、ズボンのポケットに伸びた。

道具出すつもりだ。

「拙いな？」

さすが武闘派ぞろいの片桐組だ。

厄介な連中ばかりだ。

「――なにしてんだ、外村」

苦みの利いた声が割って入った。

声がするほうを見ると、片桐組の若頭である榊原誠次が立っ

た。

「若頭、なんでもねえですよ。礼儀しらねえ、若いのに礼儀教えてやってるだけですから」

「止めとけ、外村。オメーは務所出てきたばかりで知らねえだろうが、その金

髪の兄ちゃんは若のダチだ」

「——それがどうかしたんですか、若頭？ 親父の実子とはいえ、若はまだ杯貰ってないでしょう。言わば、素人。おれのやることに口出する資格はねえでしょう。それにこいつは若のダチというだけで、看板もねえたんなる素人さんなわけだし」

「——おまえの言うとおりだな、外村。スジは通ってるよ」

誠次はそう言つと、外村に近づいた。

「おれは昔からスジだけは通して……」

外村は最後まで言えなかった。

誠次が、外村の太もみにドスが突き刺したからである。

外村は自分の太もみに刺さったドスをマジマジと見たあと、痛てえ！と叫んだ。

太股から流れ落ちた血は庭を濡らした。

「何がスジだ、テメー。親父の米びつに手エ突つ込もうとしやがつて。親父に刺して指詰め刺すぞ、ボケっが！」

誠次は言い捨てると、組の若い衆に外村をもぐりの医者連れて行くように命じた。

「すまねえな、直人さん。うちのモンが無礼な口を聞いて」

「いやいいスよ。おれこそ関係もねえのに口挟んですいません」

おれが口を挟んだせいで、えれえことになっちまった。

てか、バイオレンスすぎるだろう。片桐組。

「いいですよ、直人さん。外村の野郎最近調子こいてたから、焼

き入れてやろう

と思つてたところですからね」

誠次はおれから顔をそらし、血だらけで震えてるおっさんに向き直つた。

「和田さん、うちの若いのが迷惑かけて申し訳ありません」

「・・・・・・とんでもないです、榊原さん」

体同様、震えた声でおっさんは答えた。

「和田さんのことは、おれがきっちり親父に話しますから、今日のところはそれで堪えてやつてください」

「——本当ですか、誠次さん」

和田と呼ばれたおっさんは目を輝かせながら、誠次にむかつて何度も頭を下げた。

「そんなに頭下げないでください。今、若いのに案内させますから、家に上がってください」

誠次に命じられて、組の若いモンが和田を屋敷の中に案内した。

「——あのおっさんどうなるですか？」

おれはおっさんの背中を見つめながら尋ねた。

「死にはしないですけど、親父に骨までしゃぶられますね」

「そうスカ・・・・・・」

外村のおっさんの言つとおり、金持たないと間に入っても助けられないな。

「まあ直人さんは気にしないでください。骨までしゃぶられても殺されはしな

いですから。それより直人さん、若と待ち合わせてるでしょう」

「そうすけど、何で知つてるんですか？」

「若から言付かつてます。若はちよつと野暮用で、今出てますんで、先に資材置き場

案内しますよ」

「なんだよ、あの野郎。人を呼びつけといて、いねえだなんて」

おれが文句を垂れると「組の用なんで、勘弁してやってください。直人さん。お

詫びの印に、おれが車で資材置き場まで送っていきますから」「誠次さんが頭をさげるので、おれは慌てた。

「別に誠次さんに嫌味言ったわけじゃないですよ、おれは」

「わかってますよ、直人さんが嫌味を言うような男じゃないのは」誠次さんは人の太もを刺した後とは思えない朗らかな声で言う
と、おれを車で

送るため駐車所にむかった。

駐車場には、いかにもなベンツが一台。

それにライトバンやら軽トラ、国産の高級車が止まっていた。

ヤクザの駐車場なんだからもつとベンツが止まってもよさそうな
もんだが、片

桐組の組員である以上、自分の親父より高級な車は乗れない。

誠次はベンツの隣に置いてある黒塗りの国産の高級車に乗り込む。

おれも助手席
に座る。

さすが高級車だけあって乗り心地は最高だが、おれは居心地が悪
くて仕方なかった。

おれが余計な嘴を突っ込んだせいで、誠次さんは組員の太もを
ドスで刺しちまった。

大抵のことはすぐに忘れるおれでも、さすがに気まずい。

仕方ないので車窓の風景をぼんやりと眺めていると、無口な誠次
さんにしては珍しくおれに話しかけてきた。

「直人さん、若に誘われたんだって？」

「えっ？」

ぼけっとしてたので、誠次さんがなにを言ってるのか、わからな
かった。

「ヤクザになる件ですよ」

「ああ。その件ですか。たしかに誘われてるけど、おれヤクザに

向かないと思

うですよ。人とか殺せそうにないし」

「別にヤクザだからって、平気で人を殺せる人間なんてそういうんですよ、直

人さん」

誠次さんは苦笑いを浮かべながら言った。

「でもヤクザやったら片桐と連むわけでしょう。あいつと連んでいたらそのう

ち人を殺さないといけないハメになりそうな気がするんですよね」

「——さすが若の友達だけあって、若のことよくわかってますね。たしかに若の

アノ気性じゃあ、一人ぐらい殺しちまうかもしれない」

「——でしょう」

「でも直人さんが側にいてくれれば、若も人を殺さずに済むかもしれないですよ」

「えっ？」

「生まれて初めてですよ、若にダチが出来たなんて」

「そうなんですか？ でも片桐だって小学校とか幼稚園ぐらい行っただけ

ら、ダチの一人ぐらい居たでしょう？」

「子分ならいましたけど、ダチはいなかったですね。若は生粋のヤクザモンだ

から、縦関係以外の人間関係作るの苦手なんですよ」

「——亀は？」

「直人さんには悪いですけど、ありゃあダチじゃないですよ。あくまで子分ですよ」

わかっていた事だが、誠次さんの口から出ると重めえな。

「まあ直人さん、若みたいにヤクザやれとは言わないですけど、若のダチでい

てやってくださいよ」

「大丈夫ですよ、片桐とはもうダチですから」

「ありがとうございます、直人さん」

誠次さんは運転しながらも、頭を下げた。

「頭あげてください誠次さん。おれは頭下げてもらうようなこと別にやってないですから」

誠次の意外な行動におれは面食らった。

「いや頭さげるほどのことですよ、直人さんのやってることは。若の側にいるのは大変ですからね」

おれは誠次の言葉を聞いて、ふと亀の顔が思い浮かんだ。

亀は片桐の舎弟分だ。おれよりも遙かに片桐の側に密着して生きていくのだから。

「誠次さん、亀の奴ヤクザ向いてますかね？」

誠次はすぐには答えない。

「——直人さん、おれが若頭になれたのは、名前の通りに生きてきたからですよ」

「名前の通り？」

意味がわからず、おれは問い返した。

「外村を見ただでしょう。隙さえあれば、テメエーの親の米びつでも平気で手をつ込む。そんな人間の集まりがヤクザなんですよ」

誠次は煙草を一本を咥え、火をつける。

「——穩健派だって言われてるおれだって、所詮外村と同じヤクザなんですよ。見た目が柔らかくても名前の通りの人間なんです」

「名前の通り？」

誠次の言いたいことが理解出来なかった。

「誠を二の次ぎに置いてきたら、おれは若頭まで上り詰めたんですよ、直人さん」

誠次は煙草を深々と吸うと、大量の煙を吐き出した。

未来

土方のアンちゃん休憩所らしきプレハブ小屋の前で車を止めた。おれは車から降りる。

車の中からだと見えなかったが、プレハブ小屋の脇にはガラクタが山積みになっていた。

おれはガラクタの山に近づくと、比較的きれいな鉄板を手にとった。

「これ、チャリの改造に使えるかもな？」

学生最後の夏休みの記念に、流星号をデコチャリに改造する計画を立てていた。

しかし思った以上に材料費がかかるので、二の足を踏んでいたのだがこのガラクタを上手く活用すれば安く作れるかもしれない。

「誠次さん、このガラクタ少しもらっていいですかね？」

「――廃材だから構わんが、そんなモンなんに使うんだ？」

「いや、高校最後の夏だからデコチャリでも作ろうかと思って」

「――デコチャリ！」

誠次は絶句し、そして笑いだした。

「――そんなおかしいですかね」

おれがむくれると「いやすまん、直人さん。自分が直人さんぐらいの年の頃は、女のケツばかり追っかけていたから……」

誠次は笑いを納めると「直人さんは女を作らないですか？ 直人さんだったら、女の一人や二人簡単に作れるでしょう」

「いやあ。うちの学校、女少ないですから、そう簡単には彼女なんか作れないですよ」

「加藤の娘がいるでしょう？ アレはどうなんですか？ 親父は半チクだが、娘のほうは苦労してるから、しっかりしてるでしょう」

「――しっかりしすぎてますよ」

加藤なんか彼女に貰った日には、一円単位で金を管理されそうで

ある。

「——そうですね。あの手の女は男には甘そうですがね。まあ、女作っておけば、いざというとき米びつにはなりますから、一人ぐらい作って置いた方が良いでしょう。おれも若い頃は女房に食わせて貰いましたから」

「おれの器量じゃあ、誠次さんの真似は無理ですよ」

おれは笑った。たしかに女に食わせて貰えば就職なんかしなくてすむが、

どうもパツとしない。

「違がない。直人さんは、女のケツの下で納まる器量じゃないですからね」

それじゃあ、直人さん。

誠次は別れると、車に乗って帰っていった。

プレハブ小屋の中に入ると、亀吉が茶菓子を用意して待っていた。

亀吉は、おれに温い茶を入れてくれた。

おれは亀吉の気の利きすぎに少々ウンザリした。

気が利いたところで、アノ片桐が容赦するわけでもねえし。

片桐の生き方について行くには、何かしらの代償を払わねばついていけないだろう。

それがどの程度の代償になるか、亀吉にも、おれにも、片桐さえも、誰もわからない。

未来は誰にもわからないのだから。

「——どうしたんすか、直人の兄貴」

おれの沈黙が、亀吉に不安を与えた。

「オメエの気の利きすぎにウンザリしてんだよ、茶坊主が。気が利きすぎても出世しねえぞ」

「わかつてますよ、直人の兄貴」

亀吉は答えた。

まあ、あんま心配してもしようがねえか。

おれは温い茶を啜り、申し訳程度に茶菓子をつまんだ。

加藤の家ですき焼きは食うわ、亀吉の母ちゃんからはいなり寿司を食わされるわで、

腹には一分の隙もなかった。それでも申し訳程度に煎餅をかじった。

茶碗が空になった。

「よし、茶も飲んだし、腹ごなしに見回りでもするか」
食い過ぎで腹がもたれて仕方ない。

おれは亀吉と一緒に外に出た。亀吉が懐中電灯片手に、前を歩く。おれは亀吉と軽口を叩きながら歩いたが、そのうち話すネタもなくなり黙った。

田舎の夜は暗い。

光といえば、星明かりと月明かりと、懐中電灯の光ぐらいだった。正直、気味が悪い。

「直人の兄貴」亀吉が口を開いた。

亀吉の声が微かに震えている。

「どうした亀吉」

「鉄パイプとか持たなくて、大丈夫ですかね？」

案の定、亀吉はびびっていた。

「鉄パイプなんか持ってどうすんだよ？」

「勿論、泥棒野郎を殴るスよ」

亀吉は力んだ。

「馬鹿野郎。鉄パイプなんかで殴ったら死んじゃうだろうが」
ヤンキー漫画じゃあるまし。

「でも忍の兄貴は、いつも木刀でぶっ叩いてるじゃないスカ」

亀吉は不満げな顔で文句をつけた。

「片桐の場合は喧嘩慣れしてるから、ああ見えても急所は外してる。だから大丈夫なんだよ」

それに――。

「片桐の腹の中には、いつだって人を殺す覚悟がある」

亀吉、お前にはあるのか、と問うと亀吉は黙った。

「——なんか無茶苦茶な言われようだな。おれ」

突然、野太い声が割って入った。

片桐だ。

「——びっくりさせんなよ」

おれは驚いて鼓動が大きくなった胸を手で押さえながら言った。

亀吉の奴はびっくりしすぎて腰を抜かしている。

「——お前なんか用事があつたじゃなかったのか？」

「それなら終わったぜ、舞ちゃん」

しかし酷でえ言われようだな。

片桐は不満たらたらに呟く。

「だいたいおれまだ人殺してないから」

「まあそうだけど、おれは覚悟のことを話してるだよ」

覚悟ねえ——。片桐は呟く。

「ポン刀でイカサマ野郎の右腕切り落としたとき、おれも腹を括ったかな」

片桐は他人事のように言った。

「お前、右腕切り落としたって、そいつ何やったんだよ？」

「チンチロリンで、イカサマしやがったのよ」

「チンチロリンって、あの骰子三つ振るやつか？」

ウチのクラスの連中も、50円ぐらい賭けてやっているの、ルールは知っている。

「そう。それ」

「そんなもんで、お前片腕一本は酷くねえか」

お前はカイジに出てくる、イカれたギャンブル狂か

「全然酷くねえよ。だってそいつ、ウチの賭場から五千万も攫ってたんだぜ」

「——五千万ねえ」

話がいよいよカイジじみてきた。

「——まあたしかに五千万なら、仕方ねえか。片腕の一本ぐらいイカサマやったヤツも、腹を括っていただろう」

千葉最凶最悪と歌われてる片桐組相手にイカサマすんだから。

「しかしお前も、五千万のチンチロリンするなんてどういう高校生だよ。お前はカイジの生まれ変わりか」

「そんなときは中学生だったよ」

「余計酷いわ」

「それにおれチンチロリンやってねえから。おれは横で見物していただけ」

「それでなんでお前がイカサマ野郎の片腕を切り落とすだよ？」

「はじめは若いモンにやらすつもりだったんだけどよう。若いのにポン刀を持たしたら、ブルっちまって。見てて苛ついたから、おれが変わりにやってやることにした」

最近の若い奴は根性がなくていけねえ。

片桐は嘆いた。

「——よくやれるな、片桐」

さすがのおれもできない。

「正直いや、ちょっとはビビったよ。でも深呼吸したら落ち着いたから、スパツとやってやろうと思って刀を打ち下ろしたらよ」

そしたら——。片桐は言いながら、ポン刀を振り下ろすフリをした。

「漫画見てえに切れねのよ、これが。頭にきて、何度もポン刀振るって、ようやく腕が千切れたよ。あん時、おれは思ったね。人間頑丈だなんて」

片桐はそう言うて大笑いした。

おれは聞いてて気分が悪くなってきた。

「気持ち悪いから、話し変えようぜ」

「なんだよ、舞ちゃんから話しふったくせに」

——おれが悪いみてえじゃねえか。片桐はふて腐れた。

「片桐が悪いなんて誰も言っただけだよ。それよりお前何してたんだよ？ 人がせつかく来てやったのに、いねえなんて失礼にも程があんぞ」

「悪い、悪い。急に寄り合いやることになってさ」

「寄り合いって、なんだよ？」

血なまぐさい言葉しか出てこない片桐の口から、血の匂いのしない単語が出たので興味がわいた。

「談合の寄り合いよ。本当は明後日にやる予定だったんだけど、談合のしきり役のおっさんの都合で、いきなり今日になっちまったんだよ」

「談合？　なんだそりゃあ？」

「なんだよ、舞ちゃん。高校生にもなって談合も知らねえのかよ」
片桐は呆れた。

「いや、知ってるよ……」

何するのか見当もつかないが、悔しいので見栄を張った。

「じゃあ談合ってどういう意味だか説明してみろよ、舞ちゃん」
？そこは優しい目でスルーするところだろうが？

だからお前は残虐超人みたいな人間になるだよ。

おれは片桐の優しさのなさに憤慨した。

しかし答えないのはプライドが許さなかった。

「——アレだよ。アマゾンに住んでそんな女が取っ組み合って喧嘩するのを、みんなで見物するんだろう、談合って」

とおれが言い終わった瞬間、片桐が大爆笑した。

前を歩いてる亀吉は、両手で口を塞いで笑うのを一生懸命堪えている。

これならまだ笑われたほうがマシだった。

「——亀吉。無理すんな。笑いたきゃ笑え」

おれが声をかけてやると、亀吉のやつは腹を抱えて大笑いしはじめた。

二人とも絞め殺してやりたい。

「なんでアマゾンの女なんだよ、舞ちゃん？」

片桐の馬鹿が笑いながら尋ねてくる。

「だって片桐好きだろう、女と暴力が。だから、この二つ合わせ

たらアマゾンの女しかないかなと思ってな」

「いや好きだけだよ、その発想はなかったわ」

片桐は感心したように頭を傾げた。

「でつ、なんなんだよ談合って」

生き恥を晒したんだ。せめて談合の意味ぐらい知りたかった。

「舞ちゃん。談合ってのはな、県が発注する工事をあらかじめどこが落とすか、話し合いで決めることよ」

片桐は長々と談合について語りはじめた。

途中難しい単語が出たが、なんとか理解できた。

「片桐の奴、勉強は出来ねえけど、こと犯罪行為に関しては詳しいな？」

「やっぱ玄人だけあるわ。」

「なるほど、なんとなくわかった。で、片桐の所はこの工事する事になったんだ？」

「今回はうちはやらねえよ。この前港南橋の補修工事ウチが落としたから、灯台の解体工事は新能建設の連中に譲らないとまずいだよ。まあ、大した工事じゃないし、金玉丸出しのタヌキ像をわざわざ山奥の神社まで運ばないといけねえしで。たいして金にならないわりには手間が多いから、新能のぼんくら共に譲ってよかったかもな。反対運動まであつたらしいし。反対運動の連中がうちに押しつけてきたら、絶対事件になつてるからな」

——そんなつまんねえことでムシヨ行ったらソロバンあわないから。

片桐は大笑いした。

おれは片桐の品のない笑い声を聞きながら、少々複雑な気持ちになつていた。

その壊される灯台は、おれがガキの頃よく遊びに行った灯台なのだ。

他にも何個か灯台はあるが、金玉丸出しの下品なタヌキ像が置いてある灯台なんて他にない。

「——無くなつちまうのか」

おれはため息をついた。

「なんか言つたか、舞ちゃん？」

「あんでもねえよ。それより片桐、お前にしちゃあ平和的だな、他人に譲るなんて」

おれは思わず感心してしまった。

片桐の口から、奪うとか、脅すとか、そういう単語はしょっちゅう出てくるが、譲るなんて単語は初めて聞いた。

「そうだろう舞ちゃん。今はこれよりも」と言つて、片桐はぐくナチュラルに懷から拳銃を取り出した。

「——話し合いよ」

片桐は拳銃片手にこやかな顔で言い放つ。

「平和で結構——つて、お前なに出してるだよ！」

「——チャカだけど？」

片桐はきよつとんとした顔でとんでもないことを言い出した。

「チャカだけど、じゃねーよ。うんなもん持ってきてどうするつもりだよ。まさか泥棒射殺するつもりか？」

鉄パイプどころの騒ぎじゃねえぞ

「いや、そんなことしねえよ。チャカ持ってきたのは、どうせ暇だろうからちよつとしたサプライズイベントに、射撃大会でもやるうかなと思つてさ」

「サプライズすぎんだよ。バレたらどうすんだよ！」

「この辺人通らないから大丈夫だつて。むかし親父が茂木組の若い奴の頭吹っ飛ばしたときも、だれも気づかなかつたぐらいだから」

と言うなり、片桐は土管目がけて拳銃を連射した。

土管の上で寝ていた小汚いシャム猫が、びっくりして逃げ出していった。

片桐は舌打ちした。

「猫の野郎逃げやがつて、ちいとはサービス精神だして、自分から弾に当たりにいかんかい、このボケ猫が！」

片桐はむかついたらしく、地面に転がってる石を蹴っ飛ばした。

「おい、亀。あの猫捕まえてこい」

びっくりして腰を抜かしてる亀吉に、無茶苦茶なこと命令する片桐。

「どんだけ無法者なんだよ、お前は。猫が可哀想だろう！」

おれは本気で怒った。拳銃撃つたのはしょうがないとしても、せめて猫以外にしろ。

「なに怒ってるだよ、舞ちゃん。たかが野良猫だろう」

「そういう問題じゃねえ！」

おれは片桐の面を思い切りぶん殴った。

不意を食らった片桐は思いきり地面に倒れた。チャカが地面に転がる。

片桐は半身を起こした。

「いきなり、なにすんだよ。舞ちゃん」

片桐は片手で口から溢れ出る血を拭った

「お前だって、シャム猫にいきなり拳銃撃つたろう。これでお相手だろうが」

「野良猫とおれ一緒にすんなよな」

片桐はぶつくさ文句言いながら立ち上がった。

「だいたいクラスの飼育係である、おれの前で生き物殺そうとするのはどういいう見だよ！」

まだ怒りが納まらない。

「——いや、どうせ撃つなら動物的がいいかなと思ってさ」

片桐は頭をポリポリとかきながら弁解した。

「動物的ならヤクザにしろ！」

生き物をなんだと思ってるだ、こいつは。

「わかった怒るなよ、舞ちゃん。射撃大会は諦めるから」

そう言つと片桐は、地面に転がってるチャカを拾って懷にもどした。

亀吉が懷からハンカチを出して、片桐に渡した。

片桐は唇から流れる血をハンカチで拭き、血で汚れたハンカチを放り捨てた。

内心、おれに殴られた怒りが納まってないらしい。

亀吉は慌ててハンカチを拾い上げる。

「しかし舞ちゃんも気が短いな」

「お前ほどじゃねーよ」

その証拠に怒りの熱は冷めてきている。

猫も死んじやいないわけだし。

「今度カルカンでも買つて、シャム猫に詫び入れとけよ」

おれは仲直りのサインを出した。

「わあつたよ、舞ちゃん」

「ところで、片桐」

——うん。片桐がおれの顔を見た。

「談合つてどこでやるんだ？」

ふと、興味がわいた。

「そりゃあ色々だけど、今日はおっパブだったな」

「なんだよ、おっパブって」

はじめて聞く言葉だが、凄く面白そうな所のような気がした。

「知らないスか、直人兄貴？」

亀吉がおっパブという単語に食い付いてきた。

「おっぱい丸出しの女の子が酒を注いでくれるところスよ」

「おっぱい丸出し！」

——マジかよ。おれは思わず呟いた。

亀吉はマジすよ、亀吉まで声を潜めた。

「おいおい、そう言うところは東大でた偉いおっさんとかが行くところじゃないのか？」

昔、ニュースかなんかで、偉いおっさんが、そんな所行って捕まったの見たことがある。

「舞ちゃん、おれ等が行ったのはそんな高級なところじゃねーよ。なんせ下の毛がタワシみたいな女が出てきたからな」

なあ、亀。片桐は亀に同意を求めた。

「たしかに高級つて雰囲気じゃなかったスね。折り紙で飾り付けしてたし」

「おい、亀吉。なんでオメーまでそんなこと知ってるだよ」

「いや、この前片桐の兄貴に連れて行って貰ったスよ」

亀吉はシレつとした顔で宣った。

「あんだと！」思わず叫んでしまった。

「なんでおれもモジャゴンのところに連れて行ってくんねーだよ！」

「ちゃんと誘ったよ。この前、十一時頃電話したろう」片桐は言った。

「あの電話か！」

眠くつて叩き切ってしまった。

「そうだよ、あの電話だよ」

片桐は頷いた。

「しかし酷いよな、舞ちゃん。おれの話し一言も聞かねえで切るんだもん」

「仕方ねえだろう、そんなアマゾンみたいなところに連れてってくれるとは思わなかっただからよう」

おれはがっかりして少し膨れた。

スケベ心もあるが、モジャゴンのタワシも見てみたかった。

「なあ、舞ちゃん？」

「なんだよ、片桐」

「——モジャゴンはわかるが、アマゾンってなんの例えだよ？」何を聞いてくるかと思えば、つまらないことを片桐は質問してきた。

「うんなの決まってるだろう。なんだか知らねえけど、アマゾンの人達はおっぱい丸出しで暮らしてるだろう。だから、おっぱ子なんてアマゾンみたいなもんだろう」

「その発想はなかったわ」

片桐は、おれの言葉に感心しウンウン頷いた。

「しかしよう、舞ちゃん。アマゾンにはハッスルタイムはねえだろっ？」

「なんだよ、ハッスルタイムって？ 槍でも持つて踊るのか？」
まだ千葉のアマゾンにはモジャゴン出現のほかにイベントがあるのか？

「ハッスルタイムってのはなあ舞ちゃん——」

片桐はもったい付けた。

「早くいえよ、片桐」おれは焦れた。

「——モジャゴンが膝にのっておっぱい丸出しで踊るだよ」

「マジかよ！ モジャゴンただけ活躍すれば気が済むだよ！」

おれの頭の中は、片桐の膝に跨って腰をふるモジャゴンで一杯になった。

「こりゃあ一度千葉のアマゾンを探検してみる必要があるな、片桐！」

おれは真夜中の資材置き場で叫んだ。

クロスロード

時計の針が二時を指したところでパンチパーマの兄ちゃんが交代しに来たので、本日のアルバイトは終了になった。

片桐の野郎は飲みに行こうと誘ってくれたが、かつたるかつたので断った。

「なんだよ、舞ちゃん。付き合い悪いいな」

片桐がブウたれる。

「——それより何か入れるモンないか？」

おれは無視した。

「入れるモンって、なに入れるだよ？」

「プレハブ小屋の廃材だよ。夏休みにデコチャリを作るから、使えそうなモン貰うだよ」

「——入れモンねえ……」

片桐が頭の中の記憶を探っていると――。

「プレハブ小屋に汚ないリュックありましたよ」

亀吉が、兄貴分のかわりに思い出してくれた。

「それ使えばいいよ、舞ちゃん」

「いいのか、土方の兄ちゃんのじゃないのかよ？」

「そんな汚いリュック、どうせバックれた奴が置いていったモンだよ。それに休憩所には私物置くなって、散散言ってるんだ。使われたって文句いえないさ」

片桐は法律は守らないが、自分の組のルールには煩かった。

「そうか。遠慮なく使わしてもらうよ」

おれとカメはプレハブ小屋に戻った。

片桐も付き合うと言ったが、組から呼び出されたので先に帰った。おれとカメは使えそうなガラクタを拾い集めた。集め終わると、おれはリュックを背負った。

「直人兄貴。おれが家まで担ぎますよ」

「いいよ、おれのだから。おれが運ぶよ」

おれが断つても、亀吉は背負います、と言ってしつこかったが断った。

おれの荷物まで亀吉に背負わせる気はなかった。

途中まで道が一緒なので、道が別れるまで一緒に歩くことにした。たわいのない話をしながら、夜道を歩く。

十字路までくると、おれと亀は足を止めた。

ここからは道が違う。

亀吉は、壊れかけの街灯が照らす真つ暗な道を。

おれは、錆びたガードレールに舗装された道を。

一人で歩いていかなばならなかった。

「……直人兄貴、おれん家に泊まっていけないスカ」

「——あんでよ。亀吉の家に泊まってなんかやることあんのか？」

「こち亀50巻までありますから、夜通しで読みましようよ」

「なにが悲しくて、野郎二人で徹夜でこち亀読まなきゃいけないだよ」

「いや、初期のこち亀は半端なく面白いから、徹夜もいけますって」

「いけねーよ。てか、亀吉。オメーまさか恐いのか？ 一人で帰るのが」

「……いや、恐くないスけど、まあ、そのう……」

「興味悪いス、よ。と亀吉はほざいた。」

おれは亀吉の後頭部を引っぱ叩いた。

「これから人生の裏街道突っ走って行こうって人間が、夜道怖がってどうすんだよ！」

情けない。

「まあそうなんすけど。幽霊は別腹って言うじゃないですか」

「言わねーよ。いいからとっとと行け」

おれはぶるぶる亀吉のケツを足で軽く蹴っ飛ばした。

亀吉はノロノロと歩き出したかと思うと、ふり返り「うんじゃあ、直人兄貴」

と、頭を下げた。

「おう。じゃあな」

おれは亀吉に別れを告げると、背を向けた。

一人夜道を歩く。

ガードレールの向こう側から潮風が吹いてくる。

昼間の熱をはらんだ潮風と違って、夜の潮風は冷たくて心地よかった。

おれは足を止め、潮風が吹いてくるガードレールの向こう側に顔を向けた。

どこまでも続く闇色の海。

闇色の海にぽっかりと浮かぶ銀色の月。

？昼とは違う世界だな？

夜は、同じ道、同じ光景を一変させてしまう。

悪くない。と、思った。

夜の冷たい光景も。

？一人で帰ってよかったかもな？

一人で帰るのは寂しいが、片桐や亀吉がいたら、馬鹿話してこの美しい光景を見逃してしまうことだろう。

おれは錆びてザラザラガードレールに手をかけ、月の光が照らす海を眺めた。

波が作り出す単調な音。

孤独に光る月。

深い闇色の海。

なんだか海に吸い込まれそうな気持ちになってくる。

？いかん、あんま見つめていると身投げしちまうかもしれない？

綺麗なのは結構だが、この年で死にたくない。

おれは海から目を逸らし、再び歩き出した。

緩やかな坂道を登り切ると、灯台が見えてきた。

ガキの頃、よく遊びに行ってた灯台だ。

？そーいや、もうすぐ壊されるだよな？

遊びに行かなくなつて、だいぶ経つ。

「せつかくだし、ちよつと寄つていくか」おれは一人呟いた。

古ぼけた外灯が、権左右衛門を照らしていた。

灯台の方は昔と変わらず、なんの光も発していない。

おれは、この灯台の主である蔵左右衛門の前に立った。

「相変わらず、金玉でけえな」

おれはガキの頃と同じように、蔵左右衛門の金玉をさすつた。

「ありがたやゝ、ありがたや」

ナチュラルに小学校の頃流行つた金玉ソングが口についた。

「蔵左右衛門の金玉ありがたや。タマキンシワクチャ、クサ袋。

キンタマキンタマ、インキンタムシ」

とノリノリで歌いながらも、一つ思った。

「――やっぱ小学生つて馬鹿だな」

なんでこんな歌流行つたんだろう。

そう思うと急に金玉撫でてるのが馬鹿らしくなつた。

なんの御利益もないし。

おれは蔵左右衛門の金玉に興味を失うと、灯台の入り口の階段を昇つた。

近寄つて灯台を改めて見ると、コンクリート製の壁の表面には無数の罅が走っていた。

おれはひび割れた壁を撫でた。

「――まさかおれの張り手のせいかな？」

幼稚園の頃相撲取りに憧れていたおれは、デブを見れば相撲を仕掛けていた。

齒こたえある奴もなかにはいたが、大抵は弱虫デブだった。しばらくすると誰もおれと相撲する奴がいなくなつた。

体を持て余したおれは、灯台の壁相手にぶつかり稽古を挑んだもんだ。

「お別れ相撲！、お別れ相撲！」

懐かしくなったおれは、ガキの頃と同じく灯台相手に張り手をかます。

「お別れがぶりより、さよならもろ差し」

更なる技を灯台に仕掛ける。ふと、誰かの視線を感じた。

？流れの力士か！？

と思つたが、ふり返つて見てみると、腰にリボンを結んでいる白いワン公が足下で尻尾を振っているだけだった。

ワン公は怪訝な顔で、おれを見上げていた。

「まあ、流れの力士なんていねえわな」恥ずかしくなったおれは一人呟く。

「ところでワン公おまえこんな所でなにやってんだ」

おれが尋ねると、ワン公はワンと吠え、くるりと後ろを向いた。

？おれについてこいと言ってるのか？？

犬語はわからないが、なんとなくそう言ってるような気がした。

おれはワン公の後ろをついて行く。

なんのことはないおれが突つ張りカマしてた壁のちょうど反対側に回り込んだだけだった。

ただ反対側の壁と違つのは、ここの壁はヒビが入ってるだけではなく、穴が空いていた。

屈めば、人間の大人ぐらい入れそうである。

ワン公は穴に入っていくと、白いバックを啜えて戻ってきた。

ワン公は、おれにカバンを差し出すかのように。首を高く掲げた。

おれは訝りながらも、カバンを受け取り開けてみた。

カバンのなかには紙の束が雑然と突っ込んであった。

「なんだこりゃあ」

一枚取って広げてみる。

暗くてよく見えないが、太字のところは読めた。

灯台新聞。

「灯台新聞？」

恐怖新聞なら知ってるが、灯台新聞なんか聞いたこともない。興味がわいたおれは顔を近づけ記事を読んでみた。

総力特集。

恋路に立ちふさがる悪戯な妖精を追い出す必殺の呪文。

この呪文を使って、恋路を邪魔する妖精を追い払って、灯台で熱いベーゼを。

灯台でキスすると永遠に結ばれる？

友達以上、恋人未満な関係なそのカップル諸君！ 今すぐ灯台で熱いキスを。

今キスすれば、灯台の守護神である狸左右衛門様が貴方の守護神になってくれるかも。

ついでに狸山神社特製紅白饅頭もプレゼント。

「・・・・・・・・」

なんでこの新聞、こんなに灯台でキスすることを勧めてるんだ？
アオカンスポットにでもして、盗撮ビデオでも撮ろうとでもしてるだろうか？

「さっぱりわからん」

まあいいや。もう飽きた。

おれは灯台新聞をワン公の足下に置いた。
ワン公はもの凄く悲しそうな顔をした。

「おい、新聞ぐれえで、そんな悲しい顔するなよ」

と言って慰めたが、ワン公は頭をたれてションボリしている。

「まさかお前新聞売らないと、メシ抜きにされるのか？」

不景気な世の中だ。犬といえども働かされてるのかもしれない。

「そんなシヨンボリすんな。新聞ぐれえ読んでやるから」
と声をかけると、ワン公は嬉しそうに顔をあげ、自分の家である
灯台に戻っていた。

しばらくすると、ワン公は新聞を啜えて戻ってきた。

「これ読めというのか？」

おれが尋ねると、ワン公は頷いた。

もう読みたくないが、ワン公をがっかりさせるのもなんなので、
読んでみることにした。

総力特集

？片思いの彼を呼び寄せる不思議なおまじない？

いきなりウンザリした。

「また色恋いかよ。もつと面白い記事ないのかよ。でっかいカブ
ト虫の取り方とか、ツチノコの出現スポットとか、童貞捨てるのに
お勧めのソープとか、そういう実用的な記事がないと、この不景気
の世の中生き残れないぞ。お前の雇い主に言っとけ……」

おれはワン公に的確なアドバイス送ってやったのに、ワン公の野
郎モジモジしていた。

「——ひょっとして小便か？」

おれが問うと、ワン公は恥ずかしそうにワンと吠えた。

「犬なんだから恥ずかしがってねえで、そこら辺でしてこいよ」

おれが促すと、ワン公は灯台の茂みで用をたした。

それはいいのだが、ワン公の野郎オスのくせに四つ足を地面につ
けたまんま、雌犬のように用をたした。

し終わると、ワン公は戻ってきた。

「なんだお前。オカマじゃねえだから、そんな小便の仕方あるか」
おれが叱ると、ワン公は面目ないといった風情で頭を垂れた。

「いいか、男の立ちシヨンってのは人目も場所も気にせず豪快に
やるんだよ」

ちようど小便がしたかったおれは、オカマ犬に見本を見せてやる

ことにした。

おれは灯台の入り口の前に立つと、ズボンのチャックを降ろした。大人の余裕すら感じる自然さで、息子を外に引っ張り出す。

勢いよく、小便が飛び出してくる。

「華厳の滝」

おれは腰をグイッと突き上げる。

小便は大きく放物線をかきながら、階段を濡らした。

自分で言うのもなんだが、すごい勢いだ。

これは人生に一度きりのビックウェーブかもしれない。

「虹だ。いまのおれなら小便で虹をかけることができる。こいレインボー！」

おれは小便で虹を描こうと、息子に力をいれる。

ワン公はおれの勇姿を見て興奮したのか、ワンワンと吠えた。

おれはワン公の方に顔をむけた。

「なに吠えてるんだワン公。大人しく見てろ。いま小便で虹を描いてやるから」

「——あもう」

「へっ？一瞬犬が喋ったのかと思ったが、違う。」

女の声だ。

おれはびっくりして正面に顔を向けると、20代とおぼしき二人の女性が立っていた。

一人は身長180センチはあろうかとおもう長身の美女で、背だけ見ると和田あき子だったが、顔は和田あき子とは似ても似つかない。

短いボブカットが似合う美女だった。

声をかけてきた女は色白で、長い黒髪が似合い和風美女だった。

和風美女は車椅子を押していた。

車椅子には、鳥の巣みたいな髪のを乗つけた小学生ぐらいの少女が乗っていた。

少女の膝には、季節に合わない汚らしい毛布を乗せている。

しかも毛布が丈が長すぎるため、地面に引きずっている。
裾なんか泥だらけだ。

？夏なんだから、毛布なんか掛けなくてもいいのに？

手には何故か知らないが紙飛行機が握られていた。

まあいい。そんなことはまあいいんだ。

それより、今はこの勢いよく吹き出てる小便をどうにかしなければいけない。

「いま仕舞いますから、ちょっと待ってくださいね」

おれはチンコに静まるように念波を送るが、チンコの奴まだ虹を描きたいらしく、噴水のように小便を放水していた。

「おい、ちょっとは場面を考えろ！」

と、小声で叱ってみたが納まらない。

焦ったおれは、とりあえず場所を移動しようとした。

が、焦ったせいか派手に転けてしまった。

階段から転げ落ちたおれは、自分の小便で作った水たまりに倒れ込んでしまう。

小便まみれになるおれ。

「——こんなんじゃない！」

車椅子に乗っていたガキンチョが悲鳴のような叫び声をあげた。

「——叫びたいのはこっちだよ」

おれは自分の小便の匂いに顔を顰めながら呟いた。

タガタメ

いつまでも小便まみれじゃ格好つかないので、姉ちゃんズにお願いしてコンビニで代えの下着を買ってきて貰うことにした。

「あつ、じゃあわたし買ってきます」

和風美女が手をあげてくれた。

彼女は美人なだけではなく、気も利いてるようだ。

「そうすか。うんじゃあお願いします」

おれはポケットから財布を出し、片桐のバイトで手に入れた一万円を渡した。

「釣りで、みんなの分のジュースを買ってきてください」

懐の金が、おれに大人の余裕を持たせてくれた。

「あつ、いいですよ。そんな気を遣って貰わなくても……」

和風美女が遠慮するが「愛、わたしオロナミンCね」

美人な和田アキ子のほうは遠慮しなかった。

「フクっ！。まだ名前も知らないだから少しは遠慮なさい」和風美女は窘める。

フクと呼ばれた女は、それもそうね——と呟き

「私は福田福子です。フクちゃんと呼んでね。隣にいる小姑は鷺尾愛。大学の同級生です」

福ちゃんは手短に友達の紹介を終えると、車椅子の少女の肩にそつと手を置いた。

「そしてこの子は、愛の妹の朱美ちゃんです。恥ずかしがり屋さんだけどよろしくね」

朱美はそっぽを向いた。

？ 恥ずかしがり屋というより、怒りんぼにしかみえんな？

「それで、君は？」

おれは福ちゃんに促されて慌てて「タマカスに通ってる舞島直人

です」と答えた。

「——これで全員名前を知った仲になったわけか。じゃあ遠慮なく、わたしはオロナミンCね。朱美ちゃんは？」

「……………オレンジジュース」

朱美はぼそりと呟いた。

愛さんは何か言いたげだったが、結局諦めたのか「舞島君は？」
おれの飲み物を尋ねた。

「おれはポカリで」

みんなの注文を聞き終わると、愛さんはコンビニにむかった。
愛さんの後ろ姿が見えなくなると、自分の服から醸し出されるアンモニア臭が気になり始めた。

「小便可さいな」

「おしっこまみれなんだから当たり前でしょ、このおしっこマン！」

朱美は実に可愛げのない言葉を宣った。

「仕方ねえだろう。長い人生、一回ぐらい小便まみれになるよ」

——ねえ福ちゃん。おれは同意を求めた。

「おしっこはないけど、うんこならちよつと漏らしたことはあるわ」

福ちゃんは言いづらいことを、あっさりと告白した。

「あははは、俺等臭い仲ですね」

おれが笑うと、福ちゃんも笑った。

だが朱美だけは笑わなかった。

「馬鹿じゃないの。おしっこまみれなんか自慢になんないよ！」

「別に自慢してる……………」

おれの言葉は途中で止まった。朱美がおれに唾を吐きかけてきたからだ。

「なにも唾を吐きかけることないだろう、朱美」

おれが叱ると、「うっさい！ おしっこマン！ お前なんか嫌い、嫌い、大嫌い！」

朱美は叫びながら唾を連射する。

おれの学ランには唾の染みが広がる。

「朱美！」

温厚なおれにもさすがに頭にきた。

朱美が車椅子に乗ってなければ、げんこつの一つぐらくれてやるところだ。

「朱美ちゃん、わかったから唾を吐くのはやめなさい」

福ちゃんが割って入る。

「やだあ！」と叫びながら、朱美はあろうことか福ちゃんに唾を吐いた。

「朱美！」

おれは本気で腹が立って、怒鳴った。

おれがやられるのはまだ我慢できるが、間に入った福ちゃんにまで唾を吐くのは許せない。

「——大丈夫よ、舞島君。わたしに任せて」

福ちゃんはおれの返事も聞かず、朱美の前に座り込んだ。

「朱美ちゃん、私と約束したでしょう。怒っても唾ははかない」

「約束なんてしてないもん！」朱美は怒鳴りながら、唾をはいた。福ちゃんの顔が唾で汚れる。

黙って見てられなくなったおれは口を挟もうとするが、福ちゃんが目で制止する。

仕方なく引つ込む。

唾と言葉の応酬が続く。

朱美は怒鳴り声をあげたり唾を吐いたりした。

福ちゃんは念仏のように「唾をはかない」朱美にむかって言い続けた。

おれは福ちゃんのやり方が生ぬるいように思え、何度も二人の間に入ろうとしたが、そのたびに福ちゃんに制された。

福ちゃんの顔がすっかり唾まみれになると、朱美はようやく唾を吐くのを止めた。

「…………ごめん、福ちゃん」

「わかつてくれればいいのよ、朱美ちゃん。でも約束だから、カエルさん手帳だして」

「……………うん」朱美はポケットからデフォルメされたカエルが表紙にプリントされてる手帳を取り出した。

福ちゃんは手帳を受け取ると、頁を捲った。

手帳にはカエルのシールが何枚も貼られていた。

福ちゃんはそのうちの一枚をはがした。

「——ああ、八枚まで貯まったのに」

「朱美ちゃんがいい子にすれば、すぐにたまるわ」

「あんだけ唾吐いといて、カエルのシール一枚ですむんだから安いモンだろう？」

おれは心の中で呟いた。

「ちよつと顔洗いに行こうか。直人君もその服洗いたいだろうし」
福ちゃんは車椅子をゆっくりと押す。

朱美の唾の件は納得できなかったが、一番の被害者である福ちゃんが矛を収めている以上、おれも矛を収めざるえなかった。

福ちゃんは長く垂れた毛布が絡まらないよう慎重に車椅子を押してるが、ちよつとでも油断すると車輪は毛布を巻き込みそうになる。そのたびに福ちゃんは車椅子を押すのを止めて、屈んで車輪に絡まった毛布を解いた。

「朱美、夏なんだから毛布取ったらどうだ？」

見かねたおれが声を掛けると。

「いやだ！！！」

朱美は凄まじい形相でおれを睨みつけると、絶叫で返した。
おれは珍しく一步引いた。

「ガキのする表情じゃない？」

どんな人間も鬼を飼ってるというが、それでもガキが作る表情じゃない。

「大丈夫よ、舞島君」

福ちゃんは何事もなかったように微笑む。

「この人も、一筋縄で行く人間じゃないのかもな？」

青二才のおれに、福ちゃんが何を考えてるかなんてわからないが、見た目ほど単純な人じゃないことだけはわかった。

水飲み場に着くと、福ちゃんは顔を洗った。

おれは小便で汚れた学ランを脱ぎ捨てた。

「なかのＴシャツは大丈夫そうだ？」

だが、ズボンとパンツは洗わないとダメそうだ。

「ちよつとパンツ脱ぐから、後ろをむいててくれ」

ハンカチで顔を拭いてる福ちゃんに声をかけた。

福ちゃんは「はい、はい」と言いながら、朱美の車椅子をくるつと回した。

おれは素早くすつぽんぽんになると、洗濯を開始した。

人間素っ裸になると、何故かテンションがあがる。

おれは鼻歌を口ずさみながら、パンツをこしこし洗った。

「鼻歌なんか歌ってないで、早く洗って服着てよ」

朱美が早速ケチをつけた。

「ちよつと待ってる。今洗つてるところだから」

「だいたいなんであんなところでおしっこしてたの？ 直人は変態なの？」

「馬鹿、変態じゃねえよ。おれはただオカマ犬に小便の仕方を教えてただけだよ」

「そっぴやオカマ犬は??と思つた瞬間、 「ワンワン」 足下から吠え声がした。

見ると、おれの足下でオカマ犬が吠えていた。おれはオカマ犬をとつ捕まえる。

「お前どこ行つてたんだよ。お前がいけないせいで変態扱いされてるだろう」

「クウーン」

オカマ犬は申し訳ないといった面持ちで鳴いた。

「直人、オカマ犬って何のこと言ってるの？」

朱美がクチバシを挟んだ。

「こいつのことだよ」

おれは朱美にオカマ犬を見せてやった。

「ひよつとして福ちゃんの言ってたポン？」朱美は喜びの声を上げたと思つた途端、それは悲鳴に変わった。

「なんで直人の裸できてるのよ！？ 変態」

「うおっ、忘れてた」

「・・・・・・やっぱ下の毛も金髪なんだ」

福ちゃんはおれの陰毛を見て感心した。

「さすがにはずい？」

朱美だけならともかく、福ちゃんにまで見られるとさすがに恥ずかしい。

おれはポンを使つてちんちんを隠した。

「クウンーン」

ポンは悲しいような、すべて諦めたようななんともいえない切ない声でないた。

「直人って、なんも考えてないでしょう」

服を着替え終わつても、朱美の怒りはおさまらなかつた。

「おれだつて色々考えてるよ」

「じゃあ、いまなに考えてるのよ？」

「フルチンで濡れたズボンはくと気持ち悪いなとか」

おれは正直な気持ちを告白する。

「女の子の前でフルチンとか言わないで！ たくう、無神経なんだから。」

やっぱ直人はなにも考えてない」

「？お前だつて、でけえ声でフルチンとか言ってるだろう？と思つたが、おれの脳みそが黙つておけと忠告するので、口を閉じたままにしといた。」

「ところで朱美。こんな夜中にお前は何しにきたんだ？」

おれも不審だが、福ちゃん達も負けず劣らず不審だった。

真夜中にガキンチョつれて、こんな寂れた灯台に来るなんて普通あり得ない。

「・・・・・・ぼつ、ボクは別に・・・・・・」

朱美が言い淀むと「紙飛行機飛ばしに来たの、舞島君」福ちゃんが言葉を継いだ。

「紙飛行機？　こんな夜中に？」

「うん。おまじないだから。人に見られたら効なくなっちゃうからね」

「・・・・・・そつ、そうだよ。ポンが教えてくれただよ」

「あつ、あの新聞に書いてあったヤツか？」

「直人読んだの？」朱美は悲鳴のような声を発した。

「妖精追ひ払うヤツはよんだ。紙飛行機のやつは読んでない。読んでみるか？」

「ダメ。読んだらダメエ！」朱美はギャアギャア喚きだした。

「わあつた読まねえよ」

たいして興味ないし。

「約束する？」

朱美は上目遣いで念押ししてきた。

「おう見ねえ」

「約束破ったら絶交だからね」

朱美はしつこかった。

「でえ丈夫だ。読まねえから。ところで今日は紙飛行機飛ばさないのか？　見られるのやなら隠れてるぞ」

わざわざこんな夜中に紙飛行機飛ばしに来たんだ。飛ばさないのも可哀想だ。

「もうおまじないはいいのよ、舞島君」

福ちゃんはニコリと笑いながら言った。

「ねえ朱美ちゃん」福ちゃんは朱美に同意を求める。

「……………うん」朱美は俯きながら呟いた。

「でもココまで来て飛ばさないのもなんだから、飛ばしましょうか」福ちゃんは言った。

「そうだな。朱美飛ばしてみろ」

「ここで飛ばしたくない。海にむかって飛ばしたい」

「海って。潮風が強いからまともに飛ばねえぞ。それに海に落ちちまうし」

「いいの！　ボクは海にむかって飛ばしたの」

「——だって、舞島君」福ちゃんが引き継いだ。

「うんじゃあ、飛ばしてみるか」

観光地でも自殺の名所でもないのに、崖には柵などという洒落たもんは一切なかった。

おれは朱美もいるので余裕を見て、崖から三步ほど離れた位置に立った。

朱美はそれでも怖いらしく、おれの濡れたズボンを掴んだ。

「それおしっこズボンだぞ」

おれがからかうと「——バリアー張ってあるから平気だもん」と言った。

「現金なもんだ？　と思ったが、指摘したら朱美が怒るのは目に見えていたので黙っておいた。

「おれが風を見るから、おれが声をあげたら飛ばしてみる」

「うん。直人。ちゃんと風見ててよね」

「馬鹿野郎！　おれはタマカスの風使いと呼ばれてるんだ。間違えるはずねえだろう」

「……………うそばい」朱美は可愛げのない顔で呟いた。

「本当に決まってるだろう！　おれはサンパウロで修行積んできた男だぞ」

おれがいかにか修行積んできたから力説しようとする、「舞島君、追い風になったわ！」

福ちゃんが声をあげた。

「おう、今だ。朱美飛ばせ」

おれは慌てて、朱美を急かした。

「うん！」

朱美は手にした紙飛行機を急いで飛ばした。

潮風に乗って飛び立つ紙飛行機。

成功かと思つた瞬間、風向きが変わつた。

紙飛行機は大きくUターンし、あるうことか、おれのおでこに直撃した。

「痛つて。てつ、なに帰ってきてるだよ。ハイジャックされたわけじゃねえだから、簡単に帰ってくるな」

おれは紙飛行機に説教をたれた。

「紙飛行機に説教しても仕方ないでしょう」

「加藤みたいなこと言うな」

言い方といい、口調といい、加藤そっくりだ。

「――誰？ 加藤つて」

朱美の声は、何故かブスくれてた。

「おれの隣に座ってる口うるさい女だよ」

「フーン。どうせ直人がバカバカだから、そのお姉ちゃんもいつも怒ってるだよ」

女同士のシンクロニティが発生したのか、朱美は加藤の肩を持つた。

「なんでおれが馬鹿なんだよ」

「直人はバカだもん。それよりまた飛ばすから風みて！」

山ほど言いたいことがあつたが、おれは黙つて風の流れを読んだ。風向きは変わった。

「今だ。飛ばせ」

「うん」

朱美は紙飛行機を飛ばした。紙飛行機は風に乗る夜空の向こうへ飛んでいた。

「おつ、今度は上手くいったな。これでいいのか、朱美？」

「いいよ。あとは直人がもう少しまともになつてくれればいいんだけど」

「なんでおれの話になんだよ」

「それは舞島君が王子様だからよ」

朱美のかわりに福ちゃんが答えた。

「王子様？」

「女の子は、王子様には格好良く振る舞ってほしいもののよ、ねえ朱美ちゃん！？」

「こんなの王子様じゃないもん」

朱美はブイと横を向いた。

可愛げのガキンチョである。おれは嫌味の一つでも言つてやろうとしたその時。

「なにやつてるの、みんな？」

ビックリして一斉に振り返る。後ろにはコンビニ袋をぶら下げた愛さんが立っていた。

「なんだ愛かあ」福ちゃんは胸をなで下ろした。

「お姉ちゃん。戻ってきたなら声ぐらいかけてよ」妹は文句をつけた。

「あつ、買ってきてくれたんですか？」

おれは礼を言つた。

「これお釣りです」

愛さんは下着の入ったコンビニ二袋と釣り銭を渡してきた。

「うんじゃあ、ちよつと着替えてきます。愛さん達はジューズでも飲んでてください」

おれはそう言い残すと、灯台の裏にまわつて、着替えをする。

三分後。おれはパンツとＴシャツを装備してみんなの前に現れた。朱美が飲んでたジューズを吹いた。

「——なんで下着姿で出てくるの？ 直人は変態なの？」

「へんな勘違いするな。まだズボン濡れてるから、干しといたん

だよ」

「まあまあ。目の保養だと思って、怒らない怒らない」福ちゃんが、朱美をなだめにかかる。

「フク。おばさんくさいから」愛さんが小声でツツコミをいれる。
「なに言ってるの、愛。若い男の子のパンツ姿なんて、拝める機会なんてそうそうないだからよく見ておかないと」

福ちゃんはマジマジとおれの体を見つめた。

「なんか恥ずかしいスよ」

さすがのおれも俯くレベルだ。

「いやいやお気になさらずに」

「——福ちゃん、あんま見ちゃダメ！」

朱美が叫ぶ。

「ダメなの？」

「あんまり見ると福ちゃんの目が腐っちゃうから、ダメなの！」

「——おれの体は細菌が何かか」おれは文句をつける。

「セクハラで訴えられても困るので、この辺で止めときますか」

福ちゃんはおれを見つめるのを止めると、オロナミンCを一気飲みした。

飲み終わると、地平線の彼方から太陽が顔を出した。

「もうこんな時間？」

愛さんはうつすらと白みはじめた空を見上げた。

「シンデレラはそろそろ帰る時間ね」

福ちゃんは朱美の頭にそつと手を置いた。

「……………うん」朱美は浮かない声で返事をする、おれを見上げた。

「……………直人、また遊んでくれる」

「おう、いいぞ。おれはいつも暇だから」

「約束だよ。破ったら酷いからね」

「大丈夫よ、わたしが舞島君の携帯番号押さえておくから」福ち

やんは太鼓判を押した。

「本当？」

「まかせない」福ちゃんは力強く自分の胸を叩いた。

福ちゃんの巨乳が揺れる。

おれは福ちゃんの言葉より、揺れる巨乳のほうに気になった。

「ああっ！ 直人がエロ人になってる」

朱美は目ざとく、おれの視線の先に気づいた。

「誰がエロ人だよ。おれはただぼけとしてただけだよ！」

「ふん。うそつき。エロ男！ エロエロ菌がうつちゃうからお姉ちゃん早く帰ろう」

「遊んでもらったんだから、そんなこと言っちゃダメよ」姉は諭したが、妹はそっぽ向いた。

「いいんですよ、愛さん」

？福ちゃんの巨乳ガン見してたのは事実だから？

それでも姉は、もう一度おれに頭を下げた後、妹の車椅子を押して帰って行った。

姉妹の姿が見えなくなると、福ちゃんは口を開いた。

「今日はありがとうね、舞島君。朱美ちゃんと遊んでもらって」

「いや、礼いうのはこっちですよ。パンツまで買ってきてもらったんですから」

？うつかりすると、露出狂と勘違いされてたかもしれないだから？

警察に駆け込まれないだけでも、福ちゃん達には感謝しないといけないのかもしれない？

「ところで朱美ちゃんの件なんだけど・・・」

「まかせてください。遊ぶくらい。学校終わったあとでも、遊びにいきますよ」

「それなんだけどね、舞島君」

福ちゃんは真顔になる。

「朱美ちゃん、実は真夜中しか外にでれないの」

「へっ、今日はおまじないとかで真夜中に来たんじゃないの？」

「半分本当だけど半分うそ。たしかにおまじないするために紙飛行機飛ばしにきたけど、本当は夜じゃなくても平気なのよ」

「じゃあなんでこんな夜中に」

「朱美ちゃん対人恐怖症で昼間は外でれないの」

「おれには平気そうだったけどな」

「事前に訓練してたし、それに舞島君の場合は特別よ」

「特別？」

福ちゃんは一瞬逡巡したあと、「舞島君は出会いが強烈すぎたから、緊張する暇なかったのよ」

「そんな衝撃的な出会いだったかな」

「けっこう衝撃的だと思うけどな、私は」

「ところで朱美は学校とか行ってるですか？」

「——いつてないわ」

「そうか……」

なんか訳ありだろうとおもったけど、思った以上に深刻だった。ただでさえハンディがあるって言うのにな？

普通のガキなら外で友達と駆け回ってるだろうに。

朱美には駆け回るための足も、一緒に遊ぶ友達もいなかった。

「なんで対人恐怖症なんかになっちゃっただよ？」

福ちゃんは悪くないのに、おれは無性に腹が立って詰問口調になっ
ていた。

「学校側は認めてないけど、イジメが原因みたいね」

子どもは残酷だから。福ちゃんはぽつりと呟いた。

「——やな話だな」おれは俯いて地面を見つめた。

「そうかもしれないけど、ずっとやな話のまんまかどうかは、朱美ちゃんや、そしてわたし達次第じゃない？」

おれは顔を上げた。

「ゆっくりだけど朱美ちゃんは一步步つ前に進み始めてる」

「前に？」

「進んでるわ。一ヶ月前まで、朱美ちゃんは私を部屋に入れてく

れなかった」

「そうなのか？」

「ええ、一週間ドア越しで会話したわ」

「えつ、一週間も？」

「かかったわね。朱美ちゃん、ああ見えてもなかなか手強いから」
「福ちゃんはそう言う」と笑った。

「そんなにかかったのか」

「福ちゃんと朱美は、あの何気ないやりとりの裏には、一週間もの時間があったのか。」

「ええ。じつを言うと、ここまで来るのにも十日ほどかかっている」

「十日も！」おれは気まぐれで灯台にぶらりと立ち寄った。

朱美と福ちゃん達は、十日かけてここまでやってきたのか。

「じゃあ、昼間朱美と遊ぶのは難しそうだな」

「夜でこんだけかかっているんだ。昼間はさらに時間かかりそうだ。」

「今は無理ね。ずっと引きこもっていたから、朱美ちゃんの生活リズムも夜型になちゃっているしね」

「そうか。うんじゃあ夜行くよ。どうせ夜中までバイトしてるし」

「ありがとう、舞島君」福ちゃんは頭を下げた後、言いづらそうな顔

「実はわたしから頼みがあるのよ」

「なんですか頼みって？」

「遊び相手もいいんだけど、舞島君朱美ちゃんの家家庭教師やってみない？」

「家庭教師？ タマカスのおれが？」

「お願い。わたしを助けると思って。些少だけお金も出るから」
「福ちゃんは手を合わせながら、おれに頭をさげた。」

「いやそう言う問題じゃないで。福ちゃんは知らないかもしれなけれど、おれの通ってる高校なんて、ひらがなで名前かければ受かるような高校なんだから。そんなバカ高通ってるおれが他人様に勉

強なんか教えられるわけないだろう」

「大丈夫、舞島君ならやれるから」

福ちゃんも根拠もなく言い切った。

「いや、家庭教師は福ちゃん担当で、おれは遊ぶの担当にしようよ」

おれは逃げる。

「いやそれが、実言つと朱美ちゃん以外にも家庭教師を引き受けてる子がいるの。その子の家がいま大変だから、あまり朱美ちゃんのところいけないかもしれないのよ、実は」

「えっ、ほかに面倒みてるのいるの？」

「うん。自閉症の子みてるの」

「自閉症？ 朱美みたいに苛められたのか？」

おれは自閉症がどんなものか知らないが、昔みたドラマで自閉症の子供が出てきたドラマを視た記憶がある。

自閉症役の子役はひたすら暗く、学校でも苛められていたような気がする。

暗くてつまらないドラマなので、すぐにチャンネルを変えたからよくは覚えてないが。

「いいえ違うわ。自閉症は認知障害だからイジメは関係ないわ。生まれつきの障がいよ」

「そうなのか？ なんかドラマだと苛められてたから、てっきりイジメのせいで自閉症になったのかと思った」

「大丈夫、その子は苛められてないわ。まだ三歳だから幼稚園も通ってないし」

「三歳で家庭教師なんか必要なのか？ そんなときから勉強させたらかえっておかしくなっちゃうわいか？」

おれみたいにあまり勉強しないのもアレだが、それにしたって三歳で家庭教師は早すぎるような気がする。

「うーん。舞島君が認識してる勉強とは違うのよ。たとえば舞島君が喋ってる日本語だって幼児のとき学習したから、今喋れるわけ

でしょう？」

「うん、まあ勉強はしてないけど勝手に覚えたな」

「その勝手に覚えた、というのも学習の一種なのよ。そういう普通の子ならほつとしても勝手に学習できるような事を、自閉症の子は学習出来ないのよ。だから教える必要があるの」

「よくわからねえな。自閉症って、言葉も喋れない病気なのか？」

「喋る能力がないわけじゃないの。喋る必要性がよくわからないのよ」

「必要性あるだろう。普通。腹減ったとか、おもちゃ買ってくれだとか、ガキでも言いたいことはいっぱいあると思うぞ」

「相手にたいして訴えるというのは、相手のことをしっかり認識してないと出来ないことなのよ。たとえば舞島君だって石相手におもちゃ買ってくれだとか、お腹空いたとか訴えないでしょう？」

「そりゃあ、そうだ。石相手に喋ったら頭がおかしいと思われるよ」

「自閉症の子は認知に障がいがあるから、人間を物のように認識してしまうの。だから

自閉症児にとって他者とは路傍の石みたいな存在なのよ」

「人間を物！？」意味がわからない。

「他者の認識を体験する機械がないから、自閉症の子がどういう風に人間を認識してるか

誰にもわからないけど、簡単に説明するとこんな障がいかな。まあ、障がいの重さ、個性によって幅はあるけどね」

「わかったような、わからんような」

おれは頭をひねった。

「理解しづらいのは無理ないわ。自閉症は障害児のなかでも一番難しい子だから」

「そんなに難しいのか？」

「難しいし、育てるのも大変な子よ。幼児期だと、親が名前呼んでも反応しないからね」

「――親が呼んでるのにか？」

親が呼んでも反応しない幼児なぞ、おれには想像できない。幼い子供というのは、カルガモの親子のように親にへっついてるのが普通なんだから。

「ええ。振り向かないわ。親を親として認識してないからね。」

「そりゃあ、大変だ。そんな子面倒見てるじゃあ、たしかに朱美には手が回らないかもな」

「――そうなのよ。だから舞島君お願い。テキストとか教え方とかは、私が責任もって教えるから」

この通り。福ちゃんは頭をさげた。

「頭あげてくれよ、福ちゃん。出来るかどうかわからないけど、家庭教師やるから」

「本当？」福ちゃんは顔をガバツと上げ、目を輝かした。

「やるよ。おれなんかで良ければ」

本音を言えばあまりやりたくはなかった。

朱美のことは同情もするし気にもなるが、勉強は嫌いだし、加藤の約束や、片桐のこともある。

でも頑張ってる福ちゃんを見ると、おれも頑張ってみたいと思った。

？おれのこれまでの人生、たいした努力したことないしな？

これから社会出るんだ。一度ぐらい努力したほうが、自分のためだろう。

「ありがとう、舞島君」

福ちゃんは両手でおれの手を握った。

「できるかな、おれに」

「大丈夫よ、舞島君は朱美ちゃんの強化子だから」

「強化子？」

「学術用語。正確に説明すると難しいけど、簡単に言っならご褒美みたいなもんね」

「おれが朱美のご褒美？」

「そうよ。だって舞島君に……」と言いかけて、福ちゃんは口をつぐんだ。

「おつといけない。女の約束忘れるところだった。とにかく舞島君といると朱美ちゃんは嬉しいのよ。友達といると嬉しいもんでしよう」

「嬉しいかもしれないけど、家庭教師とは関係なくないか？」

「大ありよ。嫌いな人間に教わるより、好きな人間に教わるほうがいいでしょう？」

「まあ、そうかもな。しかしおれそんなに好かれてるかな、朱美のヤツに」

どちらかと言うと嫌われてるようにしか見えないだが。

「好かれてるわよ、自信もって」

福ちゃんは頼りないおれを励ますためか、おれの肩をバンバン叩いた。

「話がまとまったところで、そろそろ帰りますか。日も昇つてきたし、舞島君学校でしょう？」

おれは空を見上げながら頷いた。たしかに学校行くなり、そろそろ灯台から離れないといけない時間だった。

「わたし駅まで行くけど、舞島君は？」

「おれもそのまま学校行くんで、駅まで一緒に行きますよ」

「そう。よかった。とりあえず忘れないうちに携帯番号交換しましょう。それと放課後時間取れる？ 眠いかもしれないけど？」

「大丈夫ですよ」

どうせ学校で寝るし、加藤の所の子守は夕方からだった。

「じゃあ、今日の三時駅前のマックで待ち合わせましょう。朱美ちゃんの家庭教師のことで打ち合わせたいこといっぱいあるし。テキストや課題もそのとき渡すわ」

「わかりました。今日の三時スね」

おれは返事をする、乾かしておいた服を取りに行った。

君が好き 前編

放課後。

おれは福ちゃんと会うために駅前のマックにむかった。

三時という中途半端な時間のせい、マックはいつもより空いていた。

福ちゃんの姿を求め、店内を探したが見あたらない。

あの背の高さだ。よもや見落とすこともないだろうから、福ちゃんはまだ来てないのだろう。

——さきに注文して待ってるか。

カウンターに向かう途中、おれは姦しい女子高生グループの横を通り過ぎた。女子高生達は喋るのをやめて、おれの顔を盗み見た。

おれがチラリと見ると、女子高生達は慌てて顔を逸らした。

どうやらおれのことを外人と勘違いしているようだった。

いつものことなので、おれはそのまま通り過ぎた。

外人と勘違いされるのは面白くないが、誤解をとくのは面倒だし、誤解を解く必要性もなかった。

おれはカウンターの上に置かれたメニューを覗き込む。

新作のハンバーガーは出てなかったで、好物のビックマックセットを注文した。

返事が返ってこない。

怪訝に思っただけ顔をあげると、ニキビ跡があるおれと同年ぐらいのアルバイトの姉ちゃんが固まっていた。

日本語で喋りかけたというのに、店員の姉ちゃんはおれのことを外人と勘違いしているようだ。

慣れない外人相手に緊張しているのか、アルバイトの姉ちゃんのほっぺは真っ赤だった。

女子高生相手なら誤解されたまんまでも問題ないが、マックの姉ちゃんに固まられてはビックマックが喰えない。

おれは誤解を解くためゆつくりと注文を繰り返した。

ようやくおれのことを日本人とわかったのかアルバイトの姉ちゃん慌てて動き出した。

一生懸命ポテトに塩を振ってるアルバイトの姉ちゃんの後ろ姿を見つめながら、おれは自分の外人面を疎ましく思った。

生まれた時からこの面をぶら下げてるが、得した記憶はない。

初対面の人間からは拙い英語で喋りかけられるし、道で外人と会えばおれにはさっぱりわからない流暢な英語で道を聞かれたりもする。

？中途半端だな？

おれは外人でもなく、日本人でもない。

ため息をつくと同時に、カウンターにビックマックセットが置かれた。

会計を済ますと、おれは窓際の席に座り福ちゃんが来るのを待った。

暫く待っても福ちゃんは来ない。

ポケットから携帯を取りだし、時間を見る。 約束の時間まで、

五分ほど時間があつた。

どうやら早く来すぎてしまったようだ。

ついでに携帯の着信もチャックする。

誰からの着信はない。

？片桐の野郎連絡なしか？

マックに来る途中何度も携帯をかけたのに、片桐からはなんの返事もなかった。

おれは携帯の液晶画面を憎々しげに睨みつけた後、馬鹿らしくなって携帯をポケットに放り込んだ。

？このおれがなんで片桐のお世話係なんかやらなきゃなんねーだよ？

片桐のアホはただでさえ出席日数がやばいというのに、学校をサボりやがった。

おれは片桐がダブろうが、トラックに轢かれようがどうでもいいのだが、片桐を一刻も早く学校から放り出したい先公共はアワを喰った。

テストなどは、先公公認のカンニングで乗りきれるとしても、タマカスも学校である以上、出席日数に関しては甘くするにも限度があった。

出席日数があまりにも足りない、ダブらせるしかない。

普通のヤンキーならダブれば恥ずかしくなって勝手に辞めるが、片桐の場合ダブっても恥ともなんとも思わない。

平気な面して学校に通ってくるのだらう。

早く辞めて欲しい学校側としては迷惑極まりない。

しかも、だ。

片桐は今年三年だから、おれと亀吉が無事卒業となれば、タマカスで片桐の暴走を止めることが出来る人間が誰もいなくなってしまう。

そしたらアノ片桐のことだ。

不良連中からはミカジメを取るわ、シンナーやらパー券もさばくだらう。

下手すりゃあ、シャブも捌きかねない。

学校内に片桐組のシマが出来るようなもんである。

先公共からして見れば堪ったもんじゃないだらう。

？だからと言って、宮田もおれに頼むなよな？

宮田の野郎先公のくせに、生徒のおれに、片桐にこれ以上学校休まないように言ってくれと、頭を下げて頼み込んできた。

片桐の面倒など見るくらいなら、ゴリラの面倒みてるほうがマシだった。

てか面倒見るなら片桐より、ゴリラだよな。

おれはゴリラの面倒みる自分を想像してみた。

ゴリラにバナナをやるおれ。

ゴリラの膝枕で眠るおれ。

ゴリラにマウントを仕掛けるおれ。
やべえ。楽しそうだ。

おれはゴリラに生まれ変わった片桐と脳内で戯れたが、片桐が発情期になって雌ゴリラを襲うところで現実に戻り、片桐の携帯に電話をかけた。

出ない。留守電になってる。

「野郎、電話ぐらいでやがれ」

さつきから何回電話してると思ってるんだ。
しょうがない。

おれは亀吉の携帯にかけた。

亀吉も休んでるので、片桐の隣で茶坊主してる可能性は高かった。

亀吉の携帯も留守電だった。

亀吉にしては珍しい。

いつもは三コール以内に電話に出るのに。

？なんかあったのか？？

おれは心配になってきた。

片桐はともかく、亀吉が出ないのはおかしい。

何かトラブルに巻き込まれたのかもしれない。

片桐に喧嘩をふっかけるヤンキーなんて地元にはいないと思うが、揉めてるのがヤクザならわからない。

片桐のガラぐらい掠うかもしれない。

げんに一回掠われてるし――。

胸騒ぎがする。

おれは片桐組に電話をかけようとする――

「ごめん、待った」

片手にはトレイを、もう片手には本屋の紙袋をぶら下げた福ちゃんが目の前に立っていた。おれは携帯を閉じた。

「電話？ 大丈夫よ、電話かけても」

そっ言いながら福ちゃんは椅子に腰かけた。

「いや、もう大丈夫」

さすがのおれも福ちゃんの前でヤクザの組長宅に電話をかけるのは気が引けた。

おれは携帯をポケットに放り込んだ。

「福ちゃん、ここ禁煙席だけど大丈夫？」

席を決めるときあまり考えてなかったけど、福ちゃんは大学生なので、煙草ぐらい吸うかも知れない。

「平気平気、生まれてこのかた一本もタバコ吸ったことないから。舞島君も高校生なんだから吸っちゃダメよ」

「おれは吸いませんよ。タバコ嫌いだから」
酒は飲むけど。

「そう、ならよかった。これでも私は教育に携わる人間ですから。目の前で未成年にタバコ吸わせるわけにはいかないから」

「ところで福ちゃん、その紙袋は？」

おれは椅子の横においてある紙袋を指さした。

「あつ、これテキストとか指導の仕方とかの注意書き」

「——そんなにあるのか？」

紙袋の中身はかなり詰まってそうだ。

漫画すら読まないおれに何を読ませようとしてるんだ、この人は「あつ、そんなに怯えないで舞島君。私物の本がほとんどだから。

舞島君に読んでもらいたいのはこれだけ」

福ちゃんは袋からテキストの束を取り出した。

そんなに厚くない。てか薄い。

「これが課題のテキスト、こっちが指導の仕方のメモね」

おれは課題のテキストをペラペラ捲った。

ふかい谷

あおい空

まぶしい光

おれでもわかる簡単な漢字の問題が並んでいる。

「これならなんとか教えられそうだな」

「——でしょう。これは小学校2年生の一学期に習う漢字だから、

朱美ちゃんでも簡単にとけると思うわ」

「二年？ 朱美の奴はたしか三年まで学校行つてたんだろ？
三年の問題からやらせればいいじゃないの？」

「舞島君の意見も一理あるけど、この課題は学力の強化が目的じゃないの。学力をつけさせるよりも勉強する姿勢を作ることが目的なの」

「勉強する姿勢？ 背を伸ばしたって頭はよくなんねえだろう？」
おれはどうも精神論という奴が嫌いだ。

「そつちの姿勢じゃないわ、舞島君。本格的に勉強を教えるまえに、朱美ちゃんに勉強を好きになつてほしいのよ」

「そう簡単に勉強なんて好きになるか？ おれは頭ワリーから、生涯勉強好きにならない自信があるぞ」

「頭の善し悪しは関係ないわ、舞島君。知的障がい児でも勉強好きにさせることはできるし、IQ180を超える天才児でも苦手意識を植え付けることはできるわ」

「そう都合良くいくのか？」

筋金入りの勉強嫌いであるおれは、福ちゃんの話が信じられない。
「難しい理屈じゃないわ。勉強に対して苦手意識を植え付けなければ、その子が絶対とけない課題を与えて罵倒すればいいし、勉強を好きにさせなければ、簡単な課題を与えていっぱい褒めてあげればいいわけだし」

「ようは調子にのせるわけか？」

「そうとも言う」

福ちゃんはストローを口に咥えると、ジュースを飲んだ。

喋って喉が渴いたようだ。

「しかし福ちゃん、あんま調子にのさせると勉強を舐めたりしないか？ こんなもん簡単だって」

「そういった懸念もあるけど、楽観的なのは悪いことじゃないわ。日本人は努力とか根性とかそういった精神的価値観が好きだから、自信家とか楽観的な人間をあまり評価しないけど、私の経験則で言

うと学習を楽しめる人間のほうが、教えるほうも楽だしスキルも習得させやすいわ」

福ちゃんは一息つくと「でね、舞島君。学習させづらい、スキルを習得させづらい人間って、どういう人だと思う？」

「おれみたいに頭の悪い人間に決まってるだろう」

「——違うわ。その学習に対する成功経験が皆無であり、学習中に辛いことばかりあった人間よ。このタイプの子は学習すること自体拒むから、学習に取り組ますこと事態困難になってしまうの。朱美ちゃんはこのタイプではないけど、学校通ってないせいで、勉強することに慣れてないわ。だからまず勉強が楽しいものだということ。努力すれば報われるということを学習させないとね」

「——そう簡単にいくかな？」

まだ納得できない。

「適切な介入を行えば、人間を変えることはできるの。人間は素質と環境の生き物だから」

「素質と環境？」

またしても難しい言葉が出てきた。

「素質とは、その人の遺伝的能力や性向。遺伝的能力や性向は、遺伝子とか脳みそとか弄くらない限り変えることは難しいけど、環境はコントロールすることはできるわ」

「——なんか良くわからねえけど、福ちゃんはいろいろ考えてるんだな。おれの担任の宮田もそこまで考えてるのか？」

宮田の若禿げがそこまで考えて、授業してるとは到底思えないのだが。

「宮田先生が考えてる考えてないわ、会ったことない私にはわからないけど、私の指導法の原理はABAがベースになってるの」

「ABA？」

「応用行動分析を原理とした自閉症の子に対する学習プログラムよ。特殊な教育法だから、普通の先生はまず知らない。勉強熱心な養護の先生なら知ってるかもしれないけど」

「特殊って、なんか変なことでもやらせるのか。変な影絵見せたりとか？」

「影絵？ ああ、ロールシャツハ・テストのことね。やらないわ。A B Aは人間の内面を探る技術ではなくて、人間の行動をコントロールすることが主眼だから」

——行動が変化すれば内面も変化するんだろうけど。

福ちゃんは独り言を呟やいた。

自分の言葉に対して考え込んでるようだ。

「一つ聞いていいか、福ちゃん？」

「——なに舞島君？」

福ちゃんは考え込むのを止め、おれの顔を見つめた。

「ひよつとして、おれもそのA B Aとやらをやるのか？ 朱美に対して？」

——おれバカだから、難しいことわかんねーぞ。

おれが正直な気持ちを告白すると「大丈夫、大丈夫。難しいところや面倒くさいところは私が担当するから。舞島君はわたしの言うとおりやってくれればいいのよ。まあ、舞島君もA B Aの勉強してくれれば大いに助かるけど」

「やつぱ勉強した方がいいのか？」

「もちろん！」

福ちゃんは笑顔で言い放った。

おれはがつくしと頭を垂れた。

「できるかな、おれに——」

「できますとも！ なぜなら舞島君には才能があるからです！」

「才能？ おれに？」

発揮した覚えまるでないぞ。

「勿論あるわ。扱いが難しい朱美ちゃんを、初対面であれだけコミュニケーション取れたんですもの。舞島君にはA B Aの才能があるわ」

激励のつもりなのか、福ちゃんはおれの肩をパンパン叩いた。

「そうかな・・・」

元来お調子者であるおれは、美人のお姉さんに褒められその気になつてきた。

「ちよつと勉強してみるかな。ちなみに福ちゃん、A B Aのコツつてなんだ」

「一に褒めて、二に褒めて、三、四がなくて、五に褒める」

「褒める？ 褒めてりゃいいのか？」

「ただ褒めるのはダメ。課題を達成したら褒めるのよ」

「課題つて、勉強か」

「勉強だけではないわ。生活習慣や、ちよつとした良い行動も褒めてあげるの。褒め方にもコツがあるけどね」

「コツつて？」

「行動の直後に褒めるの」

「直後つて？」

「良い行動したら、三秒以内に褒めるの」

「三秒以内ねえ・・・」

けっこう短いな。

「——舞島君、朱美ちゃんが良い行動したらどうするの？」

福ちゃんがいきなり問うてきたので「すぐに褒めるんでしょう」

慌てて答えた。

「正解！ さすが舞島君ね」

福ちゃんはそう言つと、おれの頭を撫でた。

「照れるよ、福ちゃん」

おれは照れながら、ドギマギした。

福ちゃんが近づいたせいで、豊かな胸元がドアップになったからだ。

「これが直後に褒めるということよ、舞島君」

「あつ、これか」

福ちゃんは、おれに見本を見せてくれてたのか。

福ちゃんの胸元にドギマギしてて気づかなかった。

「これが基本ね。あともう一つ大切なことは、強化子がちゃんと機能してるかどうかチャックすること」

「強化子？」

「正確に説明すると、行動の直後に出現すると、その行動の頻度をあげる刺激や出来事、条件ね」

「わかんねよう、福ちゃん。そんな難しい言葉で喋られても」

「簡単に説明するとご褒美ね」

「ご褒美か。それならわかるわ。おれ馬鹿だから、そういう風に簡単に言ってくれよ、福ちゃん」

「ABAは応用行動分析という心理学がベースだから、あまり端折るのもね。それに、難しい言い方したのには意味があるのよ」

「意味？」

「強化子というのは、行動の頻度があがらないと強化子じゃないの」

「どういう意味だ、福ちゃん」

「たとえば舞島君、ひげ面で汗臭いおじさんに褒められて、勉強する気になる？」

「——ならねえな」

「これが綺麗なお姉さんに褒められたら？」

「予習までするよ」

おれは断言した。

「この場合、強化子として機能してないのはどっち？ 舞島君」

「そりゃあ、おっさんだろう」

「なんで？ 両方おなじ褒めるといふ行動よ」

「……………行動が増えないからか？」

「その通りよ、舞島君。舞島君が理解が早いから、助かるわ。はい、ご褒美ポテト」

福ちゃんはニコニコ笑いながら、ポテトを一本つまんで差し出した。きた。

おれは恥ずかしいやら、嬉しいやらで、どうしていいかわからな

かったが、結局はポテトを食った。

恥ずかしくても、綺麗なお姉さんの誘惑には勝てません。

「今の説明でわかったと思うけど、強化子というのは行動が増えないと強化子ではないの。だから強化子を与えるさいは、その強化子が機能してるか、必ずチャックする必要性があるわ。機能してないようなら、違う強化子を検討してみるのが重要ななのよ」

「ふむ、でも基本は褒めるなんだろう？」

「うん、基本はね。でも褒め方にも色々あるし、同じ褒め方だけで飽きて効かなくなることもあるから、変化をつけるのも重要よ」

「あつ、だから褒美ポテトなのか」

福ちゃんはおれが飽きないよう、褒め方に変化をつけてるのか。

「そこに気づくとは、舞島君はわたしの話よく聞いててくれたのね。お利口さんなお耳ね」

福ちゃんは手をのばし、おれの耳たぶを撫でた。

「たまんねえ？」

ルナ先生の授業みたいだぞ。

おれは中学生時代、何度もお世話になったお色気漫画を思い出した。

「これこそ世界一受けたい授業だ？」

「まあ私のやり方を舞島君がそのまま朱美ちゃんにやると、口リコンに間違えられちゃうから工夫したほうがいいわね。それに強化子が効きすぎるのも問題だし——」

「強化子が効きすぎるって？」

「強化子が効きすぎるのも弊害あるのよ。授業受ける前に、生徒が興奮していると困るでしょう」

「たしかに困るかもな」

押し倒しかねん。

「——さじ加減は今でも迷うわ。自閉症の子が対象だと、手っ取り早くラポートつけるために強めの強化子を使う癖があるからね、私」

「レポートって？」

「信頼関係のこと。はじめに信頼関係つくことは重要なよ。とくに相手が自閉症の子の場合、褒め言葉に反応しないことがほとんどだから、レポートつけがてら他者から褒められたら嬉しいということも学習させないとね」

「自閉症って、人から褒められても嬉しくないのか？」

「褒められるということが、どういう事なのかわからないのよ。他者を上手く認知できないから、そこら辺がよく理解できないのね。だからはじめに学習させることが重要なよ」

「そんなことまで教えられるのか？」

「そんなに難しいことじゃないのよ、舞島君。褒めるときに大きな笑顔を作りながら、その子にとって楽しいことをしてあげれば、自閉症の子でも人の笑顔にも反応するようになるの」

「だから福ちゃん、いつもニコニコ笑ってるのか？」

「地の部分もあるけど、正直に告白すればABAの癖もあるわ。自閉症の子は、相手の表情を読むのが苦手だから、大げさに感情表現したほうが相手にわかりやすいのよ。」

——盲人の杖みたいなものね。

福ちゃんはポテトをつまみ、口に放り込む。

「——ちよつと話がずれたわね。今は自閉症じゃなくて、朱美ちゃんのこと話さないと」

福ちゃんは少しだけ残念そうな顔になった。本当はもっと自閉症の話をしたかったのだ、この人は。

「次は教える上での禁止事項だけど、体罰は禁止ね。いくら怒っても、朱美ちゃんを叩いたりするのはダメ。了解、舞島君？」

「まあ、相手は女の子だからな、約束するよ福ちゃん」

体罰の禁止はわかる。相手は車椅子の女の子だ。殴ってはいけない。

——でも。

「——唾の一件は甘過ぎじゃないか、福ちゃん？ あれこそ拳骨

の一発や二発くれてやるべきじゃなかったのか？」

「拳骨の一発二発喰らわせても、朱美ちゃんが唾を吐くのを止めなかったら、舞島君は車椅子の女の子を殴り飛ばすの？」

福ちゃんはおれの目を見つめながら問うた。

「——いや、さすがに殴り飛ばしやーしないけど、拳骨くらったら唾なんて飛ばさないだろう？」

「舞島君。それは舞島君の主観であり、常識なのよ。相手の主観や、常識じゃないの。人間というのは無意識のうちに自分の常識や主観で相手を理解しようとするけど、人それぞれ主観や常識は違うの」

——重なり合う部分はあるけどね。

「でも誰だつて殴られるのは厭だろう？」

「そんなことないわ。アダルトビデオコーナー見ればわかると思うけど、痛みを快楽と捉える人もいるし、糞尿に性的欲情を覚える人もいるわ。舞島君、彼らを理解できる？ 彼らの常識を共有できる？」

「——いやできないな」

おれは糞尿も痛みも好きじゃない。

彼らが理解ができない。

「福ちゃんは理解できるのか？ そういう連中を？」

「理解できないわ。人間は他者も、自分ですらも理解することはできないの。言語以上の超能力みたいなコミュニケーション能力を手に入れば可能かもしれないけど——」

——それでも無理か。外的要因と内的要因の接触によって意志が生まれるのだから、自己や他者が理解できたとしても……。

福ちゃんは自分の世界に没頭しはじめた。

おれはそんな福ちゃんに呆れつつも、なんだか寂しくて仕方なかった。

自分でも何で寂しいのかわからない。

自分が理解できない。

自分の心の動きが理解出来ない。

自分なのに。

自分の心なのに――

何故寂しいのか、自分がわからない。

おれは唐突に自分が不安定になったことを理解した。

「――なあ、福ちゃん」

不安になったおれは、目の前で己の世界に没頭している女に助けを求めた。

「はっ、しまった。また話がわき道にそれてしまった。ごめん、舞島君」

福ちゃんは手を合わせて、謝る。

「いや、よくわからなかったけど面白かったよ」

いつものおれならここで話題を終えるが、今のおれはさらに問うた。

「なあ、福ちゃん。さつき独りでブツブツいつてた内的要因がどうなの、外的要因がどうの、意志が生まれるだのってなんのことだ？」

「そんなに難しいことじゃないわ。たとえばね舞島君。舞島君は椅子に座っているでしょう、これは誰の意志？」

「誰の意志も何も、おれの意志だろう。おれが座ってるだから」

「でも椅子がなければ座ろうとはしなかったでしょう？」

「そりゃあ、椅子がなければそもそも座れないよ、福ちゃん」

「つまり舞島君が座るという意志が生まれたのは、椅子がここに置いてあるせいでしょう？」

「まあ、そうだな」

「この場合、座るという意思は誰の意思？」

「ここに椅子を置いた人？ それとも舞島君？」

「いやそもそもそんなに深く考えて椅子なんて座らないよ、福ちゃん。福ちゃんは誰が椅子を置いたのか、そんなことまで考えてから椅子座るのか？」

「まさか、何も考えずに座るわ」

福ちゃんは笑って答えた後、「でも座る前に熟考しようが、なにも考えずに座ろうが椅子に座るという行動が行われたのは間違いないわけでしょう？ 結局のところ内的要因と外的要因の接触で椅子に座るという意味が形成されたと思わない、舞島君？」

福ちゃんはコーラに手を伸ばすと、黒い液体を飲み干した。

おれは暫し福ちゃんの言葉を頭の中で噛み砕いた。

たしかに、椅子がなければおれは椅子に座らなかつたらうし、椅子を置いたのはおれの意思ではない。

顔も知らないマツクの店員だ。

「・・・・おれの意思の何割かは、今座ってる椅子によって構成されてるのか？」

「うん。まあ、簡単に言えばね。それ以外にも、いろいろな要素が絡んでくるわ。たとえば常識ね。人間の常識がなければ椅子は椅子でなくなるわ」

「――椅子という常識？」

「うん。あらかじめ舞島君が、椅子が何のための道具か知っていないと、椅子は椅子として機能しないの。たとえばライオンが、この椅子を見ても座ろうとはしない。ライオンにしてみれば、椅子はたんなる障害物すぎないから」

「たしかに。ライオンは椅子があっても座らないだろうな」

椅子に座ってるライオンはちよつと想像できない。

「椅子という常識があつて、はじめて椅子は椅子として成り立つのよ。普通の人間なら簡単すぎて意識することなしに学習してるけど、こういった簡単な誰でも知ってるような常識も、本来は学習の結果なの。常識を学習する機会がなかった人は、普通の人なら当たり前に持っているであろう常識すらも、持っていないのよ」

福ちゃんはおれの目を見つめる。

「舞島君。人との接し方も、常識と同じように、学習の成果なの。母親、父親、同年の友達、異性、いろいろな人と接し、人は他

者との接し方を学習していく」

——しかしなかには学習する機会がない子もいる。

「たとえば、認識に障がいがある自閉症の子。不幸にして両親の愛情が欠如してしまった子。幼くして身体に障がいを負い、部屋に引きこもっている子——」

最後は朱美のことか。まるで関係な話題かと思つて気軽に聞いてたが、いつの間にか自分の話になっていた。

「程度の差こそあれ、皆対人関係を学ぶ機会が少なかったり、難しい子よ。そういった子には、対人関係を学習させてくれる他者が必要なのよ」

「その他者とはおれのことか、ひよつとして？」

「ひよつとしても何も、舞島君のことよ。私や愛もいるけど、舞島君は大きな存在なのよ。なにせ朱美ちゃんの数少ない異性の友人の一人だし、先生でもあるんだから。その存在大きさをや、ちよつとした巨人ね」

福ちゃんは断言した。

おれは責任の重さを自覚させられ、気が重くなった。

「直人君や私が上手く朱美ちゃんに接すれば、唾はきやその他朱美ちゃんの抱える問題行動も解決できるけど、失敗したら朱美ちゃんは今のまんま。学校に登校させるなんて夢のまた夢——」

「——おれなんかに家庭教師やらして大丈夫なのか、福ちゃん」
すっかり自信をなくしたおれは責任を放り投げたくなった。

「そんな自信のない顔しないで、舞島君。舞島君は才能あるから大丈夫。私がこんなこと言うのは、舞島君に自分の常識や価値観で朱美ちゃんを計って欲しくなかったからよ。人は、他者を計るときに自分の物差しで測るわ。」

それは仕方のないことなのだけど、心を扱う人間は、相手に合わせた物差しを作らないといけないの。相手に合わせて物差しを作るという行為は、辛くてある意味とても残酷な作業なのよ」

「なんで残酷なんだ？」

人に合わせて物差しを作った経験のないおれには、何故残酷なのかわからなかった。

「自分の価値観や信念を捨てないと、他者を計る物差しを作ることはできないわ。価値観や信念を捨てるというのは、ときに価値観や信念を貫くことより辛いことなのよ」

福ちゃんは何かを思い返すかのように、遠くを見つめた後、

「――話がズレたわね、舞島君」

福ちゃんは話を戻した。

「体罰の話をしてたのよね、体罰が何故ダメか、舞島君わかる？」
おれはちよつと考え込んだ後、「怪我させる可能性があるからか？」

「大正解。体罰はつねに相手を怪我させる可能性があるの。他にも問題点あるわ、舞島君」

「うーん。あれか。ひよつとしたらさっきの強化子が機能しないのと同じで、体罰が機能しない場合があるってことか？」

「よくわかったわね、舞島君。その通りよ。応用行動分析には強化子の反対、行動の直後に与えるとその行動の生起頻度を弱化させる弱化子というものがあるの。体罰は、問題行動の矯正を狙って、弱化子として与えられることが多いけど、重すぎると怪我させてしまつし、軽すぎると弱化子として機能しないのよ。たとえばね、舞島君」

そう言つと福ちゃんが、おれの頭の天辺をこつんと叩いた。

勿論全然痛くない。

「この程度で、悪いことした舞島君が反省するとおもつ？」

「いや、思わない」

「でしょう。つまり今のは体罰が弱化子として機能してないわけじゃないのよ。体罰賛成派の人は今のは極端に弱すぎると言つかもしれないけど、じゃあ適切な体罰の強さはどれぐらいなのか？　そこまです議論してからじゃないと、体罰を教育に持ち込むべきじゃないわ」
「そこまで考えないといけないのか……」

おれは今まで何も考えずに、人を殴ってきた。これからは少し考えてから殴らないと。

「強度以外にも体罰には問題があるわ、なんだと思う舞島君？」

「まだなんかあるのか？」

おれには十分過ぎるほど考えてるような気がするが……。

「――降参だ、福ちゃん」

「正解は体罰を使用する側の心理的負担よ。舞島君、赤ん坊が悪いことしたからって殴り飛ばせる？」

「殴れないよ」

殴れたら片桐と対して変わらねーよ。

「寝たきりの老人は？」

「それも無理だ」

「触ったら壊れてしまいそんな重度の障がい者は？」

「どいつもこいつも無理だよ、福ちゃん」

殴ること考えただけで、胸くそが悪くなる。

「無理でしょう。でもね、赤ん坊も、寝たきりの老人も 重度の障がい者も悪いことするのよ。体罰という教育方を取るなら、彼らも叩かないといけない。でもこの人達を殴るのは、普通の人ならかなり心理的負担を感じるわ。ここまで極端なメンバーじゃなくても、体罰に心理的傾向を感じる人は多いわ。この私もそうだし。この体罰を行う者の心理的負担も、看過できない問題点なのよ」

「問題点だらけなんだな体罰って。今まで何も考えずに人を殴ってきたけど、ちつとは考えないとな」

たんなる喧嘩だから体罰ではないのだが、暴力も体罰も似たようなもんだらう。

「よく考えた方がいいわ、舞島君。暴力というのは良かれと思って振るっても、相手はそうと思わずに恨みに思うことも多いのよ」

「――人間は決して理解し合うことはないか」

理解し合うつもりで人を殴ったことは一度もない。

大抵がむかつくだの、喧嘩を売られたただのクソつまらねえことが原因だった。

？おれの暴力は体罰ですらねーな？

たんなる憂さ晴らしだ。

まあ、暴力なんぞつまるところ憂さ晴らし程度なんだな。

「なんか考えたら喧嘩もつまんねえな」

「舞島君、そんな喧嘩してるの？」

「おれ自身は平和志向なんだが、なんせこの金髪背負ってるだろ
う。頭の悪いヤンキー連中によく絡まれるだよ」

おれは人格者者ではないので、喧嘩を売られたらすべて買ってしま
う。

「もうそろそろ大人なんだか、喧嘩も控えなさいよ舞島君」

福ちゃんは教師らしく締めると、何度も何度も脱線した話を元に
戻し、朱美の家庭教師の仕方について細かい部分を語り出した。

君が好き 後編

「いかん、話こんでしまった」

窓から茜色の斜光差し込む頃になって、福ちゃんは自分が喋りすぎたことに気づいた。

「アルバイトあるのにこんな長話しちゃってごめんね、舞島君」

「気にしないでくれよ、福ちゃん。バイトまでまだ時間あるし。」

それに聞いて結構面白かったぜ、福ちゃん」

お世辞ではなく、事実だった。話がつまらなかったら、とつくの昔に帰っている。

「そんなこと言われると、また長話しちゃうわよ、舞島君」

「第二ラウンドは明日にしてくれ、福ちゃん」

おれと福ちゃんは二人して笑った後、ゴミを片付けてマックを出た。

マックは駅ビルの一階に入っており、駅に行くには階段を登らねばならない。

おれは改札まで福ちゃんを送ることにした。二人して階段を上がる。

駅前はちょっとした広場になっていた。

仕事帰りのサラリーマン、金のない高校生、絶対売れそうにないアマチュアシンガー、それに暇な爺さんが鳩に餌をやっていた。

鳩に餌をやることは禁止されてるが、だれも爺さんの邪魔するとはなかった。

「見て舞島君。空が真っ赤」

福ちゃんは夕空を見上げていた。

おれも釣られて空を見上げた。

自然の驚異が作り上げた無数の赤色が段々をなし、空を赤く染め上げていた。

おれはその美しさに心を奪われ、夕空を見つめた。

「——舞島君。魂ってなんだと思う？」

福ちゃんは夕空を見上げたまま問うた。

「魂？」

「そう魂。人は魂を語ろうとするけど、今だ語りきることができない。語ろうにも、魂とは何なのか？ 何を持って魂とするのか、しっかりとした定義がなされていない」

女は夕日にむかって独語を呟いた。

「私もまた魂を語れるほど、知識はない。でも最近おもうの。魂とは認識」

福ちゃんは朱く染まった空を見つめたまま述べた。

「——夕日。朱く染まった夕日を見て、色々な人が様々なことを感じる。感動する人もいる。悲しくなる人もいる。綺麗だと思う人もいる。興味が無い人もいる。見向きすらしない人もいる。皆違う認識を持っている。皆違う魂を持っている——」

福ちゃんは語った後「やっぱ人間は不思議だわ」

「不思議？」

「これだけ多様な認識を有している種族は、地球上では人間だけでしょう。言語があるせいかもしれないけど」

「言語って、喋れるかどうか？」

「喋れなくても、言語的思考ができればOKだから——」

得意の長広舌を振るおうとした瞬間、福ちゃんはフラフラと倒れ込む。

おれは慌てて福ちゃんを支えた。

「大丈夫か、福ちゃん！？」

「大丈夫、大丈夫。たんなる貧血だから。長話しすぎたわ」

福ちゃんはおれを安心させようと手を振って見せた。

「舞島君の目って、綺麗ね。陳腐な表現だけどサファイヤみたい」

福ちゃんはおれの目に手を伸ばした。

なんか妙な雰囲気になつてきた。

「ねえ、舞島君彼女いる？」

「なに言つてるですか、福ちゃん？」

おれはドギマギしながら「別にいないけど……」と答えた。

「そうなんだ。じゃあ舞島君の後ろに立つてる子はお友達？」

「へっ？」おれが間抜けな声を上げると、「——舞島。天下

の往来でなにやってるのアンタ？」

後ろから鬼の声がした。

背を向けてるせいで姿は見えない。

が、見えなくてもわかる。

加藤だ。

福ちゃんはヨツコラシヨとおばさん臭いかけ声をかけながら、

おれから離れた。

おれと福ちゃんのラブシーンは、唐突に終わりをつけた。

「——なんだ加藤か」

おれが一言漏らすと、「なんだ加藤かじゃないわよ！ アンタが乳繰りあうのは勝手だけど、わたしに貸しがあるの忘れてないでしょうね！」加藤はマシガンのように怒鳴った。

「忘れてねえよ。これからお前の家行こうとしたところだよ」

おれが弁解していると、福ちゃんが口を挟んだ。

「舞島君つて照れ屋なのね。こんなに可愛い彼女がいるのに、彼女がいらないなんて言つて」

「——彼女？」

おれと加藤は同時に声をあげた。

「ちつ、違いますよ。この馬鹿とはたんなるクラスメイトですから」

加藤は慌てて否定する。

「えっ、私から見るとお似合いのカップルにしか見えないけど」
福ちゃんはいつものニコニコ顔で言い放った。

「カップルだなんて」加藤はマジで恥ずかしがってるのか、顔を赤らめてる。

「羨ましいわ、舞島君みたいに格好いい彼氏がいるなんて」

「いや彼氏じゃないですから……………」

おれが否定すると――。

「またまた」。本当はお姉さんの知らない領域まで突き進んでるじゃないの」

福ちゃんはおばさんくさいことを言っ、加藤をからかった。

「そんな領域進んでませんから、わたし」

加藤は俯いたまんま否定した。

おれはといえば、馬鹿みたいな顔で突っ立ってる。

「舞島君も早く進めないとダメよ。こんな可愛い彼女いるんだから」

「いや、おれは別に……………」

「じゃあ、お邪魔虫は去るから。しっかり青春してね！」

福ちゃんは言うだけ言っ、おれ達の前から去っていた。

後にはモジモジしてる加藤と、なにがなんやらわからないおれが残された。

？なんかよくわからねえけど？

福ちゃんめ、逃げたな。

絶対そうだ。短い付き合いだが、何故か確信できた。

「――とりあえずお前の家行くか」

突っ立ててもしょうがない。

「……………うん」

加藤は俯いたまま呟いた。

満月の下を二人並んで歩く。

加藤は押し黙ったまま、何も喋らない。

おれも加藤の醸し出す雰囲気を押され、黙り込んでいた。

？息苦しいなあ？

けれど不快な感覚ではない。

？それに生暖かい？

夏の暑さもあるが、それ以上に加藤の体温の生暖かさを感じる。
いや違う。

抱き合ってるわけじゃないだ。加藤の体温など感じるわけがない。
加藤の感情を感じて。

この先の――。

この一歩先の未来を予感して。

おれの体温が上がってるのだ。

「――加藤。少し蒸すな」

いつものやりとりが展開するのを期待して。

おれは軽く。ごく軽く言った。

しかし加藤は「・・・・・・うん」と言っただけ黙ってしまった。
おれは再び口を閉じた。

市民公園の入り口を横切ろうとしたとき、加藤は口を開いた。

「・・・・・・疲れたから休んでいこう、舞島」

「おお」

おれは若干どもった。

公園の広場にベンチがあったので、腰を下ろした。

並んで座ることによって、二人の距離がさらに縮まる。

おれはアホみたいな顔して、広場の隅にあるシーソーを見つめていた。

勿論、誰も座っていないからシーソーは動いてない。

傾いたまんまだ。

？昼ならいいのに？

今が昼なら、遊具で遊ぶ子供の声やら、子供を見守るお母さんの
話し声やらで、この沈黙を吹き飛ばしてくれるかもしれない。

しかし今は夜だ。

子供はいないし、誰もシーソーで遊ばない。

加藤も黙りこくってる。

沈黙に耐えかねたおれは「星が綺麗だな」とどうでもいい事を口走った。

「——舞島、喉が渴いた。缶コーヒー奢って」

加藤はおれの言葉を無視した。

「わかった。ちょっと待ってる」

おれは逃げるように立ち上がると、公園の自販機で、加藤の好きな極甘の缶コーヒーと、自分用のコーラを買ってきた。

おれは加藤に極甘のコーヒーを差し出す。

「——ありがとう」

加藤は受け取ると、プルタブに指をかけた。指が震えて、上手く開けることができない。

「おい、どうした！ 夏風邪か？」

どう優しく見ても、加藤の震え方は尋常ではなかった。強烈な病を——。

こじらせると死んでしまうような病を。

予感させる震えかただった。

「——まっ、舞島、胸大きい人好き？」

加藤は声を震わせながら、見当はずれの問いを発した。

「はああ？ なに言ってるんだよ、いきなり」

予想外の問いに、おれは戸惑う。

「わたし・・・・・・・・わたし・・・・・・・・」

——胸が小さいでしょう。声が途切れる。

「男って、胸の大きな人好きだから・・・・・・・・」

わたし胸小さいから——。

女の声は涙に変わっていた。

おれは初めて——。

加藤唯という女をいじらしく思った。

「胸の大小で、女選ぶほどおれはアホじゃねえよ」と言った瞬間、加藤はおれの胸に飛び込んできた。コーラと缶コーヒーが地面に落ち、黒い水たまりを作った。

「舞島、好き・・・・・・・・舞島大好き！」

「おい、加藤・・・・・・・・」

何か言おうとしたが、おれの胸で泣いてる加藤を見ると何も言えなかった。

言葉をかける代わりに背中を優しく撫でた。

？予感的中したな？

昨日までは、いやマツクを出るときは想像すらしてなかった未来が、突然現れた。

大切なことなのに。

神様が与えてくれた準備期間は、駅から公園までの僅かな間だけ。

これぼっちの時間じゃ、何も準備できない。何も考えられない。？まいったな？

どうしていいかわからない。

？恨むぜ、福ちゃん？

おれは自分の鈍感さを棚にあげて、福ちゃんを恨んだ。

福ちゃんが空気入れなきや、加藤も爆発しなかったかもしれない。

いや、時間の問題か。

いずれ爆発する爆弾なのだ。

福ちゃんを恨むのは筋が違う。

火を付けたのはおれのようなし。

「——舞島」

「おう」

「返事して」

「なにを？」

「好きか、嫌いか返事して」

究極の二択。即答できない。

おれは目を瞑った。

こうなったら、なにも考えずに。

ただ思ったことをすらりと言ったほうがいいかもしれない。

目を開くと、加藤の潤んだ瞳が飛び込んできた。

「――加藤、時間をくれ」

すまんが、いまのおれにはどうしていいかわからない。

「――やっぱわたしのこと嫌いなのか？」

加藤は死にそうな声で問う。

「うんなこと一言も言ってねえだろう！」

おれは大声で否定すると同時に、この女のこと好きなんだな
と思った。

どうでもよければ、大声など出さない。

「だってわたしのこと好きだったら、即答できるでしょう？」

「ただの好きなら答えは決まってるだろう」

「どういう意味？」

「嫌いなら付き合ってねえよ、加藤のことが好きだから付き合
ってるに決まってるだろう」

「――だったら！」

加藤の目が急に輝きだした。

「馬鹿、好きにもいろいろあるだろう。友達としての好きとか
恋人としての好きだとか、いろいろとよ」

「どれなの、舞島？」

「どれなのかわからねえから、即答できないだよ」

加藤はがばりと顔をあげると、

「これだけ付き合って、そんなこともわからないの舞島は！」

加藤は忌々しげに叫んだ。

「しょうがねえだろう。おれは恋愛経験乏しいだから。だいたい

お前はいつ頃から、おれのこと好きになったんだよ」

「――会って一週間ぐらいかな」

「早いな、お前」

本人には言えないが、おれは加藤とはじめて会ったとき、眼鏡と
しか印象がない。

「てか、お前だって随分時間かかってるだろう、ここまでくる

まで」

中学からの付き合いだから、かれこれ六年ぐらい経っている。

「——それは仕方ないよ。わたし舞島のことが好きすぎて、振られたら自分がどうなるかわからなかったから……」

加藤はとんでもないプレッシャーをおれにさらりとかけてきた。

「——加藤。ちよつと返事待ってくれ。おれも真剣に考えるから」

これ以上重くなる前に、時間的余裕を貰わないと。

「時間つて、どれぐらい？」

「——卒業するまで。高校を卒業するまでには答えだすから」

「——長い」

「それだけ真剣に、お前の告白を受け止めてるってことだよ」

おれは己の言葉を証明するため、加藤の目を見つめた。

暫く見つめ合った後、加藤は目を逸らした。

「——ずるい」

「なにがずるいだよ。おれは何もしてないだろう？」

「うつさい馬鹿」加藤は小声で罵った後、小指を差し出した。

「——約束。約束だからね舞島」

「おう、男と女の約束だ」

おれは加藤の心が変わる前に、急いで小指を絡ませた。

「——それとソープとか行ったらダメだからね、舞島」

「わかつてるよ」

これ聞いたあとじゃ、さすがのおれも行けない。

二人の小指がほどける。

「——帰るか。ちび共も待ってるし」

「うん」

おれ達は公園を後にする。

帰り道。

暫く黙って歩いてると、加藤が口を開いた。

「ねえ、舞島。聞き忘れたけどさっきの女の人だれ？」

加藤は、面倒くさくなりそんな質問を放り投げてきた。

「福ちゃんのことか？ バイト先の先輩みたいなもんだよ」

「なんでバイト先の女の人とマックから出てくるの？」

さっきまで泣いてたくせに、こういうこと聞くときだけは元気だった。

「ホテルから出てきたわけじゃないだから、いいだろう別に」

素直に事情を説明してもいいのだが、タマカスのおれが家庭教師やるとは恥ずかしくて言えなかった。

「答えられないような関係なんだ……」

加藤の声がまたしても潤んできた。

まずい。

「加藤、少しは惚れた男信じる。福ちゃんとおれは何でもねえよ」

「じゃあどういう知り合いなの？」加藤はしつこかった。

「今度家庭教師するんだよ、おれ」

「舞島が家庭教師！？」

よほどビックリしたのか、加藤の涙は引っ込んだ。声もいつもの調子に戻っている。

「そうだよ。ちょっとした縁で小学生の子を面倒見ることになったな。で、おれ馬鹿だろう。だから福ちゃんに色々教えてもらったんだよ。そんだけだ」

「なんでまた家庭教師なんか？」

「縁だよ、縁」

「ふーん。その子が学校終わった後、勉強教えに行くの？」

「いや夜中だ」

「なんで夜中に？ 教える子小学生なんでしょ？」

「いろいろあるんだよ」

答えるのが面倒くさくなったおれは投げやりに答えた。

「——本当に小学生なの？」

「小学生だよ、馬鹿。いいからおれの事少しは信じる。だいたい、この三年間、女なんかいなかったらう？」

「——中学のときは告白されまくってたじゃない」

「告白されたけど誰とも付き合ってたなかったらう。いい加減にしろ、加藤。そこまで疑われるとさすがに面白くない」

おれが軽く怒ると、「——ごめん。舞島」加藤はすぐへこんだ。

「うんな面すんな。もうすぐ家だぞ」

鶏小屋を改造した貧相極まりない加藤の家が見えてきた。

「うん。今日、わたしこのままバイト行くから、ここで別れよう」

「なんだ家帰らないのか？」

「今日はいつも通り振る舞えそうにないから」

「——そうか。わかった。じゃあちび共のメシは任せろ」

「うん。舞島」加藤はおれの顔を見つめると、ぽつりと「……

・抱きしめて」

いきなり発情しだした。

「——おい、家のそばでなに言ってるだよ」

おれは動揺する。

「だって舞島と離れたくないだもん」

「ガキみたいなこと言うな」

「少しは甘えたって言いじゃん。わたし今まで甘えさせてくれる人いなかったし……」

「たしかに？ 加藤は甲斐性なしの親父のせいで、背負わんでいい苦労をおぶってる。」

おれは加藤を抱きしめ、背を撫でた。

「背中じゃなくて、頭撫でて」

「こうか？」

おれは加藤の頭を優しく撫でてやった。

加藤とのラブシーンが終わると、おれは腹をすかしたガキ共に焼き肉丼を作ってやった。

「なんでこんなに遅かったんだよ、直人？」

桂太は焼き肉丼を頬張りながらブウたれた。

「大人にはいろいろあるんだよ」

まさか姉ちゃんに告白されてたとは言えない。

「ところで恵は？」

時計の針は八時を過ぎてるのに、恵の姿は見えなかった。

「わかんない。電話もないし……」

絵里花が呟く。

「心配だな。ちよつと探してくるわ」

恵は携帯持っていないので、電話するわけにはいかない。

「わたしも行く！」

絵里花がまつさきに手をあげる。

「ダメだ。絵里花と桂太には久美子と光輝の面倒見てもらわないとな」

「えええ〜。桂太だけでいいじゃん。わたしも外でたい〜」

「ダメだ。留守番してる。桂太、お前お兄ちゃんなんだから、おれがいらないあいだ久美子達のことは頼むぞ」

「心配すんなよ、直人」桂太は胸を叩いた。

「久美子、ちゃんとお留守番してるんだぞ」

「うん。早く帰ってきてね、直にい」

弟の光輝も甲高い声で「早く帰ってきて」と言った。

「おう。すぐ恵姉ちゃんつれて戻ってくる」

おれはそう言い残すと、外に出た。

外は真っ暗だった。加藤の家は住宅地ではないので、街灯があまりない。

そのせいで、夜の闇も一際濃かった。

「さて、どこから探すか？」

恵が寄りそうな所を、思い出してみる。

すぐに図書館が頭に浮かんだが、こんな夜中にやってない。

ほかにどこがある？ 夜遊びする性格じゃないし、金もないからな――。

「ひょっとしたら釣りスポットか？」

極貧の加藤家では、釣りはレジャーではなく生活手段なので、金が底を尽きるとその日の糧を求めて、家族総出で海や川に繰り出す生活がかかっているわりにはみなヘタで、一日中釣り糸を垂らしても、何も釣れないことのほうが多かった。

しかし恵だけは違った。

恵に釣り竿を握らすと、必ず大物を釣り上げた。

加藤家の人々は恵の意外な才能に当初は不思議がったが、今では貴重なタンパク源の供給してくれるとあって重宝がられている。

夜釣りもやるから、近所の河原で釣り糸を垂らしてるのかもしれない。

おれは近所の河原を探してみることにした。

恵は膝を抱え座り込んでいた。

「釣り竿も持たずになにやってんだ、こんなところに座り込んで？」

おれは後ろから近づくと、恵の肩を叩いた。「どうした恵？　みんな心配してるぞ」

「な」

恵は何も答えない。ただ川面を見つめている。

「おい、どうした。ボウズだったから落ち込んでるのか？」

「——どうしていいのかわからないです」

恵は暗い川面にむかってぼそりと呟く。

「なにが？」

意味がわからない。

「姉さんにどういう態度とっていいのかわからないんです」

「半分しか血が繋がってなくても、姉妹だろう。今さら気にするな」

「な」

「違うんです！　そう言う事じゃないです！」

普段クールな恵が怒鳴ったので、驚きのあまり呆然となってしまうた。

「うんじゃあ、どういことなんだよ？」

「……私も姉さんと同じなんです。直人さんのことが好きなんです！」

「へっ？」

おれの予想を超えた言葉に、まぬけな反応しか返せなかった。

「——なんで加藤がおれの事好きだって……………あつ、家の前のやつ見てたのか——」

恵はこくりと頷いた。

最悪だ。

「直人さんと姉さんが抱き合ってるの見たら、頭のなかが真っ白になって……………」

「でっ、ここに座り込んでるのか」

恵は顔を伏せたまんまこくと頷いた。

おれは恵の隣に腰を下ろした。

水面には満月が浮かんでいる。

？あのお月さんみたいに丸く収まってくれればいいだが？

難しそうである。恵に何を言っているのか、わからない。

仕方ないので水面に浮かんでる満月を眺めていた。

恵は泣いてるのか、時折鼻を吸る音がした。

おれはポケットをまさぐる。

声をかけてやる事が出来なくても、涙をいはしてやらないと。

出てきたのはテレクラのティッシュだった。

情緒もクソもねえな。

まあ、あるだけよしとするか。おれは恵にテレクラティッシュを差し出す。

「ほら、ふけよ」

「いやです」

「どうして？ テレクラのティッシュでもちゃんと使えるぞ」

「——泣いてる顔、直人さんに見られたくないんです」
女ってヤツは——

面倒くさい。

「じゃあ、後ろ向いてやるから」

「ほっておいてください。直人さんは家に帰って姉さんと……………」

・・」

そこで思い出したのか。恵はわっと泣き出した。

泣いてる子供と女には勝てねえ。

しゃーねえな。

おれはスクツと立ち上がると、川面に浮かんでる満月にむかって飛び込んだ。

盛大な水しぶきが上がる。

恵はビツクリして立ち上がる。

「なっ、なにやってるですか、直人さん！」

「暑気冷ましよ。こう暑いと、水でも浴びないとやってられんかな」

「服着たまんま、飛び込まないでください！」

「素っ裸で飛び込むわけいかならう。変態じゃあるまいし」

「いきなり飛び込むのだって、変態みたいなもんですよ！」

「泳いでるぐらいで変態扱いするな！」

「いいから上がってきてください！」

恵は手を差し出す。おれは恵の所まで泳いでいき、差し出された手を握りしめた。

ぐいと引っ張る。

恵は叫ぶ暇もなく、川に落ちた。

かなづちの恵は速攻で溺れる。

おれは恵を抱きかかえる。

「なっ、なにするんですか、直人さん」

恵は本気でびびったのか、おれの体にしがみついている。

「馬鹿、落ち着け。足つくぞ、ここ」

恵はアッと驚いた顔になると、足を伸ばした。

「・・・・・・本当だ」

「アホだな、お前」おれがからかうと、

「直人さんが悪いですよ！」

恵はかっとなって怒鳴る。

「熱くなるな。恵も水でも浴びて、頭を冷やせ」

おれは恵の頭に川の水をぶっかけてやった。

「——冷たい！ なにするんですか、直人さん」

恵も仕返しとばかり、おれの顔むかつて水をかけた。

二人して水を掛け合う。全身ずぶ濡れになる。恵は川のなかにへたり込んだ。

「——降参です、直人さん。水かけ過ぎです。ちよつとは遠慮してください」

「お前がカツカしてたから、ちよつと冷やしてやったんだよ」

「……そりゃあ熱くもなりますよ。直人さんと姉さんが付きあうですから……」

「恵、なにか勘違いしてないか。おれは加藤とは付きあつてないぞ。告白されたただけだ」

恵はがばりと上体を起こした。

「姉さんを振ったんですか！」

「振つてもいねえよ。返事を保留にただけだ」

「保留つて、家の前で抱き合つてたじゃないですか！」

「あれは友情の印みたいなものだ」

「だつたらわたしにも友情の印をください」

恵は目を瞑り、唇を閉じた。

おれは恵の濡れた頬にキスをした。

「——期待してたところと違います」

「唇にキスしたら友情の印にはなんねえだろう」

「——まあいいです。これで私も姉さんと同じ立場になったわけですね」

「立場？」

「返事待ちですよ。どうせ私も保留なんでしょう？」恵は拗ねた。
「今は女作るところじゃないだ。おれにもちよいとばかり時間くれ」

「いつまでですか？」

「卒業したら返事する」

「——わかりました。それまで待ちます」と恵が言った瞬間、恵の腹の虫が鳴った。

恵は真っ赤な顔で俯いてる。

「家に戻るか？」

恵は黙って頷いた。

二人濡れ鼠で、家に帰った。

全身ずぶ濡れのおれ達を見ると、加藤姉妹は驚きの声をあげた。

「なんで恵ねえを探してにいつてずぶ濡れで帰ってくるの？」

絵里花がもつともなことを尋ねた。

「恵が溺れてたんだよ。うんでおれ様が飛び込んで助けたんだよ」
すらすらと嘘をついた。

「直人さん！ わたしは溺れてたわけじゃあ……」

「恥ずかしがるな、恵。どんな人間もときに馬鹿をやる」

おれは恵の頭をポンポンと叩いた。

「恵ねえも意外と間抜けだな」桂太はからかった。

「余計なこと言うと宿題の面倒みないわよ」

恵は氷の視線を弟に送ると、桂太は首をすぼめた。

「直にい、久美子が溺れてたら助けてくれる？」

「当たり前だろう。水だろうが、火の中だろうが飛び込んでやるよ」

「ありがとう、直にい」

久美子は抱きついてきた。

「おいおい、久美子まで濡れちゃうだろう」

おれは久美子を抱っこしながら言った。

「いいよ、直にいならぬれても」

ニシへ ヒガシへ

おれはアイラブ鮭フレークと書かれたＴシャツと寸足らずジーパンを穿いて、夜道を歩いてた。

濡れ鼠のまんま片桐の所に行くわけにもいかないので、加藤の親父のを貸して貰ったのだ。

？しかしこんなダサイファッションセンスでよくまあヒモができるな？

おれは感心しながらもプレハブ小屋のドアを開けた。

ギャグ漫画みたいに全身を包帯で巻かれた亀吉が、片桐に茶を入れていた。

予想もしてなかった意外な光景に目が点となる。

「——どうしたんだ、亀吉？」

「じょつと、ごろんだんです」

亀吉は喋るのも辛そうだった。

「どう見たって、転んだ傷じゃねえだろう。」

誰にやられたんだ、亀吉

「外村だよ、舞ちゃん」

亀吉のかわりに、片桐が答えた。

「外村って、誠次さんにドスで刺されたアノおっさんか」

「そう、その外村よ」

「——まさかおれに対する当てつけか！？」

外村のおっさんが亀吉をボコる理由なんて、ほかに見当つかない。

「舞ちゃんの件もあるけど、亀やったのは亀がおれの舎弟だからよ」

「揉めたのおれだろう。片桐がなんか関係あんのか？」

「たいした事じゃねーよ。昔外村の女房マメドロしたことがあってよ。それ以来あのアホおれのこと目の敵にしてんのよ」

「——おいっ！ 全然たいしたことあるだろう！」

一生にそう何度もねえぞ。人の女房寝取るイベントなんて。

「片桐。そりゃあ恨むだろう。てか女寝取られたらおれなら刺してるぞ」

「いやおれは悪くねえて。おれは外村の女房に利用されただけだから」

「利用って？」

「ほら外村の野郎ポン中だから、女房がソープで稼いできた金をみんなシャブで溶かしちまうだよ。それだけでも別れたくなるのに、外村のアホはラリると女房を殴るんだよ。お袋！とか叫びながらアイアンでね。」

「そりゃあ、別れたくなるわな」

「てか、どうしてそんなクズとくつついたんだ？ 男の趣味悪すぎんだろう。」

「だろう？ 外村の女房もポン中で頭弱いけど、そこは舞ちゃんと同意見なのよ。でも外村が恐くて、別れたくても別れられないってわけよ」

「だから用心棒がわりに、片桐を引つ張り込んだのか」

「正解。舞ちゃんの言うとおりよ。外村の女房からだを餌に、おれを騙しやがった。」

ユルマンだな、この女はと思って抱いたら、その翌日に外村の馬鹿が女房の髪を引きずってポン刀片手に殴り込んできやがった。頭来たからチャカで弾いてやったけど」

「相変わらずムチャクチャだな、片桐」

「全然ムチャクチャじゃねーよ、舞ちゃん。ポン刀相手に素手で喧嘩するほうがムチャクチャだよ」

「そう言うもんか？」

納得できるような、できないような。

「そう言うもんだよ」

片桐は断言した。

「それで外村と、その女房はどうしたんだよ？」

「外村は入院して、シャブがばれてそのまま刑務所直行。外村の女房は、おれに対する詫び料と外村に対する守り代で、おれに二千万の借金があるから、ソープで頑張つて働いて返してるよ」

「微妙な結末だな」

「そんなことねーよ、舞ちゃん。二千万払えば自由だし、金だつて外村みたいに全額ピンハネしてるわけじゃねーし。殴りもしない。今の方が全然ハッピーじゃん」

「そうかあ？」

「そうだよ、その証拠に外村の女房毎日ニコニコしながら客のちんぽしゃぶってるもん」

——まあシャブのせいかもしれないけどな。

片桐は祿でもない言葉で、この救いのない話を締めた。

「ようするに亀吉は八つ当たりか」

「まあそうだな。外村も本当はおれを的にかけたんだろうけど、務所から出てきたばかりで、サツにはマークされてるし。親父にも組内で揉めるなと釘刺されてるから、あのボンクラもおれを的にかけたくてもできねーだよ」

——まあ来たら返り討ちにしてやるけど。

片桐はぼそりと呟いた。

「しかしよう、舞ちゃん。外村のボンクラもむかつくが、チンコロ野郎もむかつくな」

「ちんころ野郎？ まだなんかいんのか？」

「ああ。おれが外村の女房から金取つてること、外村にチクつた馬鹿がいる。外村の野郎が、この前おれにアヤつけてきたときやけに詳しかったから、どこかの糞野郎が外村のボンクラに空気入れたのは間違いねえ」

片桐は目の前にちんころ野郎がいるかのように、空を睨みつけた。

「身内の人間か？」

「証拠はねえが、十中八九身内だろう。ヤクザの世界は身内同

士の足の引つ張り合いが激しいからな。おれの足を引つ張りたい連中が沢山いんのよ」

「そんな世界におれを誘うなよ」

おれは笑いながら言う「そんな世界だから、舞ちゃんに来て欲しいのよ。おれの背中守ってくれる人間なんぞ、舞ちゃんぐらいしかいねえからよ」

「おれを買い被りすぎだよ。片桐」

片桐はニヤリと笑う「それでも人を見る目はあるつもりだぜ、舞ちゃん」と言った。

「まあ将来のことは置いてくとして。舞ちゃん、とりあえず外村からケジメは取らんなあ」

片桐は獰猛な笑みを浮かべた。

「ケジメ取るのか、外村から？」

「勿論取るに決まってるだろう。テメーの舎弟分を勝手に弄られて、それでケジメ取らなかつたら、おれが舐められちまうよ」

「まあ、そうだな」

それがヤクザの論理だ。

「それに舞ちゃん。ここで外村からケジメ取らなかつたら、また亀の奴、外村にシメられちまうぜ」

——そうだろう、亀？

片桐は後ろに控えている亀に問いかけた。

「おでげーします。なおどさん」

亀吉は頭を下げた。

おれは困った。

いつものおれなら付き合っただが、どうも今夜は気分が乗らない。これから家庭教師やりにいくせいかもしれない。

福ちゃんの話聞いたせいかもしれない。

？家庭教師やる人間が、ヤクザをブチのめしに行くか？

常識で考えても行かないし。

福ちゃんも止めると言うような気がする。

「で、いつやるんだ？」

おれは気乗りしない声で尋ねる。

「今夜だ」

「今夜つて、ようするにこれからか？」

「ああ、身内同士の喧嘩は早くやらねーと、親父が首つつこんでくるからな」

「今日は無理だ、片桐」

「なんで無理なんだよ、舞ちゃん？ ダチのケジメ取りにいくんだぜ」

「ちよつと約束があるんだよ」

「うんなもん明日に回せばいいじゃねえかよ」片桐は面倒くさそうに手をふる。

「そついうわけにはいかねえだよ」

明日に回せる約束と、明日に回せない約束がある。

「ダチがやられてるだぞ、舞ちゃん！」

片桐は近くにあった石油缶を蹴った。

石油缶はグニヤリと曲がり、大きな穴を作った。

普通に蹴ったら、ああはならない。

靴のつま先に鉄を仕込んでるだ。

「悪いが、今日は無理なんだよ」

「——そりゃあ、本気で言ってるのか、舞ちゃん」

片桐は殺意を込めて、おれを睨みつけた。

おれは静かに片桐の目を見つめ返した。

「——おでは大丈夫ですから……」

亀吉は間におれ達二人の間に入ろうとした。

「三下は引っ込んでろや！」

片桐に怒鳴られると、亀吉は尻餅をついた。

「舞ちゃん、もう一度だけ聞く。来ねえのか？」

「悪いな。バイトの銭も明日返すよ」

「——そうかよ。亀、いつまで寝てんだ！」

いくぞ」

片桐に怒鳴られ、亀は泡喰って立ち上がった。

「うんじゃあな、舞ちゃん」

片桐は亀を連れて、プレハブ小屋を出ていた。

今日はなんて日だ。二人の女に告白されたあげく、二人のダチと別れてしまった。

それでも、まだイベントは終わっていなかった。

口がすべって

海に見える丘の天辺に、朱美の家は建っていた。

？なんだ、おれのカブトムシ取りにいく森の途中の道じゃねえか？

朱美の家から暫く歩くと、毎年カブトムスを捕りに行く森がある。

毎年のように家の前を通り過ぎるのに、姉妹の顔を見かけたことはなかった。

？まあ、朝の五時頃じゃあ会はずねえわな？

カブトムスは朝が早いので、人と縁がないのは仕方ない。

玄関の前まで来ると、チャイムのボタンに指をかけた。

ボタンを押すのに気後れを覚えた。

この家の人間である愛さんに頼まれてやって来たとはいえ、今は真夜中だ。

他人の家のチャイムを鳴らす時間ではない。

しかし頼まれて来た以上、押さないわけにはいかなかった。

躊躇いながらもボタンを押す。チャイムが鳴り、すぐに愛さんが出てきてた。

「ごめんなさい、舞島君こんな夜中に……」と言った瞬間、愛さんは吹き出した。

「どうしたんですか？ てっ、この格好か」

おれはアイラブ鮭フレークと書かれたＴシャツを指で引っ張った。

？まあ、笑われてもしかたねえわな？

「ごっ、ごめんね、舞島君」

愛さんは涙を流しながら謝った。

勿論悲しみの涙ではない。

「大丈夫ですか、愛さん？」

愛さんの笑いが中々収まらないので、おれは心配になって声をかけた。

「だっ、だいじょ……」

愛さんはなんとか笑いを治めようとしたが、おれの声を聞いてさらに笑いのツボを刺激されたのか、床に座り込んで笑っている。

「いくらなんでも笑いすぎだろう？」

笑う門には福来たる、と言うがこれじゃあ福来る前に笑い死んでしまう。

心配になったおれは、愛さんの背中を撫でた。

「そんな心配することないのよ、舞島君。愛の笑い上戸はいつものことだから」

頭の上から福ちゃんの声が降ってきた。

笑ってたら本当に福が来てしまったようだ。

「なにっ、お姉ちゃんの背中撫でてるのよ、エロ直人！」

福ちゃんだけではなく、朱美も来ていた。

車椅子と毛布といういつもの装備で、朱美は車椅子の上に座っていた。

「背中さすってるだけだろう、朱美」

「フン、どうか！ どうせエッチなこと考えながら触ってたんでしょー！」

「ただ信用ないんだおれは。」

何か言い返してやろうと考えていると、

「舞島君、なかなか可愛いＴシャツ着てるわね」

福ちゃんは例のニコニコ顔で言った。

「なにそのダサイＴシャツ？」

朱美はセクハラ疑惑から、おれのファッションセンスに矛先をかけた。

「おれは鮭フレークが死ぬほど大好きなんだよ」

本当はそんなに好きではないのだが、悔しいので大好きということにしていた。

「ダサっ」朱美はお気に召さないようだ。

「女と違って、男は中身で勝負すんだよ」

「だから直人はモテないんだよ。髪型だってダサイし」

？さつき二人の女に告白されたばかりなんだが？と思ったが、馬鹿なおれにも口にしない程度の分別はあった。

おれは憎まれ口を叩くかわりに「この髪型ダメか。なら今度朱美の好きな髪型教えてくれよ」

「なつ、なに言ってるの直人！」

朱美はおれの予想外の反応にビックリしたのか、声がドモリまくっている。

「だってそのポニーテール似合ってるぞ、朱美。オシャレのセンスあるんだから、おれの髪型もなんとかしてくれ」

「……本当に似合ってる？」

朱美は褒められて恥ずかしいのか、顔を伏せている。

「ああ」

おれは笑いながら頷く。

「よかつたね、朱美ちゃん。今日は舞島君に見せるためにいろいろな髪型ためしたもんね」

朱美の顔はたちまち朱に染まる。

「言っちゃダメエ！言っちゃダメなの、福ちゃん！」

朱美は手をパタパタさせて福ちゃんに抗議したが、無論本気では怒ってない。

照れ隠しである。

「ごめん、ごめん」福ちゃんも笑いながら謝る。

？こんな感じでいいのかな？

実は、朱美の髪が綺麗に整えられてるのは、事前にわかっていた。マツクで福ちゃんと打ち合わせしたとき、

「舞島君が来る前に、朱美ちゃんの髪を愛と私で綺麗に整えておくから、舞島君は褒めてあげて」

「いや可愛いければ褒めるけど、こっいつのは自分が可愛いと感じたとき褒めればいいじゃないの？」

「たしかに舞島君の言うことにも一理あるかも知れないけど、髪型を整えるというのも訓練の一部なのよ」

「髪いじるのがなんで訓練なんだ？」

「学校に通学させることに成功しても、鳥の巣頭のまんまで学校に行かせたら、他の子に苛められるかもしれないでしょう」

「それもそうだな」

学校というのは、異質なものを弾いたり、苛めたりする。おれもやられた経験があるからよくわかる。

「ガキはくだらねーことで苛めるからな」

「せっかく朱美ちゃんを学校に通わせても、すぐに苛められて不登校になったら嫌でしょう、舞島君も」

「そりゃあやだよ、おれだって」

他人の不幸を喜ぶほど、おれは趣味は悪くない。

「わかった。協力するよ福ちゃん」

「ありがとう舞島君」

福ちゃんはニコリと笑った後「でもこんなこと言わなくても、朱美ちゃんのこと可愛いと言ってくれるかもね。あの年頃の女の子は、どんな髪型しても可愛いから」

福ちゃんの言う通りかもしれない。

鳥の巣頭から、ポニーテールに変化した朱美は、たしかに可愛らしかった。

「さて、笑い転げてる愛はほっておいて、部屋に戻って授業はじめますか。今日は舞島先生の初授業だしね」

「今日はよろしくね、直人」朱美が言うと「教えてもらうときは、舞島先生と呼ばないとね、朱美ちゃん」

すかさず福ちゃんが訂正した。

「うん。……舞島先生」朱美は恥ずかしそうに俯いてる。

「よろしくな、朱美」

おれも恥ずかしくなって早口になってしまった。

「——なんか恥ずかしいね……」
舞島先生——。

朱美の口のなかで呟いた。

朱美の勉強部屋は、小窓しかない殺風景な小部屋だった。子部屋の中央には、机と椅子が一個だけ置かれていた。

本来ならもう一つ椅子がないといけないだが、車椅子の朱美には悲しいことに椅子は必要ではなかった。

おれは朱美の車椅子を机の前に押すと、タイヤをロックする。終わると、おれも椅子に座った。

新米先生と、車椅子の少女は改めて向き合った。なんだかもの凄く緊張する。

はじめての授業である。ただでさえ緊張するのに、朱美の後ろには福ちゃんが立っている。朱美の監視ではなく、おれの先生振りをチャックするために立っているのである。

これでは初授業に、授業参観が重なったようなものである。緊張しないほうがおかしい。

「じゃあ、授業は始めるぞ。はじめは漢字のプリントやるからな」おれの声は緊張のせいか上擦っていた。

ヤクザに掠われてもこんなに緊張しないような気がする。

「ボク、漢字得意だから余裕だよ」

「本当か？」

「うん」朱美が頷く。おれは漢字のプリントを配る。朱美はスラスラと解いていった。

「できた！ 点数つけて全部あってるから」

朱美に急かされながら採点すると、朱美の宣言通り満点だった。

朱美の言うとおり国語が得意というのもあるが、福ちゃんが朱美に自信を付けさせるために、課題のレベルを低めに設定しておいたのが効いてるのだろう。

「よく出来たな朱美」

おれは朱美の頭を撫でてやった。

「なんか舞島先生にナデナデされると恥ずかしいね」

朱美は照れ笑いを浮かべた。

おれも恥ずかしかったが、「朱美が頑張ってるだから褒めるのは当たり前だろう」となるべく普通に聞こえるように祈りながら言った。

「——じゃあ、次も舞島先生にナデナデされたいから、ボク満点とるね」

なんか昨日の朱美と違ってえらい素直だな。

おれがやりやすいように、福ちゃんが下地を作っておいてくれたんだろうか？

おれが一瞬考え込んでしまうと、福ちゃんが指を振った。早く授業を進めるように、というサインだ。

考え込んでる場合じゃない。

早く授業を進めねば。

「次のプリントをやるぞ、朱美」

「うん。つぎはなに？」

「今度は漢字を書くテストだ」

おれは漢字のプリントを机の上に置いた。

「こんなの余裕だよ」

と朱美は宣言したが、今度は70点しか取れなかった。

「もう少しだったな、朱美」

七〇点の場合は褒め言葉はナシだったな。

マツクで言われたことを、おれは頭のなかで暗唱していた。

「もっと取れるとおもったのに」

朱美がブウたれるが、おれは構わず次の課題に移った。

朱美は課題を次々とこなし、朱美が八十点以上とると褒めた。

プリントが終わると、漢字の書き取りとなった。

朱美は黙々とノートに漢字を書いていく。

教えるわけでもないの、おれは少し暇になった。

「ねえ直人。直人って付き合ってる人いる？」

不意に朱美は話しかけてきた。気を抜いていたので、必要以上

に焦ってしまった。

「いつ、いるわけないだろう」

咄嗟に加藤と恵の顔が思い浮かんだ。

アレは付き合ってるとは言えんだろう。

「嘘くさい。直人本当はいるんでしょ？」

朱美はおれを睨みつける。

「おれは嘘はつかねえよ」

おれは大嘘をつく。福ちゃんは指でバツテンを作る。

？しまった。朱美の手が完全に止まっている？

朱美のペースに巻き込まれてる。

主導権を取り返さないと。

「朱美、今は勉強の時間だから休憩時間に話すぞ」

「やだ！ いま話す」

「朱美、約束したろう。授業中は私語をしないって」

「福ちゃんとした約束だもん」

「朱美、鉛筆を手にとって、漢字を書きなさい」

「やだ！」

朱美は叫ぶなり、おれ目がけて鉛筆を投げつけてきた。鉛筆は

おれの胸に命中し、床に落ちる。

おれは鉛筆を拾い上げた。

「朱美、人に物ぶつけたら、漢字の書き取り一枚増やすと約束したような」

おれは朱美の前に新たな課題を置いた。

朱美はおれをにらんだ後、ふて腐れながらも漢字の書き取りを再開した。

おれはチラリと福ちゃんを見る。

福ちゃんは軽く頷いた。

この対処でよかったようだ。

おれは授業を続けたが、朱美はふて腐れたまんまだった。そして休憩時間。

「舞島先生、付き合ってる人いるの!？」

朱美の尋問が再開した。

「まさか舞島君、わたしのこと狙ってたの？」

何故か福ちゃんまで参戦してきた。

「ねっ、狙ってるわけないじゃないですか！」

ちよつといいかな、とは思ったけど。

「怪しい! 絶対福ちゃんのこと狙ってたんだ!」朱美が尻馬に乗る。

「馬鹿言っな!」おれは否定する。

「残念! 舞島君。わたしはいま朱美ちゃんに夢中だから、ほかの人にしてね」と言って福ちゃんは朱美に抱きついた。

「福ちゃんは、舞島先生より、わたしの方が好きだよね?」

「勿論好きよ、朱美ちゃん。わたし小さい女の子大好きだから」福ちゃんは、性別が違えば問題発言になるようなことをさらっ
と言っ。

「福ちゃんは、ボクの方が好きなんだから、舞島先生は諦めな
さい!」

? いや、あきらめるもなにも? と思ったが、これはひよつとし
たら福ちゃんがおれのミスをフォローしてくれてるのかもしれない。

「おれも男だ。福ちゃんは諦めるよ」

「本当に?」朱美が念を押す。

「おう、男に二言はねえよ」おれは啖呵を切った。

「ふん、どうだか。福ちゃん、直人みたいなタイプはストーカ
ーになりやすいから気をつけるだよ」

なんかえらい言われようである。

「大丈夫よ、朱美ちゃん。舞島君はああ見えてもさっぱりした
性格だから、もう福ちゃんのこととは綺麗さっぱり忘れてるから」

ねえ、舞島君。福ちゃんが念を押すと、おれは頷いた。

朱美は機嫌が直ったらしく、「舞島先生はモテないだから!」

と言っておれをからかう。

おれが苦笑いを浮かべると、愛さんがお菓子とジュースを持って部屋に入ってきた。

愛さんは机の上に、お菓子とジュースを置いた。

「朱美ちゃん、勉強頑張ってる？」姉は妹に尋ねると「ボクは頑張ってるけど、先生はエロだからダメ！」

「朱美ちゃん、先生を辛かつちゃダメでしょう？」

「先生でもエロだもん」

「エロエロ言ってる間に、おれがお菓子全部食っちゃまうぞ」

これ以上、おれの評判を傷つけられたら堪らないので、朱美の気をそらす作戦に出た。

「あつ、ボクもポウさん食べる」

朱美は慌てて熊の形をしたクッキーに手を伸ばした。

菓子を食い終わると、愛さんは食器を片付け出て行った。

授業を始める時間だ。

今度はおれが朱美の後ろに下がり、福ちゃんが先生になる番だった。

科目は算数だ。

福ちゃんはテキパキと授業をこなした。

朱美が私語しようとしても上手く躲すし、飽きそうになると課題を変えたり、課題の難度を下げたりした。

これだけでもたいしたものだが、福ちゃんは机の下で朱美の課題の点数までメモっていた。

まったくもって隙がない。

さすがは福田先生である。

福ちゃんは簡単な計算プリントをやって、授業を閉めた。

授業が終わった後、朱美は遊ぼうとしきりにおれ達を誘ったが、福ちゃんは今日はもう遅いからと言って、朱美の誘いを上手く断った。

俺等は、姉妹に見送られ家を後にした。

外はまだ暗い。

福ちゃんは自転車を押しながら歩く。
バスも電車も出てないから、これで家まで帰るつもりなんだろう。

「舞島君。今日はよく頑張ったわね」

「いや、朱美にへそ曲げられちゃったからな」

「あれは無視すべきだったわね。ああやって私語をして、授業のペースを乱そうとするのは子供達によくやる手だから。あの場面では、休憩時間中に話すと言っか、授業中は私語禁止と言っか、どちらかね」

「なるほど、朱美のペースにさせられないようにするのか」

「そう。生徒に主導権握られたらダメ。つねに先生が主導権握らないとね」

「喧嘩と同じだな」

「舞島君は暴れん坊ね」

福ちゃんはクスリと笑った。

「でもあれは福ちゃんのせいもあるんだぜ」

「わたしのせい？」福ちゃんは目を丸くしたあと「——まさかあの時の眼鏡の彼女となんかあったの？」

「うん」

「えっ、まさか告白されたとか」

福ちゃんは目を輝かせた。

「よくわかったな。福ちゃん」

「そりゃあ、私も女の端くれですからね」と言った後、福ちゃんはおれの顔をしげしげと見つめ「でっ、舞島君は付き合っの、あの眼鏡の子と？」

「保留。もう一人告白してきたのもいるからな」おれは口を滑らせてしまった。しまったと思った瞬間「えっ、まさか舞島君、眼鏡の子以外からも告白されたの？」

福ちゃんの目は一段と輝きをました。

「……………実はそいつの妹にまで告白されちゃった」

おれは観念して、これまでの経緯を簡単に喋った。なんで福ちゃんに喋ったのか自分でもわからないが、人に相談したかったのかもしれない。

タマカスには、恋愛事を相談できるような人種一人もいないし。

「舞島君は根っからの王子様体質ね」

福ちゃんは分けのわからない感想を漏らした。

「なんだよ、福ちゃん。王子様体質って」

「女の子のほうから寄ってくるタイプの人。命名わたしね」

「中学のときは言い寄られたことあったけど、高校になってからさっぱりだぞ」

「環境に問題あるんじゃない？」

「環境？」

「たとえば周りが男ばかりとか」

「なるほど、言われてみれば男ばかりだな」

タマカスは一応共学だが、生徒の99%は男で構成されていた。

「男には言い寄られないの？ 舞島君は」

福ちゃんはとんでもない事をサラッと尋ねた。

「……………言い寄られねえよ」

本当は言い寄られたことも、告白されたことも数度ある。

恥ずかしいし、福ちゃんが喜びそうだから言わないけど。

「ところで福ちゃん、おれどうしたらいいと思う？」

おれは話を元に戻した。

「舞島君はどうしたいの？」

「わからん。そういう目で、あの二人見たことないから戸惑ってる」

「うーむ。私、キャバ嬢のバイトしてるけど、自分自身が男の人に熱くなったことないから、恋愛は苦手なのよね。いい年こいて処女だし」

「えっ、福ちゃんキャバ嬢なの？」

てか処女なの？

と聞きたかったさすがに恥ずかしいのでスルーした。

「うん。家庭教師だけだと学費払えないから……、おつと忘れてた」

福ちゃんは自転車を押すのを止め、自分の鞆をまさぐった。

福ちゃん鞆から封筒を取り出す。

「はい、舞島君。今日のバイト代。話し込んで渡すの忘れるところだった」

「えっ、いいよ。おれバイトのつもりでやったわけじゃないし」

「舞島君は立派に仕事したんだから、報酬を受け取る権利はあるし、報酬を受け取る以上職業的責任も発生もするわ。私は舞島君に責任もって家庭教師やって欲しいのよ」

「——わかったよ。もらうよ福ちゃん」

おれは金を受け取ることにした。

福ちゃんの言うとおり、おれは報酬を得ることによって生じる責任から逃げようとしてたからだ。

やるからには責任をもたないとな。

「じゃあ、舞島君これ」福ちゃんは給料袋を差し出す。

おれが給料袋を受け取ろうとしたとき「舞島君、この世の中で給料以上の責任を持たなければいけないのは、人の命に関わる仕事を持つ人だけよ。だから舞島君、このお金は額面以上に重いお金かもしれないけど、しっかりと受け取ってね」

「わあつたよ、福ちゃん。金もらうからにはおれも気合いいれるよ」

「さすが舞島君、男気がある」福ちゃんはそう言う、おれに封筒を渡した。

なかには三千円はいつていた。

「全部こなせるようになったら四千円になるから、今日は二千円で我慢してね」

「四千円も貰えるのかよ!？」驚きの声を上げると「それでも

お友達価格だから」と言つて福ちゃんは笑つた。

「ところで福ちゃん」

「なに舞島君？」

「自転車で家まで帰るつもりなの？」

「そうだけど」

「危なくないか、こんな夜中に」

福ちゃんは金は持つてないかもしれないけど、胸には男なら誰でも揉みたくするような二つのメロンをぶら下げているのである。

ある意味財布を見せびらかして歩いてるようなものである。

「大丈夫、大丈夫。いざとなつたら私自転車漕ぐの早いから」

福ちゃんはレイプマンに襲われたら自転車で逃げるつもりのもうだ。

「相手が車だつたらどうするんだよ、福ちゃん」

「それは考えてなかつたな」

うーむう、車は盲点だつた。福ちゃんは小首を捻りながら唸つた。福ちゃんは考えてるようで、実はあまり考えてない人なのかもしれない。

いや、興味のあること以外、頭が回らないタイプの人間なんだろう。

そんな気がした。

ようは変人なのだ。

「福ちゃん、送つてくよ。おれ漕ぐから、後ろのつて」

「えっ、いいよ。明日学校でしよう。舞島君」

「福ちゃん襲われたら、学校もクソもねえよ」

「……そう。うんじゃあ遠慮なく」

福ちゃんは自転車を押すのを止める。おれは自転車に乗り、福ちゃんは後ろに乗つた。

おれはペダルをガンガン漕いだ。

「さすが男の子ね。二人乗りだけど、わたしが一人で漕いでるより早いわ」

「それは福ちゃんが遅すぎなんだよ」

と言いながら、おれは頭の中で？結局、加藤の件相談しそこねたな？と思った。

なるようになるさ。

加藤姉妹のことばかり悩んでも仕方ないしな。

学校には加藤という爆弾もあるが、片桐という核ミサイルもある。

？片桐の野郎、無茶してないといいが？

おれは今頃になって、片桐のことが気になりだした。

友達のままで

昼休みになっても片桐達は現れなかった。

「あの野郎、何やってるだ？」

片桐に返そうと思って、二万持ってきたというのに。

あの下駄が来ないことには返せないじゃないか。

「まさか、外村に返り討ちにあったとか？」

心配になって片桐に電話しようと、ポケットに手を伸ばした。

「舞島、ちよつといい？」

いつのまにか目の前に加藤が立っていた。

「どうした？」

ポケットから手を出した。

「ちよつと、相談したいことがあるから屋上でご飯を食べない？」

「？」

「ああ、いいよ」

おれは席を立った。

屋上のドアには赤い文字で立ち入り禁止と書かれていた。

こんなもん書いても、誰も守らない。

とつくの昔に鍵は壊されてる。

おれは屋上のドアをあけた。

屋上でタバコを吸ってるヤンキー共は、おれの姿を見ると顔色

を変えた。

片桐がいると思ったのだ。

しかしおれの後ろにいるのが片桐ではなく加藤だとわかった、露骨に安堵のため息を漏らした。

「加藤、どこで食う？」

裏で食べようと加藤が言うので、おれ達は後ろに回った。

二人並んで座ると、弁当を広げた。

加藤の弁当は食パンに苺ジャムを挟んだシンプルな物だった。これが金がない日になると、悲しいことにパンの耳と水になる。おれのは学食で買った唐揚げパンと焼きそばパン、それに苺牛乳だった。

大した量ではないので、二人ともすぐに食べ終わった。爽やかな夏空の下だというのに、加藤のヤツは押し黙ったまままだ。

もの凄く居心地が悪い。

「おい、加藤。話ってなんだよ」

堪りかねて、おれが声をかけると「昨日、恵に泣かれちゃってさあ——」

どうしたらいい？ 加藤が問う。

おれは答えられない。

？付き合ってるわけでも、浮気したわけでも、ただ乗りしたわけでもないのに、なんでこんなに重いだよ？

おれは心の中で文句をつけた。

なにが嫌いって、おれは重苦しい雰囲気ほど嫌いなものはなかった。

「それより加藤、空を見ろよ。実に良い天気じゃないか」

爽やかな青空を指さした。爽やかな夏の青空を見て、加藤にも爽やかな気持ちになってもらいたかったのだ。

「今は空の話してるんじゃないの！ 恵のことを相談してるのよ！」

おれの気持ちも気づかずに、加藤が怒り出した。空気の読めない奴め。しかしそのおかげで、重苦しい雰囲気が薄らいだ。

「わかった落ち着け。青空じゃなくて恵の話すればいいだろう？」

「そう、恵のことよ、舞島。昨日、恵から告白されたんでしょっ？」

「よく知ってるな」おれはとぼけた。

「わかるわよ。家帰ったら、恵が泣いて私に謝ってくるし」
「なんで恵が泣いてるんだ？」

暗くならないように、川に飛び込んでやったのに。

「あの子、わたしに遠慮してるのよ」

「遠慮なんかするな、と言ってやりやあ良いじゃないか」

「饅頭じゃないだから、そんな気安く譲れないわよ」

「おれは饅頭か」おれは今日初めて笑った。

「なにのんきに笑ってるのよ！　わたしがこんなに苦しんでるのに」

「お前も遠慮してるからだろっ、苦しんでるのは」

「遠慮って？」

「にぶい女だな。お前が恵に悪いと思ってるから、苦しいだろう。あんま気にするな。なるようにしかなんねえだから」

「なるようにって、舞島は本当に適当なんだから。舞島はいいわよ。逃げ場所があるから。わたしなんか家に帰ったら恵とずっと顔を合わせないといけないだから」

「鶏小屋だから、狭いのはしゃあねえべ」

「鶏小屋いうな！」加藤がツツコミを入れたあと「だいたいなんでもバレてるのよ！」

悲劇のヒロインのように加藤は頭を抱え込んだ。

「お前が家の前で甘えてくるからだろっ」おれが指摘すると、加藤は真っ赤になって慌てた。

「えっ、あっ、あれ恵に見られちゃったの！？」

「あれ見られたから、恵は家にも帰れず河原でいじけてたんだよ」

「——そうだったんだ」

「そうだよ。まあ気にするな。おれは卒業まで気にしないことにしたから」

「——なんか扱いが軽くない。私達」

加藤はぶんぶくれた。

「真剣な顔してもんもん悩んだってしゃあねえだろう、色恋の話なんだからよ」

「でも――」

「どうせ夜になつたらお前家行くんだ。恵にはそんな時言っておくよ」

「言うつてなにを？」

加藤は驚いて、おれの方に顔をむけた。

「考えてねえけど、まあ姉ちゃんと仲良くやれって言つよ。喧嘩なら、結果が出てからでもいいだろう」

「べつに私は、恵と喧嘩してるわけじゃないから」

「なら良いだろう、うんなに悩まなくても」

「なんか舞島に相談すると、話がどんどん脳天気な方向にいくんだけど」

「脳天気で結構。それより聞き忘れたんだが、なんでおれのと好きになつたんだ、加藤は？」

えつ、と絶句した後、

「顔かな。あと優しいところ」と宣った。

「なんだ顔かよ」おれは自分の頬をペチペチと叩きながら「罪作りな顔だな」と言つて笑った。

話が終わると加藤と別れた。

加藤は職員室に用があると言つたが、多分おれと一緒に教室に戻るのが恥ずかしくなつたのだ。

一人教室に帰ると、おれの前の席に片桐が座っていた。亀吉も横にいる。

気のせいかな、亀吉の顔色が冴えない。

なにかあつたのか？

「なんだ来たのか、片桐」

おれはなるべく普段と変わらない口調で話しかけた。

「あんまサボると、ダブるからよ。それより、舞ちゃんこれみ

ろよ」

片桐が珍しくスポーツ新聞ではなく、普通の新聞を差し出してきた。

「おれはこういう新聞は読まねえ——」

と言つておれは絶句した。

新聞には暴力団員自殺未遂か、と書かれていた。

「——これ外村か？」

「おう、昨日あいつのヤサ乗り込んで、窓から放り投げてやった」片桐はニヤニヤ笑いながら言った。

「放り投げたつて、どこから放り投げたんだよ？」

「マンションの八階から」

「死ぬじゃねえか、そんなところから放り投げたら」

「よく読めよ、舞ちゃん。死んだら自殺未遂じゃなく、自殺になるだろう」

「よく死ななかつたなあ」

八階から落ちたら死ぬだろう、普通。

「車の上に落ちたから助かったみてえだ」

悪運のつええ野郎だ。片桐が毒づく。

殺る気まんまなかよ。

「片桐やりすぎだろう、いくらなんでも」

「文句なら亀に言えよ、舞ちゃん。はじめ亀にシメさせようとしたんだよ。ケジメは自分で取ったほうがいいからな。そしたら亀のヤツ、外村の野郎の胸を小突きはじめたのよ。」

しかもブルリながら。うんなんじゃあ、ケジメ取れねえから、おれが仕方なく外村のぼんくらを窓から放り投げてやった」

「うんなことしたら、パクられるだろうが」

「大丈夫、大丈夫。外村の野郎ポン中だから、警察だつてシャブ食いすぎて飛んだんだと思うよ。それによつ、あんなゴミ虫が死のうが怪我しようが、親だつて気にしねーよ」

「そつという問題じゃねえよ」おれが吐き捨てると、「亀吉も止

めろよな」

「——片桐の兄貴は悪くないスよ。ケジメとっただけスから」
亀吉はボソボソと呟いた

「アッ？ 悪くねえだ？。それ本気で言ってるのか、亀吉？」

亀吉はおれから顔をそらした。

「ヤクザなんだから仕方ないスよ。——面でメシ喰ってるんですから」

亀吉は逆らう。おれは気づいた。

土手の言葉だ。あときの土手の言葉が、亀吉の背を押してるのだ。

そうか。亀吉を追い込んでるのは、おれの言葉か。

「わあーたよ。行かなかったおれがこれ以上口を挟む権利はねえわな」

おれはポケットから金を掴んだ。片桐の机に置いた。片桐から貰った二万円だ。

片桐は机の上に置かれた金を不審げに見つめた。

「なんの真似だよ、舞ちゃん」

「お前のところのバイトやめるわ。おれやりたいこと出来たしな」

「やりたいこと？ ブルったんだろ？」

「好きに取れよ、片桐」

おれは投げやりに答えた。弁解するような話でもないし、弁解したところでどうにもならない。

片桐は席を立った。

「むなくそ悪いから、酒でも飲みに行くか」

亀いくぞ！ 片桐は怒鳴り声を置いて、教室から出て行った。

片桐の一件は、おれの胸でわだかまりとなったが、考えてもどうにもならないので、加藤の家の狭い台所で挽肉を捏ねくり回していた。

さっぱりと生きるをモットーとしてるおれとしては、今の状態はまったく面白くない。

ガラガラと音をたてながら、茶の間と台所を隔てる引き戸が開き、それとともにテレビとガキンチョ達の笑い声が台所に雪崩れ込んできた。

すぐに静かになった。

恵が引き戸を閉めたのだ。

「――直人さん、手伝います」

そう言つと恵は台所の壁に掛けてあるエプロンを手に取つた。
？加藤のヤツが気を利かしたんだな？

恵とおれが二人つきりで喋れる所など、狭い上に人が溢れてる鶏小屋では、台所しかない。

「――直人さん、わたしは何を手伝えればいいですか？」

「もうこね終わつたから、丸めるの手伝つてくれ」

「わかりました」

齒切れよく恵は返事すると、手を洗いボールのなかの挽肉を手にとつた。

「――恵落ち着いたか？」

おれは手の中で挽肉をキャッチボールしながら尋ねた。

「――混乱しましたけど、姉さんもわたしのことは気にするな、と言つてくれたんで、ちよつと気が楽になりました」

そうか。おれは恵の話を聞きながら、恵の手の中にある挽肉が気になった。

「恵、ダンゴ三兄弟作つてるじゃないから、丸めるな。てか、なんでハンバーグのタネを丸めるんだ？」

それでは空気が抜けない。

「丸めて、上から手で押せばハンバーグの形になるかな、て――」

「それじゃあ、美味しいハンバーグができねえよ。まずこつやつて空気抜くだよ」

おれは右手にある挽肉を、左の掌に叩きつけた。

「えっ、そうやって空気抜くんですか？」

「なにやってると思ってたんだ？」

「いえ、あのう……」

——格好つけてるのかと思いました。恵は頬を染め白状した。

「さすがのおれも、その発想はなかったわ」

おれは知らず知らずのうちに、片桐の口癖を吐き出してた。

胸がちくりと痛んだ。

恵は挽肉に気を取られていたのか、おれの微妙な変化に気づいてなかった。

「直人さん、こうですか？」

恵はおれの真似をしようとしたが、挽肉は恵の手をすり抜けてしまった。

「あっ！」二人同時に声をあげる。

幸い、挽肉はまな板の上に落ちたので被害はなかった。

「それじゃあ、姉ちゃんと同じだな」

おれが笑うと、「同じ人を好きになっちゃいましたし」

恵は笑いづらいギャグを飛ばしてきた。

おれは気にしたら負けだと思ったので、「趣味の悪さまで似ちまったな」と言って笑った。

「趣味はわるくないですよ。直人さんのことを好きな人、わたし達以外にもいますよ」

「そのわりには、恋人が出来ないな」

「直人さんがズルいからです。直人さんって人付き合いよさそうに見えるけど、話が面倒くさい方向に行くときに身を引きますから」

恵は痛いところをついてきた。

たしかにおれにはそういうところがある。

「さっぱりした関係が好きなんだよ」

おれは反論にもならぬ言葉を吐いた。

「——直人さん、面倒くさいからって、姉とわたしを置いてどこかに消えたりしないでくださいよ」

——そんなことしたら、一生恨みますから。

恵は横目で睨んだ。

「——するわけないだろう」

多分。

「それと、これ以上立候補者を増やさないでください。ライブルは一人で沢山です」

「心配すんな。次から次に女なんか寄ってこねーよ」

「直人さん見てると、イマイチ不安です」

恵は言葉を強調するかのよ挽肉を強く叩いた。ふて腐れてるのかもしれない。

「なかなかいい音出すな。恵は姉ちゃんより料理の才能があるかもな」

本音を言うと、恵の不器用な手つきを見ると、料理の才能なんぞこれっぽちも感じないが、それでもはじめの時よりは良くなっている。

少なくともダンゴではなく、ハンバーグもどきには進化してる。おれはハンバーグもどきを手に取ると、「恵、こうやるとさらに良くなるぞ」

おれは恵に見本を見せると同時に、恵の作ったハンバーグもどきを作り直した。

こういう形でやれば恵のプライドに傷はつかない。

我ながら細やかな気配りだが、タネはある。

タネの元は福ちゃんだ。

人に苦手なことを教えるとき、成功して終わらせるように、福ちゃんに言われた。

なんでだ？ おれが問うと福ちゃんは理由をおしえてくれた。

苦手なことを失敗で終わらせると、苦手意識をもったままで学習を終えてしまうので、最後あたりで簡単な課題をやらせて褒める

か、多少強引でもいいから、むりやりでも褒めて終わらせたほうがいいだそうだ。

おれはそんなもんかと思って聞いていたが、良い機会なので恵で試してみることにした。

おれがハンバーグを作り直すと、「もう一回やってみますね」

恵はおれの作ったハンバーグを手に取ると、もう一度作り直した。

あまり上手くないが、さっきよりは進化はしてる。

「上手いぞ、恵。もっと練習すれば、もっと上手いハンバーグが出来るぞ」

おれが褒めると「——じゃあ、練習がてら直人さんにお弁当でも作ろうかな……」

一瞬、それは勘弁だと言いつうになったが、せつかく恵がやる気だしたのに潰すのも悪いので「そりゃあ、楽しみだ」と心にもないことを言った。

仕方ない。仕向けたのはおれだし。

おれは観念すると、恵は嬉しそうに挽肉をこね始めた。

加藤家のちゃぶ台には、おれと恵の作ったハンバーグとサラダ、それにガスパチヨが並んでいた。

「すげえ、ハンバーグだ。ハンバーグなんて一家心中でもするときは喰えねえと思ってたよ、おれ」桂太は食卓に並べられた御馳走を見て、不吉なことを口走った。

「直にい、一家心中でなに？」

隣に座っていた久美子が、答えづらい質問を放ってきたので「みんなで天国に行くこと

だよ」と答えておいた。

「みんななら良かった。みんななら久美子置いてかれちゃわないもんね」久美子は胸をなで下ろした。

？久美子は実の親に置いてかれちゃったもんな？

ほっとする気持ちもわかるが、みんなと一緒に天国行くのは勘弁だ。

寂しくても置いてかれたほうがいい。

「早く食べようよ、冷めちゃうよ」

我慢出来なくなったらしく、絵里花が催促する。

みんなで頂きますをした後、箸を手にとった。

「――舞島、このトマトジュースみたいななに？」

加藤はお椀のなかに満たされてるガスパツチヨをしげしげと見つめながら呟いた。

「ガスパツチヨっていう冷たいトマトのスープだよ」

「へー」と感心した声をあげると、加藤は椀に口をつけた。

「さっぱりして美味しい！」加藤は感嘆の声をあげる。

「野菜がいいだよ、三宅の婆さんにもらったヤツだから取れたてで新鮮なんだよ」

おれは美味しいほみたいなこと言った。

「ガスパツチヨって海賊みてえな名前だな」

桂太はズウズウ音を立てながらスープを飲んだ。光輝は何か勘違いしてるらしく、ガスパツチヨガオーと怪獣の鳴き真似を連呼していた。

「桂太、音たてて飲まないでよ。絵里花みたいにお姫様のように飲みなさい」

絵里花はたしかに音は立ててないが、ここにいる誰よりも飲むのが早かった。

「おいしい！ 直人おかわりある？」

冷蔵庫に入ってるよ、と教えたなら絵里花はすぐに立ち上がった。

「なにがお姫様だよ！ がつつきやがて」

桂太は負けじとスープをかつ込む。

賑やかな食卓だ。

多めに飯を炊き、多めにハンバーグを焼いたが、あっという間に皆の胃袋に消えてしまった。

おれは食い終わると、ちゃぶ台に小学生のドリルとノートを広げた。

加藤は不思議そうな顔で、机の上のドリルを見つめていた。

「なにしてるの？」

「見ればわかるだろう、勉強だよ、勉強」

「舞島が勉強！」加藤は仰け反って驚いた。

大げさなやつめ。

「家庭教師してると言っただろう。先生が生徒よりアホだったら問題だろう」

「そりゃあ、そうね。舞島の頭じゃ、小学生に勝てないもんね」

加藤がからかうと「姉さん、せっかく直人さんが真面目に勉強しようとしてるのに、笑うなんて酷いです」妹が怒った。

「えっ、いやそんな怒らなくても——」

姉が口ごもると「直人さん、わからないところあったら、わたしに聞いてください」

「そうか、助かる」おれは素直に感謝した。

「いいんですよ、ハンバーグの作り方教えてくれたお礼です」

「さっそくで悪いだが、この問題どうやって解くんだ？」

おれが尋ねると、恵はおれの隣に腰をおろし、教え始めた。
必要以上に密着してるような気がする。

「ちよつと、くつつきすぎでしょう。そこ

！」

加藤が焼き餅を焼く。

「わたし目が悪いから、近づかないと問題が見つづらいです」

妹は反論する。

「でも——」

姉は妹の言い分に納得できないようだ。

「ちよつとくつついたくらいで喚くなよ、加藤。おれはこれから真面目に勉強するんだからよ」

おれは長くなりそうなので、姉妹の間に入った。

「だつ、誰も喚いてなんかないわよ」

姉は強がる。

「だったらいいだろう。そんなふて腐れなくても」

「ふて腐れて——」

加藤が言い終わる前に「せっかく可愛い顔してるんだから」おれの言葉が割つて入った。

「えっ……」

「なにボケツとしてるだよ、可愛い顔が台無しだぞ」

おれが追い打ちをかけると「うん……」加藤は小さく頷いた。

「加藤、少しの間だけ、恵とちゃぶ台かしてくれ。この後家庭教師いかないといけないから、家帰ってる暇がないんだ」

「——べつにいいけど」

「姉ちゃんちよろいな」

桂太はすかさず姉をからかうと、姉は空手チョップで返事を返した。

「うつさい！ 桂太も絵里花も宿題したの？」

「なんで絵里花の名前が出てくるの？」

「あんたらはセツトでしょう！ ここにいと舞島の勉強の邪魔だから、あんたらはとなりの部屋で宿題してなさい！」

加藤は容赦なく弟妹を追いつ出した。

二人共ぶうたれながらも、となりの部屋に移った。

「唯お姉ちゃん、久美子とミツは？」

「クミ達はお姉ちゃんとトランプでもしようか」

久美子達は姉の言葉に素直に頷いた。

茶の間には、おれと恵が残された。

「姉さんを上手くあしらいましたね、直人さん」

「あしらったつもりはねーよ。おれは冗談抜きで勉強したいだよ」

言葉に嘘はない。自分でやると決めた以上、頑張らないとな。

？片桐と別れて、選んだんだから？

全部自分で決めたことだ。

おれは真面目に勉強に取り組んだ。

恵もおれのやる気を察して、恋愛方面に流れることはなかった。
ただ姉は気になるのか、しょっちゅうお茶やお菓子を持って
くるので、正直鬱陶しかった。

時間になると、おれは加藤家を後にした。

手紙

片桐と揉めてから一週間が過ぎた。

片桐とはまだ仲直りをしてない。

お互い教室であつてもシカトしている。

そのおかげで教室の空気は最悪だが、仕方がない。

？道が別れてしまったのだ？

誰に強制されたわけでもない。

自分で選択し。

自分で選んだ道だ。

寂しくても仕方がない。

だがおれは落ち込んではいなかった。

やることが色々とありすぎる。

自分自身の勉強。

朱美の家庭教師。

福ちゃんから本を借りて応用行動分析の本も読み始めた。

加藤家の食卓の面倒もみななければいけない。

これだけでも忙しすぎるのだが、朱美の件で福ちゃんと定期的に打ち合わせしなければいけない。

今もその最中だ。

「全体的に授業中の私語は減少傾向だけど、算数の時間は私語が多いわね」

福ちゃんはマツクのテーブルの上に広げられたグラフを見つめながら呟いた。

朱美の私語の回数はカウントされ、グラフに記録される。

朱美の私語を減らす対策が効果あるのか？

それを客観的に検証するために、統計を取る必要があるのだ。

「朱美は算数苦手だからな。やりたくないだろう」

理由は単純。

「——そうね、朱美ちゃん国語とか社会は得意だけど、算数は苦手なのよね」

福ちゃんは算数ドリルに目を落とす。

ほかの教科に比べて、明らかに点数が落ちている。

「課題のレベル下げてみるか？」

「うーん。ちよつと様子見ますか。朱美ちゃんもやる気あるよ
うだし、一時期に比べれば私語も減ってるしね」

「様子見か」

——課題のレベルは維持、と。
手帳に書き込む。

「——舞島君も、板についてきたわね」

福ちゃんはおれの顔を見つめながら微笑んだ。

「なんの板だ？ カマボコか？」

「カマボコじゃなくて、先生のことよ。最初はどうか、とお
もったけど今じゃどこに出しても恥ずかしくない先生だわ」

「——福ちゃん、最初の頃おれのこと、才能あるだのなんだの
言ってなかったか？」

おれはジト目で福ちゃんを睨んだ。

今にして思えば、あれはおれを乗せるための手口だったのだ。

「私の予想をはるかにこえる才能だったから驚いてるだけよ、

舞島先生」

福ちゃんは師匠らしく、抗議する弟子を軽くいなした。

なんかおれ、この人に一生頭上がないような気がする。

「さて、舞島先生のおかげで勉強の方はなんとかなりそうだが
ら、そろそろ朱美ちゃんを昼間の世界に戻すための訓練に取りか
りましょうか」

「——ついにやるのか？」

朱美の先生をやってるからわかるが、朱美の引きこもりぷりは
酷い。

夜はかろうじて外に出るが、昼間は絶対外にでない。一度、外

でメシを食わないかと、朱美を誘ったことがあったが、猛烈な勢いで拒絶された。

「正確に言うと朝の世界だけだね」

「――朝やるのか？」

「舞島君に負担かかるかもしれないけど、早朝なら人が少ないでしょう」

「なるほど、難度を下げるのか」

「はじめから人通りの激しい昼間からだと、まだ朱美ちゃんには難しいからね」

「そうだな。また引き籠もりはじめたら今までの苦労が水の泡だからな。まっだるこしくても朝から始めたほうが賢明だな」

「急いで危険は橋を渡るのは最期的手段よ。」

ゆっくりでも安全な道を選ぶのが、教育の基本だから」

？おれは急いで危険な橋を渡るタイプだな？

テーマー一人が危険を被るのならそれでもかまわないが、先生の場合は生徒がいる。

なんかあつたら、生徒も巻き添えにしてしまう。

考え方を改めないとな。

「さて、難度の設定はこれでいいとして、モチベーションの設定は何がいいかしら」

「なんだそのモチなんたらって？」

「やる気を出させるための動機付け。なんの目標もないより、朱美ちゃんが達成したいと思う目標を設定した方がやる気がでるでしょう」

「なるほど。たしかに目標あった方がいいな。おれも中学生の頃、エロ本の自販機でエロ本を買うために、眠いの我慢して夜中まで起きてたもんな」

「――間違っではないけど、エロ本で朱美ちゃんを釣るわけにはいかないでしょう」

「そりゃ、そうだ」

おれと福ちゃんはそこで大笑いした。

笑いがおさまると、二人して考え込む。

「——おもちや買いに行く、はどうだ福ちゃん」

ガキの頃、お袋におもちや屋連れて行ってやると嘘つかれて、

歯医者に連れて行かれた厭な思い出を参考にアイデアを出してみた。

「——悪くない。悪くないんだけど、問題点があるわ」

「どんな？ 約束通りおもちや屋連れて行くぞ？」

おれはクソお袋みたいに、嘘をついたりしない。

「そこが問題なのよ、舞島君。おもちや屋が開く時間帯は昼頃でしょう。その時間帯だと人通りもあるから、朱美ちゃんの負担が重くなっちゃうでしょう」

「——あつそうか。人を避けるために早朝に設定したのに、おもちや屋じゃ意味ないよな」

おれは頭をバリバリ掻きながら「おれってやつば馬鹿だな」と、自分の頭のできの悪さを嘆いた。

「そんなことはないわ、舞島君。着眼点は悪くないのよ。アイデアがいっぱい有ったほうがたたき台になるし——」

あつ！

福ちゃんは手を叩く。

なにか思いついたようだ。

「手紙よ、手紙！」

「手紙？」

「単身赴任中のお父さんに手紙を出しにいくのよ。郵便局のポストなら、朝早くなら誰もいないでしょう」

「あつ、なるほど。それにポストなら、店員と喋らなくてすむな」

朱美にとって一番困難である、知らない人間とのコミュニケーションを避けられる。

「——よく考えられてるな、さすが福ちゃん」

「私一人の力じゃないわよ。舞島君がいいアイデアを出してく

れたから、思いついたのよ」

「？さすが福ちゃん。隙あらば褒めてくる？」

福ちゃんの的には、おれにアイデア出させるための手なんだろうが。

「？アイデアが使える、使えないはともかくとして、アイデアを出したらとにかく褒めて、アイデアを出すという行動を強化しているのだ？」

おれだって勉強してるから、それぐらいの

理屈はわかる。しかし理屈はわかっていても、福ちゃんみたいに呼吸するように実践できない。頭で理解してても、体に染みついてないのだ。

「？しかし福ちゃんって怖いな？」

相手に悟られぬよう、つねに相手の行動に介入してくる。

「？自由意志ってなんだろうな？」

おれの頭の中で、柄にもない考えが沸く。

「――どうしたの舞島君？」

「いやなんでもない」

今は哲学ではなく、朱美のことを考えないと。

「――なあ、福ちゃん？」

「なに？舞島君」

福ちゃんはジュースを飲むのを止めて、おれの顔を見つめた。

「上手く行かない、今回？」

朱美のことを色々と考えていたら、不安が沸いてきた。

「朱美ちゃんのこと？」

「うん。今回は勉強教えるのとはわけが違っただろう？」

「たしかに勉強とは違うけど、私は結構樂觀的だけだな。深夜とはいえ、外出たわけだし」

「福ちゃんは慣れてるから自信もてるかもしれないけど、おれこういうの初めてだからなんか不安なんだよ」

脳天気なおれでも不安になる。

先生という稼業をやってみて初めてわかったことがある。

？先生つてヤツは、時に生徒の一生を左右する？

おれ達が手を貸さなくても、朱美一人で外の世界に一步踏み出す日が来るかもしれない。

しかしそれは明日、明後日の話じゃない。

一年先か、三年先か、十年先か――。

それとも一生――。

外の世界に出ないかもしれない。

年単位となれば、もはや朱美だけの話ではすまない。

家族全体の問題になる。

現になつてゐる。

愛さんからチラリと聞いた話だが、朱美の親父さんがアメリカに単身赴任したのも、朱美の治療費やら教育費を稼ぐためなんだそうだ。

愛さんが彼氏と別れたのも、大学を留年したのも、朱美の世話に時間を取られたせいだ。

聞くだけで重たくなるような話。

おれと福ちゃんは、この重い事実を。

少しでも軽くするために、愛さんに雇われてるわけだ。

おれに背負いきれるかな。この重い現実を。

「大丈夫よ、舞島君。舞島君にはラポートという武器があるわ」

福ちゃんはおれの心の声が聞こえたかのように励ます。

「ラポート――」

「そう。ラポート。わたしの経験だけど。昔ね、わたしが見ていた自閉症の子で、車は好きなんだけど、車のエンジンの音が嫌いな子がいたの。その子、車見たいから駐車場に行きたいんだけど、エンジンの音がするでしょう」

「そりゃあ、駐車場だからな」

「うん。怖いエンジンの音がするから行きたくても行けないの。でもある日ね、その子わたしの手を自分の耳に持って行って、自分

の耳を塞いだの」

「自分の手を使えばいいじゃないか？」

おれならそうする。

「普通ならそうするだろうけど、自閉症の子はクレーン現象と言って、他者の体を道具のように使うことがあるの」

「いつもやってるのか、そのクレーン現象ってやつ？」

「ううん。だいぶ前にクレーン現象を言語に置き換えたから、見たのはひさしぶり。はじめは矯正しようかと思ったけど、なんとなく様子を見てみることにしたの。その子がクレーン現象やるの、本当に久しぶりだったからね。しばらくの間その子の耳を塞いであげると、その子おっかなびっくりだけど駐車場の中を歩き回りはじめたの」

「へー」

おれは素直に感心した。

「不思議なもので、この子、わたし以外だとやらないの。お母さんの手でも、お父さんの手でも、お兄ちゃんの手でもやらないのよ」

「福ちゃんの手じゃないとダメなのか？」

「そう、私の手じゃないとダメなの。その子も家族が嫌いというわけじゃないけど、家族だと注意が行き届かない所もあるでしょう？」

私は他人の子でしかも障がいのある子を預かってるわけだから、仕事中は細心の注意を払うけど、家族はそういうわけにはいかないの。仕事ではないし、二十四時間生活を共にしてるわけだから、四六時中気を張るなんて不可能だし——」

——どうしても手が回らない時がある。

「その差が信頼感に繋がってるのか」

「そんなところかな。自閉症の子は程度の差こそあれ、他者認識に障がいあるからあんまり他者に意識を払わないけど、ラポーターがついてくると、自閉症児にとっても特別な存在になるのよ」

「――朱美とおれにも、レポートあるかな」

「あるわ、絶対。だから自信を持って舞島君」

福ちゃんは笑顔で断言したが、おれはどうも納得出来ない。

「信頼感つてより、漫才のコンビみたいな気がするだが」

しかも度突き合いの。

「漫才のコンビも信頼感がなければ、コンビにならないでしょう」

「それもそうだな」

言われてみればそうだ。おれは福ちゃんの言葉にほだされて、自信とやる気が出てきた。

「やるか、福ちゃん！」

「やりましょう、舞島君！」

こうして、手紙投函作戦は開始された。

まだ薄暗い朝の道を歩いて、おれは鷺尾家にやってきた。

鷺尾家の玄関先には見慣れぬ鉢植えが置いてあった。

鉢植えには赤い花が植えてあったが、興味のないおれには何が植えてあるのかわからない。

？愛さんかな？

朱美の趣味じゃないような気がする。

そんなこと考えながらピンポンを押すと暫くしてドアが開いた。玄関には愛さんと朱美がスタンバってた。

「お早う御座います。舞島さん」

愛さんは爽やかな笑顔を添えて挨拶したが、声が固い。

原因はすぐにわかった。

朱美の様子が酷い。

顔は真っ青だし、膝に乗っかっているアノ汚い毛布は震えている。毛布の端を握りしめている朱美の手が震えているせいだ。

おれは車椅子の傍らに座り込むと、朱美の目線に合わせながら「お早う、朱美」と挨拶した。

「——お早う、直人」

朱美はかたい声で挨拶を返した。

「こりゃあ、無理は禁物だな？」

初日の結果が頭をよぎった。

昨日は初日とあって福ちゃんが担当した。

福ちゃんが車椅子を押して庭に出た瞬間、朱美が泣き出したので即バック。外に出た時間は僅か一分弱。

報告メールを読んだときある程度のことは覚悟していた。

「おれに出来るのか？」

胸の中で眠らせていた弱気が目を覚ましたが、顔には出さないようにした。

おれの弱気が、さらなる不安を朱美に与えてしまうかもしれないからだ。

「朱美、今日はお花に水をあげようか？」

怯えている朱美を刺激しないよう優しく声をかける。

「——うん」

朱美は花に水をやりに行くというよりも、自分の親の葬式にでも行くかのような暗い顔で頷いた。

「庭はまだ早いかな？」

おれは朱美と一緒に玄関先の花に水をやることにした。

外というより家の範囲のような気がするが、半歩でも前に出たことには変わりわない。

おれはスロープを使って朱美を玄関に下ろす。その間に愛さんが如雨露に水を汲んできてくれた。

おれは腰をかがめ朱美の目線に合わせながら、朱美と一緒に鉢植えに水をやった。

朱美と目線の高さを合わせたのは、朱美の不安感を少しでも和らげるためである。

勿論おれが考えたのではなく、福ちゃんに教えてもらったテクニクの一つである。

細かいことだが、そういう細かい積み重ねが、後に大きな結果を出すことがある。

と、福ちゃんは言っていた。

しかしまだ効果は現れていなかった。

朱美は怯えたままだ。

これだけではダメだ。

「愛さん、この花なんて名前なんですか？」

花の名前なんて興味はないが、場の空気を変えるきっかけが欲しかった。

「ゼラニウムです、直人さん」

「ほう——。カブト虫とか寄ってきますかね」

こっちの質問は、その前の質問より興味はあった。

「——寄ってこないよ、カブト虫なんて」

愛さんではなく、朱美が答えた。

「そうか。寄ってくるなら、おれも育ててみようと思ったのに」
残念。

「なんで直人は、そんなにカブト虫が好きなの？」

朱美はおれを見上げ尋ねる。

「なんでカブト虫が好きかって？ そんなこと考えたことすらないけど、あれだ。親父のせいだな」

「直人のパパのせい？」

「親父は仕事以外興味の無い人間で、子供を遊園地に連れて行くとかそういう類は一切できない人間だったけど、カブト虫採りだけは連れて行ってくれたんだよ」

正確に述べると、親父は夏の森を散歩するのが好きで、散歩のついでにいつもほったらかしてる自分の子供を道連れにした。

子供は子供で、ただ散歩するだけでは退屈だから、網を担いでカブト虫を捕まえることにした。

ただそれだけのことである。

深い意味はない。

「――直人、パパのこと好き？」

朱美は鉢植えに水をやるのを止めて問うた。

「――嫌いじゃないな」

好きといえるほど、可愛がられていない。

嫌いというほど、厭なことをされたわけでもない。

「直人のパパもやつぱ金髪――」

朱美が質問を重ねようとしたその時、家の前をトラックが重低音を轟かせながらゆっくりと通り過ぎていく。

？うるせえな？

住宅街だから大型トラックの通行は禁止されてるが、国道の抜け道として利用する馬鹿がたまにいる。

「トラック、やだあ！」朱美は悲鳴をあげる。

？しまった？

朱美がトラックによって、足を奪われたのだ。怯えるのは無理はない。

？いや、怯えるだけではすまないかもしれない？

朱美は恐怖のあまりパニックを起こすかもしれない。

おれは一瞬どうしていいかわからなくなり、固まる。

？なにやってる！？

固まってる場合か、おれ。

なんとかしなければ。

？しかしどうする？

考えてる暇もない。

怯えてる朱美を守ってやらなければ。

おれは手を伸ばし、朱美の両耳を覆った。トラックを追い払うことは出来ないにしろ、あの耳障りな重低音から耳を守ることはできる。

おれの手が朱美の両耳を覆うと、朱美は幾分落ち着いたのか叫

ぶのは止めた。

叫ぶ代わりに、唇を噛み恐怖に耐えた。

トラックは走り去っていた。

おれは朱美の顔が落ち着いたのを確認してから、朱美の両耳から手をはなした。

「——今日は終わりにするか、朱美？」

「うん」朱美は泣き顔のまま頷いた後、「——ありがとうね、直人」と言った。

翌日。

おれは教室で歪な形のハンバーグをつまみながら、中学生の参考書を解いていた。

両方とも、恵が提供してくれたものである。

参考書の余白には要点がメモ書きされており助かったが、ハンバーグの方はソースがしょっぱく食べて食べたもんじゃない。

？今日の晩飯の時、デミグラミックスソースの作り方おしえてやらないと？

こんなしょっぱいの毎日食わされたら、間違いなく血圧が上がる。おれは冷たいウーロン茶を飲んで、しょっぱいハンバーグを無理矢理食った。

弁当箱を片付けていると加藤が寄ってきた。

「舞島、宮田が呼んでるよ。職員室に来いって」

「なんだよ、このクソ忙しいときに」

おれはぶつくさ文句を言いながら弁当箱を鞆にしまった。

「——舞島、ハンバーグ美味しかった？」

「——まあまあだな」

点数にすると三十点だが、それは言わないでおいた。

「わたしも作ろうかな、恵一人じゃ大変だろうし」

姉は不吉なことを言い始めた。

恵も料理ヘタだが、加藤はヘタというレベルをはるかに超えて

いる。食材を毒に変えるスキルの持ち主だ。

「いや、別に無理しなくてもいいだぞ、お前の家は金がないんだから」

「大丈夫、スーパーでパートしてるから、安く買えるから」

「——そうか。できればハンバーグ以外にしてくれ」

「うん。恵が作ってるもんね。何が食べたい舞島？」

加藤は新婚生活に浮かれてる若奥様のような笑顔で、おれの顔を見つめていた。

「シンプルな味付けの炒り卵と野菜炒めにしてくれ」

これなら不味くてもなんとか食えるだろう。

「そんな簡単なヤツでいいの？」

目玉焼きすらまともに作れない癖に、加藤は強気であつた。

「ああ。おれはシンプルな味に飢えてるんだ」

「そう。じゃあ明日作ってあげる。楽しみに待っててね」

加藤はニコニコ顔で言い放つた。

？グッバイ、おれの昼食生活？

おれは心の中で健全な昼食生活に別れを告げると、職員室に向かうため教室を後にしようとした。

亀吉とクチャベつてた片桐がにやけ面で呼び止めた。

「舞ちゃん、ガリ勉の次は宮田にゴマすりかよ。精が出るな」

「ゴマすりなんかじゃねーよ、片桐。宮田に呼ばれただけだ」

「けっ！ 人間変われば変わるもんだな。先公に呼び出されて尻尾振ってほいほいかよ。おれと殺し合い演じた人間が、まかさこんなになちまうなんて」

おれは頭にきて、言い返してやろうと思ったが、口から出たのは違う言葉だつた。

「悪いな、片桐。おれ、やりたいことが出来ちまつたんだ」

だからお前とはもう連めない。

悪いが、道が違つちまつた。

「——そうかよ！」

片桐は横に座っていたヤンキーを蹴り飛ばした。ヤンキーは思いきり床に転がったが、怒り狂った片桐に文句を垂れるような愚かな真似はしなかった。

おれは教室のドアを開けて、職員室にむかった。

宮田はすし屋の湯飲みで茶を飲んでいた。

「おう、舞島か」

宮田は机の上に茶碗を置いた。

「話ってなんすか？」

「いや、お前だけまだ進路の調査票まだ提出してないだろう」

「それが、忘れてたわ」

「どうすんだ、舞島。就職か？ それとも片桐のところでヤクザやるのか？」

「進学でお願いします」

宮田は口をあんぐりと開いて驚いた。

「——進学って、専門か？」

「大学行って、心理学勉強しようと思って」

「——心理学？ 舞島がか？」

明日この世が終わると聞かされても、宮田はこれほどは驚かないだろう。

「おれじゃあ、ダメすかね」

馬鹿にされてるようで気分よくないが、気持ちはわかる。

昔のおれが聞いたら、そんな未来絶対信じない。

「舞島、お前じゃ推薦はやれんぞ。それでも進学でいいだな？」

タマカスは開校以来、推薦を使わずに大学に進学したヤツは誰もいない。

「はい」と頷くと「——そうか。難しいとは思うが、舞島も最近真面目に勉強してるようだしな。よし、進学の方で考えてみようか」

おれは宮田に礼を言々と職員室を後にした。
廊下を歩いていると、ポケットの中の携帯が震えた。

？福ちゃんか？

携帯を取り出してメールをチャックする。

件名 今日の報告

朱美ちゃんは家の前の道路まで行くことが出来ました。トラックの件もあるから、すぐに家に戻れる範囲で訓練していきましょう。そういう訳で明日よろしくね

道路まで行くことが出来たか。

よかった。

おれの口から安堵のため息が漏れた。

昨日のトラックの件があるから心配してたが、どうやら取り越し苦労のようだ。

おれは携帯を仕舞うと、教室に戻った。

そして十日後。

数々の困難、試練はあったけど、おれ達はずいぶん郵便ポストにたどり着くことが出来た。

？なんとかなるもんだな？

はじめは無理かと思ったが、四日目あたりから朱美も慣れてきたのか、スイスイ進むようになった。

苦手なトラックが来ても、耳を塞いでやればやり過ごせるようになった。

知らない人とすれ違っても、おれが手を握ってやれば落ち着くことが出来るようになった。

「直人、届かないから。直人がいれて」

感動に浸る暇もなく、朱美が催促してきた。

朱美が入れた方が絵になるような気がするが、届かないじゃない。ようがない。

おれは朱美から手紙を受け取ると、ポストに入れた。

「よく頑張ったな、朱美えらいぞ」

おれは朱美の頭を撫でて褒めた。朱美は照れくさそうに笑う。

「どれぐらいでパパに届くかな、直人」

「エメールなんか送ったことないからわからねえけど、一週間もあれば届くじゃないのか？」

「直人はパパに手紙送ったりしないの」

「まったくしないな」

手紙を送るという発想すらわからない。

「直人って、薄情なのね。直人のパパだって手紙もらえば、絶対喜ぶよ」

「おれは手紙派じゃなくて、直接会う派なんだよ」

親父は海外を飛び回っているの、直接会うのは難しいが。

「——ねえ、直人」

朱美は俯き加減で、おれの名を呼んだ。

「どうした？」

「ボク、手紙を……」と、朱美が言いかけた瞬間、おれは盛大な屁をこいてしまった。

？ 昼間に加藤に食わされた生焼けの薩摩芋ご飯のせいかな？

なんであいつは炊飯器まかせの料理でも、これほどまでに不味い料理を作ることができるのか不思議である？

「臭い！ もう、なんなのよ直人！」

朱美は鼻を掴みながら怒り出した。

「——しょうがないだろう。出るもの所かまわずなんだか」

自分の鼻を掴みながら、弁解した。

たしかに臭い。

「バカ、バカ、バカ、バカ。人がせつかく大切な話しようとしてるのに、オナラする馬鹿どこにいるの？」

目の前にいるよ。と言いたかったが「まあ、落ち着け。これは祝い屁だから、めでたいものなんだ」

「お目出度いのは直人の頭よ！。せっかく顔は格好いいだから、中身も少しは格好よくなればいいのに」

朱美は喚いた。

朱美を家に送り届けると、福ちゃんに報告メールを送り家に帰った。

部屋で、英語の勉強をしてると福ちゃんからメールの返事がきた。

件名、おめでとう！

さすが直人君ね。こんなに早く目標が達成できるとは私も思ってたませんでした。

それで今後の訓練についてなんですけど、打ち合わせもしたいから五時にマックで会いませんか？

おれは了解とだけ書いてメールを打ち返した。

少し早めの夕食を取る人でマックは賑わっていた。

福ちゃんは店の隅の窓際の席に陣取り、いつも通り本を読んでいた。

時折腹が減るのか、チキンナゲットに手を伸ばした。

「福ちゃん——」

おれが声をかけると、福ちゃんは「うわっ」と叫んで仰け反った。

「——ビックリした。舞島君かあ」

福ちゃんは胸に手を当てながら、安堵のため息を漏らした。

「いや、そんなビックリするなよ、福ちゃん。おれのほうが逆にビックリしたよ」

「ゴメンね、私って考え込んでると、すぐビックリするのよねえ——」

おれは席に座ると「何読んでるの、福ちゃん」

おれはとつくの昔にカバーが外れたボロボロの本を指さす。

「うん？ 自閉症の本」

福ちゃんは背表紙を見せてくれた。

自閉症児の認知とその世界――

背表紙にはそう書かれていた。

「福ちゃん、本当に自閉症好きだな」

「自閉症オタクですから、グフフ」

福ちゃんはオタクを強調するためか奇声を発したが、美人なためキモく聞こえない。

美人は得だ。

「舞島君も、朱美ちゃん落ち着いたら自閉症やりましょうよ、自閉症。大物の子もいるから、男手が欲しいのよね」

「大物って、なに？」

「体が大きくて、問題行動が激しい子」

「それって暴れたりするの？」

「走り出したり、唾かけたり、叩いたり、自傷したり、いろいろやるわね」

「――よくそんなのと付き合えるな」

普通なら金貰っても断るんじゃないか。

「いや、舞島君も接してれば好きになるって。みんな萌え系だから」

「そうかな――」

話聞いていると、とても萌え系には思えないだが。

「まあ、今は自閉症より朱美ちゃんよね」

福ちゃんは本を閉じると、鞆にしまった。

「それでね、今後の訓練の事なんだけど。外出訓練は一段落ついたから、そろそろ朱美ちゃんに同年代の友達を作る訓練をしようかと思っているの」

「お友達？」

「うん。学校に通えば、大人よりも同じ年の子と接する機会のほうが圧倒的に多いのだから、同じ年頃の子供達と仲良くするスキルが必要なのよ」

「なるほど、そりゃあそうだな。学校で友達がいないと寂しいもんな。でもそれってどう訓練するんだ？」

友達を作る訓練なんて、おれの頭では丸つきり考えつかないだが。
「訓練と言うとピンとこないかもしれないけど、ようは合コンと同じようなもん。」

合コンの幹事じゃないけど、わたし達大人が場所をセッティングし、友達候補を招待し、朱美ちゃんがみんなと仲良くなれるよう私達が影ながらフォローする」

「なるほど。たしかに合コンみたいだな」

合コンなんてしたことないけど

「でね、舞島君。この訓練をやるうえで一番の困難があるんだけど」

「困難？」

「朱美ちゃんの友達候補よ。舞島君、小学校三年生ぐらいの子供の知り合いいない？ 私も心当たりはあるんだけど、その子場所が遠いのよね。今後のことも考えると近場に住んでる子のほうがいいのよね」

「近場に住んでて、小学校三年ぐらいの子ねえ……」

おれは頭を捻り、誰か適当なのがいらないか記憶を探ってみる。

「……いた！ 丁度いいのがいたよ、福ちゃん」

「えっ、誰か心当たりあるの舞島君？」

「ああ。この前福ちゃん、駅の前で眼鏡かけた女にあつたろう」
「舞島君の彼女候補ね」

福ちゃんは厭な言い方をした。

「——まあ、その女なんだけど、あいつの家は貧乏子沢山を地でいつてる家だから、小さいのから大きいのまで全部そろってるよ」

「小学三年生も？」

「いる。絵里花っていう生意気盛りがいるよ」

「おお！　なら悪いけど舞島君、加藤さんに頼んでみてよ」

「いいよ。一番上の眼鏡はアルバイトで忙しいけど、ほかの連中は暇だからくるよ」

「そうかな。あの眼鏡の女の子も忙しくても絶対きそうだけど」

「なんで？」

「そりゃあだって、好きな人と一緒にいられるチャンスですもの」

「——変なこというなよ、福ちゃん」

そのことに関してはあまり意識しないようにしてるだから。

「顔真つ赤だよ、舞島君。舞島君も王子様みたいな見た目のわりには、女の子慣れしてないようだから朱美ちゃんの件片付いたら今度は舞島君を訓練しようか。もっと女の子慣れして、恋愛上手になれるように」

「福ちゃんだって似たようなもんだろっ。」

おれ以上に恋愛下手そうだもん」

「あつ、痛っ。たしかに私もよく言われるのよね。恋愛下手だの、奇人だの、地に足がついてないだの」

——親からも早く彼氏作りなさいって、言われるし。

福ちゃんはため息とともに愚痴を吐き出した。

「まっ、いまは自閉症児でいいや。彼氏はあと」

福ちゃんは一人で合点すると「互いに痛いところを刺しあってもしょうがないから、話を戻しますか」

福ちゃんは弟子に休戦を申し出た。

「そうしようぜ、福ちゃん」

弟子が同意すると師匠は話を戻した。

「それで朱美ちゃんの件だけど、残る問題として、どういう遊びを用意するか、なのよね」

「遊び？」

「うん、遊び。朱美ちゃんや、絵里花ちゃん、二人が楽しめる

遊びを、我々が用意してあげる必要があるの。よく問題になるけど、障がいのある子と健常児と一緒に遊ばせようとすると、健常児の子がお世話係みたいな感じになったり、用意された遊びが簡単すぎて健常児の子が退屈してしまったりすることがあるの。こういった問題が起ると、大抵の場合教師や親は精神論で片付けるの」

あの子は障がいがある子なのだから、我慢しなさいってね。福ちゃんはため息をついた。

「これはよくないのよ。障がい児は、健常児に優しい心を学んでもらうための教材じゃないし、健常児側からしてみれば厄介な物を押しつけられたと考えるかもしれない。

これだと友達という関係に発展するのは難しいのよ。舞島君だって同情心とかそういったものだけで朱美ちゃんの家教師を引き受けてるわけじゃないでしょう？」

「——同情心だけじゃないな」

同情する気持ちもある。

でも、それだけじゃない。

「朱美ちゃんと接して楽しい気持ち、人に物を教える楽しみ、学ぶ楽しみ、他にも色々な楽しみが舞島君のなかにあると思うの。そういう物がないと、こういう仕事は出来ないわ」

「——ようは朱美が好きってことか」

好きな相手といるのは時に苦しいことがあるかもしれないが、やはり楽しいだろう。

「——朱美ちゃんに聞かせてあげたいセリフね」福ちゃんは呟く

「なにが？」

声が小さすぎて聞こえない。

「なんでもない」

福ちゃんは笑って誤魔化す。

「ところで福ちゃんはなんで朱美とか、その自閉症とかと付き合ってるんだ？」

「よく聞かれる質問だけど、答えは舞島君と同じ。好きだから

よ。好きじゃなきゃ、付き合つてられないもん」

福ちゃんは笑った。

「まあ他にも、知的好奇心とかもあるけどね。一番はこれ」

福ちゃんは一端言葉を切り、ちよつとだけ考え込む。

「——しかし福祉とかボランティアやっていると、よく優しい人なつて言われるけどあれも困るのよね。私がボランティアやるのは単なる趣味だし、性格にいたっては私は優しい人というよりも、どちらかという人が悪いほうだし」

「——たしかに福ちゃんは人が悪いよな。一見すると人よさそうに見えるけど」

これまでの付き合いでなんとなくわかる。

「——なんか酷いこと言われてるな、私」

福ちゃんはムスツとした顔を作ったあと、笑った。

「またしても話が脱線したけど、用意する遊び何にしようか、足が不自由な朱美ちゃんでも参加できて、加藤家の皆さんが楽しめる遊び……」

福ちゃんは顎に手を当て、考え込む。

おれは手を叩いた。

福ちゃんは顔を上げて、おれの顔を見る。

「——花火はどうだ？ 花火なら朱美でもできそうだし、加藤達も大喜びするぞ」

加藤家の財政事情では、花火すら厳しいので、タダで花火がやれると聞いたら絶対食いついてくる。

「——花火ねえ。たしかに花火ならみんな参加できそうね。よし花火で決定！」

擬態

無数の星が微かな光を放ち、朽ちた灯台を照らしていた。

それは美しい光景かも知れないが、加藤家のガキンチョ軍団の目を奪うことは出来なかった。

今宵の主役は美しい夜空ではなく、山と積まれた花火なのだから。

「ねえ直にい、こんなに花火買って大丈夫？」

お金なくなっちゃったりしない？」

久美子是不安げな顔で、権左右衛門の前に積まれてある花火の山を指さした。

「こんぐらいどってことないから、心配すんな久美子」

予算は鷺尾家から出ている。

だが、多少足が出た。

足りない分はおれが出しておいた。

鷺尾家から支給された予算が少なかったわけではない。

花火を選んでいるウチにテンションが上がったおれが、後先考えずにバカバカ買いきすぎたのが原因である。

だからアシが出た分はおれの財布から出すのは当然であつた。

「うお！　　すげえ花火いっぱいある」

花火の山を見た桂太は興奮して鼻息が荒くなる。

光輝も、桂太を真似をして、うお！、だのすげえだの言つて一緒になつて騒いでる。

おれが知らない間に、光輝は桂太に懐いたようだ。
いいことだ。

長姉は、光輝が最近桂太の真似をして、悪戯ばかりして困ると嘆いたが、仲が悪いよりはずっといい。

「桂太ったらガキなんだから。花火ぐらいではしゃいじゃって」
絵里花は、姉のように兄を評すると「直にい、クミと一緒にレ

デイ向きの花火選んでくる」

絵里花は久美子の手を引っ張って、レデイ向きという謎の花火を探しにいった。

「――加藤も自分の花火を選ばなくていいのか？」

おれは隣に立つてる加藤をからかう。

「もう花火でよろこぶ年じゃないわよ。恵行ってきたら」

「――姉さん。直人さんと二人きりになりたいからって、さりげなく私を追い払おうとするのはやめてください」

恵はジツと目で姉を睨んだ。

「いや追いつきそうとしたわけじゃ――」

目が泳ぐ加藤。

「――いや、それはそうと舞島も偉いわよね、足が悪い子の家庭教師やるなんて」

姉は強引に話題を変えた。

「別に偉くなんてねーよ。家庭教師引き受けたのも成り行きだよ」

しかも立ちションがきつかけである。

別に偉くもなともない。

「成り行きでも普通の人はなかなか引き受けませんよ、直人さん」

話題を変えた姉に抗議することなく、妹は姉が口にした話題に乗った。

「なんかおれが普通じゃないと言われてるような気がするだが」

「直人さんが普通の人の範疇に入るはずないじゃないですか、ハーフで、喧嘩が強くて、女の子からラブレターを山のようにもらって、その上姉妹両方から告白されて……」

恵の声は段々と陰悪になっていた。

自分の言葉にむかついてるらしい。

いかん。

足下で犬が吠える。

灯台犬のポンだ。

「なんだお前も花火見に来たのか？」

おれはムツゴロウさんばりに、ポンの頭をなで回した。

話題を変えないと、な。

「犬はやっぱ可愛いな、恵！」

「態とらしいにもほどがありますよ、直人さん」

恵はブウたれると、「舞島君！」林の方から福ちゃんの声が聞こえてくる。

見ると、車椅子を押してる福ちゃんが林道の入り口前に立っていた。

おれが「福ちゃん！」と叫びながら手を振ると、師匠は腕が抜けるのでは、と心配になるぐらいの勢いで手を振ってくれた。

片手にコンビ二袋をぶら下げてる愛さんは、空いた方の片手でごく常識的な範囲で手を振ってくれた。

その妹である朱美は、今にも泣き出しそうな顔で小さく手を振っている。

？MAXで緊張してるな？

無理ないか。同年代の子は朱美にとって一番苦手な存在なのだ。緊張するな、という方が無理がある。

？よく見とかないとな？

チビ共が花火に浮かれようと、おれだけは油断しないようにしない。

おれは気合いを入れ直していると、福ちゃん達がやってきた。

「こんばんわ、鷺尾愛と申します。今日はよろしく願いします」

愛さんは加藤にたいして丁寧に頭を下げた。

「こちらの方こそ、こんなに大勢で来てしまつて申し訳ありません」

加藤は慌てて頭を下げた。

「大勢の方が賑やかで楽しいですから」

愛さんは言い終わると、妹に向かって「今日はいっぱいお友達が来てくれてよかったわね、朱美ちゃん」

「——うん」朱美は小さく頷く。

？大丈夫かな、朱美のヤツ？

朱美の姿を見ていると不安になるが、朱美がギブアップ宣言したら、もしくは福ちゃんが無理だと判断したら、花火が途中で朱美を撤退させることになっていた。

こちらも用心してるんだ。

なんとか乗り切れるだろう。

愛さんと加藤の挨拶が終わると、福ちゃんが口を開いた。

「福田福子です。この前はすみません。誤解を与えるような事しちゃって」

福ちゃんはいきなり加藤に謝った。

「いやべつに私は——。そのう——」

あの時のことを思い出したかの、加藤は一人悶えてる。

「舞島君、こっちの可愛い女の子は私に紹介してくれないの？」

ワテンポ遅れて、恵の頬が赤くなった。

「こいつは加藤の妹の恵。本ばかり読んでるから福ちゃんとは話があうよ」

「加藤恵です、よろしくお願いします」

「福田福子です。福ちゃんって呼んでね」

福ちゃんの紹介が終わると、長姉は「花火は後にして、あんたらちゃんと挨拶しなさい！」

花火の前で騒いでる姉妹達を呼びつけた。

絶体権力者である長姉の声を耳にすると、チビ共はワラワラと集まってきた。

「ほら挨拶して！」

長姉に急かされると、長男である桂太が前に出てきて、早口で「桂太です」というとぞんざいに頭を下げた。

よく見ると桂太の顔は赤い。ああ見えても、照れ屋なところが

あるから、見慣れぬ美人を目の前にして多分恥ずかしがってるのだろっ。

桂太が挨拶を終えると、光輝も頭を下げた。

絵里花は頭を下げながらも、ちらりと朱美かの車椅子を盗み見た。

？余計なこと言わなきゃいいが？

絵里花は意地悪な性格ではないが、無神経で空気を読まないところがある。

なんの前触れもなく爆弾発言するかもしれない。

よく監視しとかないと。

最期に久美子が挨拶すると、チビ共は花火の山の前に戻ってた。

と思ったら、久美子は一人残ってポンを見つめていた。

？ポンに触りたいのか？

しかしポンが怖いのか、久美子は遠巻きに見つめてるだけだ。しゃーない。おれが助けてやるか。

おれは久美子にポンを触らせようとしたその時、福ちゃんは目頭でおれを押さえた。

福ちゃんに何か考えがあるみたいだ。

おれは福ちゃんに任せることにした。

福ちゃんは久美子の前で屈むと、「久美子ちゃんはワンちゃん好きなの？」

「うん、好きだよ。ワンちゃん」

久美子はおどおどした顔で答えた。

福ちゃんが怖いというより、人見知りの激しい久美子にとって初めて会う人は皆怖いのだろっ。

「犬好きなんだ、お姉ちゃんもワンちゃん大好きよ」

福ちゃんは久美子に話題を合わせた。

？話題を合わせて、久美子のラポートを取ろうとしている？

ラポートを得ようとしてる相手と共通の話題を持つことは、ラポートを簡単に得ることができいい手なんだそっだ。

おれはそれを聞いたとき、相手の話題にまったく興味がなかったり、知らない趣味だったりしたらどうするだ、と質問した。

「知らなくてもいいの。自分の知らないことなら、興味あるふりをして、相手に質問してみたり、ニコニコしながら黙って聞いているだけでもいいのよ」と福ちゃんは答えた。

福ちゃんはその手口を巧みに使い、久美子の緊張をほぐしていた。

五分もしないうちに、久美子の口から笑い声が漏れるようになった。

「久美子ちゃん、それじゃあこのワンちゃんの名前知ってる？」

福ちゃんは名前を知ってるくせに、久美子に質問した。

「ううん、久美子知らないよ」

久美子は悲しそうに頭を振る。

「朱美ちゃんなら知ってるから、一緒に聞いてこようか？」

？なるほど、ポンを接着剤にして朱美と久美子をくつつける作戦か？

福ちゃんに手抜きりはなさそうである。

二人は手を繋いで、朱美に名前を聞きに行く。その後ろをポンが尻尾を振りながらついて行く。

「朱美ちゃん、久美子ちゃんに犬の名前教えてあげて」

「——ポン」朱美は俯いたまま答えた。

「ポン？、ポンて言うの朱美お姉ちゃん？」

「——そうだよ。その子はポンていうんだよ」

「ポンかあ——。可愛いおりボンにお似合いの名前だね」

「——りボン可愛いと思う？」

朱美は少しだけ顔をあげた。朱美もりボンで髪を結ってるから、自分が褒められたみたいで嬉しいのかも知れない。

「うん、可愛いと思うよ。久美子も朱美ちゃんやポンみたいにおりボンで髪結いたい」

「——りボンならわたしが持つてるわ」

福ちゃんは鞆からリボンを取りだした。

「好きな色のリボンあげるから、久美子ちゃんも朱美ちゃんみたく髪を結ってみたら？」

「いいの、福ちゃん？」

「いいのよ、久美子ちゃん」

福ちゃんは笑顔で了解する。

「ご飯抜いちやったりしない？」

久美子らしい、切ない質問を放った。

「大丈夫、リボンをつけてもご飯食べられるから」

福ちゃんは笑顔で受け止める。

「じゃあ、久美子にリボン結って」

「うん」と福ちゃんは答えた後、「朱美ちゃん、久美子ちゃんの髪結ってあげて」

福ちゃんは朱美を上手く巻き込む。

「いいよ、久美子ちゃん後ろむいて」

久美子はクルッと回って、朱美に背中を見せた。

朱美は久美子の髪をリボンで結ぼうとするが、さして器用でもない朱美は大人のように上手く結うことができない。

朱美が悪戦苦闘していると、福ちゃんがさり気なく助けにはいる。

朱美は福ちゃんの助けをかり、久美子の髪を結う。

リボンを結び終わると、福ちゃんはコンパクトを差し出す。久美子はコンパクトに付いてる鏡を覗き込んだ。

「久美子、可愛くなってる！」

久美子は喜びの声を上げると、「ありがとうね、朱美ちゃん」頭を下げた。

「ボクだけの力じゃないよ、福ちゃんが……」

と朱美が言い掛けたその時「桂太、花火で下品な事するの止めなさい！」

加藤の怒鳴り声が響いた。

何事かと思つて見ると、桂太が権左右衛門の金玉を花火で炙つていた。

「なんでおれだけ怒られるだよ。絵里花だってやってただろう」

桂太は唇を尖らせ抗議する。

「絵里花はそこで花火やってるじゃない」

加藤が指さしたさきでは、絵里花はニコニコ笑いながら花火を楽しんでいた。

「くそう、あの女上手いことやりがつて……」

桂太は齒ぎしりしながら悔しがったが、現場を押さえられた以上どうにもならない。

絵里花はしてやったりと言わんばかりの顔で、ほくそ笑んだ。

「――私達も花火やろうか」

福ちゃんが誘うと、皆頷いた。

チビ共は好きな花火を手にとると火をつけた。アダルト軍団はその後ろで、チビ達を見守る。

「直にいい、花火がシュウシュウして怖いから、一緒にやって？」

久美子は勢いよく噴き出る花火に怯えたのか、おれに助けを求めてきた。

「ほい、わかった」

おれは調子よく頷くと、花火を握りしめてる小さな手を握ってやった。

「直にいい握ってもらったら怖くなくなったよ」

「そうか。こんなんでも怖くなくなるなんて安上がりでいいな、久美子」

「安上がりながら、久美子をお願いしたらいつでも手を握ってね、直にいい」

「お安い御用だ」

得意の安請け合いですと、久美子の隣にいる朱美がブスっとした顔でおれの顔を睨んでいた。

おれが見てるのに気づくと、朱美は顔をそらした。

？どうしたんだ？？

なんか気に障ることしたか、おれ？

「朱美ちゃんの花火も勢い強いから、舞島君手を握ってあげて、後ろから福ちゃんが声をかけた。」

「おつ、朱美のこと忘れてたな」

おれは朱美の手握ってやった。

「直人のバカあ、ボクの先生なのにボクのこと忘れるなんて――」

本当にバカなんだから。朱美は呟く。

「悪かった、悪かった勘弁してくれ」

おれは平謝りに謝る。

「ふん、わかればいいだよ。わかれば」

「両手に花ね、舞島君」

福ちゃんが茶化す。

「――わたしも少し怖いかも、直人さん」

それまで黙って見ていた恵が呟くと「ならわたしが手を握ってあげるわ、恵」

姉は妹の手首をがっちりと掴んだ。

「――やっぱ怖くないです」

「あつそう」

姉は妹の手を解放した。

うつかり口を挟むと、面倒くさい展開になりそうなので見なかったことにする。

「小便の滝！」

桂太は股間に花火を押し当て、立ちシヨンの真似をした。

光輝も真似しようとしたが、加藤が恐ろしい顔で走ってきたので、二人して逃げ出した。

？馬鹿だな？

おれも人のことといえないが、男というのは馬鹿なことをやるチャンスがあれば、逃さずやる生き物なのかもしれない。

騒がしい桂太達をよそに、女達は和気藹々と花火を楽しむ。

「――舞島さん」

「愛さん、どうしたんですか？」

「舞島さんにお礼を言いたくて。いつも朱美のことを面倒みてくださってありがとう御座います」

愛さんは深々と頭を下げた。

「大したことないですよ。福ちゃんのお手伝い程度ですから」

「いえ、舞島さんがいたから朱美もあんなに笑えるようになったんです」

おれは照れくさくなって、顔をかいた。

「頭なんかさげ――」

おれは言葉を飲んだ。愛さんの瞳から涙が溢れていたからだ。

「――ごめんなさい。いきなり泣き出しちゃって。朱美がほかの子と遊んでるの見たら、わたしまで嬉しくなっちゃって――」

「おれも嬉しいですよ、愛さん」

おれはポケットをまさぐりテッシュを取り出した。

テレクラのテッシュだった。

「――どうも格好つかないな」

「舞島さんらしいです」

愛さんは微笑むと、テレクラのテッシュで涙を拭った。

しんみりした場面をぶち壊すかのように、桂太と光輝が手を広げながら、こちらにむかって走ってくる。

「一番機到着！」

続けて光輝が「二番機到着！」と叫んだ。

姉の姿が見えない。

「姉ちゃんは？」

「黒パンなら、林の中でへたばってるよ」

桂太は花火を掴みながら言った。

バイトで鍛えた加藤も、小学生の底なしの体力には勝てなかったようである。

「――舞島君、ちよつといいかな」

青い顔した福ちゃんが、おれの肩をがっちりと掴む。

「どうした福ちゃん？」

何事か思つて驚いて問い返すと「ウンウンが外に出たがってるから、ちよつとトイレ行つてくる」

「――なんだ便所か」

肩の力がどつと抜ける。

「早く行つてこいよ、福ちゃん」

「うん。行つてくる」

福ちゃんはケツに力を入れながらモジモジと歩き出した。

よほど我慢してたらしい。

せつかくの美人が台無しだな。

ゆつくりと遠くなつていく福ちゃんの背中を見つめながら評すると、福ちゃんの足がぴたりと止まった。

？エスパーか？

と思つたら「舞島君、私がない間、朱美ちゃんのことよろしくね」

なんだ、そつちか。

「大丈夫だよ、だから早く便所行つてこいよ」

「――うん」

福ちゃんはトイレを目指してもぞもぞと進み始めた。

福ちゃんと加藤がいなくなると、桂太は派手な花火に手を伸ばした。

「おい、あんま危ないことすんなよ。小さい子もいるんだから」

「わかつてるつて。おれを信じろよ、直人」

あんまり信じられないが、まああんまり危険なのは買つてこなかったから大丈夫だろう。

「桂太！ 絵里花も選ぶだから勝手に取らないでよ」絵里花は唇を尖らせ文句をつける。

「花火は絵里花のじゃねえだろう」

桂太が言い返すと「桂太でもないでしょう。この花火は朱美ちゃんのお家が買ったんだから、朱美ちゃんのもでしょう」

絵里花はなんの前振りもなく朱美に話を振った。

「——うん」

絵里花に話しかけられて、途端に下を向く朱美。

「ほら、朱美ちゃんのじゃない。あんたのじゃないだから偉そうにしないでよ」

「——ぐう」

言い返すことができず、唇を噛む桂太。

？ 介入すべきか？

桂太も絵里花もがさつだからな。

へんな事を口走るかもしれん。

だが逆に考えれば朱美と絵里花をくつつける良いチャンスかもしれない。

「喧嘩すんな！ みんなの花火なんだからジャンケンで決めろ」

「ジャンケンか、うんならおれの勝ちに決まってるじゃん」

なんの根拠もないくせに桂太は自信たっぷりだった。

「ジャンケンなら絵里花だって負けないわよ。いつも給食で残ったプリンをこの黄金の右腕で勝ち取ってるだから」

絵里花は腕をまくる。

「ミツはグウ出す。ミツはグウ出して勝つ！」

ミツは心理戦に打って出た。

「——朱美ちゃんはなに出す？」

久美子は朱美に相談を持ちかけた。

朱美は久美子の耳打ちした。

たかがジャンケンだけど、やり方は人それぞれである。

「ほれ、やるぞ」

おれが声をかけると、皆が構えた。

「ジャンケン、ポン！」

皆が一斉に手を出した。

ミツを抜かして、全員がパーだった。

「――ミツ負けちゃった。ミツのグー負けちゃった」

ミツが己の丸めた拳を涙目で見つめながら呟く。

「雑魚が一人へった！」

絵里花が止めを刺す。

「ウワン！」

ミツは激しく泣き出した。

愛さんが慰めようとしたが、その前におれがミツの前に立った。

「ミツ、唇を噛んで我慢しろ」

ミツははじめはおれの言葉がわからなかったが、おれの言葉を理解すると泣きながら唇を少しだけ噛んだ。

この程度じゃ、勿論泣き止まない。

おれは素早くミツを持ち上げると、タカイタカイをしてやった。

「偉いな、ミツ。よく我慢したな」

ミツを高く舞い上げながら褒めると、ミツの顔に笑顔が戻った。おれは止めとばかりに、ミツを地面に転がすと脇を擦ってやった。

た。

笑い転げるミツ。

？よし泣き止んだ？

このミツを泣き止ました手も福ちゃんに伝授された手の一つである。

応用行動分析的には、泣くという行動を無視し、指示に従うという行動を強化する。

分化強化というヤツである。

こうすることによって、子供は泣くより指示に従ったほうが得だということを学習させることができるのだそうだ。

福ちゃんが言うには、これには原型があって元のやり方は、子供の泣き声を無視するという簡単な手法だった。

無視することによって、泣くという行動を弱化させるのである。

子供の泣き声を減らすにはいい手なのだが、欠点が二つあった。使用者の心理的負担。

無視することによって、一時的に泣く行動が強化されてしまう。これら二つの欠点を克服するために、福ちゃんは分化強化の手法を使うことにした。

泣くという行動は無視する。

指示に従うという行動は強化する。

（指示する行動は、できれば泣くことができない行動、もしくは泣いても出来る簡単な行動を選択するのがポイント）

これなら使用者の心理的負担も少ないし、指示に従うという行動も強化できるので、福ちゃん曰く一石二鳥なんだそうだ。

？たしかに使えるな？

無視を使うと体裁が悪いし、心も痛む。

「直人、いつまでミツを撥つてるだよ！

おれは早くテポドン十三号やりたいんだから、早くジャンケンやろうぜ」

桂太が喚いた。

テポドン十三号は、おれがおもちや屋で選り抜いた逸品で、子供用とは思えない巨大大打ち上げ花火であった。

あれに目をつけるとは、桂太も侮れない。

おれは笑い転げてる光輝を解放すると、ジャンケンのジャッジに戻った。

「二回戦いくぞ、最初はグウ、ジャンケンポン」

あっさりと朱美と久美子は負けた。

「負けちゃったね、朱美ちゃん」

久美子は残念そうに呟く。「今度は勝つかいいよ」

朱美は負けて悔しいのか、ちよつとブスくれてるが機嫌が悪くなるほどではない。

「おし、決勝戦だ。ほらやるぞ、桂太、絵里花」

「絵里花、おれは負けねえからな」

桂太が凄む。

「お猿相手に絵里花が負けるわけないでしょう」

絵里花は鼻で笑った。

「女のくせに生意気な奴め」

「猿がなんか鳴いてる。餌の時間かしら」

絵里花は手を口に当て高笑いする。

悔しがる桂太。

？桂太、諦める？

口喧嘩で女に勝てる男はいない。

「ほら口喧嘩なんかしてないで、さっさとジャンケンやるぞ」

おれが間に入ると、二人は口を引っ込めかわりに拳を握りしめ

た。

「ジャンケン、ポン」

桂太はグー。

絵里花はパー。

「勝った勝った！」

絵里花はピョンピョン飛び跳ねながら喜びを表現をする。

「頭がパーだからって、ジャンケンにまでパー出すじゃねえよ」

「そのパーに負けたウルトラ馬鹿は誰ですか！？」

絵里花は絞め殺したくなるようなむかつく顔で、桂太を煽る。

桂太は絵里花を睨みつけながら齒軋りして悔しがる。

「さて花火選ぼう」

「おれのテポドン十三号が」

桂太は呻く。

「誰がそんな下品な花火選ぶのよ、レディの花火といえばヘビ花火に決まってるじゃない」

「ヘビ花火！？」

桂太、その他一同みな口を開けて驚いた。

絵里花は皆の驚きを無視して、ヘビ花火に火をつけた。

モゾモゾと動き出すヘビ花火。

「ギター。ニヨロニヨロきたよ！　うわあ

ニヨロニヨロだあ」

絵里花一人大興奮してる。

「ニヨロニヨロニヨロ、ヘビ花火！」

興奮のあまり、体をくねくねさせながら喜びのヘビダンスを踊る絵里花。

「――つぎ行くか」

皆、無言で頷いた。

「やっぱおれの元に来る運命だったんだな」

桂太は花火の山からテポドン十三号を手にとると、愛おしそうに頼ずりする。

「お前がテポドン好きなのはわかったから、早く火をつけてぶっ放してこい」

テポドン十三号はおれが選びに選んだ逸品だ。正直桂太に点火役の栄光を渡したくなかったが、ここは大人にならねばなるまい。今のおれはやることあるのだから。

「直人、あれって大きな音する？　火とか吹いたりするの？」

朱美はおれを見上げ不安げに尋ねた。

「大丈夫だ、朱美。おれが隣にいてやるから」

「――じゃあ手を握って」

朱美は小さな手を伸ばしてきた。

おれが握ってやると、握り返してきた。

「この小さな手をほっておくわけにはいかない？」

「ねえ、直人。話があるんだけど」

「なんだ朱美？」

「ボクね。今度――」

朱美の言葉は途切れた。

手を広げた光輝が乱入してきたのだ。

「ブーン。二番機飛行中！」

光輝は飛行機の真似をしながら、おれ達のところに走ってきた。

「テポドンやるから飛ぶのは後にしろ、ミッ」

光輝の手を引いて、強引に着陸させる。

「ブーンしたいのに……」

光輝はしゅんとなって俯いたが、おれに逆らうことはなかった。

「火をつけるぞ！」

桂太が怒鳴る。

皆の目がテポドン十三号に注がれる。

しかしテポドン十三号は火を吹かなかった。

点火役の桂太はライターを握りしめながら固まっている。

「どうした、桂太？」不審に思つて尋ねると「いや、そのう、

やっぱ直人に譲るよ、火をつけるの」

桂太は土壇場になってびびりだした。

おれは呆れた。

「なんだ、怖いのか？」

「いや怖いわけじゃないけど、これ直人が買ってきた奴だろう

？だから直人に譲るよ」

「いいよ、お前がやれ」

テポドンを飛ばしてみたいが、今のおれの手はライターを握る

わけにはいかない。

朱美が手を握つてるのだから。

「じゃあ、唯ねえやるか？」

桂太は加藤にライターを差し出した。

「いやよ、なんでわたしがそんなことしなきゃならないのよ」

長姉に断られた桂太は、次女に目をむけたが、次女は目で断つ

た。

桂太の視線は再びおれに戻った。

「直人しかいねーよ。やっぱ」

「おれしかいらないと言われてもなあ」

おれはチラリと視線を落として、朱美を見た。

「いいよ、ボクは一人で平気だから」

朱美はふて腐れたような、我慢してるような、なんとも言えない声でいった。

「直人さん、朱美はわたしが見てますからどうぞ、火をつけに行ってください」

愛さんは勧める。

？たしかにおれしか火をつけるやついないな？

「よし、おれが行ってつけてくる。朱美ちよっと待っていてくれ」
おれは桂太からライターを受け取ると、テポドン十三号の前に座り込んだ。

火をつけた瞬間、朱美の悲鳴が木霊した。

おれはビクリして、慌てて振り返ると朱美のアノ汚い毛布が捲り上がっていた。

朱美の足下で光輝がへたり込んでいた。

光輝が毛布を捲ったのだ。

朱美の足を覆っていた毛布の中にはあるべき物がなかった。

足が――。

足がなかった。

足の変わりに醜い切り株のような太股が、露出していた。

驚きのあまり、おれは固まってしまった。

足が悪いのだと思っていた。

足があるんだと無意識に思っていた。

それは大きな勘違いだった。

朱美は両足がなかった。

そしてあの汚らしい毛布は、その残酷な事実を隠していたのだ。

朱美は誰にも見られなくなかったのだ。

毛布の中を。

切り株のような両足を。

「いやああ！ 直人見ないで！」

朱美は絶叫放つと自分の手首を噛んだ。

？あれは福ちゃんが言ってたパニックってやつじゃないか？？

まずい。早く毛布をかけてやらないと。

泣いてる朱美に駆け寄ろうとした瞬間、轟音が鳴り響いた。
テポドン十三号だ。

おれは間抜けなことに驚いて転けてしまった。泣き叫ぶ朱美の
声や、みんなの悲鳴や泣き声が耳を刺した。

「朱美ちゃん！」

福ちゃんは機関車のごとく猛スピードで走ってくると、朱美を
毛布でくるんで無残な切り株を隠した。

それでも朱美は暴れることも、己の手首を噛むことも止めな
かった。

完全に我を失ってる。

おれは立ち上がると、暴れる朱美に駆け寄った。

「朱美！」

「いやああ！ 見ないで見ないで！」

朱美は泣き叫び、暴れた。

「直人君！ 今は逆効果だから、加藤さん達つれて、今日は帰
って！」

福ちゃんは朱美に手首を噛まれながら、怒鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1553u/>

メドレー

2011年12月19日12時45分発行